

伏見城跡・指月城跡

—平成 27 年度発掘調査報告書—



2021

有限会社 京都平安文化財

中表紙：本調査出土軒丸日輪文瓦拓本
〔図版4－軒丸日輪文5〕
※縁部欠損範囲は復元的に加工してあります。



1. 指月の丘を望む（南から）



2. 出土した金箔瓦



1. 石垣1と堀1(下層)全景(南から)



2. 石垣2(東から)

例　　言

1. 本書は京都市伏見区桃山町泰長老 176-6 に所在する伏見城跡・指月城跡における発掘調査の報告書である。
〔文化財保護課受付番号 14F529〕
2. 本調査は、株式会社大京の計画した集合住宅建設を請負った 株式会社藤井組 からの委託により、有限会社京都平安文化財が実施した。
3. 発掘調査の面積は、601m²である。
4. 発掘調査は平成 27 年 4 月 21 日から同年 7 月 31 日まで実施した。整理・報告書作成は平成 27 年 8 月 1 日から令和 3 年 2 月 26 日まで実施した。
5. 発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制にて行なった。

指導機関 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

調査主体 有限会社京都平安文化財

主任調査員 卜田 健司

調査員 小森 俊寛

補助員 小林 雅幸

作業員 有限会社京都平安文化財、西村興業

測量・図化 有限会社京都平安文化財 深川 永子、小林、田中 侑、木建 桢

遺物実測 有限会社京都平安文化財 川端 玲子、入江 正則、木建

6. 本書の執筆と編集は小森が行なった。

7. 遺構・遺物の写真撮影は小林が行なった。

巻頭図版及び図版に使用した空撮写真は 株式会社大京 からご提供頂いた。

8. 基準点測量は自社にて設定した。

9. 調査検証委員会として下記の方々のご指導を頂いた。

京都外国语大学教授 南 博史

同志社女子大学教授 山田 邦和

10. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができた。(五十音順、敬称略)

芦田淳一（総持寺）、一瀬和夫（京都橘大学）、井戸良太（枚方市）、植山茂（京都文化博物館）、北垣聰一郎（金沢城）、木村泰彦（長岡京市）、木村理恵（櫻原考古学研究所）、久保直子（島本町）、下高大輔（彦根市）、鶴柄俊夫（同志社大学）、千田嘉博（奈良大学）、三木善則（御香宮）、大洞真白（八幡市）、高田徹（中世城郭研究会）、滝川重徳（金沢城）、富田和氣夫（金沢城）、中井均（滋賀県立大学）、福宜田佳男（文化庁）、宮川勝次（金沢城）、三好美穂（奈良市）、村山保（桃山高校）、森岡秀人（芦屋市）、森島康雄（丹後郷土資料館）、山本雅和（京都市埋蔵文化財研究所）、吉永眞彦（大津市）

京都府教育委員会、京都府立桃山高校グローバルサイエンス部、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、御香宮、伏見指月城を考える会、伏見城研究会、やましな車石の会

凡　　例

1. 調査に使用した座標値は、世界測地系（國土座標第VI系）に基づいている。水準点はT.P.値（東京湾平均海面値）を使用し、本文中では「T.P.」と略称している。
2. 使用した地図は京都市都市計画局発行の1:2500「城南宮」「竹田」「大龜谷」「下島羽」「丹波橋」「桃山」「横大路」「中書島」「木幡池」を参考にし編集した。
3. 色調については、農林水産省農林水産技術會議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1994）を使用した。
4. 主要な石垣石材の石種鑑定は橋本清一氏（元山城郷土資料館）に依頼した。
5. 遺構図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を100・150・200・300分の1とした。
6. 遺構名は、堀、石垣、溝状遺構、落込、土坑、pit等の遺構の種類別に通し番号を与え、番号の前に遺構の種類名を付して「堀1」のように表した。北区・東区・南区は一連の遺構番号を付加し、西区のみ独立した通し番号を与えた。
7. 遺物実測図は各図スケールを掲載し、原則として縮尺を4分の1とした。
8. 遺物番号は、土器・陶磁器類については挿図別に通し番号を付加し、瓦類については「菊丸1」のように種類名の略称を冠して種類別に通し番号を付加した。遺物番号は実測図・觀察表・写真図版共に一致している。
9. 本書に収録した各資料の図は本書の体裁に合わせて整えるためにそれぞれ縮小した。
10. 本書に収録した図資料の引用元は各図に付記し、参考文献は第2章文末に掲載した。

本文目次

第1章 調査の経緯

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査区の範囲	2
3. 調査の目的と課題	2
4. 調査の方法と記録	3
5. 発掘調査の経過	4

　　日誌抄

第2章 遺 跡

1. 遺跡の立地と自然環境	10
2. 歴史的環境	11
(1) 古墳時代以前	11
(2) 古代	14
(3) 古代末～中世	15
(4) 近世・近代～安土・桃山時代以降	16
(5) 指月の丘とその周辺の考古資料について	24

第3章 調査の成果

1. 履序	36
2. 遺構	42
(1) はじめに	42
(2) 第1遺構面	43
(3) 第2遺構面	45
(4) 堀について	56
(5) 石垣と堀の関係	57
(6) 石垣石材の大きさ、石の種類、間詰石等について	58
3. 遺物	76
(1) 出土状況の様相	76
(2) 土器・陶磁器	77
(3) 瓦類の概要	80
(4) 瓦類の種類別観察	89

第4章 総 括

伏見指月城の復元案について	109
「日輪文」金箔瓦に込めた秀吉の思い	111
調査成果まとめと課題	113
【補記】伏見城全体の歴史的評価を考える	114

挿図目次

第1図 調査地位置図	1	第36図 石垣1平面・立面図	63	
第2図 調査地詳細位置図	2	第37図 石垣1と転落石主石材石種グラフ	64	
第3図 地区割り図	3	第38図 聚楽第石垣SW105主石材石種グラフ	64	
第4図 検出した石垣の立面と断面の概念図	5	第39図 石垣1石材掲載写真区分図	64	
第5図 北区搅乱1平面・断面図	6	第40図 石垣1平面・立面写真(1・2区)	65	
第6図 搅乱1と地質調査を合わせた 堀1の推定復元断面概念図	6	第41図 石垣1平面・立面写真(3・4区)	66	
第7図 西側石垣(石垣2)検出写真	7	第42図 石垣1平面・立面写真(5・6区)	67	
第8図 調査地位置と周辺遺跡地図	12	第43図 石垣1平面・立面写真(7区・拡張区)	68	
第9図 近世伏見図	20	第44図 転落石材写真	70	
第10図 軒丸瓦日輪文と軒平瓦無文の模式図	25	第45図 東区南壁転落石材写真	71	
第11図 周辺既調査地・遺物採取地位置図	26	第46図 参考石垣資料(1)	73	
第12図 基本順序	37	第47図 参考石垣資料(2)	74	
第13図 南区西・南壁土層断面図	38	第48図 出土土器実測図(古代)	78	
第14図 北・東・南区 東壁土層断面図	39	第49図 出土土器・陶器実測図		
第15図 西区南・東壁土層断面図	40		〔平安時代～室町時代〕	77
第16図 西・南区 斷割り2・3土層断面図	41	第50図 出土土器・陶磁器実測図		
第17図 地区割りと断割り位置図	42		〔安土・桃山時代〕	78
第18図 第1-②A・B遺構面平面図	44	第51図 出土陶器実測図		
第19図 西区 第1-②A・B遺構面平面図	45		〔安土・桃山時代～江戸時代初期〕	79
第20図 第2-①遺構面平面図	46	第52図 出土土器・陶器実測図(江戸時代前期)	80	
第21図 西区 第2-①遺構面平面図	47	第53図 出土磁器実測図(江戸時代中期)	80	
第22図 北区 第2-①遺構面平面図	48	第54図 秀吉関係の金箔瓦	81	
第23図 第2-②遺構面平面図	49	第55図 出土した金箔瓦の主張な種類名称	82	
第24図 南区 第2-③A遺構面(瓦溜り) 遺構面平面・断面図	50	第56図 軒丸瓦の瓦当径法量グラフ	85	
第25図 第2-③B遺構面平面・立面図	51	第57図 大坂城軒丸瓦の瓦当径法量グラフ	86	
第26図 南区石垣2平面・立面・断面図	52	第58図 伏見指月城堀1他から出土する軒丸瓦 日輪文の理解に向けて(概念図)	88	
第27図 堀1断面図①②	54	第59図 古手の瓦実測図	90	
第28図 堀1断面図③④	55	第60図 菊丸瓦の瓦当径法量グラフ	90	
第29図 石垣1・2と堀1の関係理解概念図	56	第61図 軒丸瓦菊文の瓦当径法量グラフ	91	
第30図 鈎巻石垣と腰巻石垣の断面模式図	57	第62図 軒丸瓦桐文の瓦当径法量グラフ	91	
第31図 当調布地検出石垣主要石材法量グラフ	59	第63図 軒丸瓦日輪文の瓦当径法量グラフ	91	
第32図 聚楽第石垣SW105主石材法量グラフ	59	第64図 軒丸瓦巴文の瓦当径法量グラフ	92	
第33図 長岡京勝龍寺城跡北門石垣SX264 主石材法量グラフ	60	第65図 軒丸瓦文様不明の瓦当径法量グラフ	93	
第34図 安土城主郭南面石垣T11～13 主石材法量グラフ	60	第66図 軒平瓦無文と軒丸瓦日輪文(照文) の軒組み概念図	93	
第35図 石垣2写真	62	第67図 鳥伏間瓦日輪文の軒端正面模式図	95	
		第68図 伏見指月城範囲復元案	110	
		第69図 軒丸瓦日輪文と軒平瓦無文の模式図	112	

表 目 次

第1表	仙洞御所伏見殿一覧	17	第6表	転落石材観察表	71
第2表	開発年表	21-23	第7表	軒丸瓦・軒平瓦の文様割合	83
第3表	周辺の調査履歴	27-32	第8表	金箔瓦関係種類別数量とその統計表	84
第4表	石垣 2 石材観察表	62	第9表	出土土器・陶磁器観察表	99
第5表	石垣 1 石材観察表	68-69	第10表	出土瓦観察表	100-108

図版目次

巻頭図版 1	1.指月の丘を望む（南から） 2.出土した金箔瓦	図版 27	1.桃山丘陵より男山方面を望む（北東から） 2.北区 NE 堆乱 1 土層断面（北西から）
巻頭図版 2	1.石垣 1 と堀 1（下層）全景（南から） 2.石垣 2（東から）	図版 28	1.南区 E 化粧土検出状況 2.南区 E-C 第 1-② 遺構面全景（東から）
図版 1	出土瓦実測図〔菊丸瓦 1〕	図版 29	1.東区 第 1-② 遺構面全景（南から） 2.北区 第 1-② 遺構面全景（南から）
図版 2	出土瓦実測図〔菊丸瓦 2・軒丸瓦菊文〕	図版 30	1.北区 SE GP 検出状況 2.北区 GP 完掘全景（北から） 3.北区 GP 完掘全景（南西から）
図版 3	出土瓦実測図〔軒丸瓦桐文〕	図版 31	1.南区 E 堀 1（最上層）掘下げ状況（西から） 2.石垣 1 と堀 1（中層）全景（北から）
図版 4	出土瓦実測図〔軒丸瓦日輪文〕	図版 32	1.南区 E 石垣 1 と堀 1（瓦溜り）全景（東から） 2.南区 E 堀 1 北壁土層状況（南東から） 3.南区 E 石垣 1 全景（西から）
図版 5	出土瓦実測図〔軒丸瓦巴文 1〕	図版 33	1.南区 E 石垣 1（矢穴部） 2.北区 堀 1（下層）全景（南から）
図版 6	出土瓦実測図〔軒丸瓦巴文 2・軒丸瓦文様不明〕	図版 34	1.北区 拾張 石垣 1 出土状況（北から） 2.北区 拾張 石垣 1 出土状況（南から）
図版 7	出土瓦実測図 〔軒平瓦菊文・軒平瓦桐文・軒平瓦無文〕	図版 35	3.西区 第 1-③ 遺構面完掘状況（東から） 1.南区 第 1-③ 遺構面完掘状況（西から） 2.調査地全景（北東から）
図版 8	出土瓦実測図〔軒平瓦唐草文〕	図版 36	1.西区 第 2-① 遺構面完掘状況（東から） 2.南区 E 石垣 2 出土状況（南東から） 3.南区 E 石垣 2 出土状況（北西から）
図版 9	出土瓦実測図〔輪違い瓦〕	図版 37	1.南区 E 石垣 2 出土状況（北西から） 2.南区 E 石垣 2 出土状況（南東から） 3.南区 E 石垣 2 出土状況（北東から）
図版 10	出土瓦実測図 〔青海波瓦・青海波面戸瓦・鳥伏間瓦〕	図版 38	2.南区 E 石垣 2（矢穴部） 1.北区 断割り 1 全景（南から）
図版 11	出土瓦実測図〔飾瓦花菱文〕	図版 39	1.北区 断割り 1（南から） 2.北区 堀 1（最下層）南壁断割り状況（北から）
図版 12	出土瓦実測図〔飾瓦桐文・飾瓦菊文他〕	図版 40	1.南区 E 堀 1 m 南壁土層状況（北から） 2.北区 断割り 1 堀 1 土層状況（北から）
図版 13	出土瓦実測図〔製作斗瓦関係・鰐瓦〕	図版 41	出土土器・陶磁器
図版 14	出土瓦実測図〔鬼瓦 1〕		
図版 15	出土瓦実測図〔鬼瓦 2〕		
図版 16	出土瓦実測図〔鬼瓦 3〕		
図版 17	出土瓦実測図〔鬼瓦 4〕		
図版 18	出土瓦実測図〔鬼瓦 5〕		
図版 19	出土瓦実測図〔平瓦 1〕		
図版 20	出土瓦実測図〔平瓦 2〕		
図版 21	出土瓦実測図〔丸瓦 1〕		
図版 22	出土瓦実測図〔丸瓦 2〕		
図版 23	出土瓦実測図〔丸瓦 3〕		
図版 24	出土瓦実測図〔軒瓦・面戸瓦・谷瓦〕		
図版 25	出土瓦実測図〔桟瓦関係〕		
図版 26	出土瓦実測図〔堀瓦〕		

第1章 調査の経緯

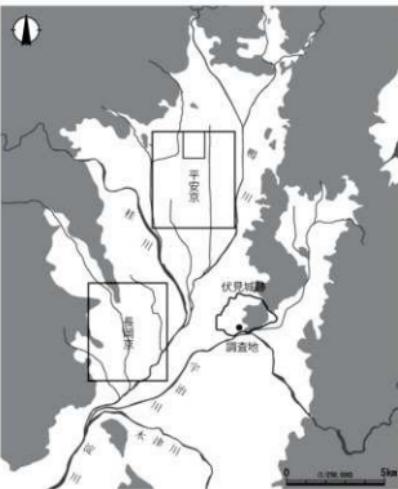
1. 調査に至る経緯

この発掘調査の対象地は、伏見桃山丘陵の南辺部西半の丘陵上面に位置し、伏見区桃山町泰長老 176-6 に所在する。桃山町泰長老が立地するこの丘陵は、北東部の木幡山を中心とした桃山丘陵の主要部との間に、北西から南東方へ延びる小谷地形を挟み半独立的な小丘陵的な一面を持つている。この小丘陵は、古来、観月の名勝地としても名高い「指月の丘」と通称された小地域である。豊臣秀吉の伏見城は、この指月の丘陵上に建てられたと推定されている隠居所、続く指月城の築城から始まるとしている。そのため、当地は、近世遺跡である伏見城跡とその城下町跡内に含み込まれており、加えてその下層には、中世以前から続くとされている宮殿跡や寺院跡が残存している可能性がある泰長老遺跡が重なる複合遺跡である。

2015 年度に株式会社大京が当地に集合住宅の建設を計画し、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから文化財保護法第 93 条第 1 項に基づいて、京都市文化市民局文化財保護課（以下、市保護課と略す）に届出を提出した。この開発の届出に対応して市保護課は、平成 27 年（2015 年）3 月 2 日から 4 日に、遺跡の残存状況の確認を主目的とした試掘調査を実施した。

試掘調査は、敷地の東辺と南辺にはほぼ沿う形で一定の間隔をおいて 2ヶ所と西半部に 1ヶ所の計 3ヶ所で、幅 3m 程の長い溝状の調査区を設定して行なわれた。その結果、整地土層及び同層から、少數ながら金箔瓦等の伏見城あるいは城下町の大名屋敷跡の存在を示す、近世初頭頃に比定出来る遺物が出土している。また、石垣自体は確認されなかったが、石垣の裏込めに入れられていた可能性がある栗石、あるいは幅 1m 前後ある石垣の主石材と見られる遊離した大石が検出された。さらに、近世以降の整地層に混入したものではあるが、古代から中世にかけての遺物も少數ながら出土している。

この試掘調査の成果に基づいて市保護課により発掘調査の実施が必要であるとの行政指導が示された。株式会社大京は、市保護課の指導にしたがい発掘調査の届出をおこなった。発掘調査とその報告書の作成は、株式会社大京から施工を請負った株式



第1図 調査位置図

会社藤井組を介して有限会社京都平安文化財が業務委託を受け、実施することとなった。

2. 調査区の範囲

調査対象地は、全体として約 3,000m²であるが、集合住宅建設に伴なう行政主導の、記録保存を主な目的として行なう緊急発掘調査であり、本発掘調査区は基礎掘削を伴なう建物や関連施設の建設予定範囲内にとどまる。建物等の予定範囲内は全面発掘調査が原則ではあるが、遺跡保護に大きく影響する基礎掘削の深度と範囲の有り方、及び試掘調査の結果に基づく遺跡・遺構の残存状況の濃淡に対しても配慮する必要性もあり、さらに限定的なものとなった。今回の調査の対象範囲は、南北の東棟、東西の南棟、南北の西棟の 3 棟が北の開いたコ字型を呈する集合住宅建物本体の予定建設範囲、及び敷地辺部の一部の擁壁建設予定地である。建物等の建設予定地は、合わせると 2,000m²を越えるものとなる。しかし、当地は元日本住宅公団が昭和 30 年代に建設した古い集合住宅の深い基礎の掘方により遺構や遺構面が掘削されているところも少なくなく、実際の調査対象地はより限定的なものとならざるを得なかった。設定した発掘調査区の範囲と位置は、市保護課の指示と指導によるものに、現場の現状を踏まえて市保護課の合意を得た上で微調整した結果である。今回の実際の調査区は、南区（南北 5 ~ 6.5 m × 東西 41 m）約 185m²、東区（東西 4.5 m × 南北 13 m）59m²、北区（東西 15 m × 南北 16 m）m²、北区拡張区 66m²、西区（東西 10 m × 南北 6 m）約 60m²と合わせると約 600m²程となった。



第 2 図 調査地詳細位置図

3. 調査の目的と課題

調査目的は、第一義的には、安土桃山時代の伏見城期の始まりとなる、指月の丘陵上に建設されたと推定されている豊臣秀吉の隠居（所あるいは城）屋敷、及びその敷地を含むかたちでほぼ新造的に築城されたとされている秀吉の初期伏見城であるいわゆる指月城跡を検出・調査し、考古学的に記録することである。加えて指月城が、地震に被災した直後から、桃山丘陵内ではあるが当地の北東部に位置する木幡山（伏見山）の頂部付近を中心として、木幡山城とでも呼ぶべき新しい伏見城が再建される。新城の建設に伴ない当地は、大名屋敷地帯に組み込まれ、江戸時代初頭に徳川の伏見城が廃絶するまで続く。それらの大名屋敷の形成と変遷またその終焉を把握し記録することも課題の 1 つである。さらに指月城の下層に存在が推定されている中世の伏見殿等、あるいはその前身とされている古代の平安時代中期末頃に、藤原俊綱が建てたとされている伏見

山莊の一端なりともを検出し調査することも課題の1つである。

このように指月の丘に立地する遺跡は、近世初頭の江戸時代前期以前の古い遺跡に限っても、古代、中世、近世初頭と各時代の遺跡が重複する、いわゆる複合遺跡である。今回の当地での発掘調査は、複合遺跡として残る土地の歴史を考古学的視点から明らかとし、遺存している各時代の遺跡をそれぞれ記録保存することが、最も主要な調査目的である。

しかし、江戸時代以降、近世～近代・現代にかけても土地利用され、この土地の歴史は続いている。実際に当地でも江戸時代以降、近代～現代に形成された整地土層がかなりの厚さで積み上げられており、遺跡の上に新たな歴史が重ねられている。開発に伴う行政的な発掘調査では、行政的に認知された遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）が発掘調査の主要対象である事は、言を要しないところであるが、行政的な緊急発掘調査においても、この土地の歴史を考古学的視点を加えて復元していくという視点からは遺跡の後史にも配慮した調査が必要であると考えている。現状では対応の難しい学問的ともみえる課題ではあるが、一般の方が現地表面上に残る凹凸（人工あるいは自然）を歴史痕跡として注目する現代においては、行政的な緊急発掘の担当調査員においても、前提として必要な問題意識ではあるだろう。

4. 調査の方法と記録

今回の本調査の実施にあたっては、市保護課の指導を受けて、集合住宅の建設予定地内に、2ヶ所の溝状のトレンチ調査区(南区、東区)及び2ヶ所の方形状を呈するグリット調査区(北区、西区)の計4ヶ所の調査区を設定し、発掘調査を進めて行くこととなった。

遺跡の平面調査を軸とした発掘調査は、手順として、まず各時代の遺構をそれぞれでベースと成っている（整地）土層の上面に形成された遺構面を正確に検出す。次いで遺構面上に成立し展開している遺構群を検出し、その平面的関係を把握する。その上で個々の遺構の掘り下げ調査を新しい遺構の側から順次進めていく。遺構面や遺構の検出作業及び遺構の掘り下げ調査は、すべて人力による手作業である。その掘り下げ作業の客観的妥当性を保証すべき、土の違いとその関係に対する正確な認識の形成は、現在でも調査員の肉眼観察が基本であることに変わりはない。土層観察の精度を確保し土の掘り分けを正しく



第3図 地区割り図

進めるためには、観察対象となる遺構面や遺構また土層断面の検出状況のきれいさの質を上げることが必要条件ではある。発掘調査の目的や課題を達成するための調査方法も、発掘調査の基礎作業を荷う調査員と作業員の質量向上の確保を、リアルに真剣に根本から考えなおさなければ、調査方法を現実的に保障することが難しい時代となっている。

遺跡の平面的調査方法での遺構面の客観的認識の形成には、上述してきた平面的情報への正確な対応に加えて、遺構面及びそのベース土層を、縦方向の積重なりである堆積土層の層位関係のなかで位置付けと理解の、正確な情報が必要条件である。縦方向の情報と言える土層断面情報に問しても、遺跡の平面調査方法のなかに位置付けておく必要がある。

また発掘調査は、調査過程、遺跡の平面図、地層の断面図記録、各写真記録が伴なって完結するものであり、記録のない発掘調査は、単なる遺跡の破壊削除である。発掘調査における記録は、①調査経過を記録した調査日誌、遺物、遺構等の台帳類等、②遺構、遺跡の平面実測図、土層断面図等の実測図面類、③プロセススナップを含めた個別遺構、遺構面の全景、土層等の写真記録の3種が基本的記録であり、この3種の記録資料が揃ってはじめて発掘調査が完結する。

記録①は、手書きのアナログの文字資料と略測図等が中心である。

記録②は、平面実測図は、個別遺構、遺構面全体図とともに、現場での電子平板で測量実測作業を基に作成している。

平面実測図の基準点は世界測地系第6系により、2点設置している。

地層の断面実測図は、写真測量で図化しており、土層の注記等は人力による。

記録③の写真記録は、作業スナップ他、遺構個別、遺構面全景、土層断面等すべての写真記録はデジタルカメラでフォローしている。

遺構面の全景、個別遺構、土層断面等は白黒とカラーリバーサルのフィルム写真での撮影も行なっている。

5. 発掘調査の経過

本調査の実作業は、2015年4月21日の調査区設定から開始した。続いて南区・東区・北区の近現代の堆積土層や搅乱坑等の廃土を主目的とした第1次の重機掘削を、同4月22日から始めて同4月30日には完了している。調査区周辺の整備や調査区の壁整形等の人力主体の作業も重機掘削と並行して開始している。西区に関しては、上げ土置場確保等の場内運営の面から、調査期間の後半段階において調査を実施する計画としていた。西区の調査は、重機掘削を含めて2015年7月4日から始めた。最終段階の機械力による埋め戻し作業は、北区及びその拡張区を同7月28日から始めて、東区、南区と進めて、同7月29日には調査を終了していた西区を含めて、同7月30日には完了しており、同7月31日にはすべての調査を完了した。

調査の進行過程は、日々の作業等については日誌抄にまとめており、それを参照されたい。以下では、調査の進行過程で感じ、考えて理解を得ていく必要がある問題点や課題等について、進

行過程での見方やその変化も踏まえながら幾つかについて記述しておく。

①-1 第一次の重機掘削は、南区の西端から開始し、2日目には東端部まで進めた。その結果東壁から1.5m程の位置で、西面して南北方向に延びる、かなりの大石を用いた石垣の下部の2段分を検出した。本来は数段以上の高さがあったと推測された。この西面する南北石垣(石垣1)に関しては、試掘段階からの具体的な情報はなかったが、検出状況からは直感的にも今回の調査成果の質量の中心になるとと考えられた。そのような思いを持ちながら、2日目以降東区から北区へと掘り進めて、敷地東辺にほぼ沿い、一部主石材が失われている部分もあったが、ほぼ連続するかたちで検出することができた。検出した石垣1の様相は、京都では聚楽第や主石材の石垣に大小差はあるが旧二条城の石垣、あるいは安土城や秀吉の大坂城の石垣等、安土桃山時代前半期頃の天下人の城の石垣に良く通じており、いわゆる穴太(衆)積みの石垣と見てよいものであった。心躍る大きな成果となる事は明らかではあるが、調査が各種の制約的な条件下にある点からは、調査主体にとってはかなりヘビーな工夫と努力が要求される課題が満載の調査成果であることもまた言を用しないだろう。指月城とこの石垣の関連性に対する理解は、検出した当初から最大の調査課題となった。

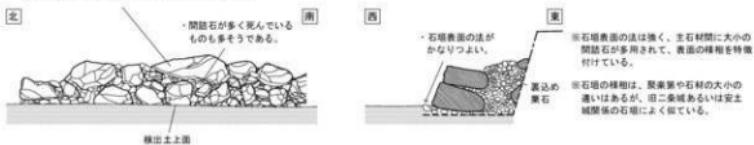
①-2 この石垣1の年代観は、石垣の特徴から桃山時代にほぼ特定出来るが、慶長の初め頃までは類例がよくみられるので、石垣の型式学特徴からだけでは文様以前に特定することは難しい。

①-3 石垣1の年代観は一旦置いて、石垣の性格を理解出来るかも大きな課題である。石垣の間や石垣掘方からは今のところ出土遺物がほとんど見られない。掘方の裏込めから石組残存部上にかかる近・現代の積土等からは、小片少数ではあるが古手混入品として金箔瓦片が、機械掘削直後の石垣1検出作業中に出土している。決め手に欠く。

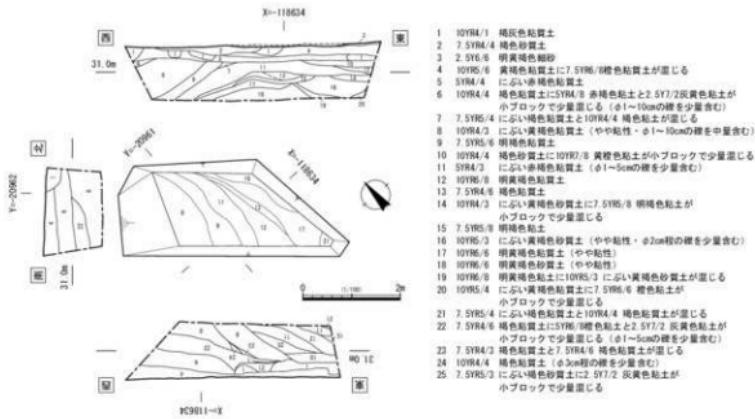
②-1 指月城との関連を決定付けるような、城郭を示す規模の堀が検出出来るか。

②-2 機械掘削中に北区の中央部付近の石垣1西脇で擾乱1を発見し、早めに掘り下げて側壁整形とその清掃を行なう。1m程ではあるが、石垣1以下の堆積土を確認出来た。南北方向の石垣は東側から入れられた瓦片も若干包含する埋土土層群の上面に形成されている。石垣1西側下端部には極狭いテラス状の段の上面が残り、その上面には石垣下端に沿うように栗石あるいはそれよりやや大き目の礫がランダムに並び置かれている。それらの礫は、石垣下面に続くようにも見える。この石垣沿いの狭い帯状テラスを肩にして、西側へ大きく下る瓦片を包含した堀の埋土群と見られる土層が観察できた。

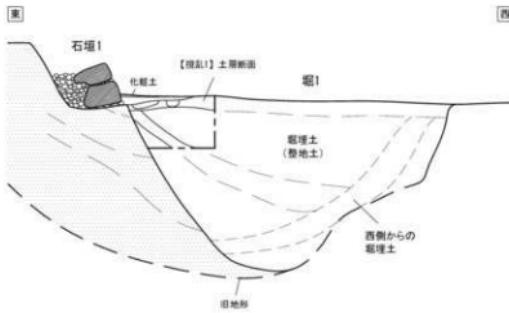
・主石材がかなりの大石が主
構成石あるいは半深底石とみられるものと堆積石(チャート含む)
の自然石が生体をなしている。
割石も若干含まれている。



第4図 検出した石垣(石垣1)の立面と断面の概念図



第5図 北区擾乱1平面・断面図



第6図 摆乱1と地質調査を合わせた堀1の推定復元断面概念図

して、石垣1と絡んで同じ方向に大規模な堀状の遺構が埋没していることがより明確な事実となつた。擾乱1の壁で先に確認していた埋土層群が石垣1より西側の一群と石垣1下より東側に上りながら広がると見られる2群に大きく分けて見られる堆積状況からは、南北石垣1の西側を石垣1に並走する堀1が形成され機能していた時期と、より東側に古い石垣が存在するかは別として、東側に大きく広がるより幅の大きな堀あるいは、自然的谷地形が存在していたと断定的に理解してよいだろうと考えた。

なお、石垣1と堀1あるいは谷地形の理解を進められた直後に、施主である株式会社大京から当地の地質調査資料の提供を受けることが出来た。その資料では、敷地東辺沿いにGL-6m程の深さをもつた自然地形あるいは堀的な大きい溝状遺構が地下に埋没していると読み取れた。加えて指月の丘の南辺崖面の踏査では、この埋没遺構の南延長部付近の崖面では、高等線のラッパ状に開く様相からは、後に人工的な堀等への改変を受けている可能性はあるが、元来は指月の丘

また北区での遺構検出作業によって石垣西面下端から西へ8~10m程の位置で、南北方向に延びる土の違いをライン状に検出している。この南北方向に延びる堀等の大規模な溝状を呈した遺構の肩部と推定された。この西肩部の検出によってすべてが人工的か自然地形の改変かは別に

陵上に南の崖面にほぼ直交するかたちで形成された自然の開折谷であったと見られる。

②-3 上述してきた東辺沿いの南北方向の石垣1と同方向の堀状遺構が、金箔瓦とともに指月城とどのような関係にあるのかが、調査中盤以降の最も重要な調査課題となった。東辺の南北石垣1とそれより西側で石垣1に並走する堀1上部は、石垣1と共に開口して指月城内で機能していたのか、堀1が埋められた後に指月城の石材を再利用して、慶長元年に大名屋敷に伴なう石垣として再構築されたものなのか、石垣1下で東へ延びる埋土土層群は、谷地形を改変して堀1と石垣1を構築するための東半の埋土か、1段階古い石垣あるいはその痕跡が埋土東端に発見出来るのか。西側堀1の掘り下げ調査を進めて結論を得たいと考えた。しかし、本質的な関連に対する理解の獲得には、調査対象地の東辺よりさらに東にまで、堀や石垣に直行する断面を残した本調査が必要であることは自明であろう。

③-1 5月中旬以降、南区東辺部において、堀の掘り下げ調査を進めた結果、金箔瓦は東へ下る西側から入れられた埋土土層内から最も数多く出土することが明らかとなった。西側からの金箔瓦には、鰐瓦片や鬼瓦また無文の軒丸瓦や軒平瓦片など、天守と関連するとも見られる飾瓦が多く含まれている。本丸の位置は既推定の東側から西側へ変更することも検討が必要となった。

③-2 南区東辺の堀の掘り下げ調査を進めた結果、金箔瓦片を多数含んだ西側からの埋土の直下で、堀の西側側壁に構築された石英斑岩の大石を主体にした東面する石垣の残存部を検出した。検出上辺部で現表土下-2.5m程を測り、現表土下3.2m程までは手掘りで追跡した。しかし、安全面確保が難しくなり中断していたが、調査最終段階で、重機で調査区を拡張しつつ追跡し、表土下45m程まで検出した。下位へもう少し続くようだが、安全上不可能と考えて記録後すぐに埋め戻した。この堀1の西側石垣（石垣2）は、堀底近くから側壁を全面的に保護するかたちで設定された石垣と見られる点などから本丸関係の石垣と推定される。石垣2は検出状況からも城郭に直接関連すると見て良いと考えられ、かぶった埋土から多数出土した金箔瓦は、石垣2のその見方を左証するものと考えられた。また、石垣2は上部主石材のズレや落石、間詰石の落石による欠失から慶長の大地震に被災したことを示す物証であることも十分に理解出来た。

④ 調査期間中に調査の進行によって生じた、現場での妥当な理解が必要な重要性の高い調査課題について、現場中に進行形で考えていた事を中心に①～③に箇条書きで記した。他にも記しておきたい調査経過上の思考はいくつかあるが、これで置く。上に記した調査成果・課題については、発掘調査終了後に行なった調査資料の整理研究の成果も加えたかたちで、少しでも進めた解釈を入れ、遺構遺跡の歴史的評価も加えて報告書とした。



第7図 西側石垣（石垣2）検出写真

日誌抄

- 4.21 (火) 調査区設定
4.22 (水) 本日から重機掘削開始（南区から）
4.23 (木) 重機掘削及び壁整形開始
4.24 (金) 重機掘削及び壁整形
4.25 (土) 重機掘削及び壁整形、继续して石垣1を検出
4.27 (月) 重機掘削及び壁整形【市保護課検査】
4.28 (火) 重機掘削及び壁整形。
石垣1上に堆積から金箔瓦出土
4.30 (木) 掘乱削除開始、廃土山養生開始
5.1 (金) 壁整形及び掘乱削除【市保護課検査】
5.7 (木) 壁整形及び掘乱削除
5.8 (金) 壁整形及び掘乱削除。
石垣北端の近現代層除去
5.11 (月) 北区遺構出頭跡、台風養生
【検証委員山田教授来訪】
5.12 (火) 台風接近現場調査作業中止、金箔瓦洗浄
5.13 (水) 北区遺構検出、北区ピット群個別明示
5.14 (木) 北区遺構検出、石垣1石列上の近現代層除去、
北区略図作成
5.15 (金) 石垣1北端の近現代層除去、北区略図作成
5.18 (月) 石垣1北端の近現代層除去、北区略図作成
【市保護課検査】
5.19 (火) 南区遺構検出、北区遺構調査（掘下げ）開始
5.20 (水) 南区一部掘下げ、北区遺構調査
5.21 (木) 南区一部掘下げ、北区遺構調査
5.22 (金) 北区遺構調査
5.25 (月) 南区遺構検出、現地説明会6.20予定
【市保護課検査】
5.26 (火) 南区写真用清掃、東区遺構検出、
北区遺構調査
5.27 (水) 南・東区遺構検出状況写真撮影
【検証委員南教授来訪】
5.28 (木) 南区遺構検出、北区遺構調査、
東区遺構調査と調査
5.29 (金) 南・東・北区第1面写真撮影
6.1 (月) 第1面測量、現場整備
6.2 (火) 第1面測量、第1面掘下げ開始
6.3 (水) 南天のため現場調査作業中止
6.4 (木) 南・東・北区遺構調査【市保護課検査】
6.5 (金) 東・北区遺構調査、
現地説明会記者代表の連絡を幹事社に行う
6.6 (土) 南・東・北区グレーピット群遺構調査
6.8 (月) 南・東・北区グレーピット群遺構調査
【市保護課検査】
6.9 (火) 南・東・北区グレーピット群測量
6.10 (水) 堀1上層部下げ清掃開始（北区部分から）
6.11 (木) 北区拡張壁整形と表土層除去
6.12 (金) 南区堀1最上層の掘下げ、北区堀1の壁整形、
北区拭去表土層除去
6.13 (土) 北区堀1の遺構調査、北区拡張表土層除去
6.15 (月) 南区堀1の遺構調査、北区拭去表土層除去、
現地説明会資料打合せ
【京都府教育委員会視察】
6.16 (火) 南区堀1最上層掘下げ、北区堀1底部掘下げ、
北区拭去表土1検出作業
6.17 (水) 南区堀1の掘下げ、北区堀1中層の掘下げ
【市保護課検査】
6.18 (木) 現地説明会準備、記者発表【市保護課検査】
6.19 (金) 現地説明会準備
- 6.20 (土) 現地説明会
(午前近隣住民、午後一般対象に分けて開催)
来場者約2,400名【市保護課検査】
6.22 (月) 北・南区堀1の遺構調査
6.23 (火) 北・南区堀1の遺構調査、
写真撮影用清掃開始
6.24 (水) 第2面全景写真撮影
6.25 (木) 南区堀1・石垣1写真撮影、測量
6.26 (金) 南天のため現場調査作業中止、金箔瓦洗浄
6.29 (月) 石垣1立面測量、南・北区堀1の遺構調査
6.30 (火) 北区堀1の遺構調査、北区堀1西側部清掃
7.1 (水) 南天のため現場調査作業中止、
午後より排水・シート閉鎖作業
【文化庁主任調査官視察、京都府教育委員会と
市保護課が現場案内】
7.2 (木) 北区東側断面削り開始（断削り1）、
南区堀1下層の掘下げ、北区拡張・西区設定
7.3 (金) 南区石垣2 検出状況写真撮影
7.4 (土) 北区と北区拡張の接続部掘削
7.6 (月) 北区拡張壁整形【市保護課検査】
7.7 (火) 北区拡張壁整形、西区壁整形、南区掘下げ
7.8 (水) 北区拡張壁整形と遺構調査、
西区壁整形と現代層除去
7.9 (木) 北区拡張壁整形と遺構調査、西区遺構調査
【桃山小学校6年生社会科見学（115名）】
7.10 (金) 北区拡張壁整形と遺構調査、西区遺構調査、
第1面遺構検出写真
7.11 (土) 北区拡張清掃、石垣1検出状況写真撮影
7.13 (月) 北区断削り1掘下げ、南区遺構調査、
西区掘乱・遺構調査
7.14 (火) 北区断削り1掘下げ、西区遺構調査、
南区遺構調査、測量
7.15 (水) 北区拡張ピット群遺構調査、
西区第1面写真撮影、北区断削り1掘下げ、
測量【市保護課検査】
7.16 (木) 台風養生
7.17 (金) 台風接近のため現場調査作業中止、
現場点検・見回り、金箔瓦洗浄
7.18 (土) 台風養生復旧、西区東半掘下げ
7.21 (火) 西区東半掘下げ、南区遺構調査、
【市保護課検査】
7.22 (水) 南区写真用清掃、第2面写真撮影
7.23 (木) 西区第2面遺構検出、南区第2面測量
7.24 (金) 西区測量、石垣石材鑑定
【検証委員山田教授来訪】【市保護課検査】
7.25 (土) 西区第2面遺構検出と遺構調査、
北区拡張遺構検出、調査地遠景の写真撮影
7.27 (月) 北区拡張写真撮影・測量、西区遺構調査
【市保護課検査】
7.28 (火) 北区断削り1掘下げ、西区第2面写真撮影、
南区西側から埋戻し開始
7.29 (水) 北区断削り1掘下げ、堀底部掘下げ、
南区堀1西側面構調査
7.30 (木) 北区堀1最下層掘下げ、西区断削り調査、
南区堀1石垣2調査
7.31 (金) 南区堀1石垣2下段確認、埋戻し、
調査終了



調査前風景



石垣1棟出状況



発掘作業風景



発掘作業風景



測量作業風景



記者発表風景



現地説明会風景



調査終了後風景

第2章 遺跡の環境

1. 遺跡の立地と自然環境

伏見桃山丘陵は、京都盆地の東辺を南北方向に走り、尾根線は南方へと徐々に低くなる東山山地の南端部に位置する。桃山丘陵は東部の木幡山を最頂部とし、西方へゆるやかに下る傾斜面を成し、下烏羽から横大路の低地へと至る。丘陵南辺の中央部あたりの西半付近には、現状では平坦な広い頂部となっている半独立的な小丘陵があり、指月の丘と通称されている。調査対象地は、この指月の丘の上面に所在している。この指月の丘を含む桃山丘陵南辺部は、東西方向に1kmを越える南へ強く傾斜した長い崖面が形成されており、南側は巨椋池干拓地を中心とした低湿地帯へと大きく下る。低湿地帯との比高差は、20m弱程である。巨椋池は、京都盆地の3大河川である木津川、宇治川、桂川が合流し、大阪平野へ流れる大山崎地狹の東北部に広がる低地に形成された自然の大遊水池であった。干拓される直前の昭和の初め頃でも、大池よりも湖との表現が妥当と言える規模をほこっていた。現在の宇治川は、巨椋池干拓地と桃山丘陵南辺崖面との間の低地部側の辺部をめぐるように、南西の淀から八幡市方向へと下流しているが、現状は桃山時代に秀吉が太閤堤を築いて付けかえた結果である。

水辺の少し高所となる指月の丘陵上からの眺望は、南西方向の眼下に広がる巨椋池の水面と、背景となる南山城の山々や北端部の男山に石清水八幡宮が鎮座する生駒山系の山々、また西山の山々も加わって織り成すパノラマ的風景によって、絶景の一言につきようである。京都では指月の丘は、嵯峨嵐山と並ぶ月の名勝として名高い所だが、盆地内とは思われない雄大な水面に写る月を愛でることが出来る指月の丘での観月に分があったようだ。

桃山丘陵を含む東山山地は、数千万年前頃とされている中生代白亜紀から新生代第三紀頃には西山や北山に続くように隆起して、丘陵化しさらに山地化した山々である。隆起した岩盤（母岩）は、チャート、砂岩、泥岩あるいは粘板岩等の堆積岩を主体とするものであり、西山や北山と共に通するいわゆる「丹波帯」と称される岩盤的地層である。しかし、東山山地の最南部に位置する桃山丘陵部では岩盤上に堆積していた古い大阪層群及びその上位に堆積していた中・高位段丘堆積土が、低い丘陵状を呈する程度の隆起に止まったようだ。このため古い大阪層群とその上位に堆積していた中・高位段丘堆積土層（桃山礫層等）が、桃山丘陵の地形を規定している基盤土層とされている。この内の大阪層群は、粘土、砂、礫を主体とし複数層からなる新生代第三紀の鮮新世から第四紀更新世の数10万年前の古い堆積歴を持つ自然堆積土層群ではあり、各地層ともによく締まり安定した堆積状況を示す土層群である。その上位に堆積している、丘陵化以前の低地段階において堆積し、大阪層群と併に隆起した風化の進んだ桃山礫層などを中心とする中・高位段丘堆積土層も、堅くよく締まる安定性のある自然堆積土層である。桃山丘陵の基盤は、古い堆積土層群の重なりであり、丘陵全体として、よく締まった安定したものとなっている。

桃山丘陵まで含めた東山山地の西斜面のすそ付近には、北山にまで延びる南北方向に長い「花折れ断層」と称される活断層が走る。その南端部は、桃山丘陵にまで達しており、桃山断層とも称されている。桃山丘陵北辺部付近からは、枝脈的に見える「黄檗断層」が南東から南方向へと走っている。また、宇治川の丘陵南辺沿いから西方向に宇治川断層が東西に走る。しかし、桃山丘陵南辺部を東西方向に延びる崖面は、地質学的には古山科川が造り出した河岸段丘の片側が隆起したものと見られている。桃山丘陵を走る活断層は、一聞では多いとも思われるが、フィリピンプレート、太平洋プレート、北米プレート、ユーラシアプレートの4大プレートが攻めぎ合う、日本列島では、決して多いと特別視する程の密度ではなく、むしろ平均的と見てよい程度ではある。活断層の場合は、断層の走るラインで地下にまで連動して起こる2者の地盤のズレの運動と、その動いた力が引きおこす地震が大きな問題となる。動くラインに関しては、またがる建物は厳禁ではあるが、それぞれの地盤に建っている限りでは、強力な耐震構造を持って対応せざるを得ないのが現状であろう。日本列島のどの地域に住もうと、理解し獲得しなければならない、一般論的事実認識であろう。

秀吉の指月城が、文禄末年の伏見地震（名称的には慶長の大地震）で倒壊した大きな理由の1つは、五重の塔などにみられる耐震力を支える通し柱を使わない、望楼式と称されている積木重ね的に急造した五層の天守閣などが代表するように、なまざに注意とは言いながら耐震工法をまったく顧みなかった点にあると考えている。安定した丘陵の基盤の上に建てられた指月城は、その当時の技術を駆使して、良質な材料と丁寧な仕事をする時間と手間をかければ、法隆寺等の五重の塔と同様に、簡単には倒壊を見るような事はなかっただろう。

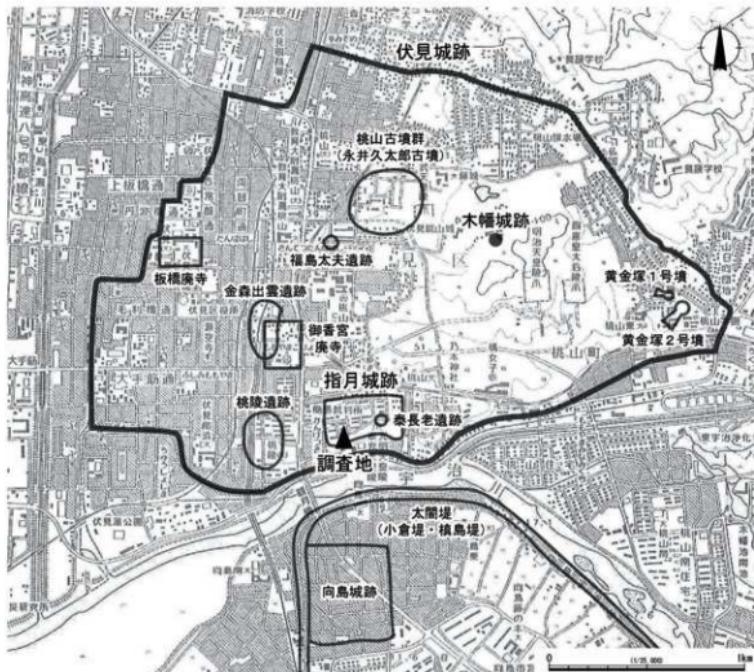
2. 歴史的環境

(1) 古墳時代以前

古墳時代以前とは、現代日本の考古学会では極当然のごとくなっている飛鳥時代を含めたそれ以前を1つにまとめて表現している。飛鳥時代以前としなかった理由は、畿内においても土器の年代観を実体より近いかたちに修正して見ると、飛鳥を中心とした畿内周辺では、寺院や宮殿などの遺跡が出現している事を認めて、それまで古墳時代として見てきた社会や文化のベース部分は、7世紀後葉頃以降に於いて変化が読み取れるようになる。古墳時代文化は、地域によってバラツキはあるが、畿内でもベーシックなレベルでの変化が大きく進んでも奈良時代前半頃まではかなり残っており、他地域では平安時代前期頃までは視覚的に確認できるかたちで残っている。本州の北辺部に位置する青森県では、近年類古墳とでも呼称すべき墳墓が、平安時代前期の9世紀代にまで残っている。飛鳥地方を含む畿内においても、土器の年代観を妥当に修正すれば、飛鳥地方においても終末期古墳と称されている天皇家関係の古墳以外に、たくさんの群集墳と括されているたくさんの古墳（群）が機能し一定のものは奈良時代にまで残る。このような見方からは、時代枠の名称として古墳時代という表現は、まったく適切とは考えていないが、歴史学

的にも一般的にも認められている古墳時代を使用して、その内後葉の初め頃までの7世紀代を古墳時代末期としておきたい。飛鳥時代と表現されている時代と私が使用している古墳時代末期は、ほぼ同様の時間幅を持っていると考えている。

以下では、物質的な歴史資料である遺物・遺構等の考古学資料を使って当地の古墳時代以前の歴史を概観する。伏見の歴史は、縄文時代以前に関しては、まとまった考古資料も知られておらず、不鮮明である。しかし、弥生時代前期の中頃とされる、伏見では最も古い遺跡が、下鳥羽の低湿地の微高地で発見されている。弥生時代前期は、旧来の教科書にまで記されていた位置付けでは紀元前3世紀頃からであったが、最近の研究ではそれまでは縄文晩期とされていた紀元前8～9世紀頃まで遡るとされるようになっている。巨椋池周辺の伏見の低湿地では、紀元前数世紀以前から水田を開発し、本格的米作りをすでに開始していたと考えられるようになった。続き弥生時代中期の早い段階では、深草の丘陵西辺からそこにとり付く扇状地上には集落が進出しており、丘陵のすぐ西につづく鳥羽の低湿地にまで水田が広がっていたようだ。鳥羽離宮遺跡の下層では、弥生時代の遺構や遺物も確認されている。弥生時代後期の方形周溝墓群が、桃山丘陵の南西端の桃陵中学校の発掘調査で発見されている。現段階では、墓址しか発見されていない



第8図 調査位置と周辺遺跡地図

が、弥生時代の方形周溝墓群は近接地にそこで墓を営んだ人々の集落が並存する例が一般的である。伏見城下町建設に伴なう造成等で削平され喪失した所も多いだろうが、近代の同中学校内の調査でも、弥生土器は出土しているようである。このように、弥生時代には、深草丘陵から桃山丘陵にかけて、丘陵西辺部からそこに沿う低湿地帯において、弥生人の土地利用がかなり活発化するようになるのだが、丘陵中位から上部の乾高地への進出は進んでいないようだ。

弥生時代に続く古墳時代には、稲荷山の頂部の1峰、2峰、3峰で前期から中期の方墳3基が、また桃山丘陵東北辺の山裾では、中期の黄金塚古墳が2基確認されているが、地域の容量からは少ない印象がつよく、全国各地で群集墳が増加する後期から末期の古墳も、深草辺りの大和街道沿い等で残影も消滅した等の断片的伝聞情報はあるが、実体確認はほとんどできていない。古墳以外の遺跡でも、深草や鳥羽または桃陵などの遺跡で遺物や遺構が確認されて情報蓄積は進んではいるが、全体像を把握できる程には至っていない。伏見の古墳時代の歴史像の確立の難しさは、深草や桃山の丘陵上に数多く造られた可能性のある古墳や古墳群が、秀吉の城郭と城下町の都市建設に向けて、丘陵地の頂部から斜面地に対して、高い所を削り、低い側へその土を入れて平坦なより広い宅地面を造り出す、いわゆる雑壇造成を大規模に加えた結果、大判の古墳の墳丘が削平され消滅してしまったことが大きな理由であると考えられる。この見方は先学もすでに指摘しているところである。このように考えると伏見の古墳時代は、将来に渡り判らないとの結論になりかねない。しかし、近年の伏見の市街地の調査の増加によって、30年以上前に低地の鳥羽遺跡の発掘調査で確認されていた、いわゆる埋没古墳の周溝が丘陵の中位付近に位置する伏見奉行前町の発掘調査で発見されている。その残っていた周溝内や周辺からは、埴輪も出土しており、古墳時代後期の円墳の周溝であることが判明している。この調査地周辺の桃陵遺跡は、比較的調査が進んでおり、他にも奉行所跡地や桃陵中学校内でも、密度は高くないが、古墳時代の遺構、遺物が確認出来るようになった。伏見の他地域でも、遺構に伴なわない例や混入品的な出土例まで、含めるとかなりの地点で古墳時代の遺物が出土している。さらなる資料増加は前提的条件だが、それにもまして、現時点ですでに大量化しつつある既資料の総合的研究が、個人的努力ではなく調査団体の違いを越えて目的意識を共有するかたちで進める事が必要となっている。このような基本的問題はあるが、概観的には古墳時代に入ると、弥生時代に比べて、古墳を別格としても遺跡や遺物が丘陵の中位付近まで分布が広がっていたと見られる。これは支配層の宅地や交通路の発展、村落の立地条件の多様化などが進む結果と見られるが、伏見丘陵の古墳時代の地域史を理解する上でも行政主導による、既発掘調査資料の総合的研究への進展がのぞまる。

このような状況下にあって、妥当なレベルでの概観も出来なかったが、考古資料からは、伏見という自然的地域世界に人間が本格的村落と稻作等の耕作地的集落を基本とした安定した地域社会を形成し、古墳時代末期にまで歴史は継続、発展していると見ることが出来る。今後縄文時代以前の考古資料が発見される可能性は十分考えられるが、人々が伏見地域で生産を始めて定住して、伏見に地域社会の形成を開始するのが、弥生時代前期の初め頃であるとする認識が大きく変わることははないだろう。弥生時代から古墳時代の伏見という地域の社会がどのような発展をと

げたのか、詳細は明らかではないが、低地部の農業生産に支えられた人々が丘陵すそから中位以下を中心て定住し、丘陵中位にかけて墓域を営み地域社会を発展させてきた地域史の基盤部分は見え始めている。

若干追記する。古墳時代末期頃あるいは、実際に伏見城及びその城下町が形成される頃までは基本的に農村村落を中心とした地域社会が続くとみられるが、定住が始まる弥生時代の深草や桃山丘陵は、低湿地帯の水辺近くまで、照葉樹林を主体とした森林地帯であったと見られる。丘陵裾部ではあっても森林を切り開く必要があつただろう。もちろん里山の変化は進んでいたであろうが、古代から中世の寺院の建設は森を切り開くことから始まるのだろう。桃山丘陵の特に西半地域から森林がほぼ完全に消えるのは、歴史時代も、伏見城及びその城下町の建設が始まつて以降であろう。森林と共生しながらの歴史発展は、古墳時代以前の弥生時代から中世にまで続いたものと考えている。

(2) 古代

ここでは、7世紀後葉頃以降の藤原京期を含む奈良時代以降、いわゆる歴史時代について、主に既史料から綴られてきた既往の歴史観を中心に記す。対象地域を古墳時代以前と同様に、少なくとも伏見全域とすべきではあるが、紙面や時間の限定性もあり、伏見桃山丘陵の内にある今回の調査地が所在している指月の丘と通称されている小地域を中心とした記述にとどめる。

伏見という地名は、おおよそ5世紀代と目されている『日本書紀』雄略天皇17年の条が初見とされており、続いて『万葉集』第九の「宇治川にして作る歌」に、一射目人乃伏見何田井一と出てくるとされている。『日本書紀』の作成は8世紀初め頃であり、万葉集も8世紀にまとめられたものであり、いずれにしても奈良時代の8世紀代頃には、稻荷山以南の東山丘陵南辺部にあたる深草丘陵や桃山丘陵中心とした地域一帯は、伏見との通称が当時の中央において定着していたのだろう。

桃山丘陵では、その頃の遺跡は多くは確認されていないが、現御香宮の下層からは7世紀代末頃から8世紀代前半頃にかけての土器や瓦等の遺物や構溝の遺構が確認されており、御香宮廃寺（遺跡）とされている。御香宮廃寺がまとまった資料から確認出来る桃山丘陵では最も古い古代の遺跡である。同様の時代の遺跡及びもう少し古い古墳時代末期頃まで遡る遺物や遺構が丘陵南西部の桃陵遺跡で出土がみられるようになっている。古代の早い時期からは古墳時代にもまして丘陵上の開発が進むようだ。しかし、中世の室町時代には文献資料が増加する伏見九郷が、郷単位的に編成されるようになるのは、古代からではあろうが、村落実体と村名そのものは、古代以前からと考えられる。九郷の村々が古墳あるいは弥生時代から連続するものかについては実証的解明の必要な大きな課題だろう。伏見九郷の一つである、森林のはずれになるのか船戸庄村のはずれになるのか談じ難いが、桃陵遺跡は弥生時代から連続と続き、さらに古代・中世へと続く歴史の非常に長い遺跡である。弥生時代・古墳時代の遺跡と古代・中世の遺跡がつながる伏見では数少ない遺跡の一つでもあり、巨椋池岸部を含むとみられ、津の内存している可能性も含めて

非常に高く注目している。

このように伏見という大きな地域名称が古代の早い段階まで遡り、地域開発は桃山丘陵全体では、古代に入ってさらに進むようだが、後に指月の丘と通称されるようになる、桃山丘陵南北の半独立的小丘部の土地利用は、古代の平安時代中期頃まで不鮮明な状態が続く。しかし、森林であったろうこの丘のそれまでにない土地利用は、平安時代中期末頃から始まるようである。

(3) 古代末～中世

平安時代の治暦3年(1067)頃には、平等院を建てた閑白藤原頼道の子である橘(藤原)俊綱が、伏見山に持仏堂である即成就院(後の伏見寺)を作なった壮大美麗な伏見山荘の造営を始めたとされているが、丘陵上でこの山荘の細かい位置の特定は、文献からだけでは難しい。しかし、平安時代末期から中世にかけての文献史料からは、後白河上皇以来の仙洞御所ともなる山荘の宮殿の伏見殿や、それらとも関連の深い大光明寺などの寺社が、中世には指月の丘陵上に建てられたことは歴史的事実としてよいだろう。

俊綱の伏見山荘は、弟の家綱に伝領され、さらに白河法皇に献上、法皇は養子の源有仁にさらに有仁の子となった皇女頌子内親王(伏見庄も)に伝領、この頌子内親王が遅くとも建久2年(1191)には今の指月の丘を含む伏見領を、後白河院(法皇)に献上する。後白河院はこの丘陵上に伏見殿を建立し、そこを始めて仙洞御所(後院ともいう)とした。その後御所を含んだ長講堂領は、承久3年(1221)の承久の乱後に鎌倉幕府に没収される。しかし、その後伏見領は、天皇家に返還され、正元元年(1259)には、後深草院が、伏見殿を建てて後院=仙洞御所としている。その後、伏見院(1298年頃)、後伏見院(1301年)、花園院(1301年頃)ら3代、伏見殿を仙洞御所としている。南北朝のさなかの貞治2年(正平18年、1363)には、北朝の光嚴院は御領処分なしとなり、伏見領全体は崇光院の別相伝とすると定められた。崇光天皇が退位した觀応2年(正平6年、1351)には、同院が伏見殿を仙洞御所としている。その後子の栄仁親王に伝えられて、伏見殿は代々伏見宮家の当主に伝えられていく。栄仁親王は、四大宮家とされる伏見宮家の祖(初代)となる。

大光明寺は、北朝の御願寺として後伏見天皇の皇后であった広義門院藤原寧子により、文和年間(1352～55)頃に夢想礎石の開山になる臨濟宗の禅寺である。この寺には、光嚴・光明・崇光の三院(三天皇)が祀られている。その位置は、丘陵上の伏見殿の東隣地辺であり、現在の大光明寺跡に重なる付近と見るのが妥当である。大光明寺と伏見殿は、丘陵上で隣接並存する建物群であったと見てよいだろう。なお、伏見家初代の栄仁親王は、丘の麓の現在の月橋院辺とも言われているが、14世紀中頃には、大光明寺領の塔頭である、大通院指月庵を建てて隠棲している。若干それるが、この丘陵の名称は、14世紀中頃には指月の丘となっていたようである。厳密には、指月という名詞は禪宗系の仏教用語であり、この寺院名称が先行する可能性もあるが、丘陵の名称が先行しており、それを庵の名称としたと見ておきたい。現在の月橋院の指月山という山号は、先行するゆかりの地名からの名称であろう。

弥生時代以降歴史時代に入った古代・中世にかけてまで、伏見九郷とされる農村的集落を軸にした地域社会を形成してきた伏見の地域社会の上に、日本という古代律令国家が大きくかぶるが、桃山丘陵辺の伏見では古代末期頃までは文献的にも考古学的にも、支配層や権力者の影を大きく感じとれない。しかし、古代末期の平安時代中期末頃、承久年間（1069～74）には、地域社会にとっては、かなり唐突的にも見えるように、今の指月の丘辺に、橘（藤原）俊綱の立派な山荘が建つ。以降平安時代から室町時代にかけて、伏見は天皇家の直轄的な莊園となり、指月の丘陵上には仙洞御所となるレベルの宮殿である伏見殿が続く。14世紀代の室町時代初めの南北朝以降は、指月の丘陵上には大きな禅寺である光明寺も立並び、華やぎのある都市的空间を形成していたようだ。光明寺は応永8年（1401）には焼亡するが一定は復旧している。

このように指月の丘は、古代末期から中世には伏見の地域社会にとっても中心的なところになるが、指月の丘を中心に建っていた宮殿は、地域の支配者の居館等とはまったく異質な、天皇が退位後に使う後院＝仙洞御所という隠居御殿が中心的であり、伏見宮家の宮殿となり、伏見が宮家の所領となっても、本質的には地域社会とは付き合いの薄い、別格の存在であること大きな変化がなかったと見られる。伏見は指月の丘の宮殿や大寺院を受け入れながらも、近世に入るまでというよりも城下町に組み込まれ再編されるまでは、古墳時代以前からの農業（水産業・水運？）を基盤とした伝統的地域社会を維持し、発展させてきたものと見ている。

（4）近世・近代・安土・桃山時代以降

伏見地域で最も大きな歴史的画期は、近世初頭の安土・桃山時代に豊臣秀吉が始めた城とその城下町造りにあることは言を用しないだろう。京都市史である『京都の歴史4巻 桃山の開花』にとどまらず、国定教科書でも広く使用されている（安土・）桃山時代は、本来的には（安土・）伏見時代とすべき時代枠の名称である。江戸時代に城跡地となった伏見丘陵が大桃畠となり、春に咲き誇った桃花の華やぎが、彩り豊かな（安土・）桃山文化のイメージにあまりにフィットしたことが、後発の名称でありながら地名化にとどまらず時代枠名称にまで摺り替わってしまったものと思われる。

この安土・桃山時代は、『京都の歴史』では天下人の変化によって大きくⅠ～Ⅲの3期に区分されて概説されている。同Ⅰ期は、この時期に天下人への階段を駆け登った織田信長の時代である。信長が入京を果たした永禄11年（1568）から、天正10年（1582）に本能寺の変で倒れるまでの15年間である。巨椋池の槇島にあった小さな城に、室町幕府15代將軍足利義昭が籠城するが、伏見の岸に殺到した信長軍に包囲され1日を待たずに敗れて、畿外へと追放されてしまう。これによって200有余年続いた室町幕府は、滅亡する。このとき伏見と直結する巨椋池の槇島（城）が、一瞬歴史の表舞台に登場し大きな注目を受けるが、巨椋池の北東岸の伏見地域は、信長の時代に再び注目されるような事件もおこることはなかった。

同Ⅱ期は、倒れた信長に変わって羽柴秀吉が天下人豊臣秀吉になる天正10年（1582）から、秀吉が没する慶長3年（1598）までの16年間である。この頃短期間で天下人へと駆け上がった

第1表 仙洞御所伏見殿一覧

上皇	譲位年月日	崩御年月日	仙洞御所
後白河上皇	保元3(1158).8.11	建久3(1192).3.13	高松殿・三条烏丸殿・法住寺殿・七条殿・六条殿
後深草上皇	正元元(1259).11.26	嘉元2(1304).7.16	冷泉富小路殿・二条高倉殿・六条西洞院殿 ・常盤井殿・持明院殿・ 伏見殿
伏見上皇	永仁6(1298).7.23	文保元(1317).9.3	二条高倉殿・冷泉富小路殿・常盤井殿・持明院殿 ・ 伏見殿
後伏見上皇	正安3(1301).正.21	建武3(1336).4.6	二条富小路殿・冷泉富小路殿・常盤井殿 ・持明院殿・ 伏見殿
花園上皇	文保2(1318).2.26	貞和4(1348).11.11	土御門東洞院殿・持明院殿・ 伏見殿 ・萩原殿
光明上皇	貞和4(1348).10.27	康永2(1380).6.24	土御門殿・持明院殿・大和賀名生・河内天野 ・宇治殿・ 伏見殿
崇光上皇	親応2(1351).11.7	応永5(1398).正.13	大和賀名生・河内天野・菊亭今出川邸・室町殿 ・ 伏見殿

※仙洞御所…譲位した天皇の御所。後院とも称する。

『国史大辞典』吉川弘文館 改変

秀吉は、同Ⅱ期の早い段階で急速な出世のステップアップを示すごとに、山崎の合戦に勝利した翌年天正11年（1583）には天下譲請で大坂城の築城を開始、太政大臣となり豊臣姓を賜う天正14年（1586）には京都に聚楽第と、天下人の居城となす大規模城郭を連続的に築いている。同Ⅱ期に入っても天正後半頃までの伏見は、宇治とともに宮殿が造立される程の、山と水が織り成す絶景に、月の名所の魅力が加わるという、自然景観の好条件を有しながらも、本質的には山城の農村地帯の一角を占めるにとどまっている。しかし、秀吉の晩年ともなる同Ⅱ期後半となる天正末年から文禄年間頃（1590年代）になると、伏見は地域の住民にとっては青天の霹靂のごとくの激変が、真に突如として秀吉によって引き起こされる。その序曲は、天正末年であり、文禄元年でもある1592年に、伏見桃山丘陵の南西辺に位置する指月の丘で始まる、太閤秀吉の隠居城の築造である。しかし、序曲といえる期間は通例通り極短く、翌年文禄2年（1593）には、城の本格城化、城下町の建設、堤の築造、宇治川のつけ替えを含む大規模な交通インフラの整備等々が、先にグランドデザインがあり各部の設計や人員の確保や建設スケジュールまでが出来ていたかのように、一斉に開始され具現化される。文禄2年（1593）に命令、同3年（1594）正月には着工し、その八朔の日である11月1日には秀吉は入城している。翌同4年には、工事は続いていたようだが、城郭、大名屋敷を含む城下町、水陸の交通網等の主要要素はほぼ完成していたようである。農村伏見は、2年もかからず大坂と並ぶ秀吉政府の首都的大都市へと大きな様変わりを遂げる。この城と城下町造りは、伏見桃山丘陵西斜面の宅地化を目的とした、大規模雑壇造成から始まったと見てよいだろう。現代的都市建設では前提である道と宅地を計画に基づいて造成し、完成した町割りの基盤の上に、大名屋敷や町屋個々を配してゆく。もちろん工事期間の短さからは、このような基礎工事に關してもいくつもの工区単位を分担するいわゆる天下譲請での一氣施工であったと見られる。この時に造られた西に段々と下る宅地面やその間に通された直線的道路は、今も伏見の町にはよくその姿をとどめている。この初期段階の城下町造りは、現

大手筋より南側が中心的であったと見られる。現在の町の地図を見ても、鍵形にまがる道路は大手筋以南でしか見られない。大手筋を含めてその北側とくに町屋地区等は、次の段階で本格化するものと見ている。

なお、この隠居所（城）をほぼ新造に近いかたちで築城された城に関しては、両者ともに指月の丘上で進められたものと理解している。このためこの初期の伏見城に関しては、伏見・指月城の名称としておく。文献史料からの解釈は立場の違いもあり深く言及はしないが、『京都の歴史第4巻 桃山の開花』の伏見城関係の執筆者（黒川直則・野田只夫）や『豊臣秀吉の居城・聚楽第／伏見城編』の著者櫻井成廣らが記している、文献史料家の立場からの指月城（指月の岡城）に対するほぼ共通すると理解出来る認識は、その根拠と共に十分に首肯出来るものとの立場はここで表記しておく。指月城は、存在していなかったとする考え方には組し難い。指月城が歴史的に存在したものである点については、考古資料とその正確な認識を提示することによって実証的に示したい。

伏見の指月城や城下町の建設が進んでいる頃、文禄朝鮮の役は中国明軍が参戦し膠着状態に陥り、小西行長は講和条約締結を画策し、秀吉は明の使節とは大阪城ではなく新造中の伏見の城で引見すると決める。結果的には、明の副使には伏見の城で謁見したようだが、正使との会見が予定されていた文禄5年（慶長元年、1596）7月18日の1週間程前の同7月13日の夜半に、後で慶長の伏見地震ともされる大地震により城郭施設の多くは倒壊してしまう。明正使との会見は、結果大阪城で行なわれた。その会見の後秀吉は朝鮮再征を発することとなる。また伏見の城と城下町は、地震で倒壊した翌日には、本丸を指月の丘の北東に位置する木幡山へ移す形で再建が命じられ、時をうつさず再建工事が始まる。翌年慶長2年（1597）には、新造になった木幡伏見城に秀吉は秀頼と一緒に入城している。

この様に慶長年間初期（1590年代後半）には、木幡山の伏見城は早くも完成しており、名実ともに太閤秀吉最晩年の政治の舞台となった。秀吉は、慶長3年（1598）にこの伏見城で没しており、天下人秀吉の時代であった安土・桃山時代Ⅱ期もこれで閉じる。伏見・木幡城の建設段階では、指月城が破棄された丘上は三度整備されて大名屋敷地帯へと組み込まれた事が、江戸時代前期以来の各種の伏見城とその城下を描いた地図等の資料から明らかなところである。同Ⅱ期後半に秀吉により大開発されて、森と水に囲まれた田園地帯であった伏見は都市化され、京都と大阪を繋ぐ主都の一画を占め、政治の表舞台として輝く存在となつた。しかし、続く徳川家康の時代として設定されている安土・桃山時代Ⅲ期には、城と城下町の景観が大きく変わることはなかったが、家康によって秀吉の主都であった伏見の城・城下町ともに性格は大きく変わっていく。

安土・桃山時代のⅢ期は、秀吉の没する慶長3年（1598）から教科書的には、徳川幕府の開幕となる慶長8年（1603）までとなるが、『京都の歴史第4巻 桃山の開花』で言う豊臣氏が滅亡する慶長20年、元和元年（1615）頃までに從つていて。家康は、Ⅲ期の頭となる秀吉没直後から石田三成らを中心とした豊臣家臣団と意図的に反目を強めながら、畿内での拠点を伏見へと移し、慶長4年（1599）には大阪城へと移った豊臣秀頼と変わるように、伏見本城へと入つて

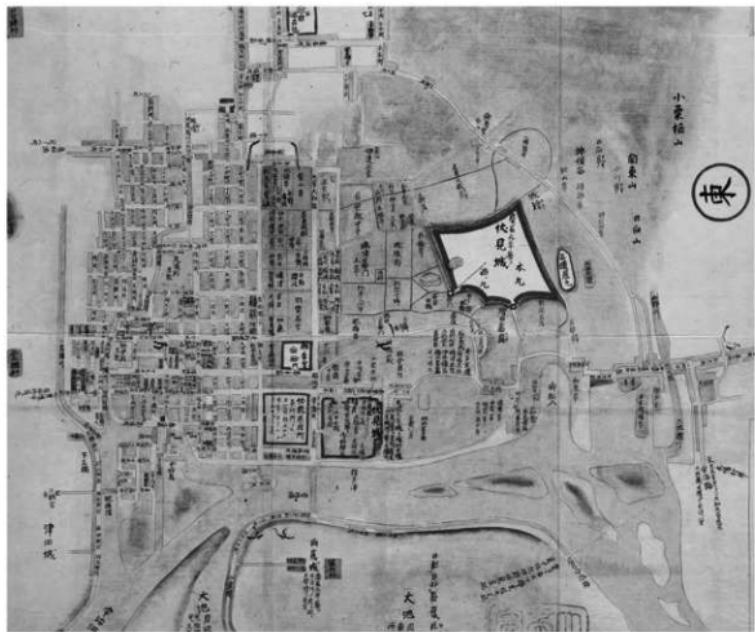
いる。以降伏見木幡城は、家康を城主とするごとく成る。この結果、天下統一戦となる慶長5年（1600）の関ヶ原の合戦の前哨戦では、石田三成を中心とした西軍に攻められて延焼し落城している。その前段では、徳川側の東軍が西軍の大名屋敷を焼き討ちしている。安土・桃山時代Ⅲ期は、都市化した伏見にとって初めての受難の時代であるが、一面では再編の時代でもあった。関ヶ原で勝利した家康は、慶長8年（1603）には征夷大將軍となり徳川幕府を開いている。その前段階から家康は、大坂城に残る秀頼の豊臣氏を意識して、大坂城包囲網の要とするため、伏見城を再建し自らの本城の1つとしている。伏見の再建は、本城や大名屋敷にとどまらず、城下町の再開発や交通インフラの整備にまで及んでいる。早く慶長6年（1601）には、伏見の両替町に日本で最初の銀座を開設しており、慶長16年（1611）には、角倉了以を持って京都と直接結ぶ高瀬川の開削工事なども行なっている。伏見の都市機能は、復旧にとどまらずこのような新たな開発にまで力を入れている。この様に伏見は、安土・桃山時代Ⅲ期において城下町を含めて、景観に大きな変化は見られなかったとも思われるが、城・城下町とともに内実は大坂・京都を押さえる徳川氏の主要的都市へと大きく変貌を遂げていると理解すべきだろう。慶長19年（1614）～20年（元和元年、1615）の大坂の陣では、豊臣氏を滅ぼした後伏見城へ凱旋している。しかし、豊臣氏に対する完全勝利は、徳川氏の伏見城の本質的存在意義を失わせるものである事は言を要さない。

京都でいう安土・桃山時代Ⅲ期は、大坂の陣の終了する元和元年（慶長20年、1615）をもつて終わり、伏見城も次代の天下人・家康によって翌年元和2年（1516）に伏見城の廃城が決定されるが、同9年（1623）に徳川家光が將軍宣下を受けるまでは残されていた。しかし、その翌年寛永元年（元和10年、1624）には完全に破却されている。同Ⅲ期直後には、それまでの伏見の城と城下町を造り出した主役である天下人や支えた大名またはそれらの家人達の多くは伏見の町から去っている。元和年間中には、大名屋敷もそのほとんどが移転しており、城と大名屋敷が林立した丘陵上部は、大名らの氏名が地名として残るだけとなり、桃畠となっていゆく。江戸時代の早い内には、伏見や京都の人々の間には桃山丘陵との呼称が広がり定着していくようである。

このように伏見にとっては、江戸時代前期の元和年間（1615～1624）は都市化してからの初めての変化期＝画期ではある。城や大名屋敷の姿は失われ、政治色は消えていき、奉行所は残るが町衆（町屋・商家）を中心とした経済的町へと、都市的には規模縮小した変容を遂げる。しかし、秀吉が天下人の力を持って造り出し、家康がフォローして都市伏見の基本的性格ともなった交通の要衝としての地位は、揺らぐことはなかった。伏見の浜は、宇治川、淀川の水運を通じて大坂さらに国内外の各地へと繋がり、陸路も京都・奈良・大坂・大津へ通じ、各都市のむこうの国内各地と繋がっている。江戸時代における伏見の酒造業の発展要因は、京都から受け継いだ伝統的技術と御香水、伏見水にもあるが、天下人秀吉と家康が残した交通の要衝と称される遺産の上に乗って全国へ広がり発展する。江戸時代の伏見は、安土・桃山時代の政治都市の伏見ではなくなるが、1次産業中心の農村地帯にもどることもなく、交通の要衝であり京の外港という、天

下人によって造られた都市性格を利用し、酒造業に限らない各種の二・三次産業によって、ゆるやかとはなったが、都市的発展を続けたものと理解される。安土・桃山時代のこの地域が発する独特の放光と、その結果が、京都に対して自主独立的な一面を持った伏見人を成長させたものと考えている。

近世末期の幕末には伏見の町は戊辰戦争の戦場ともなるが、近代に入る明治時代には、伏見は深草あたりから桃山丘陵にかけて、旧日本陸軍第16師団関係の諸施設が建ち並び、丘陵上には練兵場や射撃場などが幾つも造られ、指月の丘も軍事施設が建ち、伏見は軍都に変貌するようである。また、これとも関連する面を持つが、いわゆる国鉄の東からの路線が伏見を通り京都へと向う。また、昭和には、私鉄の2路線が伏見で交差して、京都・大阪・奈良を結ぶようになる。これらも安土・桃山時代以来の交通の要衝としての伏見の性格が呼び寄せた新交通路であろう。近代に入り鉄道網の発展で各地の水運が衰退する中、伏見はその新交通路が早々と町際を走り、都市としての再生を果たすようである。戦後伏見は、伝統産業を内包しながらも京都と大阪のベッドタウン的住宅地として発展を続けている。各地の古い昭和的商店街が衰退する現代社会にあって、大手筋商店街は、2線の私鉄とJRによって運ばれた人々で今も賑わい発展を保っている。秀吉・家康が残した遺産が、伏見という町では今も生きているようだ。



第9図 近世伏見地図
【画像提供：国際日本文化研究センター / 所蔵：国立公文書館】

第2表 関連年表

半 年は、西暦と年号（和暦）を並記し、月日は和暦（旧暦）を基本としている。

区分	西暦	年号	政治・社会	城・城下町地、天下人關係中心	文化、他、備考
	1537	天文6	2. 豊臣秀吉 尾張守村 等右衛門・なかの子として出生 9. 与西郎（平利休）京都で茶会 織田信長3才		
	1551	〃20	3. 尾張国 織田信秀没 子 信長家督を継ぐ		
	1552	〃21	2. 三好長慶入京		
	1553	〃22	6. 第1回 川中島合戦（長尾虎虎×武田信玄） 豊虎上洛・参入 塙へ		
	1554	〃23	3. 北山（相模） - 今川（駿河） - 武田（甲斐） 4. 信長 潤州城進出 秀吉 信長の小者となる		
	1555	〃24	第2回 川中島合戦 弘治1 7. 優勝の南朝 定宗に連絡		武野裕謹 逸 3. 小舟 手舟興行
	1556	〃2	4. 三好長慶 山城國宇治橋造替		
室町時代	1557	〃3	第3回 川中島合戦 4.28 上京大火 95 後奈良天皇 廃御 泉涌寺に火葬 10.27 正親町天皇 在位		
	1558	〃4	3. 足利義輝 入京 永禄1		
	1559	〃2	2. 信長 入京 4. 長尾虎虎 入京		
	1560	〃3	5. 椎葉郡の戦い 今川義元没 8. 長尾虎虎 上野国に出席		
	1561	〃4	11. 関東征伐 上杉政定（謙信） 9. 第4回 川中島合戦	8. 秀吉 おねと結婚 この頃以降「木下藤吉郎」と名乗る	
	1562	〃5	1. 信長・市川家康 同盟（清洲城にて）	2. 信長 反む攻城	
	1563	〃6	1. 長宗我部元親 土佐朝敵守城を攻略 9. 信長・秀吉・徳川の美濃守藤山城奪取	7. 信長 尾張小牧山城 美濃攻略拠点	宣教師フロイス 長崎に上陸
	1564	〃7	10. 上杉景虎 川中島に逃走 12. 大坂・朝敵など撃滅		
	1565	〃8	5. 三好・松永ら 足利義輝を安土町に襲撃		7. フロイスを京都より追放
	1566	〃9	2. 三好三人衆 豊山高政を河内に破る 12. 家康「黒川」を称す	9. 信長 木下秀吉 美濃国墨俣に築城	
	1567	〃10	8. 信長・秀吉・三好三人衆 東大寺に破る 10. 松永・秀吉 三好三人衆を東大寺に破る 大坂・朝敵に辱る	8. 信長・秀吉・徳川を攻略 駿賀山に進出 岐阜城を築造	10. 信長 美濃国加納の 鳴市美庭 岐阜城に城下町
	1568	〃11	9. 信長・足利義昭奉じ入京 足利義昭が奥大寺守となる		
安土桃山時代	1569	〃12	1. 三好三人衆・元親 足利義昭を本圀寺に迎む 4. 秀吉吉田二条城（二条御所）警備	2. 信長 足利義昭に 旧二条城（二条御所）菜穂 膳院伏姫（膳院勝考）	旧二条城石垣・墓石多數 膳院守城 穴太（衆）構み
	1570	〃13	1. 足利義昭 信長と対立 6. 鮎川の合戦	6. 家康 池松城築城 同時から移る	
	元龜1		9. 本願寺光元（顯如） 信長軍と攻戦 10. 山城守間の士一揆		
			11. 信長 長島一向一揆攻撃		
	1571	〃2	5. 信長 尾張長島一向一揆討伐戦 9. 信長延暦寺焼き討ち		7. 武田信玄・家康 東大寺大仏殿再建の費用援助
	1572	〃3	12. 武田信玄 家康を三方原に破る	1. 明智光秀 近江坂本城築城	9. 信長 近江国金森に美田美庭 対馬守宗氏 朝敵との通行貿易権が集中する
代時（～代代）	1573	〃4	7. 足利義昭 宇治橋城にて信長に敗れる 室町幕府滅亡 8. 信長・秀吉・朝倉氏を滅ぼす 秀吉に満足の旧領を与える	3. 武田信玄 野田城 4. 信長 上京焼き 足利義昭二条城に圍む 7. 秀吉「木下」から「羽柴」と改姓	
（～代代）	天正1				
（～代代）	1574	〃2	6. 秀吉 長浜城と同城下町建設 9. 長島一向一揆 信長に降る	3. 信長 多賀城で東大寺の豪養寺を受 4. 本願寺顕如 大坂に率兵	1. 信長 蘭尹の娘を免許 他所の廻停止 6. 信長 洛中洛外因襲風 (対野永徳) 謙信に贈る
（～代代）	1575	〃3	5. 長篠の合戦	9. 信長 超前国内の所領を削減 10. 信長 京の妙覚寺で茶会を催す 平宗室が茶頭	
（～代代）	1576	〃4	6. 本願寺光元（顯如） 照津御石山城（石山本願寺）で再び信長と戦う 6. 石山城（石山本願寺）包囲	2. 信長 安土城築城開始 安土城に移る	

区分	西暦	年号	政治・社会	城・城下町施、天下人団体中心	文化、他、備考
桃山時代（一期）	1577	〃5	10.信長・明智光秀ら信濃山城を攻略 秀吉 中国攻略本格化	明智光秀 京都 須山城築城開始 (～天正7年完成)	3.信長の命 異なる盆地を修築 6.安土城下に美市民衆
	1578	〃6	11.九鬼嘉隆 信長の命の経済にて毛利本軍を破る 島津義久、向日国高城にて大友宗麟軍を破る	3.上杉景勝 日山城にて家臣を相続	10.景裏で相模を催す
	1579	天正7	5.安土宗室の争 (承宗系×法華宗)	1.安土城に津田宗市及び 5.安土城守闇門より完成	宣教師オルガンチノに 安土に寺社建設可
	1580	〃8	1.秀吉 别所長治を猪鹿三木城に攻撃 3.石山本廟寺 信長に降伏	4.秀吉 姫路城拡張 11.信長 大和郡山城 指井陣原に与える	6.信長 石清水八幡宮造営
	1581	〃9	6.秀吉 姫路城で茶会	8.信長 高野堂数百人を捕えて処刑する 9.信長 伊賀平定	2.ツアニヤーへ 京都にて 信長に黒い駄上 2.信長 内裏東側で馬組え
	1582	〃10	1.武田氏滅亡 6.5本廟寺の愛 信長没す 山崎の合戦 明智光秀敗死 6.濃州（三國）会議	5.備中高松城の攻城戦 6.秀吉 山崎城築城開始	
	1583	〃11	4.秀吉 近江猪ヶ谷にて 柴田勝家の母含め豊臣盛政を破る 4.24 謙朝切腹	8.秀吉 大坂城築城開始 9.京都二条に妙徳寺城を建造	6.秀吉 大徳寺で侯長の一 周忌法要を宮む
	1584	〃12	3.小牧・長久手の戦い (秀吉×家康)	8.秀吉 大坂城新部に移る	
	1585	〃13	3.確立 根本改め 7.秀吉 開元となる 9.海外派遺の意志を公表	秀長 大和郡山城に入る 大坂城完成 秀次 近江国安土の町を八幡山下に	秀吉 正親町天皇に仙洞御所造営 豊中茶会を催す千利休
	1586	〃14	9.秀吉 正親町天皇に直轄領を認める 10.秀吉・家康 大坂城にて和睦 11.後陽成天皇即位 12.秀吉 太政大臣となる	2.秀吉 麟乗殿若主 4.秀吉 東山に大坂の道造営開始	2.25 仙洞御所造営 10.秀長 大和國中に直升使用命令
安土桃山時代（二期）	1587	〃15	1.秀吉 烏津城討伐開始 3.秀吉 出陣	9.秀吉 麟乘殿完成 大坂城より移る	秀吉 北野大茶湯 千利休泡
	1588	〃16	4.後陽成天皇 家康御行幸 5.加藤清正 肥後入国	5.方広寺で大仏開眼の儀 7.秀吉 刀狩り令 8.座廻止	後藤徳兼 秀吉命で天正大利造
	1589	〃17	5.秀吉・英次の子秀忠・淀川で生れれる 11.秀吉・小田急 (後北条氏) 征伐令発	秀吉 伊豆 石山城 (後北条攻め) 秀長 淀古城築堤 淀説入る	3.慶美第の辯に落書きあり 5.慶美第にて金隠り
	1590	〃18	7.後北条氏 英吉に家臣開闢して移封 11.秀吉・慶美第にて朝鮮使節と謁見 2年後の朝鮮出兵のため 立花宗茂ら大坂陣を命じる	7.歐州の位置きなる	9.慶美第で茶会 12.後陽成天皇 新御内裏（御常御閣）へ
	1591	〃19	4.秀吉 沿岸諸国に官舗建設を命じる 8.鶴松才之介 9.朝鮮征討令発 11.秀吉 開白を秀次に	閑院・秀吉 土居を築造 10.秀吉 肥前毛羅屋城築城開始	千利休 京都追放 秀長没後呼び戻され京にて自刃 秀吉 本廟寺に六条絆川の地与える
	1592	〃20	3.文禄の秋 秀吉 新朝名屋城へ 文禄1 8.西行方明の沈没事故と50日前の休戦協定を結ぶ	8.秀吉 伏見 (指月の丘) に膳所城普請 12.秀吉 伏見城築城請負かず	秀吉 膳所城普請 小規模で出発 石垣あり
	1593	〃2	8.秀吉・越後の子秀頼が生まれる 9.朝鮮征討令決定 朝鮮に在陣の加藤清正ら倭城多数築城	秀吉 丹波尼崎城を擴張化 明の勤節をここに記せる目的も兼ねる	9.方広寺大仏廻上権
	1594	〃3	8.秀吉 伏見丸岡城へ移る	3.7月の膳所城改築大工奉仕工 8.1伏見指月城建工	淀古城破却 天守（三重）など伏見指月城へ
	1595	〃4	7.2.15 秀吉 西方に自殺する 同日 秀次切腹	7.膳所第3代破却 材木など伏見指月城へ	
	1596	〃5	9.秀吉 明の副使 深沢敬と伏見稻葉城で謁見 慶長1 7.伏見城地盤 地盤削除 明の2月使節と大坂城で引見	毛利氏庭 波川に太閤堤を築く 閑院・秀吉 丹波尼崎城 8.木幡山の伏見城の再築を始める	
桃山時代（三期）	1597	〃2	1.慶長の役 秀吉 再興再貢を命じる 7.ルソン統督の使者 秀吉と大坂城で謁見	1.木幡山の伏見城築城開始 5.4月の伏見城天守完成 秀吉・秀頼 入城	伏見城内に舟入学問所成り 西堀承児「学問所記」を草する
	1598	〃3	8.五大老・五奉行・卸貯 9.18 秀吉伏見城に没する 家臣ら朝鮮砦兵を命じる	5.宇喜多・毛利・西川・ 桂鏡賀・藤原ら陣固 11.小笠行長・加藤清正・大坂城 朝鮮からの搬出完了	3.秀吉 關原寺で花見を催す
	1599	〃4	1.秀頼 伏見城から大坂城へ移る 家臣向島から伏見城へ入る	4.家康 大坂城で秀頼と会見	2.前田利家 加賀領内百姓の 佐渡金山移住を禁じる
	1600	〃5	6.家康 伏見城から大津征伐に出る 9.関ヶ原の戦い 菊池家康 起つ	8.西軍諸将の伏見城敷地へ 池田輝政 姫路城入城 春年から大改修	
	1601	〃6	5.家康 伏見に御座を設ける	3.家康 大坂城再建 大坂城から伏見城に入る 黒田長政 須山城築城開始	家康 伏見大光明寺跡に学校 円光寺とする 佐渡金山発見される
	1602	〃7	家康 本廟寺前法主 光寿（教如）に 烏丸六条の地と与える	5.家康 京都二条城 舞臺着手 6.家康 菖蒲池へ走らに命じて 伏見城の増築開始 藤島高虎 今治城築城開始	佐渡・石見などで銀鉛多産 方広寺大仏開炎上

区分	西暦	年号	政治・社会	城・城下町化、天下人関係中心	文化、他、備考
江戸時代～明治時代の教科書的	1603	慶長8	2.家康 征夷大将軍となる 江戸幕府開幕	家康 江戸城の大規模拡張に着手 井伊直勝 役替城築城開始 (元和2年完成)	
	1604	〃9		江戸城の工事本格化 天下普請 藤堂高虎 編引き?	
	1605	〃10	3.家康 伏見城で朝鮮使節と会見 4.徳川秀忠 征夷大将軍となる	12.伏見城下に火災 大名座敷多数焼亡	
	1606	〃11	家康 藩庁に態度を設ける	江戸幕府 仙洞御所造営に着手 伏見城石垣修築 江戸城復築開始	壁草流行 箱所 煙草の栽培禁止令
	1607	〃12	5.20 朝鮮使節 駿府城で家康に面見	家康 駿府城を篠原城に駿府作廢 伏見城石垣修築 江戸城復築 加藤嘉正 熊本城築城	
	1608	〃13		藤堂高虎 今治城を完成させる 酒に移封 津城へ入城	
	1609	〃14	島津家久 球球に出身 球球を付属国とす		秀頼 京都方丈寺再建開始 淀川決済 伏見汎水
	1610	〃15		1.名古屋城 築城開始 (慶長19年完成)	
	1611	〃16	3.27 後水尾天皇即位 家康 伏見城に入る 角倉了以 高瀬川開削	江戸幕府 諸大夫に禁裏作道命令し 藤堂高虎 伊賀上野城の大修築開始 3.家康 二条城にて秀頼と会見	
	1612	〃17	駿府の細度を江戸に移す		
	1613	〃18	高瀬川完成 (二条桃木町 (現 木屋町) ～伏見)		江戸幕府 キリスト教禁止 宣教師・教徒 追放
	1614	〃19	方広寺 墓地事件 大坂の陣	家康 伏見城代松平定頼に嚴威を命じる 大工頭 中井正経・林通善・角倉与一 宇治川開削を家康に上申	松花堂朝美 衛信伝説のもとめで 長良歌を書き
	1615	〃20 元和1	大坂夏の陣 定光・秀頼没 直臣氏滅亡 家康・秀忠 伏見城へ凱旋する 江戸幕府 一揆一城令 発令	大坂城落城 無死	江戸幕府 淀川通書船の支配を 木村氏・角倉氏に命ずる 本阿弥光世 家康から 洛北農耕の地を併領する
	1616	〃2	4.家康 駿府城にて没する 駿府因久能山に葬る 5.幕府 京都方広寺境内に秀吉廟墓建立		江戸幕府 墓草の栽培禁止令 淀川通書船の法規制定 木村・角倉氏に支配させる
江戸時代	1617	〃3	9.秀頼使節 京入	6.秀忠 伏見城へ入る	
	1618	〃4		江戸幕府 伏見城後橋造替する	江戸幕府 キリスト教 禁令出す
	1619	〃5	5.秀忠 伏見城へ入る 8.伏見城代職を廃止	8.伏見城 震城決定 小堀忠政 德川和紀子内に備えて 女院御所造営開始	
	1620	〃6	徳川秀忠 の娘子 二条城から後水尾天皇のもとへ入内	1.江戸幕府 諸大名に大坂城座廢を命ずる	徳川家光 大坂城再建
	1621	〃7			お江 (秀忠正室) 伏見城の通材で 養源院を再建
	1622	〃8	江戸幕府本丸工事 秀忠 西の丸から移る 伏見城柵井盛業 和泉国代官に任じられる		
	1623	〃9	7.徳川家光 征夷大将軍となる 隣接シャム使節 伏見城で家光に謁見	江戸幕府 松平定頼に伏見城天守閣の 通材による新淀宮造宮を命じる	
	1624	〃10 寛永1	1.大坂城築城につき 法度	伏見城 破却終了 徳川家光 二条城の修築に着手	
	1625	〃2		新淀宮 完成	
	1626	〃3	後水尾天皇 二条城行幸	二条城 完成	

【年表参考資料】

井上光貞『年表 日本書歴史』3 繩倉・室町・戦国 (1185 ~ 1567) 筑摩書房 1981 年

井上光貞『年表 日本書歴史』4 安土・桃山・江戸前期 (1568 ~ 1715) 筑摩書房 1984 年

小和田哲男『詳細図説 秀吉記』新入物往来社 2010 年

小和田哲男『詳細図説 家康記』新入物往来社 2010 年

(5) 指月の丘とその周辺の考古資料について

伏見城及び同城下町跡でこれまでに実施されてきた行政上の遺跡調査は、先行的に行なう例の多い分布調査を実施する事もあるが、掘削工事等への立会調査、開発に伴なう試掘調査、その結果に基づく発掘（本）調査の3種類の調査が基本である。これらの行政上の調査成果とその記録は、伏見城及び同城下町跡では40ヶ所分以上が各種の報告書類にまとめられて、すでに公表されている。一方伏見では先の行政上の遺跡調査とその報告書以外に、考古学徒の地方史家星野猷二・郷土史研究家高島勲、御香宮宮司三木善則ら3氏を中心とした伏見城研究会の人々によって幾つかの発掘調査に加えて工事掘削現場や崖面などの各所の地点から、金箔を含んだ瓦類を主体としたたくさんの遺物が採取され、記録されてきた。これらの既採取資料は、同研究会の人々と中でも星野猷二の努力によって2006年度頃までの50ヶ所以上に及ぶ分が、各種の記録に遺物写真や同実測図・同拓影まで加えて、「器瓦録想其の二・伏見城」（2006年）として伏見城研究会から刊行されている。これらの4種類の調査は、調査レベルがそれぞれ異なるが、既に調査成果が公表されているものについては、本報告書ではすべて考古学的な遺跡調査資料として扱い、遺跡の範囲を図示した第11図に出来る限り調査・採取地点を明示した。地点にはそれぞれ番号を与えて、第3表の調査履歴一覧に番号順に並べて、項目別に摘要をまとめて付している。

ここでは、これらの資料を用いて伏見城跡及び城下町跡から出土あるいは採取された、桃山時代の遺物を金箔瓦を中心に通覧点検し、指月の丘とその周辺地域からの出土遺物群に、特徴が見いだせるのか概観レベルでだが検討する。

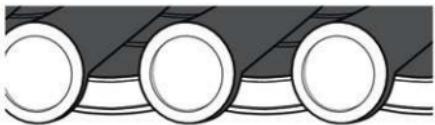
今回の登録分の調査・採取地点は計103ヶ所であるが、この内63ヶ所から金箔瓦の出土が報告されている。金箔瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・小菊類の他に輪違い、棟の方形あるいは円形の飾瓦・鬼瓦・鍔瓦等他、各種の広義の意味での飾瓦類が多数出土している。金箔瓦の（地点的）出土率は、 $(63 \div 103 \times 100 = 61.2\%)$ 約6割の出土地点率である。伏見では、なんらかの形で遺跡調査すれば、6割近い地点で金箔瓦が出土するという事である。この資料には、工事の立会い調査も少なからず含まれている面からは立ち会えなかった一般的工事掘削においても同等の高率で金箔瓦が出土するという事である。洛中の京都御苑西側一帯の上京地域に重なっている、安土・桃山時代の聚楽第から聚楽廻り跡一帯での調査での出土率に比べても多い印象である。

伏見内の地域別に金箔瓦の出土傾向を考える前提として、地域別に調査密度を見ておく。指月城推定範囲内では、調査数は少なく、木幡山城の城郭地域内でも調査件数はより少ない。木幡城の城郭地域の西南辺より南側隣地及び西側から両替町通り（京阪電車の西側を南に走る）より東側の一帯は、桃山時代には大名屋敷地帯であり、それに沿う京町と両替町通り沿いは商家地区であったが、公共施設を含んだ住宅街から商業地区となっており、開発工事もかなり多い。現在、登録調査地の8割程は、この地域の集合住宅化等の再開発や公共開発に伴なう遺跡調査が占めている。北濠ライン付近より北部、両替町通りより以西は、桃山時代には大名屋敷も点在するが、商工業者等を中心とした町屋が多い地域ではあるが、現在も市街地の中心に近接する地域であるためか、近年になるまでは集合住宅化的再開発もテンポがゆるやかで、調査件数は少なかった。

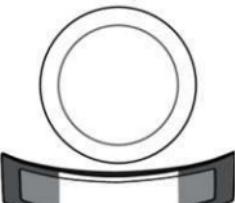
地理的な地域別の金箔瓦の出土傾向は、調査地点の分布にやや片寄りも見られるが、城郭内・城下町の大名屋敷地帯、町屋も多い地帯等の差異にかかわりなく、伏見城跡・城下町跡内では、どの地域で調査を行なっても、6割程の調査地では必ず金箔瓦が出土すると言える。城郭内や大名屋敷地域から出土する金箔瓦の多くは、出土地があるいは近接地で使用されていたものが主体を成すと見てよいだろう。左証するように大名屋敷地帯では、軒丸瓦の場合、巴文の他大名家の家紋（扇に日丸文・一星文等）が、金箔を施していない家紋瓦（違ひ鷹羽文等）とともによく出土している。有力大名の多くも屋敷の屋根に金箔瓦を使用することが許されていたことは明らかである。大坂城や京都聚楽廻りの大名屋敷に比べても、伏見城関係の方が増加しているように見られるが、定量的データでの結論は今後である。町屋が多い地域では、出土率的には大きくは劣らないが、破片は小片のものが多く、やはり大名屋敷や城郭側から2次あるいは3次の移動を受けて、新しい整地層や遺構に混入したものが多いようである。

指月の丘とその周辺にしぶった金箔瓦の出土状況は、巴文や菊文、桐文等の軒丸瓦や対応する唐草文などの滴水風を含めた軒平瓦他の飾瓦類等は、他地域とは新旧の型式変化等の比較研究が必要であるが、一見では文様を含めて大きな違いはないようである。しかし、無文の軒丸瓦（本報告書では「日輪文」としており、見方は後述している）と対応する無文の軒平瓦が、瓦当の完形品や大片で出土している点は、他地域とは大きく異なるようである。これら無文の軒瓦類は、12（桃山泰長老）、66（桃陵町）等の指月地域であっても西半の南辺あたりから、その西側隣接地付近でしか出土が見られない。今回の調査地の堀1埋土からは無文の軒瓦が一定数出土しているが、既推定指月城地域の西南地区に限定して見えることとは齟齬はない。指月の丘北辺の東西立売り通り以北では、今のところ出土が見られないし、指月の丘周辺でも西半南辺とその南西隣接地にかぎられる。もちろん、安土城、大坂城、聚楽第関係からの報告例も知られていない。これら無文の金箔軒瓦は、金箔の非常に残存状態の良好なものを含み、共伴している他の文様のものも、金箔の残りの良いものが多い点も注目される。無文が大きな位置を占めている指月の丘周辺地は、このように既報告資料を見ていても、かなり特徴的な出土様相を示す。今回の発掘調査から出土する金箔瓦類は、この地域の特徴をより強調する方向を持っていると理解してよいだろう。その特徴の解釈と位置付けは、この報告書上で後述する。

軒丸瓦日輪文 軒平瓦正面（白抜き部一金箔貼り）



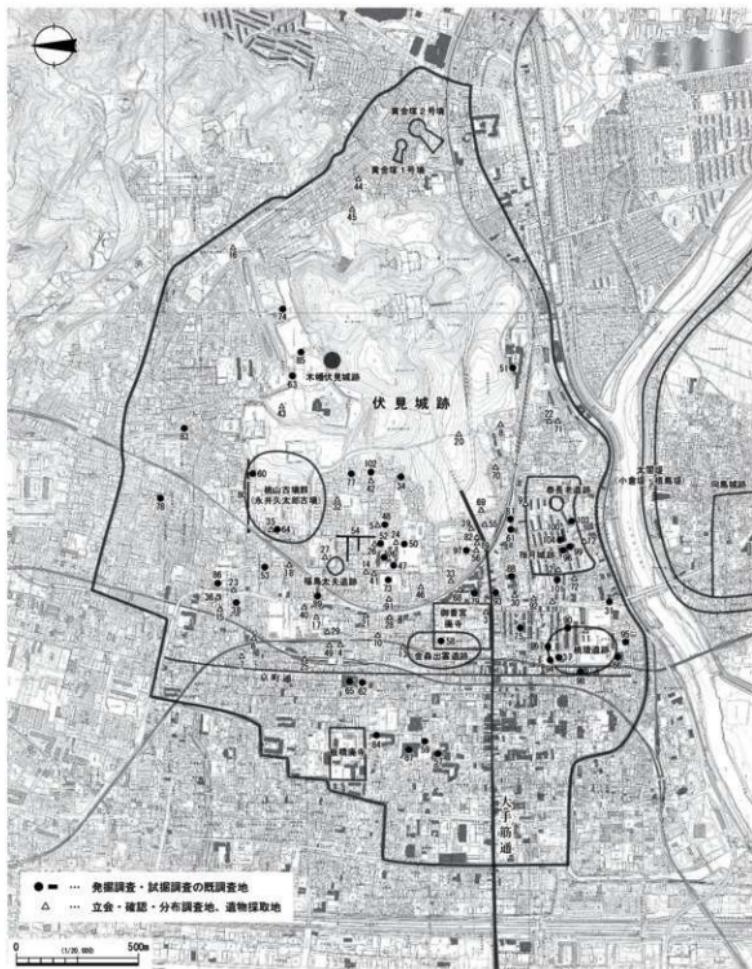
軒丸瓦日輪文・軒平瓦無文 軒先模式図（白抜き部一金箔貼り）



軒平瓦無文 軒正面向（白抜き部一金箔貼り）

第10図 軒丸瓦日輪文と軒平瓦無文の模式図

なお、金箔瓦を中心とした瓦類は、城と城下町の建設の始まる桃山時代のなかでもやはり文禄年間頃以降、南部と以北地域では若干の時間差はあるようだが小さい時間差のためか伏見では短期間に多くの地点で大量に出土が見られるようになるよう見える。天下人の近世の城と城下町作りは、遺物を見ても、室町時代末期から桃山前半期以前とは比較にならない程、劇的といえる変化を地域にもたらしている。



第11図 周辺既調査地・遺物採取地位置図

第3表 周辺の調査履歴

- ※ 調査の種類について、併用調査は実施、分布調査は分布、試掘調査は試掘、立会調査は立会、試掘・立会不明は試・立、確認調査は確認、地物採取は採取と省略する。
 ※ 調査回数は44回では、結果をまとめる場合がある。本名義は4件目で記す。
 京都府教育府指導部文化財保護課=府教文、京都府埋蔵文化財調査研究センター=府埋セ、京都市文化市民局=市文局、京都市住宅局=市住局
 京都市文化財調査会=市理文、平安京調査会=市理文、伏見城研究会=伏城研、伏見城発掘調査団=伏發团、西近畿文化財研究所=西近研
 関西文化財調査会=関文調、京都平安文化財=京平文
 ※ 5件目での「他」は推定の省略とする。
 ※ 6件目の数字は草末の参考文献一覧の番号に準じ、調査報告書は報-番号、その他の文献は他-番号とする。文献番号の後ろの()は、報告書内での地点番号である。

地区 番号	器瓦 登録 番号	調査地又は採取地 住所	・年度 ・調査種類 ・調査団体・個人	調査成果概要・推定屋敷 (・遺構・遺物・推定地)	参考文献 番号	備考
1	7	常盤町 (伏見黒島裁判所前付近)	・採取 ・廣田長三郎	・「慶長九甲辰 四月口口」銘入り格文軒平瓦	他15 他50	
2	8	桃山町泰長老 (UR駅周囲地)	・採取 ・星野敏二	・金箔五三桐文軒丸瓦、五葉木瓜文軒丸瓦、大櫻飾瓦(16弁2重の菊文添板瓦)、他	他50	
3	13	御香宮門前町 (御香宮境内)	・立会・採取 ・星野敏二、三木善則	・金箔輪宝文軒丸瓦、桔梗文軒平瓦、桐文軒平瓦、他	他50	一部御香宮西側に隣接する金森出雲から出土
4	27	桃山箇井伊賀西町22 (星野邸)	・採取 ・星野敏二	・金箔菊丸瓦、巴文飾瓦、菊文飾瓦	他50	
5	39	桃山町三河 (NHK桃山荘)	・採取 ・土本幸太郎	・金箔扇に月丸文軒平瓦 (推治平三河守)	他50	
6	44	桃山伊井堀部西町4	・採取 ・森島清三郎	・金箔五七桐文獅子口瓦、同飾瓦	他50	
7	45	京町8丁目横町65 (森島邸)	・採取 ・森島健次	・宝珠瓦	他50	
8	21	桃山町板倉周防 (乃木神社境内)	・1916 採取	・金箔五七桐文飾瓦	他50	乃木神社宝物
9	10	桃山町泰長老13-1 (二松邸)	・1934以前 採取 ・二松慶彦	・朱漆が残る鰐の尾・腹片	他50	
10	25	桃山羽柴長吉中町16 (藤本邸)	・1934 採取 ・星野敏二	・金箔唐草文軒平瓦	他50	
11	3	桃陵町 (伏見公園グランド北東)	・1934~36 採取	・(推)金箔五七桐文軒丸瓦、唐草文軒平瓦	他50	旧陸軍工兵隊南側東西道路側溝工事時に出土
12	9	桃山町泰長老 (指月の森遺物散分布)	・1934~49 採取 ・星野敏二	・金箔無文軒丸瓦、五七桐文軒丸瓦、菊文軒丸瓦、輪文軒丸瓦、飾瓦、輪達瓦、他	他50	
13	24	桃山羽柴長吉西町 (羽柴光宣公園)	・1935 採取 ・星野敏二	・巴文軒丸瓦、菊文軒平瓦、他	他50	
14	40	桃山福島太夫南町64	・1935 採取 ・星野敏二	・中世軒平瓦、唐草文軒平瓦、他	他50	
15	46	桃山水野左近東町54	・1935 採取 ・星野敏二	・巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、他	他50	上水道管理設時に出土
16	56	深草大龜谷款賀町	・1935 採取 ・星野敏二	・(推)五七桐文飾瓦	他50	

地図番号	器瓦 銀想 番号	調査地又は採取地 住所	・年度 調査種類 ・調査回数・個人	調査成果概要・推定屋敷 (-遺構・遺物・推定地)	参考文献 番号	備考
17	31	桃山簡井伊賀東町46 (教育大桃山小学校)	・1935頃 採取 ・星野敏二	・石垣 ・巴文軒丸瓦(「人」か「イ」の字有) ・	他50	
18	42	桃山長岡越中南町 91-4	・1935頃 採取 ・星野敏二	・金筋獅子口瓦、両袖落し軒平瓦、唐草文軒平瓦 ・	他50	
19	16	桃山筑前台町32-1 (佐東部)	・1936～1974頃 採取 ・星野敏二、高島斎	・金筋菊文軒丸瓦、菊丸瓦、五七桐文飾瓦、五 三桐文軒丸瓦、他 ・(推)肥前中納言、平松八右衛門	他50	
20	22	桃山町三河 (乃木神社隣接道路)	・1938 採取 ・星野敏二	・ ・巴文軒丸瓦、敏瓦、割裂斗瓦、敷瓦、他	他50	
21	29	桃山簡井伊賀東町20 (上野部)	・1938 採取 ・星野敏二	・ ・龟甲角花文飾瓦	他50	
22	20	桃山町本多上野60-9 (野坂通)	・1939 採取 ・星野敏二	・ ・金筋巴文飾瓦	他50	野坂通括幅時に出 土
23	47	桃山水野左近東町81	・1939 採取 ・星野敏二	・ ・金筋巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、桐文獅子口 瓦、他	他50	大和街道括幅時に 出土
24	36	桃山毛利長門東町8 (原立桃山高校)	・1939～1943 採取 ・星野敏二、高島斎	・ ・金筋唐草文軒平瓦、巴文軒丸瓦、他 ・(推)毛利安芸守	他50	
25	32	桃山伊丹掃部西町 (京阪丹波橋筋切)	・1942 採取 ・星野敏二	・ ・巴文、折敷に三文字軒丸瓦、同飾瓦 ・(推)稻葉彦六	他50	
26	37	桃山毛利長門東町8 (原立桃山高校)	・1942 採取 ・宇佐晉一	・ ・金筋抜文飾瓦、五七桐文飾瓦 ・(推)毛利安芸守	他50	地図番号52と同じ地 点
27	41	桃山福島太夫北町41 (兵竹姫学校)	・1950 採取 ・星野敏二、廣田長三郎	・石垣 ・金筋巴文飾瓦、巴文軒丸瓦、両袖落し軒平瓦、 五七桐文軒丸瓦、他 ・(推)田中筑後守	他15 他50	器瓦銀想に「発掘 調査」の記述あり
28	26	桃山羽柴長吉東町65 (国道24号)	・1962 採取 ・星野敏二	・ ・金筋巴文軒丸瓦(桐花部不明、葉部は昆虫の 腹状)	他50	国道24号改良工事 時に出土
29	30	桃山簡井伊賀東町46 (教育大桃山小学校本館)	・1970頃 採取 ・星野敏二	・ ・菊丸瓦、輪邊瓦(いの字有)	他50	
30	11	桃山町鍋島2-1 (京都桃山プラザ)	・1970代? 立会 ・星野敏二	・ ・小型敏瓦	他50	
31	1	豊後横町 (朝月橋北詰遺跡)	・1974 発掘 ・伏城研 ・星野敏二、他	・石垣、他 ・金筋菊文軒丸瓦、五葉木瓜文飾瓦、菊丸瓦、 青海波、五七桐文軒丸瓦、他	他1 他50	
32	52	桃山町島津58 (島津兒童公園)	・1974 採取 ・高島斎	・ ・巴文軒丸瓦	他50	兒童公園整備時に 出土
33	18	桃山筑前台町1 (郵便局桃山番台他)	・1974 採取 ・星野敏二、高島斎	・ ・金筋菊丸瓦、菊丸瓦、青海波面戸瓦	他50	
34	50	桃山町下野26～27	・1975 発掘 ・伏城研 ・江谷貫	・石垣 ・金筋瓦、巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、他	他50	

地図番号	器瓦 総合研究 番号	調査地又は採取地 住所	・年度 調査種類 ・調査団体 ・個人	調査成果概要・推定屋敷 (-遺構・遺物・推定地)	参考文献 番号	備考
35	43	桃山永井久太郎1 (森林総合研究所)	・1976 立会、他 ・伏堀研、他 ・江谷寛、他	・花崗岩礎石、他 ・金箔柄文飾瓦、他	報2	地図番号65と同地点
36	49	桃山水野左近東町 74-1 (大宮邸)	・1976 採取 ・星野歟二	・ ・金箔澤寅文軒丸瓦	他50	
37	4	奉行前町 (財務局桃山宿舎4号棟)	・1977 免掘 ・伏免団	・唐草文軒平瓦	報3	
38	48	桃山水野左近東町64 (郵政局宿舎)	・1977 免掘 ・市埋文 ・吉村正規	・柱穴、瓦面、井戸、他 ・金箔一星文軒丸瓦、桐文飾瓦、他	報39 (1-VI59)	
39	15	桃山筑前台町34-1 (森川邸)	・1977 採取 ・星野歟二、他	・ ・金箔巴文、菊紋軒丸瓦、軒平瓦、駒瓦、鬼瓦、 五七桐文飾瓦、他	他50	
40	33	桃山伊井堀部東町16 (教育大桃山中学分校)	・1977 採取 ・星野歟二	・ ・上り藤文軒丸瓦、他	他50	
41	38	桃山毛利長門東町62 (エトワール桃山)	・1977 採取 ・星野歟二	・ ・金箔訂抜文飾瓦	他50	
42	51	桃山町下野28	・1977 採取 ・星野歟二 ・高島船	・ ・(推)金箔五三桐文軒丸瓦	他50	
43	53	桃山町大藏 (キヤッスルランド駐車場)	・1977 立会 ・伏免団 ・江谷寛	・礎石 ・金箔軒丸瓦(文様不明)、巴文軒丸瓦、他 ・(推)木樽伏見城西の丸	他50	
44	57	桃山町紅雪150	・1977 確認 ・星野歟二、他	・石垣(刻印有)40m ・ ・	他50	造成工事中に多数の 石材が出土、邊塁を受 け残地にて石垣の有 無の確認を行う
45	59	桃山町三河 (桃山陵墓地境界内)	・1977 確認 ・星野歟二	・石垣 ・ ・	他50	墳墓地内に両面する 石垣を確認。立入り不 可の為公道から確認
46	18-1	桃山毛利長門東町	・1977 採取 ・星野歟二	・ ・金箔煙瓦、巴文軒丸瓦	他50	
47	35	桃山毛利長門東町8 (府立桃山高校体育館)	・1980 免掘 ・府教序 ・堺圭三郎	・瓦溜り ・金箔巴文軒丸瓦、金箔大型方形折入角花文裝 飾瓦、聯子口瓦、他 ・(推)毛利安芸守	報4	
48	39	桃山町三河48 (三和銀行桃山店)	・1980 免掘 ・市埋文	・礎石建物、柱穴、等 ・金箔雨に月丸文軒丸瓦、同軒平瓦、同飾瓦、他 ・(推)泡平三河守	報40 (1-VI87)	
49	28	桃山箭井伊賀西町 (友田邸)	・1980頃 採取 ・星野歟二	・ ・菊丸瓦(三つ巴文)	他50	
50		桃山毛利長門東町8 (府立桃山高校)	・1982 免掘 ・市埋文 ・礎部跡	・桃山期土坑、他 ・金箔軒平瓦、他 ・(推)毛利安芸守	報5 (1-VI51)	
51	23	桃山町伊賀50 (京都橋中・高校)	・1982 免掘 ・市埋文 ・脇内明博	・礎、他 ・金箔桐葉文透戸瓦、巴文軒丸瓦、瓦袖落とし軒 平瓦、巨大な丸瓦、他 ・(推)板倉重雄	報5 (1-VI52)	京都橋中・高校にて 遺物展示
52		桃山毛利長門東町8 (府立桃山高校)	・1983 免掘 ・府埋セ ・長谷川達	・ ・金箔瓦、他 ・(推)毛利安芸守	報6 (5)	地図番号26と同地 点

地図番号	器物登録番号	調査地又は採取地住所	年度 調査種類 ・調査回数・個人	調査成果概要・推定屋敷 ・(遺構・遺物・推定地)	参考文献番号	備考
53		桃山井伊掃部東町	・1983 試・立 ・市埋文 ・吉村正親	・瓦 ・(推)日根野左京亮、他	報8 (2-III44)	
54		桃山福島大夫南町	・1983 試・立 ・市埋文 ・吉村正親	・大名屋敷瓦石 ・瓦 ・(推)島津右馬頭、他	報8 (2-III46)	
55	14	桃山町鍋島25 (カーサ桃山)	・1983頃 採取 ・星野敏二	・金箔大株飾瓦	他50	試掘調査あり
56	17	桃山町筑前台町26-1 (ジャスト桃山)	・1983頃 採取 ・三木善則、高島熱	・桐文軒平瓦(「上」の文字あり)、菊丸瓦	他50	
57		東組町698	・1985 発掘 ・市埋文 ・上村重幸、 ・小森俊寛(平調会)	・桃山附地裏、大土坑 ・金箔瓦、他 ・(推)高橋七兵衛	報9 (1-VI39)	
58		桃山町金森出雲	・1985 発掘 ・市埋文 ・源山忠志、 ・小森俊寛(平調会)	・桃山附門跡 ・金箔瓦、他 ・(推)金森法印	報9 (1-VI40)	
59		今町 (伏見中央図書館)	・1986 発掘 ・市埋文 ・平田泰	・井戸、土坑 ・金箔瓦三種文瓦 ・(推)油石左門	報10 (1-VII39)	
60		桃山町永井久太郎	・1986 発掘 ・市埋文 ・平方幸雄	・桃山附壁石建物 ・桃山附唐津、漏戸、美濃等 ・(推)松平伊豫守	報10 (1-VII40)	
61	12	桃山町立売1-6 (社会福祉法人健光園)	・1987 発掘 ・市埋文 ・小森俊寛(平調会)	・桃山附墓地 ・金箔瓦、迷い鹿の羽文軒丸瓦、他 ・(推)浅野伝馬守	報14 (1-VII46)	
62		京町南七丁目、両替町九丁目	・1987 発掘 ・市埋文 ・長戸満男(平調会)	・土坑、落込み、掘込み、他 ・町屋	報14 (2-III18)	
63	54	桃山町大蔵 (北堀公園多目的広場)	・1988 発掘 ・伏城研 ・江谷寛	・東西方向の石塙(木桶形) ・巴文軒丸瓦、上り藤文軒丸瓦、草唐文軒平瓦、 ・他 ・(推)木桶城外堀	報12	
64		桃山町永井久太郎 59-2	・1988 発掘 ・市埋文 ・久世慶博	・塔石繩物、石組築面、路面 ・金箔瓦 ・旧伊達街道	報16 (1-VII52)	地図番号35と同じ地点
65		京町南七丁目、両替町九丁目	・1988 発掘 ・市埋文 ・小森俊寛	・2面の道模様・町屋壁石、他 ・金箔瓦 ・町屋か	報16 (1-VII53)	
66	2	桃陵町1-1 (桃陵中学校体育館)	・1988 発掘 ・市埋文 ・小森俊寛	・大名屋敷か、瓦罐 ・金箔文軒丸瓦、無文軒平瓦、劍花蓋飾瓦、 ・菊丸瓦、他 ・(推)山口龍河守	報16 (1-VII54)	
67	5	西奉行町51~54 (桃陵市営団地)	・1989 発掘 ・市埋文 ・吉川義彦	・桃山附土坑、溝、門跡、他 ・金箔文軒丸瓦、巴文軒丸瓦、桔梗文軒丸瓦、他 ・(推)富田信謙守	報11	
68	19	桃山町松平筑前1 (エルシティ桃山筑前)	・1989 発掘 ・市埋文 ・内田昇昭	・武家屋敷 ・金箔軒瓦、鬼瓦(玉七桟文の下部に菊の文様)、 ・加賀梅鉢文軒丸瓦、他 ・(推)肥前中納言、他	報17 (1-VII50)	
69		桃山町鍋島、三河	・1989 立会 ・市埋文 ・吉村正親	・石列 ・巴文軒平瓦、他	報17 (2-III9)	
70		桃山町松平武藏	・1989 立会 ・市埋文 ・吉村正親	・ ・金箔瓦 ・(推)油月舟入	報17 (2-III9)	

地図番号	器瓦 総合想 像番号	調査地又は採取地 住所	・年度 調査種類 ・調査団体 ・個人	調査内容概要・推定屋敷 (-道様・遺物・推定地)	参考文献 番号	備考
71		桃山町本多上野	・1989 立金 ・市理文 ・吉村正親	・切り石 ・ ・(推)泊月伏見城壁り口	報17 (2~Ⅲ9)	
72		桃山町泰長老	・1989 立金 ・市理文 ・吉村正親	・ ・ ・金筋巴文軒丸瓦、他	報17 (2~Ⅲ9)	
73	34	桃山毛利長門東町8 (府立桃山高校)	・1990 免権 ・府理せ ・柴暁彦、他	・礎石建物跡、板塀、築地、他 ・金筋宝輪文軒丸瓦、菊花文獅子口瓦、巴文軒 丸瓦、瓦瓦、他 ・(推)毛利安芸守	報15 (3)	
74	55	桃山町大藏 (北都公園トリム広場)	・1990 免権 ・伏城研 ・江谷亮	・石垣(刻印有) ・ ・(推)木幡城外堀	報12	
75	6	片桐町 (桃陵市営団地)	・1991 免権 ・市住局、伏城研 ・家崎孝治	・桃山期溝、掘立柱建物跡、他 ・金筋花菱瓦、桐文垂先瓦、鬼瓦、他 ・(推)片桐市正	報21	
76		桃山毛利長門東町8 (府立桃山高校)	・1993 免権 ・府理せ ・岩松保	・建物跡 ・金筋菊文軒丸瓦、金筋菊文軒平瓦、金筋唐草 文軒丸瓦、他 ・(推)毛利安芸守	報18 (3)	
77		桃山町下野29-1、他	・1995 試掘 ・市文局 ・梶川敏夫	・石垣 ・瓦 ・	報19 (V68)	
78		深草内膳町10-1	・1995 試掘 ・市文局 ・梶川敏夫	・溝、石列 ・巴文軒丸瓦	報19 (V69)	
79		桃山町松平筑前	・1997 免権 ・市理文 ・前田義明	・近世初頭の構造、他 ・瓦、他 ・(推)神原式部太夫	報23 (I~V36)	
80		桃山町永井久太郎、 他	・1998 免権 ・市理文 ・小松武彦	・石垣、他 ・金筋軒丸瓦、軒平瓦 ・(推)山内佐守、他	報25 (I~V26)	
81		桃山町立売	・1999 免権 ・市理文 ・桜井みどり	・礎石建物6棟(慶長10年の火災面) ・火熱を受けた痕跡のある瓦類・土器類 ・町屋	報28 (I~VI23)	
82	16	桃山筑前台町32-1 (坂東郡)	・1999 立金 ・市理文 ・吉本善吾	・石垣、瓦溜り ・金筋桐文軒丸瓦、金筋菊文軒丸瓦、金筋唐草 文軒平瓦、鬼瓦、他 ・(推)坂前中納言、平松八右衛門	報24 (III3) (株)TOWAにて遺物 展示	
83		深草大龜谷六軒町、 万帖敷町	・2001 試掘 ・市理文 ・南幸雄	・礎石建物跡、他 ・金筋軒丸瓦、唐草文軒平瓦 ・町屋	報29	
84		下板橋町、鹿匠町、竹 中町	・2004 免権 ・市理文 ・平尾政幸	・桃山期土坑、溝、樋、他 ・金筋菊文軒平瓦、五七桐文方形飾瓦 ・(推)竹中貞右衛門	報30	
85		桃山町大藏	・2004 試掘 ・市理文 ・丸川義広	・素掘幅34m程 ・金筋菊文軒丸瓦、菊文軒平瓦、鬼瓦、他 ・(推)横伏見城	報31 (I~II6)	
86		桃山水野左近東町19 (市立桃山中学校)	・2004 試掘 ・市理文 ・モンペティ恭代	・ ・軒平瓦 ・(推)邊上家鏡	報31 (I~II7)	
87		竹中町 (伏見区役所)	・2006 免権 ・市理文 ・山本雅和	・近世埋葬施設、他 ・金筋巴文軒丸瓦、五七桐文軒丸瓦、他 ・(推)洞田監物	報32	
88		桃山町立売	・2006 試掘 ・市文局 ・馬瀬智光	・溝、高台造成の痕跡 ・瓦 ・(推)浅野馬守	報33 (V2)	

地図番号	器瓦 銀想 番号	調査地又は採取地 住所	・年度 調査種類 ・調査団体・個人	調査成果概要・推定屋敷 (-遺構・遺物・推定地)	参考文献 番号	備考
89		桃山福島大夫西町1-2	・2007 発掘 ・市川文 ・平田泰	・石垣 ・金箔刷に丸文軒丸瓦、桐文軒平瓦、他 ・(推)往竹修理大夫	報34	
90		東・西奉行町	・2008 発掘 ・西近畿 ・村尾政人	・追跡、他 ・金箔瓦 ・(推)富田信謙守	報36	
92		桃山毛利長門西町53	・2009 分布 ・市文局 ・山本智和	・石垣(刻印あり) ・瓦 ・(推)毛利下屋敷	報38 (図8+9)	
91		鍋島町	・2009 分布 ・市文局 ・山本智和	・指月城北西角の石垣か ・瓦、木製品 ・(推)山中山城守	報38 (図11)	
93		桃山町鍋島	・2013 発掘 ・イビンク ・田邊一元	・獨立柱建物跡、他 ・金箔桐文軒平瓦 ・(推)鍋島信謙守	報43	
94		奉行前町	・2013 発掘 ・京平文 ・河野凡洋	・獨立柱建物跡、他 ・瓦 ・(推)生駒謙岐守	報44	
95		桃陵町 (桃陵中学校校内)	・2015 発掘 ・市川文 ・近藤章子	・伏見城城下町造當時の整地層 ・菊丸五(16券2重の菊文)、他 ・	報45	
96		桃山町泰長老	・2015 発掘 ・京平文 ・ト田野司、小森俊寛	・石垣、堀、他 ・金箔桐文軒丸瓦・無文軒平瓦・両軒丸瓦、他 ・(推)伏見指月城	本報告書	
97		桃山筑前台町	・2015 発掘 ・市文局 ・奥井智子	・建物跡、堀、造成土 ・菊文軒丸瓦、他 ・(推)肥前中納言	報46 (IX)	
98		京町1丁目	・2015 発掘 ・京平文 ・植山茂	・礎石列 ・金箔瓦 ・(推)山口龍河守	報48	(株)ラプラス・システムにて遺物展示
99		桃山町泰長老	・2015 分布 ・市文局 ・熊谷舞子	・石垣塗込め ・金箔桐文軒丸瓦、金箔菊丸瓦、他 ・(推)伏見指月城、寺沢志摩守、泰長老	報47 (IV)	本報告書の発掘調査後のマジックレンズ設計変更による補足調査
100		桃山町泰長老	・2016 発掘 ・市文局 ・奥井智子	・石垣、溝 ・金箔桐文軒丸瓦、金箔菊丸瓦、金箔唐草文軒平瓦、他 ・(推)伏見指月城、寺沢志摩守、泰長老	報49 (IV)	
101		桃山町泰長老	・2016 発掘 ・閑文鏡 ・吉川義彦	・石垣、堀 ・瓦、木製品、他 ・	他107	
102		桃山町下野27-1	・2017 発掘 ・四門 ・千喜良淳	・石垣、石組溝 ・金箔桐文軒丸瓦、他 ・(推)松平下野守	報50	
103		桃山町泰長老	・2018 発掘 ・市文局 ・新田和央	・土垣、他 ・金箔桐文瓦、金箔巴文軒丸瓦、他 ・(推)伏見指月城、寺沢志摩守、泰長老	報51 (四)	

参考文献

- <免振調査報告書>
- 1 1975年 鈴木重治
 - 2 1977年 星野歎二・江谷寛、他
 - 3 1977年 伏見城免振調査団
 - 4 1980年 堀圭三郎、他
 - 5 1982年 鶴内明博・梅川光隆
・磯曾勝、他
 - 6 1983年 長谷川謙、他
 - 7 1984年 破部謙、他
 - 8 1985年 吉村正親、他
 - 9 1988年 上村憲章・森俊寛
・原山充克、他
 - 10 1989年 平田泰・平方幸雄、他
 - 11 1990年 星野歎二・三木善則
・高島勲
 - 12 1990年 江谷寛・三木善則、他
 - 13 1991年 岩崎誠、他
 - 14 1991年 小森俊亮・長戸満男、他
 - 15 1991年 桑原景、他
 - 16 1993年 久世康博・小森俊寛、他
 - 17 1994年 内田好昭・丸川義広
・高橋潤・吉村正親、他
 - 18 1994年 森島康雄・松本謙、他
 - 19 1996年 榎川敏夫、他
 - 20 1997年 鈴木廣司・山本雅和、他
 - 21 1997年 星野歎二・三木善則
・宮崎孝治
 - 22 1999年 平田洋司・八木久栄
 - 23 1999年 前田義明、他
 - 24 2000年 吉本健吾、他
 - 25 2000年 小松武彦、他
 - 26 2002年 錦町俊夫・新海正博
・林和美、他
 - 27 2002年 江浦洋・亀井聰、他
 - 28 2002年 桜井みどり、他
 - 29 2002年 南孝雄
 - 30 2005年 平尾政幸
 - 31 2006年 丸川義広
・モンペティ恭代、他
 - 32 2007年 山本雅和・大立目一、他
 - 33 2007年 馬瀬智光、他
 - 34 2008年 平田泰
 - 35 2009年 杉本宏・荒川史、他
 - 36 2010年 村尾政人、他
 - 37 2010年 山本雅和
 - 38 2010年 山本雅和、他
 - 39 2011年 上村和直、他
 - 40 2011年 伊藤潔・網伸也、他
 - 41 2013年 岩松保・古川匠、他
 - 42 2014年 上村憲章
 - 43 2014年 田邊一元
 - 44 2014年 河野凡洋・卜田健司
 - 45 2015年 近藤章子
 - 46 2016年 奥井智子、他
 - 47 2016年 谷熊舞子、他
 - 48 2017年 植山茂
 - 49 2017年 奥井智子、他
- 『伏見城豈後橋北詰の調査』伏見城研究会
- 『伏見城水井久太郎遺跡の調査』伏見城研究会
- 『伏見城奉行前道跡免振調査報告』伏見城免振調査団
- 『埋蔵文化財免振調査概報 1980-1』京都府教育委員会
- 『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『伏見奉行所免振調査報告』桃陵団地にて替え工事に伴う埋蔵文化財調査』
京都市住宅局・伏見城研究会
- 『伏見城跡免振調査報告』伏見北堀公園整備工事に伴う事前免振調査-』伏見城研究会
- 『拂龍寺城 免振調査報告』財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
- 『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『京都府道跡調査根報 第44回』公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『京都府道跡調査根報 第59回』財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 『京都市内道跡試掘調査報告根報 平成7年度』京都市文化市民局
- 『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『伏見奉行所免振調査報告Ⅱ』桃陵団地にて替え工事に伴う埋蔵文化財調査-』
京都市住宅局・伏見城研究会
- 『大阪城跡IV-谷筋地帯下駐車場の建設に伴う大阪城跡免振調査報告書-』
財団法人 大阪市文化財協会
- 『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『京都市内道跡立会調査概報 平成11年度』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『大阪城跡免振調査報告書I』大阪府庁舎・周辺整備事業に伴う
埋蔵文化財免振調査報告書-』財団法人 大阪府文化財センター
- 『大阪城址Ⅱ-大阪府警察本部庁舎新築工事に伴う免振調査報告書-』
財団法人 大阪府文化財調査研究センター
- 『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『京都市埋蔵文化財研究所免振調査根報 2002-11 伏見城』
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『京都市埋蔵文化財研究所免振調査根報 2004-18 伏見城跡』
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『平成16年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『京都市埋蔵文化財研究所免振調査報告 2006-27 伏見城跡』
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『京都市内道跡免振調査報告 平成18年度』京都市文化市民局
- 『京都市埋蔵文化財研究所免振調査報告 2007-10 伏見城跡』
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『宇治市埋蔵文化財免振調査報告書 第73集 宇治川太閤堤跡免振調査報告書』
宇治市教育委員会
- 『伏見城跡・桃陵遺跡免振調査報告書-(仮称)』公務員宿舎伏見住宅整備事業に伴う-』
西近畿調査研究会
- 『京都市埋蔵文化財研究所免振調査報告 2009-15 史跡二条御宮(二条城)』
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『京都市内道跡詳細分布調査報告 平成20年度』京都市文化市民局
- 『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『京都府道跡調査報告集 第156回』公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 『平安京左京北之三坊六町 内膳跡遺跡』古代文化調査会
- 『伏見城跡・集合住宅建設に伴う埋蔵文化財免振調査報告書-』株式会社 イビック
- 『伏見城跡・桃陵遺跡』有限公司 京都平安文化財
- 『京都市埋蔵文化財研究所免振調査報告 平成15-2 伏見城跡・桃陵遺跡』
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 『京都市内道跡免振調査報告 平成27年度』京都市文化市民局
- 『京都市内道跡詳細分布調査報告 平成27年度』京都市文化市民局
- 『伏見城跡・桃陵遺跡-京町1丁目-』有限公司 京都平安文化財
- 『京都市内道跡免振調査報告 平成28年度』京都市文化市民局

- 50 2018年 千喜良津
 51 2019年 新田和央、他
- 〈その他〉
- 1 — 農林水産省 近畿農政局
 巨椋池農地防災事業所
 パンフレット「巨椋池歴史絵巻」
 - 2 1878年 ジアン・クラッセ
 『日本西教史』
 - 3 1892年 三坊本部測量局
 『京阪地方仮製二万分の一地形図』
 - 4 1969年 黒川直則・野田只夫・他
 『第1章第4節 伏見城と城下町』『京都の歴史4 桃山の開花』学藝書林
 - 5 1973年 山口憲一郎、他
 『日本図書大系 近畿Ⅱ』朝倉書店
 - 6 1975年 田源実夫
 『石垣もとの人間の文化史15 法政大学出版局
 - 7 1976年 坪井利弘
 『日本の瓦屋根』理工学社
 - 8 1979年 川上寅
 『国史大辞典・仙洞御所』吉川弘文館
 - 9 1980年 制作社
 『日本城郭大系第11巻 京都・滋賀・福井』新人物往来社
 - 10 1981年 小林章男
 『鬼瓦』大蔵経済出版
 - 11 1983年 岡本良一、他
 『城と天下人—桃山の黄金文化』日本の美と文化第12巻 講談社
 - 12 1984年 足利健亮
 『中近世都城の歴史地理—町・筋・辻子をめぐって』地人書房
 - 13 1985年 小和田哲男
 『慶臣秀吉』中央公論社
 - 14 1987年 北垣聰一郎
 『石垣普請』ものと人間の文化史58 法政大学出版局
 - 15 1989年 廣田長三郎編集
 『古瓦図鑑』ミネルヴ書房
 - 16 1991年 京都市
 『史料・京都の歴史・第16巻・伏見区』平凡社
 - 17 1991年 板本博司
 『巨椋池』宇治市教育委員会
 - 18 1991年 山本眞頼・水野克比古
 『京・伏見歴史の旅』山川出版社
 - 19 1991年 小林章男
 『桃鬼瓦』
 - 20 1992年 井上秀雄
 『実証 古代朝鮮』日本放送出版協会
 - 21 1992年 山室恭子
 『黄金の馬鹿—夢を演じた天下人』中央公論社
 - 22 1992年 西谷泰弘
 『復原図譜 日本の城』理工学社
 - 23 1993年 市原実
 『大阪群居』創元社
 - 24 1993年 上田正昭・村井康彦編集
 『千年の吹き 京の歴史群像 中巻』京都新聞社
 - 25 1993年 辻邦生
 『日本名城写真選集18 京都御所・仙洞御所』新潮社
 - 26 1994年 干宗室・森谷尙久監修
 『京都の大路小路』小学館
 - 27 1995年 大塚秀章、他
 『日本の自然 地域編・近畿』岩波書店
 - 28 1996年 佐原真・小島道裕、他
 『城の語る日本史』朝日新聞社
 - 29 1996年 財团法人
 『木村捷三郎収集瓦図鑑』財团法人 京都市埋蔵文化財研究所
 - 30 1997年 京都市埋蔵文化財研究所
 『民衆生活の日本史 金』恩文閣出版
 - 31 1997年 松田時彦
 『活断面』岩波書店
 - 32 1998年 小嶋正亮
 『宇治文庫9・宇治の道・旅人と歩く』宇治市歴史資料館
 - 33 1998年 足利健亮
 『景観から歴史を読む—地図を解く楽しみ』日本放送出版協会
 - 34 2000年 富元健次
 『建築家秀吉—道標から推理する戦術と建築・都市プラン』人文書院
 - 35 2000年 足利健亮
 『地理から見た信長・秀吉・家康の戦略』創元社
 - 36 2000年 尾藤正英
 『日本文化的歴史』岩波書店
 - 37 2000年 平井豊監修
 『図説日本城郭大辞典3』日本図書センター
 - 38 2001年 伏見区老人クラブ連合会
 『子等にこたえる伏見風土記 総集編』
 - 39 2001年 仁木宏・山田邦和、他
 『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』文理閣
 - 40 2001年 網野善蔵
 『歴史を考えるヒント』新潮社
 - 41 2001年 聖母女学院短期大学
 伏見学研究会女学院
 『伏見学ことはじめ』恩文閣出版
 - 42 2002年 水本邦彦
 『京都と京街道—京都・丹波・丹後』吉川弘文館
 - 43 2002年 京都市文化市民局
 文化部埋蔵文化財保護課
 『遺跡から見た京都の歴史』京都市文化財ブックス第16集
 - 44 2002年 池上裕子
 『織豊政權と江戸幕府』日本の歴史15 講談社
 - 45 2002年 国立歴史民族博物館
 『天下統一と城』歴博フォーラム 塔書房
 - 46 2003年 聖母女学院短期大学
 伏見学研究会
 『京・伏見学叢書第1巻・伏見の歴史と文化』清文堂
 - 47 2003年 富元健次
 『月と日本建築—桂離宮から月を見る』光文社
 - 48 2003年 中村良夫・日暮貞夫
 『さがしてみよう日本のかたち(二)城』山と溪谷社
 - 49 2005年 三浦正幸
 『城のつくり方図鑑』小学館
 - 50 2006年 星野歎二・三木善則
 『器瓦鉢想 其の二 伏見城』伏見城研究会
 - 51 2006年 滋賀県立
 安土城考古博物館
 『信長の城・秀吉の城—織豊系城郭の成立と展開—』平成18年度秋季特別展図録
 - 52 2006年 平岡昭利・野間晴雄編集
 『近畿(1)地図で読み百年—京都・滋賀・奈良・三重』古今書院
 - 53 2006年 桑田忠親
 『太閤の手紙』講談社
 - 54 2007年 村上隆
 『金・銀・銅の日本史』岩波書店
 - 55 2007年 歴史教育研究会(日)
 歴史教科書研究会(韓)
 - 56 2007年 歴史教育研究会(日)
 歴史教科書研究会(韓)

- 56 2007年 森茂暁
 57 2007年 島津光夫
 58 2007年 山中良昭
 59 2008年 網野善彦
 60 2008年 滋賀県立安土城考古博物館
 61 2008年 中井均、他
 62 2008年 脇田修、脇田晴子
 63 2009年 赤尾博章
 64 2009年 滋賀県立安土城考古博物館
 65 2010年 寒川旭
 66 2010年 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
 67 2010年 森嶋康雄
 68 2010年 森嶋康雄
 69 2010年 三好和義
 70 2011年 寒川旭
 71 2011年 新創社
 72 2011年 藤井謙治
 73 2011年 山善泰正
 74 2012年 小和田哲男
 75 2012年 福垣秀輝
 76 2012年 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
 77 2012年 公益財団法人大阪府文化財センター
 78 2012年 堺市博物館
 79 2012年 渋見雅男
 80 2012年 加藤理文
 81 2012年 中井均
 82 2012年 乗岡実
 83 2012年 加藤理文
 84 2012年 中井均
 85 2013年 網本逸雄
 86 2013年 岩真也
 87 2013年 渡邊大門
 88 2013年 大山崎町歴史資料館
 89 2013年 山本博文、冠新・曾根勇二
 90 2013年 大阪歴史博物館
 91 2014年 実業之日本社
 92 2014年 宇佐美龍夫
 93 2014年 武田知弘
 94 2014年 吉田光男
 95 2014年 平尾良夫・村井草介
 96 2014年 小野正敏・五味文彦
 97 2014年 西川幸治・高橋徹
 98 2014年 山崎敏昭
 99 2014年 山崎敏昭
 100 2014年 石清水八幡宮
 101 2014年 堀井成廣
 102 2015年 大阪歴史博物館
 103 2015年 大阪文化財研究所
 104 2015年 藤井謙治
 105 2015年 藤原清貴
 106 2016年 河内将方
 107 2016年 関西文化財調査会
- 『南北朝の動乱』戦争の日本史8 吉川弘文館
 「第一章 石の文化」「日本の石の文化」新人物往来社
 『もう一度学びたい日本の城』西東社
 『日本とは何か』日本の歴史00 講談社
 『信長と安土城—収蔵品で語る戦国の歴史』開館15周年記念 第35回企画展図録
 「織田・豊臣の城の魅力」歴史読本 織田・豊臣の城を歩く』新人物往来社
 『物語 京都の歴史 花の都の二千年』中央公論社
 『龍馬伝 京都幕末地図本』ユニプラン
 『戦国の城—安土城への道』
 特別史跡安土城跡発掘調査20周年記念展 平成21年度秋季特別展図録
 『秀吉を築いた大地震—地震考古学で戦国史を読み』平凡社
 『京都 秀吉の時代 つちの中から』ユニプラン
 『伏見城下町の考古学的調査』『ヒストリア』第222号 大阪歴史学会
 「それでも指月伏見城はあつた!」京都府埋蔵文化財論集 第6集】
 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
 「②仙洞御所・修学院離宮』『京都の御所と離宮』朝日新聞出版
 『日本人はどんな大地震を経験してきたのか~地震考古学入門~』平凡社
 『城下町時代MAP 上方編』PHP研究所
 『天皇と天下人』天皇の歴史05 講談社
 『信長・秀吉 京の城と社寺』
 一本龍寺の変から聚楽第の衰退・豊臣氏滅亡まで』ふたば書房
 『NHKかのぼり日本史』富を制するものが天下を制す』NHK出版
 『最新47都道府県危険度マップ』エクスナレッジ
 『平准儀—院政と京の変革』ユニプラン
 「激動の時代「慶長」を掘る』講演会資料
 『激動の時代「慶長」を掘る—よみがえる400年前の京都・大阪・堺』
 発掘された日本列島2012地盤図録
 『伏見宮 もうひとつの大天皇』講談社
 『織豊權力と城郭 瓦と石垣の考古学』高志書院
 『織豊系城郭研究の現状』
 『季刊考古学第120号 特集 織豊系城郭の成立と展開』雄山閣
 『織豊系城郭の成立 石垣』
 『季刊考古学第120号 特集 織豊系城郭の成立と展開』雄山閣
 『城の瓦 金箔瓦、桐紋・菊紋瓦』
 『季刊考古学第120号 特集 織豊系城郭の成立と展開』雄山閣
 『城の瓦 漆喰瓦』『季刊考古学第120号 特集 織豊系城郭の成立と展開』雄山閣
 『京都盆地の災害地名』駿誠出版
 『今こそ知っておきたい「災害の日本史」-白鳳地震から東日本大震災まで-』PHP文庫
 『秀吉の生と死』世伝説・洋泉社
 『戦國 京都周辺の城をめぐる』開館20周年記念第21回企画展資料
 『偽りの秀吉像を打ち壊す』柏書房
 『天下の城下町 大坂と江戸』特別展図録 大阪歴史博物館
 『京都のお散歩山陰地図』実業之日本社
 『大地震・古記録に学ぶ~』吉川弘文館
 『「織波間」は近畿戦争だった』青春出版社
 『日韓の交流 ひと・モノ・文化アジア理解講座4』山川出版社
 『大航海時代の日本と金属交易』
 別府大学文化財研究所企画シリーズ—ヒトとモノと環境が語る 思文閣出版
 『金属の中世—資源と流通』考古学と中世史研究II 高志書院
 『日本人はどうに建造物をつくってきたか』新装版 京都千二百年(下) 草思社
 『豊臣政権の城壁跡』寺田出土瓦の製作技法と防護役——妙心寺南門系軒平瓦と京都大
 仏出土軒平瓦の製作技法の比較から』城壁史料学第9号 城壁史料学会
 『豊臣氏専用の金箔瓦—妙心寺南門系軒平瓦・再論』城壁史料学第9号
 城壁史料学会
 『石清水八幡宮本社調査報告書』石清水八幡宮
 『豊臣女系団 哲學教授桜井成廣の秀吉論考集』桃山堂株式会社
 『大阪 豊臣と徳川の時代』近世都市の考古学』高志書院
 『豈能大坂城 秀吉の豪城・秀穂の平和・家康の攻略』新潮社
 『戦国乱世から太平の世へ』シリーズ日本近世史I 岩波書店
 『歴史REAL 日本の城』洋泉社
 『落日の豊臣政権』吉川弘文館
 伏見城跡『近隣説明会資料』

第3章 調査の成果

1. 層序

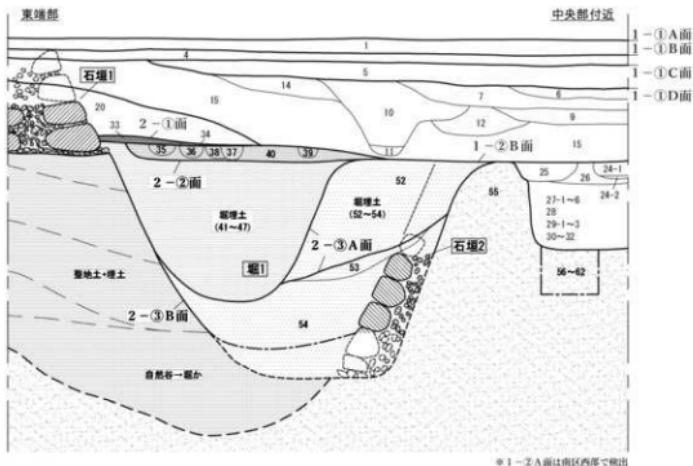
ここでは、この調査地全体に広がる整地土層等の堆積状況を、遺構面のベースともなっている無遺物の自然堆積層=地山を含めて、南区の南壁の東端部辺と中央部辺を切り出して模式的に図化した第12図を用いて、基本層序の理解を記しておく。提示した模式図は第13図等に提示している調査区別の土層断面実測図とほぼ共通するものであるが、抜粋し若干デフォルメ的簡略化を加えており、スケールアウトである。土層番号も基本的に共通して用いているが、ここでは飛び番号も有り、飛び番号に関してはフルサイズで提示している南区南壁土層断面図（第13図）等を参照されたい。

西区では、地山の上面の一部に近世堆積層の残れと見られる薄い土層第46層（7.5YR3/1 黒褐色粘質土層）が南壁沿い東半部で地山直上に確認出来る。また南区東辺、東区、北区東辺部の埋土上面で、石垣沿いの狭い帯状を呈して桃山時代の部分的土層と、共通に灰色系の粘質土が堆積するピット群が重なるように展開している。しかし、南区、東区、北区、西区ともにそれ以外の大半の地域で、近世及び中世以前の整地層などの遺物包含層はほとんど残存していなかった。残存していた桃山時代の面や地山直上面のまた残存していた石垣の様相などからは、本来的に当地に存在していた。中世以前あるいは近世の包含層等が、多くの場所で削平され失われてしまったものと推測される。削平の要因の一つは、戦前の明治から昭和にかけて日本陸軍の用地となり斬堀や地下道的な、垂直壁を持ち底面が平らな箱状あるいは箱溝状の掘り込み遺構群が重なり切り合っており、斬堀的掘削がくり返されたことによるとも考えられる。南区西半から西区は戦前の人力掘削のくり返しによる削平が激しかった印象である。もう一つの大きな原因是、戦後の1960年代の昭和30年代から40年代にかけての住宅公団や公務員官舎等の大型の集合住宅群、当地には親月橋団地の建設、それらに伴なう丘陵の造成とコンクリート大型集合住宅の基礎掘り等での、大型重機による広く深い掘削と搬入土を含んだ積土造成にあったと考えられる。底部にバックホーの爪跡が残っている例も幾つか見られた。堀東側の石垣例（石垣1）は、戦後の団地建設当時の基礎掘りでくずされたと見られる部分もあるが、旧態化した集合住宅を解体し基礎を排除する工事の際にぐずされたと見られる部分も少なくない。基礎除去後の埋土内からは、コンクリートの付着した桃山時代の石垣の主石材も出土している。桃山丘陵上に団地の建設が進んだ頃には、文化財保護法の改正も行なわれておらず、法律的にはいたしかつたが、集合住宅などの解体や基礎除去工事には、積極的立会い調査の必要性を感じるところである。

このように桃山時代の石垣や裏込め残存部の上面から一部に残る桃山時代から江戸時代初頭頃の残存土層の上面、加えて地山上面にかけて堆積している土層の主体は、近代以降から戦後の現代にかなり近い時期の埋土や積土整地土層と理解出来る。これらの土層には、桃山時代の石垣主

石材・同裏込栗石・またブロック化した地山土等が良く含まれているにとどまらず、中世以前の小片化した土器・陶器類あるいは布目瓦片・近世初頭頃のやはり小片化の進んだ金瓦を少數含んだ瓦類片あるいは土器師・陶器片も混入出土している。原位置を遊離した遺物ではあるが、これらの破片遺物も破壊され削除されてしまった遺跡・遺物が当地に存在していた事を示す、分布調査採取品と等価あるいは以上の価値を有する歴史的物証である点には配慮する必要があるだろう。なお、以下では明治時代以降から戦前（戦争直後の連合軍占領期昭和25年（1950）までを入れる）を近代とする。占領終了後を現代と表現し、UR の団地の建つ前を古、建って以降を現代新と表現する。

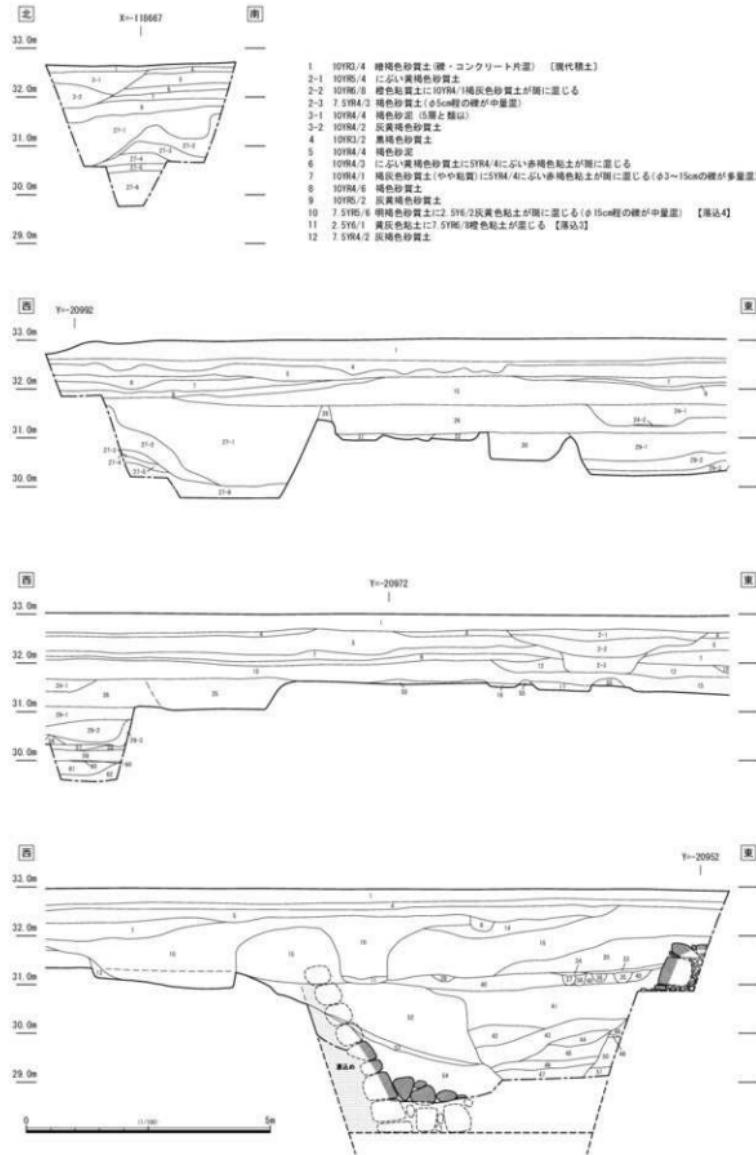
以下では、第12図の模式図に示した南区南壁の断面図の土層を概括し、その理解を示してお



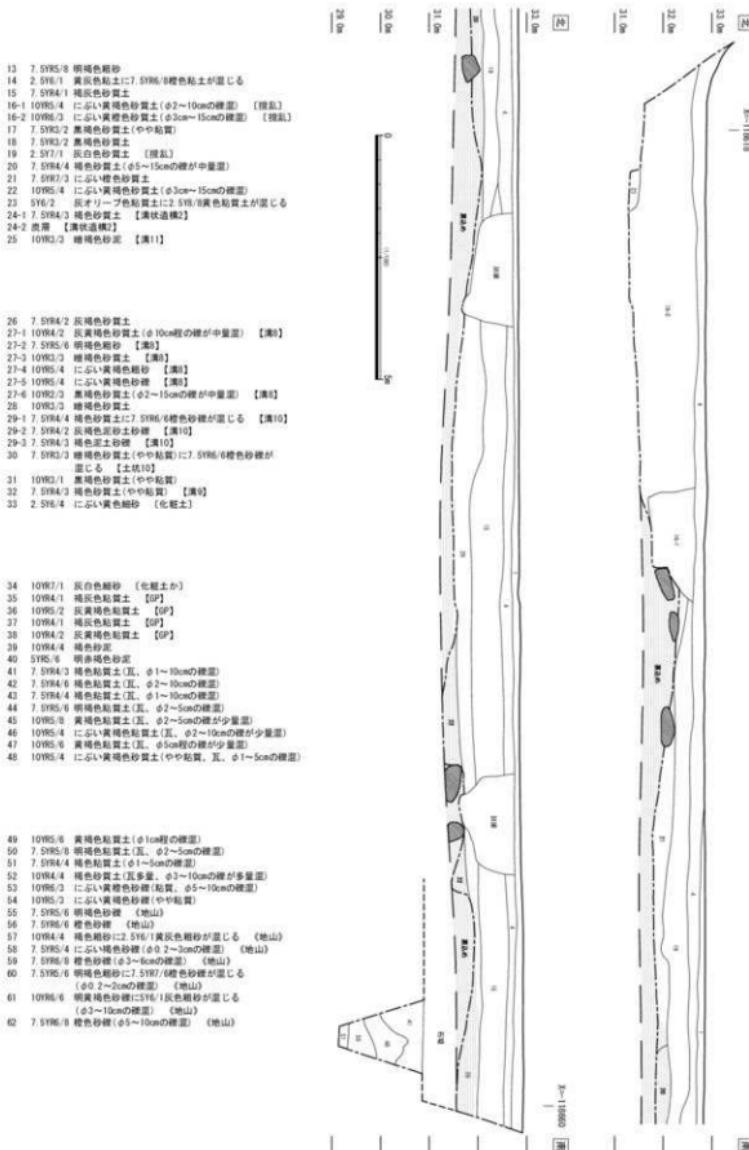
※1-2 A面は南区西部で露出

1	10YR0/4	緑褐色砂質土(硬・コンクリート片面) (現表土層上面)	36	10YR5/2	灰黄褐色粘土質土 [GP]
4	10YR0/2	黒褐色砂質土。 (一時解古い(鉢和)の表土)	37	10YR4/1	褐褐色粘土質土 [GP]
5	10YR4/4	褐色砂質土 (柱)	38	10YR4/2	灰黄褐色粘土質土 [GP]
6	10YR4/3	〔にぶ〕 黄褐色砂質土に10YR4/4にぶい赤褐色粘土が間に混じる 〔にぶ〕 黄褐色砂質土に10YR4/4にぶい赤褐色粘土が間に混じる (約2~5cmの層が多量)	39	10YR4/4	褐色砂質土
7	10YR4/1	褐色砂質土 (柱)	40	10YR5/3	褐色砂質土 (W2-2ペース面) (底層土) 安佐福山(江戸戸)
9	10YR5/2	反張褐色砂質土	41	7 SYR4/3	褐色粘土質土 (W1, W1~10cmの層面) (底層土) 安佐福山(江戸戸)
10	7 SYR4/2	反張褐色砂質土 [C: 5%] / 反張黄色粘土が間に混じる (約15cmの層が中量面) (W1の初期産成のれん土(堆積土)か) 【落込4】	42	7 SYR4/5	褐色粘土質土 (底, W2~10cmの層面)
11	2 SYR1/1	黄褐色粘土 (C: 5%) / 黄褐色粘土が混じる【落込3】	43	7 SYR4/4	褐色粘土質土 (底, W1~10cmの層面)
12	7 SYR2/2	反張褐色砂質土	44	7 SYR5/4	明黄色粘土質土 (底, W2~5cmの層面)
14	2 SYR1/1	黄褐色粘土に7 SYR6/6褐色粘土層	45	10YR5/7	黄褐色粘土質土 (底, W2~5cmの層が少量面)
15	7 SYR2/1	反張褐色砂質土	46	10YR5/4	〔にぶ〕 黄褐色粘土質土 (底, W2~10cmの層が少量面)
20	7 SYR4/4	褐色砂質土 (W1~15cmの層が中量面)	47	10YR5/6	黄褐色粘土質土 (底, W2~5cmの層が少量面)
24-1	7 SYR4/3	褐色砂質土 (W1~15cmの層が中量面)	52	10YR4/4	褐色砂質土 (底, W2~5cmの層が多量面) (底層土) 安佐福山(金糞瓦合)
24-2	黑層【状況説明】		53	10YR5/3	〔にぶ〕 黄褐色砂質土 (粘土, W1~5cmの層面)
25	10YR0/2	緑褐色砂質土【薄】	54	10YR5/3	〔にぶ〕 黄褐色砂質土 (粘土, W1~5cmの層面)
26	7 SYR4/2	反張褐色砂質土。(近代盛り込み)	55	7 SYR5/5	明黄色砂質土 (地山) (砂被主体)
27	10YR4/2	灰黄褐色砂質土 (W10cmの層が中量面) (近代盛り込み(堅塗か))	56	7 SYR6/6	褐色砂質土 (地山)
28	10YR0/3	緑褐色砂質土	57	10YR4/4	褐色砂質土 [C: SYL1] 黄褐色細粒が混じる (地山)
29	7 SYR4/4	褐色砂質土に7 SYR6/6褐色粘土が混じる【薄】	58	7 SYR5/4	〔にぶ〕 黄褐色砂質土 (W2~2.5cmの層面) (地山)
30	7 SYR4/4	黒褐色砂質土 (W1~15cmの層が中量面) 7 SYR6/6褐色砂質土が混じる【土坑10】	59	7 SYR6/6	褐色砂質土 (W3~5cmの層面) (地山)
31	10YR5/1	黒褐色砂質土 (やや乾燥) (薄)	60	7 SYR5/5	褐色砂質土 (W1~5cmの層面) (地山)
32	7 SYR4/2	褐色砂質土 (やや乾燥) (薄)	61	10YR5/6	明黄褐色砂質土 [SYL1] 褐色細粒が混じる (W1~5cmの層面) (地山)
33	2 SYL4/4	〔にぶ〕 黄褐色砂質土 (化粧土)	62	7 SYR6/6	褐色砂質土 (W1~5cmの層面) (地山)
34	10YR7/1	反張褐色砂質土 (化粧土)			
35	10YR4/1	褐色砂質土 (P7)			

第12図 基本層序



第13図 南区西・南壁土層断面図

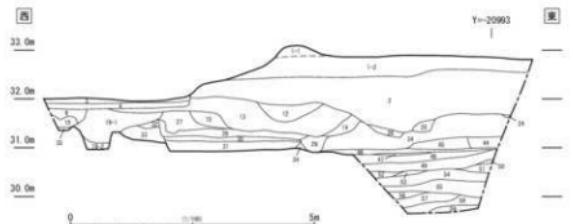


第 14 図 北・東・南区 東壁土断面図

く。第1層は、現代の表土層、直下の第2層も一時期前の表土層か、両者ともに敷地の南～東部にかけてのかなり広い範囲にまで及んだ整地土層である。第4～7層、第10層・11層・15層・20層は、近代から現代の整地土層で積土により形成されたものと見ている。第1層は現代最新、第2～4層は現代新であり、第5～7・9層は現代古と考えている。第10～15層は、URの団地形成直前の整地土層と見ており現代の古側に位置する。第20層も同様にみておく。この内第2層と第7層の間に位置し、南部中心に広がる第5・6層は、暗褐色を呈した砂質土であり、一時期畑の耕作地として利用があった事を示すものか。

第24層は浅い幅のある南北向の溝状遺構2の遺構内堆積土である。第25層も断面が皿状を呈する南北方向の溝11内の堆積土であり、同遺構の底部の東西幅よりやや幅の狭い炭層が南北に延びる。いずれにしろ両者ともに近代の戦前の一時期に形成された南方への排水施設と見ていく。第26・27～32層は、箱状や箱溝状を呈した掘形を持った掘り込みの切り合った遺構の構内堆積土である。砂礫あるいは礫層の地山を掘り込んで形成され、褐色色味のつよくなつたよごれ砂礫の（元）地山土を主体とする土で埋め戻されている。戦前の軍隊関連の埋没した廐塹あるいは地下道的施設ともみられる。

第33・34層は、微妙な色調が異なるが淡緑白色を呈したうすい砂質土層である。堀1東側を

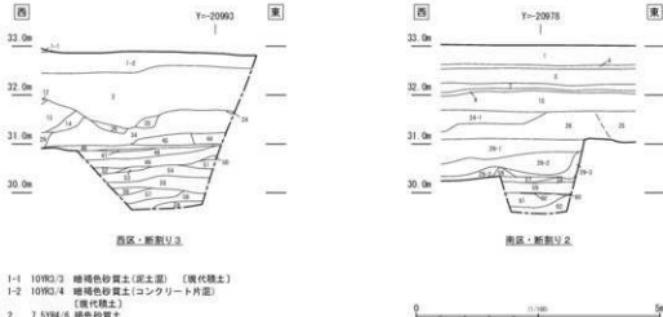


第15図 西区南・東壁土層断面図

南北に走る石垣1の裾に一部かぶり、幅1~2m程の幅で、石垣1に沿うように南北に帯状に走る。第40層は少し幅は広いが、第33・34と同様に石垣1沿いを南北方にのびる。堀1埋土最上層と見られる第40層上面には、第35~39層は灰色粘質土のほぼ共通した構内埋土を持った、ランダムに帶状に分布するピット群が一部である。

第41層の下方の第41~47層は、堀1の埋土の上層部を形成する。一時期の細かくはなるが漆として機能をしていた可能性も考えられるが、断定的理は今後の課題とする。第52~54層は、堀1の西肩側から入る埋土であり、中でも第52・53層からは多くの金箔瓦を含んだ瓦類が多量に出土した。これらの埋土は、西側のくずれた石垣と落下石の上に直接かぶっている。

第55層は、地山の最上層に位置する砂礫主体の土層であり、本来的には数10cmとかなりぶ厚い土層である。第56層以下第62層は近代遺構の底部を断割り掘削し、確認した砂礫主体の地山土層である。8層分の地山土層を確認したが、遺物は出土していない。これらの砂礫地山層は、大阪層群の隆起に伴ない押し上げられて、初期には丘陵地の表土層を形成していたものである。大阪層群の上位に堆積したいわゆる、中位段丘形土層である。



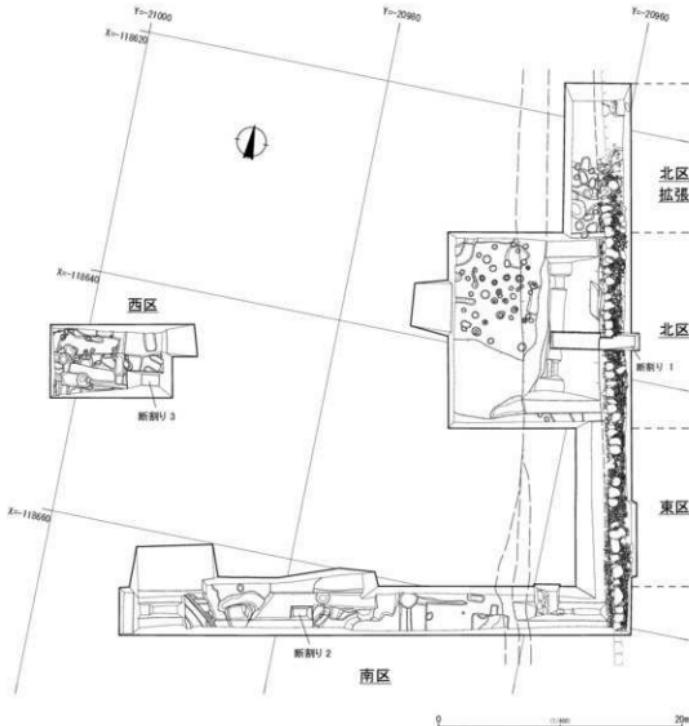
- | | |
|--------------------------------------|---|
| 1-1 10YR2/3 緑褐色砂質土(底土層) (後代地盤) | 1 10YR2/4 緑褐色砂質土(後・コンクリート片混) |
| 1-2 10YR2/4 緑褐色砂質土(コンクリート片混) | 2 7.5YR4/6 黒色の粘質土(コンクリート、レンガ片、煉瓦) |
| 2 7.5YR4/6 黒色の粘質土(コンクリート、レンガ片、煉瓦) | 3 10YR2/3 黒褐色砂質土 |
| 3 10YR4/3 にじみ黄褐色砂質土 | 4 10YR2/2 黒褐色砂質土 |
| 4 10YR2/2 黒褐色砂質土 | 5 10YR4/4 黑褐色 |
| 5 10YR4/4 にじみ赤褐色砂質土 | 7 10YR4/1 緑褐色砂質土(やや粘質)にSYR4/4にじみ赤褐色
粘土が間に混じる(φ3~15mmの礫が多量) |
| 6 10YR4/5 黑褐色 | 9 10YR5/2 黄褐色砂質土 |
| 7 7.5YR1/1 黑褐色砂質土 | 15 7.5YR4/1 緑褐色砂質土 |
| 8 10YR5/2 黄褐色砂質土(φ2cm程の礫が少量混) | 24-1 7.5YR4/3 緑褐色砂質土【準状造体】 |
| 9 10YR5/4 にじみ黄褐色砂質土(φ2cm程の礫が少混) (地山) | 24-2 7.5YR4/3 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 10 10YR5/6 黑褐色砂質土(φ2~3cmの礫混) (地山) | 24-3 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 11 10YR6/3 にじみ黄褐色砂質土(φ2~5cmの礫混) (地山) | 24-4 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 12 10YR6/3 にじみ黄褐色砂質土(φ1~5cmの礫混) (地山) | 24-5 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 13 10YR6/3 にじみ黄褐色砂質土(φ1~5cmの礫混) (地山) | 24-6 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 14 10YR6/1 黑褐色砂質土(やや粘質) | 24-7 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 15 10YR5/1 黒褐色 | 24-8 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 16 10YR4/3 にじみ黄褐色砂質土 | 24-9 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 17 10YR4/3 にじみ黄褐色砂質土 | 24-10 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 18 10YR4/3 にじみ黄褐色砂質土 | 24-11 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 19 10YR4/3 にじみ黄褐色砂質土 | 24-12 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 20 10YR4/3 にじみ黄褐色砂質土 | 24-13 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 21 10YR2/2 黑褐色砂質土 | 24-14 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 22 5YR4/4 にじみ赤褐色砂質土 | 24-15 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 23 10YR4/5 黑褐色 | 24-16 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 24 10YR4/4 黑褐色 | 24-17 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 25 10YR4/3 にじみ黄褐色砂質土 | 24-18 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 26 10YR4/3 にじみ黄褐色砂質土 | 24-19 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 27 10YR2/2 黑褐色砂質土 | 24-20 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 28 5YR4/4 にじみ赤褐色砂質土 | 24-21 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 29 10YR4/5 黑褐色 | 24-22 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 30 10YR4/5 黑褐色 | 24-23 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 31 10YR4/5 黑褐色 | 24-24 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 32 10YR4/5 黑褐色 | 24-25 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 33 10YR4/5 黑褐色 | 24-26 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 34 5YR4/4 にじみ赤褐色砂質土 | 24-27 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 35 10YR4/5 黑褐色 | 24-28 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 36 10YR4/4 黑褐色 | 24-29 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 37 10YR4/4 黑褐色 | 24-30 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 38 10YR4/4 黑褐色 | 24-31 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 39 10YR4/4 黑褐色 | 24-32 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 40 10YR4/4 黑褐色 | 24-33 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 41 10YR4/4 黑褐色 | 24-34 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 42 10YR4/4 黑褐色 | 24-35 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 43 10YR4/4 黑褐色 | 24-36 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 44 10YR4/5 黑褐色 | 24-37 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 45 10YR4/4 黑褐色 | 24-38 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 46 7.5YR1/1 黑褐色 | 24-39 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 47 10YR5/2 黄褐色砂質土(φ2cm程の礫が少量混) | 24-40 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 48 10YR5/4 にじみ黄褐色砂質土(φ2cm程の礫が少混) | 24-41 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 49 10YR5/6 黑褐色砂質土(φ2~3cmの礫混) (地山) | 24-42 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 50 10YR6/3 にじみ黄褐色砂質土(φ2~5cmの礫混) (地山) | 24-43 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 51 10YR6/3 にじみ黄褐色砂質土(φ1~5cmの礫混) (地山) | 24-44 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 52 10YR5/3 にじみ黄褐色砂質土(φ3~5cmの礫混) (地山) | 24-45 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 53 10YR5/4 にじみ黄褐色砂質土 | 24-46 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 54 10YR6/3 にじみ黄褐色砂質土(φ1~5cmの礫混) (地山) | 24-47 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 55 10YR6/3 にじみ黄褐色砂質土(φ1~5cmの礫混) (地山) | 24-48 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 56 10YR5/3 にじみ黄褐色砂質土(φ1~5cmの礫混) (地山) | 24-49 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 57 10YR5/3 にじみ黄褐色砂質土(φ1~5cmの礫混) (地山) | 24-50 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 58 10YR5/2 黄褐色砂質土(φ2~5cmの礫混) (地山) | 24-51 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 59 10YR5/3 にじみ黄褐色砂質土(φ1~5cmの礫混) (地山) | 24-52 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 60 10YR5/3 にじみ黄褐色砂質土(φ1~5cmの礫混) (地山) | 24-53 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 61 10YR6/5 黄褐色砂質土(φ2~5cmの礫混) (地山) | 24-54 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |
| 62 10YR6/2 黄褐色砂質土(φ2~4cmの礫混) (地山) | 24-55 7.5YR4/2 黑褐色砂質土【準状造体】 |

第16図 西・南区 断割り2・3 土層断面図

2. 遺構

(1) はじめに

今回実施した発掘調査では、中世以前の遺構や整地層等は確認されなかった。検出し調査した遺構は、(安土・)桃山時代頃からの近世初頭の遺構と、江戸時代後期以降の主に近代以後の遺構群の、大きくは2時期の遺構群に限られる。整地層等の遺物包含層は、中世以前に限らず近世と特定出来る土層も、西区の一部で薄く残存していたに限られ、調査区内で確認された土層の大半は近代以降から現代の積土整地土層や耕作土層であった。しかし、近代以降の土層中や近世・近代の遺構内からの出土遺物には、古代から中世の遺物が混入して出土している例が多く、古代から中世の遺跡が当地にも存在していた可能性を十分に示している。中世以前の遺構や整地層等は当地では、近世以降の遺跡形成に伴う大規模な削平を伴なう宅地の造成工事によって大きく削平を受けてほとんど消滅したものと考えられる。また近世においても江戸時代前期後半以後か



第17図 地区割りと断面位置図

ら同後期頃までの宅地的遺構が残存していないのは江戸時代には当地を含めた桃山一帯が桃畠として利用された事に加えて、近代に入る明治時代以降には旧日本軍第16師団関係への軍事施設用地に組み込まれた事にもよる。さらに、戦後、団地の造成工事による削平や塹壕等の掘削工事による大きな削除、その後の積土や埋土等が行なわれたことによるものと考えられる。

今回の発掘調査で検出した新しい側の遺構群は、江戸時代後期頃に遡る可能性のある少部分のものを含めた近世末から近代以降の遺構群が中心であり、それらを第1遺構面にまとめたが、そのなかでも大きく2時期に分けられるので、同1-①と同1-②として分けて扱った。第1-①遺構面は、近代でも現代に近い戦後でURの団地が建てられる前段階から現代である現地表面は南区では1-①に20~30cmの積土層の上面であり、図示はしていない。第1-②遺構面は、明治時代以降から昭和の太平洋戦争の終戦直後の占領軍である連合国軍が、旧日本軍第16師団関係の軍事施設を使用していた1950年頃以前の遺構が主体となる。なお南区は、同1-②を最終段階は②Aとして、最盛期は②Bとして提示している(第18図)。西区は第1-②A・B遺構面を1枚にまとめた(第19図)。

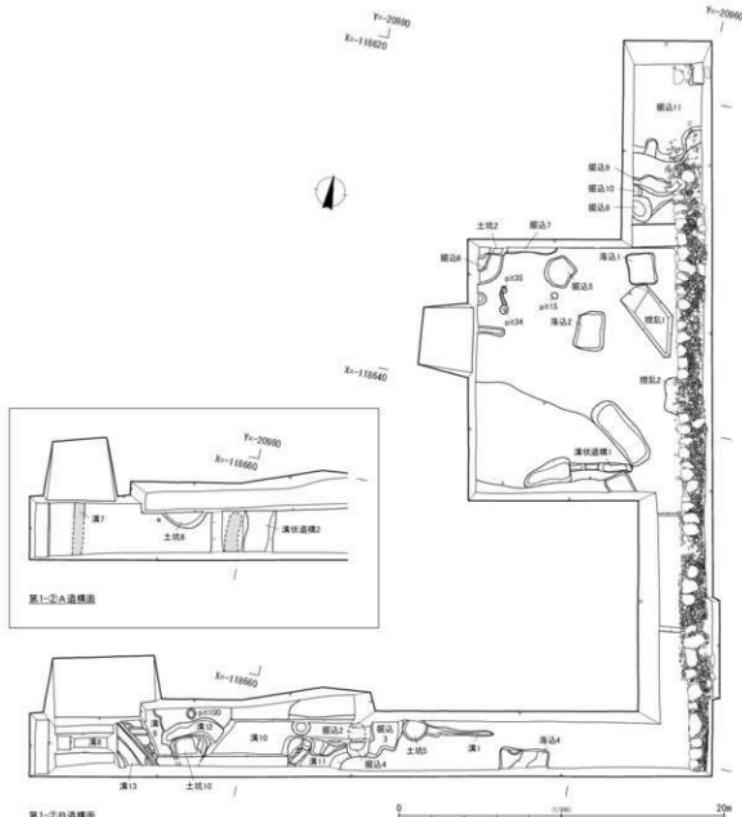
近世初頭の桃山時代から江戸時代初め頃は、時間的には30年前後の短い時期ではあるが調査の主目標の1つとなっている指月城を含む伏見城が造られて機能していた時期である。土層と遺構面とセットで変化を押えられたものは部分的なものに止まるが、堀や石垣等の大型の遺構を含めて複数回の造り変えが確認出来ている。北区、東区、南区東辺部の近世初頭の城及び城下町(大名屋敷)関係の遺構を、第2-①遺構面、同2-②・同2-③A・同2-③Bの四小期に分けて提示した(第20~25図)。

以下では、遺構面番号の順に遺構面と遺構の説明を記す。その後に、堀と石垣、石垣の石組、石材等について説明を加える。

(2) 第1遺構面(第18・19図)

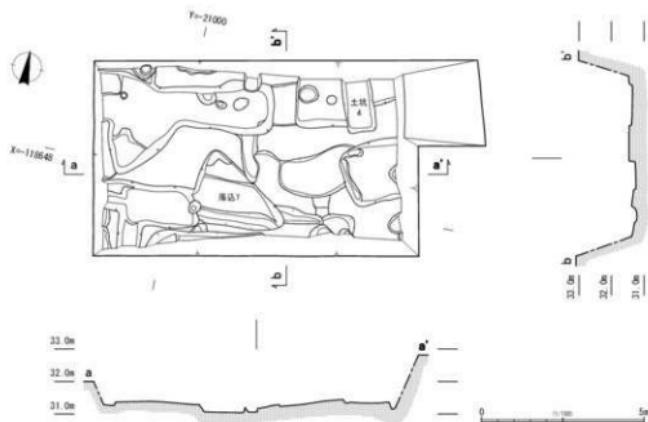
第1-①A遺構面は、現代表土面であり、同1-①Bは南区のみに確認出来る遺構面で整地土層である4層の上面に形成される。4層は煙の歎に直接的に積土している。南壁断面の東半では煙の歎の凹凸が数条確認出来る。歎の上面が第1-①C遺構面となる。戦中からかあるいは戦後の一時期に当地でも畑作が行なわれ、その上に4層を入れて宅地面(第1-①B遺構面)として利用を再開したと見られる。戦後につらなりその上に新たに形成される遺構面と第1-①遺構面としてまとめたが、戦前からつらなる面である第1-①D遺構面を含めて、近・現代面であり、土層とともに断面観察による理解に止まる。

第1-②遺構面は、各調査区で確認しているが、第1-②A遺構面は敷地の南辺部だけが1段低くなっていた戦前の遺構と見ている。南区でも中央から西部で検出出来たに止まり、東半では近世遺構面に連続する。第1-②A遺構面では、溝7と溝状遺構2及び土坑6を検出した。2条の溝状遺構は、構内に炭層を有しており濾過機能を持った排水溝とも考えられるが、土坑6を含めて昭和期の第16師団の軍事施設の一部と関連した遺構であろう。第1-②B遺構面は、



第18図 第1-②A・B遺構面平面図

南区の東辺部より以西全域で確認している。溝1・8～13などや土坑5・10、掘込2～4、落込4・pit100等多くの遺構を検出し掘り下げ調査を行なっている。これらの内では、溝8・10等はかなり規模も大きく、垂直に近い側壁、平坦な底部を持っており断面形状は箱形を呈する。地下道を含めた地下施設建設を目的として掘り下げられたものとも考えられる。他の小規模な溝状遺構や土坑・pit等を含めて、旧日本陸軍京都第16師団によって構築された軍事的な、地下施設の建設用を含めた軍隊による軍事施設の建設に関した掘削、あるいは訓練用塹壕等も加わった人工的な掘り込み群であると見ている。将来は、平面的にも広い調査を実施して解明する必要がある戦争関連遺跡ではあるが、現代の行政レベルでの緊急発掘調査で本格的に扱うことは難しく、今回はこのレベルの調査で終了しておく。なお、土坑5・溝9・落込4等は江戸時代後期あるいは



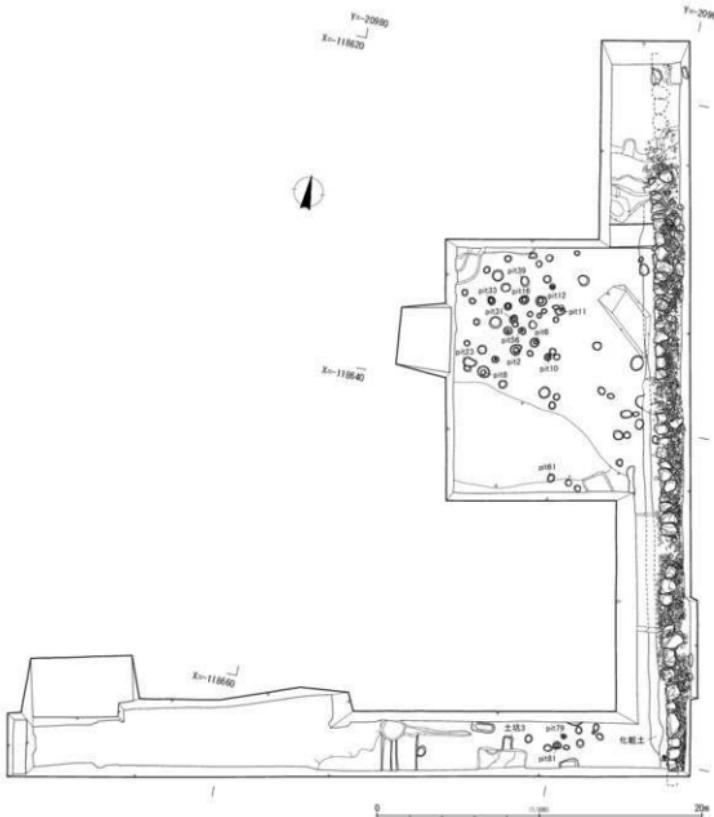
第19図 西区第1-②A・B遺構面平面図

末期頃まで遡る可能性もあるが、トレンチ調査では明確な判断を示すことは難しい。しかし、丘陵南西辺部は、底地部の観月橋や道路との距離間からも他とは土地利用のあり方が異なるようであり、第1-②B遺構面は、江戸後期から近代の幅を持って理解しておきたい。

東区・北区・西区では、第1-②A・Bは合わせて第1-②遺構面として図示している。理由は、第1-②遺構面は近現代に機械力による大規模掘削が、深く加えられた結果の影響が大きく、削平は地山面以下に及んでいる部分が多く、一般的には遺構面とは言い難い部分が広い。ほとんど地山上面となってではあるが残存していた遺構面よりも、深く掘り込まれた部分は、一部擾乱坑や土坑、pit等の名称を付して扱ったが、多くは掘込という名称を付して扱い、図示している。北区から北区の拡張部では掘込5~11、落込1・2、擾乱坑1・2やpit15・34・35、溝状遺構1等である。東区では、試掘削坑底部が江戸時代初め頃の遺構面をかなり掘り下げていた。南区中央の北壁沿いには、深いトレンチ試掘坑が重なる。機械掘削の主要因は、戦後の集合住宅建設に伴う基礎掘りや、同集合住宅解体工事による基礎等と取り去る大規模掘削であろう。この掘削は桃山時代の石垣にも大きく影響しており、石垣の上半部や一部は1段目までもが除去されてしまっていた。動いた石材は現代埋土の中に金箔瓦とともに多数含まれていた。北区等の掘り込みについては、針金・コンクリート片・アスファルト片などが入っているものが大半であった。しかし、これら近・現代のものも、掘り分けなければ近世以前の遺構も検出することが出来ないので、調査の手順で対応しなければ発掘調査は進められない。

(3) 第2遺構面（第20~25図）

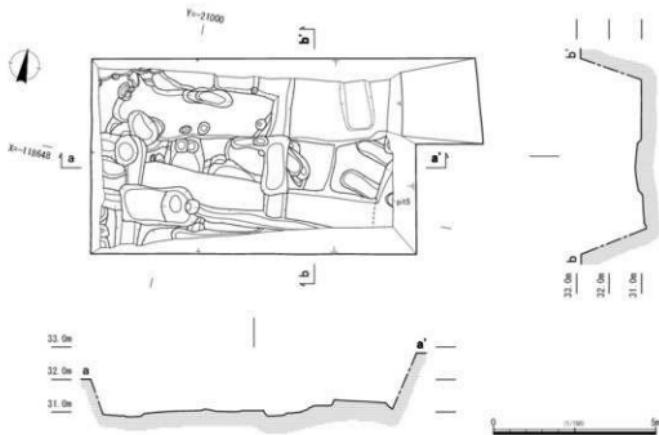
第2遺構面は、（安土・）桃山時代から江戸前期にかけての遺構面であり、基本的には各区ともにほぼ地山直上の1面であるが、堀や石垣の形成また部分的土層とその上面の遺構等の、関



第20図 第2-①遺構面平面図

係から第2-①～2-③遺構面に分けて図示している。順次説明を進める。

第2-①遺構面は、東側の石垣1が残っているが、その西側の堀はほぼ埋っており平坦となって、西側の遺構面に連続するものとなっている。石垣沿いは、堀から幅1.5m程で淡灰白色の砂が敷かれている。この砂礫は石垣最下段の石礫からはみ出ている石垣下のグリ石を用いた敷石を覆い隠す目的の、化粧土と見ている。化粧土は、石垣形成後に施されているものだが、石垣の形成時期との時間差については、同砂からは出土遺物もみられないで単独的に結論を出すことは難しい。石垣堀沿いに化粧土が施された状態で、大名屋敷の一部か、東端を形成していたものと考えられる。この第2-①遺構面では、南区東辺部と北区において径30～50cm程の小穴群と少数の土坑を検出している。pitには、1つの建物と出来る程に方形状に並びの確認出来るもの

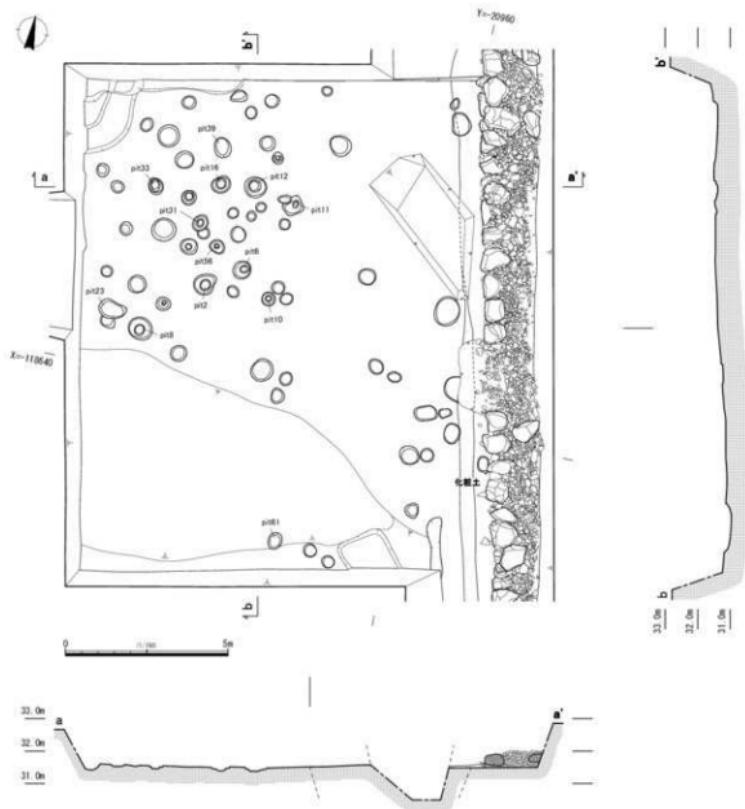


第21図 西区第2-①遺構面平面図

もないが、南区 pit79・81、北区 pit2・6・8・10・12・16・31・33・56・61などのように、柱あたりと見られる柱穴と出来るものが一定量含まれており、大名屋敷の主要建物ではないが、雜舎等の小規模な付属建物が建っていた可能性は示している遺構とは考えられる。しかし、第2-①遺構面の成立期に近い時期に位置付けられるもの以外に、一定数は成立的には、第1-②遺構面以下に下がる可能性のあるものを含んでいるが、出土遺物はそのほとんどが近世初頭の城あるいは城下町の時期からの小片であり、確定的理解は難しい。

第2-①遺構面は、石垣形成期以降の桃山時代後半期から江戸時代前期の早い段階頃の時間幅を持ち、伏見木幡城の城下町（の大名屋敷地帯）の時代に対応する遺構面と理解している。

第2-②遺構面は、先の石垣1壁沿いの薄い化粧土（砂）を掘り上げた直下の石垣沿いの幅2.5m程で南北方向に帶状に検出される。また非常に特徴的な様相を呈して、その帶状地区だけに展開する平面40×80cm前後、深さ15～20cm程の不定形な小規模土坑群が検出される。堀1埋土上面にこの遺構群のベースを形成するように浅い溝状に入れられた黄褐色粘質土（橙色粘質土が混じる）が、帶状に入れられている。上面に展開する遺構は、検出分だけで100基程であり、先に削除されたと見られる分を加えると調査範囲内だけでも百数十基と推定される。この遺構群の構内堆積土は、ほぼ共通している灰色状の粘土～シルト土であり、検出時にはグレーピット群と仮称していたので、GPとし後に遺構No.を付した。この遺構群の性格は、密集した水溜まりの小池群の様相を想定し、現在も検討しているが妥当な解釈が難しく、報告書以後に残る課題の1つである。もう1点注目される点は、内容の詳細は遺物の項に譲るが、出土量が少ないとはいえ、ほぼ一定の時期幅に収まる遺物が出土していることである。時期的には、室町時代末期から桃山時代前半期のものを主体とする。織部や唐津等は、1点も含まれておらず、又単体では土師器皿



第22図 北区 第2-①遺構平面図

を含めて慶長以降と言いかれるものも含まれていない。型式学的な観点からは、最新のものでも文禄年間から慶長であれば最初年頃が下限である。このグレーピット群は、出土遺物と層位関係から、指月城の被災痕の整理と堀1の埋没直後に形成され、短期間に埋没したと見るのが妥当である。しかし、遺構の成立期と様相・性格の解明は、指月城の最終段階から大名屋敷としての再利用間を理解する上でかなり重要な課題ではある。

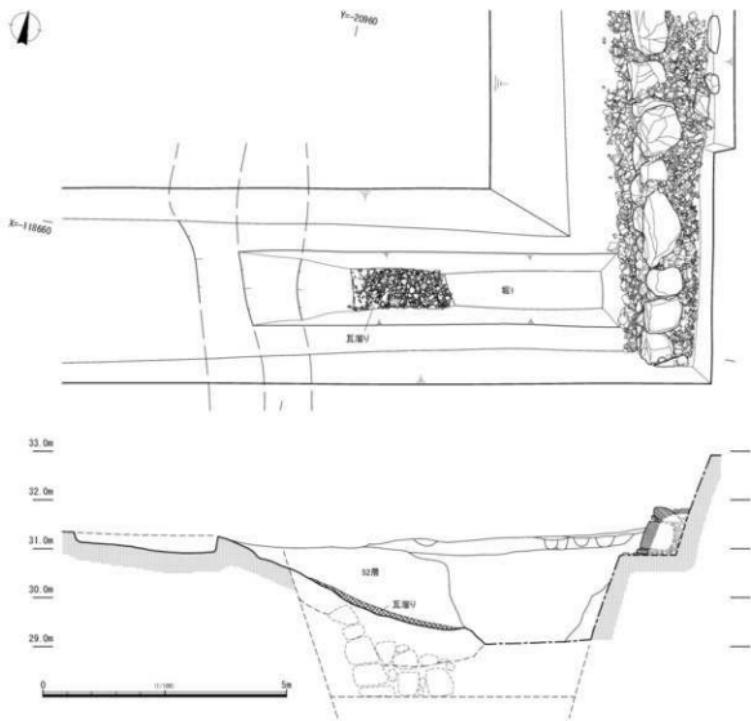
第2-③遺構面は、南北方向に延び西面する東辺の石垣1とその西側に堀1が南区では堀1の西側壁で東面する石垣2を並存していた時期のものである。石垣1の西側沿いの犬走りのあり様が0.3~0.6m程と幅はバラツキがあり、若干不明瞭であり、石垣2は一部を検出したにとどまるが、堀1との関係を含めて現在の認識をまず示す。

東辺の石垣1は、検出した部分はとんでいる部分も入れて、南北約43m分程検出しており、

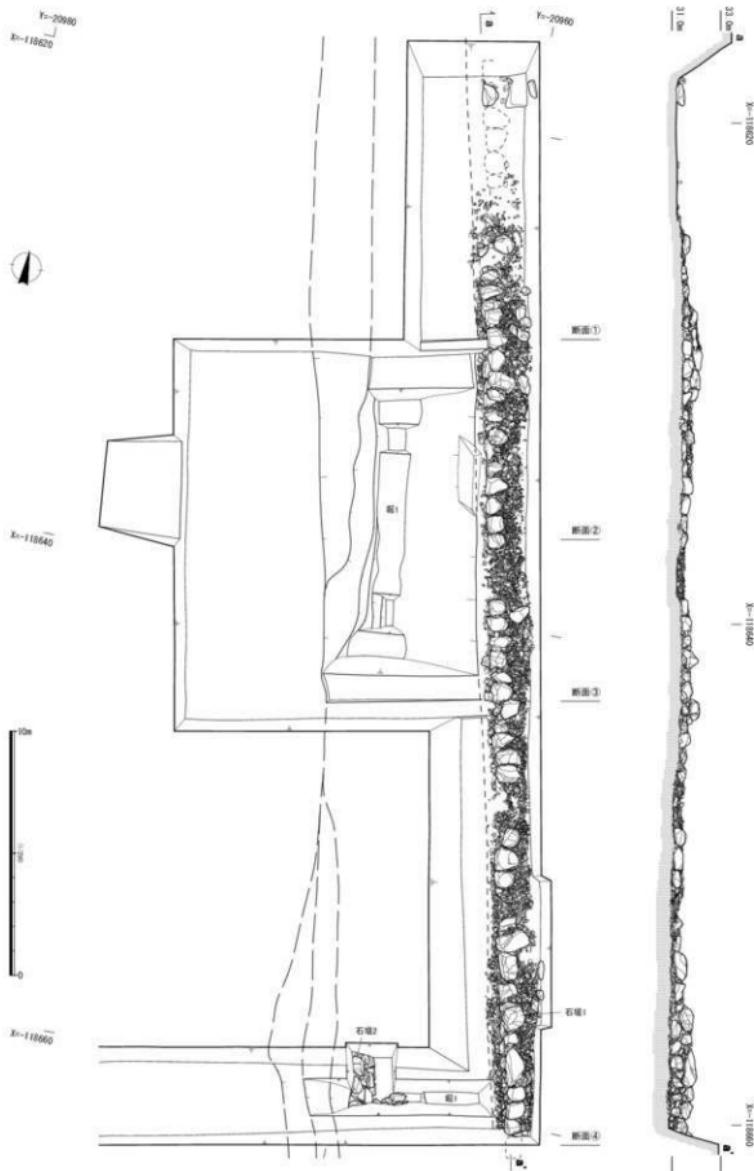


第23図 第2-②遺構面平面図

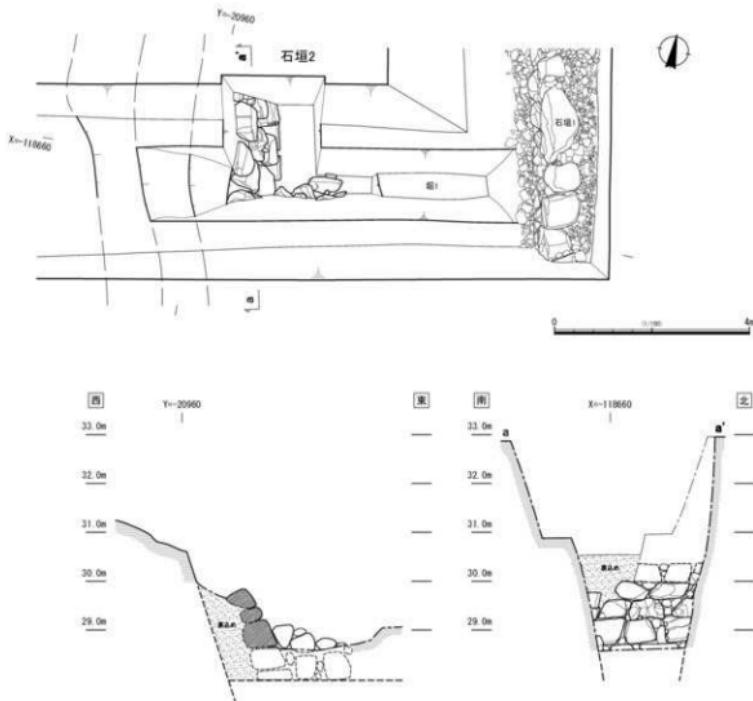
2段残る残存部の最も高い部分で高さ1.1m程を測る。石垣の表面は西面しており、主石材は0.6～0.8m×0.8～1.5m程と大石が主体である。表面を見た印象は、法の角度緩く、大石の隙間に間詰石の小石が多く組み込まれている特長的な表面を有する。残存部は、ない部分を一部含み1段から2段である。裏込めの栗石のあり方からは、少なくとも2段以上は破壊されて欠失していると推定される。主石材は、石英斑岩とチャート、砂岩等の堆積岩の自然石が主体である石英斑岩は矢穴が2個体で確認出来るが、割り面も少なく、他も多くは自然石が多い。栗石は堆積岩の10～15cm大のものが主体である。一見的には、信長の安土城、京都では旧二条城以来のいわゆる穴太（衆）組み（この表現も難しいが、秀吉がいる頃までは使用してよいと考える）的である。秀吉の大坂城や聚楽第の石垣にもよく類似している。石垣は、旧段階の堀あるいは自然の谷地形の東半を埋めた整地層の先端ライン近くに、胸木は設置せずかわりに小石の石群を密に敷きつめて強化した石敷面上に構築している。裏側の掘方部は幅1m弱ながら栗石が密に入れられており、掘方にあたる東面には積土法面の保護の目的か大石を並べている部分もある。



第24図 南区 第2-②A 遺構面(瓦溜り) 平・断面図



第25図 第2-③ B 遺構面平面・立面図



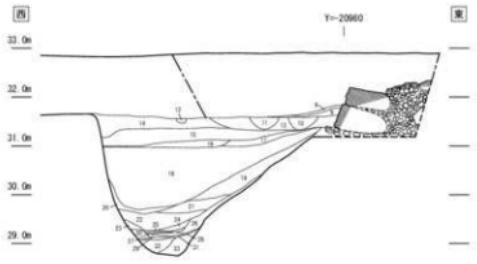
第26図 南区 石垣2 平面・立面・断面図

堀1の西邊において南区のみで東面する石垣2を検出した。残存していた部の天場は堀1の西肩の遺構面からは1m程下り、そこから下方へ3段分とその下部で少し積み方のわかる、横長に設置されている石の上部の、計4段上下約1.5m分程を確認している。4段目はさらに下方へ伸びているので、堀西側壁に組まれたこの石垣2は、堀底部近くまで組まれた可能性が高い。石垣2の表面は東面しており、法は東側石垣1よりやや強く60°程である。主石材は、石英斑岩の割り石が主体で、矢穴も確認できる。割り石で表面をととのえた印象は、東側石垣1よりも新相感が強いが大きな時期差はないだろう。西側掘方に入れられた裏込めの栗石は7~8cm大が主であり、主石材間に間詰石が見られず隙間が大きい印象である。上部にも2~3段組まれていたと想定されるが、落下した様であり、石垣東側の堀内には主石材や間詰石と見られる石材が埋っており、一部上部を検出している。この堀西側の石垣2は、北区には延びていないが、北区の堀の西側壁の南半、他よりも垂直気味であり、その肩部は南北検出分の途中まで直線的に延び、鍵状に内へ折れて北へ延びている。堀西側壁は、その以北ではゆるい法が付く。その様相からは、その付近まで石垣が積まっていた可能性が高いと見ている。

石垣1・2と堀1の関係及びそれぞれの性格と位置付けについて記す。3者の関係を示す意味で堀1を中心にして両石垣を入れた平面図と東西方向の4本の断面図及び理解の概念図を掲載している（第52-56図）。断面図は最も北側に位置する北区北壁断面図を①として、その南側で断割り部を含むものを断面図②、続く南側分となる北区南壁分を③とし、最も南に位置する南区の南壁分を断面図④とした。

堀1は、南区東部～東区～北区（拡張区を含め）東半部において検出し、北区拡張部分を残した北区全般と南区で掘り下げ調査を実施した。調査分は、南区南辺から北区北辺の南北約30m分程である。東西幅は、北辺近くで石垣1基から西肩まで約7m程であり、最も広い南区南辺付近で幅約9m程である。深さは、北区で西肩から約3.3m程、南区でも同じく3.3m程まで掘り下げたが、底部を確認することが出来なかった。本調査後、建物設計上遺構の破壊を免れない部分について市保護課がおこなった補足調査で、堀1の深さはさらに1m以上下がることを確認したようだが、人為的な堀底部あるいは自然の谷地形底部等については明確な確認は得られていない。推測を含むが底部は、調査で検出した西肩からは-4m以上は下がり、堀1の前身の堀か谷筋かは別にすると東へ一定幅で広がるようである。堀1の前身段階になるか、改変対象になった東へ広がる南北方向の自然の谷地形かは今のところ判らないが、今後その点を解明するための発掘調査はぜひ必要である。いずれにしても堀1は、石垣1より東側と一連で一気にかの大きな問題をのこすが、南区東部が若干の時間差で凹状を呈した段階（第2-③A遺構面）があるようだが、ほぼ一気に埋め戻されて平坦地化する。

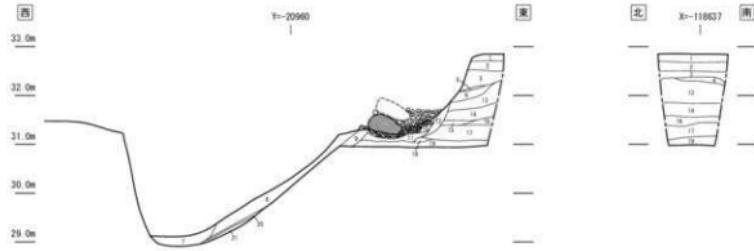
堀1埋土は、北区南部から西側に石垣2を残す南区東部では、東の堀1中央へ大きく下る西肩側から入れられた埋土が数層確認出来る。この西側からの埋土の下部では、瓦片以外に石垣の主石材や間の間詰石等の落石が検出されている。南区の東部でのこの西側からの埋土の上には、東へゆるく下る礫敷と称していた、礫や瓦片の多い第52層にぶい黄橙色砂礫（粘質土含む）土層が入れられ、よく締まっていた。堀1が埋められる間の極一時期ではあるが、排水をかねた浅い凹状に堀1上部が残っていた可能性がある。その礫敷きの上に入れられた埋土も西から入れられており、この西側からの埋土上層分からも金箔を含む瓦類が多く含まれていた。この西側からの入土埋土と石垣1の間は、少し後まで細い堀状凹がのこるようである。このような堀1の埋没過程は、北区の部分でも確認出来る。指月城段階の施設が壊れてから、堀1が埋って平坦地の一部となるまでにも複数段階の小過程を経てからようである。いずれにしろ、南北方向の堀1は、その前身段階を含めて指月の隠居城段階から指月城段階の城郭施設の一角を形成していくと見て大過ないだろう。東側の石垣1、西側の石垣2とともに堀1と直接関連して構築されたものと見て良いが、石垣1は指月城期中に構築され木幡城期に引き継がれたのか、堀1と並存して一定期間生き残りその後の木幡城期の早い段階で埋められて石垣1だけが生き残ると理解するのか。あるいは石垣1は、木幡城期の初期に堀1東側が埋め戻されて、一時期堀1が生き残っていた段階、さらに堀1を埋めて平坦化し石垣裾に化粧土を施した後に大名屋敷との段差境として生き延びるのか、あるいは、木幡城初期に堀1が埋め戻された後に、指月城関係の石材を



図面1-1 北区・堀北壁

- 8 2.5YR 6 黄褐色砂質土〔化成土〕(堀)南壁と瓦層)
 9 7.5YR 5.0 黄褐色砂質土〔堀〕(堀)南壁と瓦層)
 10 10YR 1.0 棕褐色粘質土〔0cm〕
 11 10YR 4/1 棕褐色粘質土〔0cm〕
 12 10YR 4/3 にぶい棕褐色粘質土
 13 5YR 6/6 明赤褐色粘質土〔1.5YR 6.0棕褐色粘土〕間に混じる
 14 7.5YR 5/6 棕褐色粘質土〔1.5YR 6.0棕褐色粘土が
 小ブロックで少量混じる(0.1~5cmの縫が中量混)〕
 15 5YR 4/6 棕褐色粘質土〔1.5YR 6.0棕褐色粘土が
 小ブロックで少量混じる(0.1~5cmの縫が中量混)〕
 16 7.5YR 4/4 にぶい棕褐色粘質土〔1.5YR 6.0明赤褐色粘土上に薄く混じる〕
 17 7.5YR 5/6 棕褐色粘質土〔2.5YR 4.0棕褐色粘土が少ブロックで少量混じる〕
 18 7.5YR 4/6 棕褐色粘質土〔0.3~10cmの縫、瓦層〕〔堀〕(堀)南壁14と瓦層)
 19 10YR 4.0 棕褐色粘質土〔0.3cm程の縫混〕
 20 7.5YR 5.0 明赤褐色粘質土〔0.2~5cmの縫混〕
 21 10YR 5/6 黄褐色粘質土〔0.5cm程の縫混〕
 22 10YR 4/6 棕褐色粘質土〔0.1~5cmの縫混〕

23 10YR 5/6 黄褐色粘質土
 24 10YR 5/6 黄褐色粘質土
 25 10YR 5/2 反黄褐色粘土
 26 10YR 4/6 塙地粘質土〔0.5cm程の縫混〕
 27 10YR 2/3 棕褐色粘質土
 28 10YR 4/4 塙地粘質土〔0.4cm程の縫混〕
 29 10YR 5/6 黄褐色粘質土〔0.3cm程の縫混〕
 30 7.5YR 4/6 棕褐色粘質土
 31 10YR 5/6 黄褐色粘質土
 32 7.5YR 4/3 塙地粘質土
 33 10YR 4/4 にぶい黄褐色粘質土〔0.8cm程の縫混〕

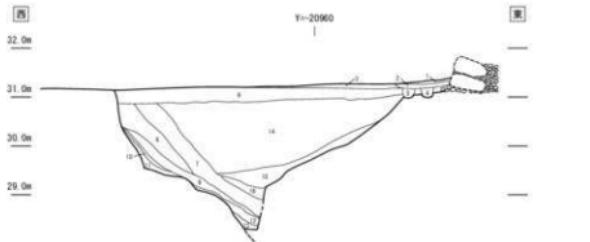


図面1-2 北区・堀北壁(削り解き)

- 1 10YR 3/4 棕褐色砂質土(縫、コンクリート片面)〔後代積土〕
 2 10YR 2/2 黑褐色粘土
 3 10YR 5/0 黄褐色粘質土〔0.1~3cmの縫、瓦層〕
 4 7.5YR 4/6 にぶい棕褐色粘質土〔0.1~3cmの縫、瓦泥〕
 5 10YR 2/2 にぶい棕褐色砂質土〔0.1cm程の縫混〕
 6 10YR 4/6 棕褐色粘質土〔0.2~5cmの縫混〕
 7 10YR 5/6 黄褐色粘質土〔SV-2にぶい黄褐色粘質土がブロック状に混じる〕
 8 10YR 6/6 明黄褐色粘質土〔0.5~10cmの縫混〕
 9 7.5YR 4/6 棕褐色粘質土〔0.2~5cmの縫混〕
 10 10YR 4/6 棕褐色粘質土〔裏込みの堆土〕
 11 10YR 4/6 棕褐色粘質土〔主石根固め土〕

- 12 10YR 5/6 黄褐色粘質土〔0.1~5cmの縫が少量混〕
 13 10YR 6/6 明黄褐色粘質土と10YR 5/6明黄褐色粘土ブロック
 〔0.1~8cmの縫混〕
 14 10YR 4/4 塙地粘質土〔0.2~5cmの縫混〕
 15 10YR 4/6 棕褐色粘質土〔0.1cm程の縫混〕
 16 7.5YR 6/6 棕褐色粘質土〔0.5cmの縫、瓦層〕
 17 7.5YR 5/6 黄褐色粘質土〔0.5cmの縫が少量混〕
 18 7.5YR 6/6 明褐褐色粘土
 19 10YR 5/0 黄褐色粘質土
 20 10YR 5/6 黄褐色粘質土〔0.1~5cmの縫が少量混〕
 21 10YR 4/6 塙地粘土

第27図 堀1断面図①②



断面3 北区・掘削壁

- | | |
|---|--|
| 1 2.SYR/6 明黄褐色砂質土【化成土】(東1北壁と同層) | 11 10YRS/4 にぶい黄褐色砂様(φ1~15cmの塊面) |
| 2 7.SYR/6 棕褐色粘土質土【西1北壁と同層】 | 12 10YRA/6 棕褐色粘土質土 |
| 3 10YRA/5 明褐色粘土質土 | 13 10YRS/6 黄褐色砂質土(φ5cmの塊が少量面) |
| 4 10YRA/4 棕褐色粘土質土【GP】 | 14 7.SYR/4 棕褐色粘土(φ1~10cmの塊、瓦面) (東1北壁と同層) |
| 5 10YRA/1 棕褐色粘土質土 | 15 7.SYR/5 明褐色粘土(φ1~5cmの塊が少量面) |
| 6 7.SYR/5 棕褐色粘土質土(3m付近)市販色粘土が
小ブロックで多量にじる(東1北壁と類似) | 16 7.SYR/6 棕褐色粘土(φ2~3cmの塊が少量面) |
| 7 10YRA/6 棕褐色粘土質土(φ2~10cmの塊面) | |
| 8 10YRA/4 棕褐色砂質(φ1~10cmの塊が多量面) | |
| 9 10YRA/6 棕褐色砂質土(φ2~5cmの塊が少量面) | |
| 10 10YRS/4 にぶい黄褐色砂質土(φ2cm程の塊が少量面) | |

10YRS/4 明褐色粘土質土(3m付近)市販色粘土が
小ブロックで多量にじる(東1北壁と類似)

10YRA/6 棕褐色粘土質土(φ2~10cmの塊面)

10YRA/4 棕褐色砂質(φ1~10cmの塊が多量面)

9 10YRA/6 棕褐色砂質土(φ2~5cmの塊が少量面)

10 10YRS/4 にぶい黄褐色砂質土(φ2cm程の塊が少量面)

- | |
|--|
| 11 10YRS/4 にぶい黄褐色砂様(φ1~15cmの塊面) |
| 12 10YRA/6 棕褐色粘土質土 |
| 13 10YRS/6 黄褐色砂質土(φ5cmの塊が少量面) |
| 14 7.SYR/4 棕褐色粘土(φ1~10cmの塊、瓦面) (東1北壁と同層) |
| 15 7.SYR/5 明褐色粘土(φ1~5cmの塊が少量面) |
| 16 7.SYR/6 棕褐色粘土(φ2~3cmの塊が少量面) |

10YRS/4 明褐色粘土質土(3m付近)市販色粘土が
小ブロックで多量にじる(東1北壁と類似)

10YRA/6 棕褐色粘土質土(φ2~10cmの塊面)

10YRA/4 棕褐色砂質(φ1~10cmの塊が多量面)

9 10YRA/6 棕褐色砂質土(φ2~5cmの塊が少量面)

10 10YRS/4 にぶい黄褐色砂質土(φ2cm程の塊が少量面)

11 2.SYR/6 黄褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

12 2.SYR/6 黄褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

13 2.SYR/6 黄褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

14 7.SYR/4 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

15 7.SYR/4 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

16 7.SYR/4 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

17 10YRA/4 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

18 10YRA/4 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

19 10YRA/4 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

20 10YRA/4 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

21 10YRA/4 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

22 10YRA/4 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

23 10YRA/4 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

24 10YRA/4 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

25 10YRA/4 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

26 10YRA/2 黄褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

27 10YRA/4 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

28 10YRA/2 黄褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

29 10YRA/4 棕褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

30 5YR5/6 黄褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

31 10YRS/6 黄褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

32 10YRS/6 黄褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

33 10YRS/6 黄褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

34 10YRA/1 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

35 10YRA/1 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

36 10YRA/2 黄褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

37 10YRA/4 棕褐色粘土質土【GP】 (西1北壁と同層)

38 10YRA/2 黄褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

39 10YRA/4 棕褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

40 5YR5/6 黄褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

41 10YRS/6 黄褐色砂質土【GP】 (西1北壁と同層)

42 7.SYR/4 棕褐色粘土質土(瓦面、φ2~10cmの塊面)

43 7.SYR/4 棕褐色粘土質土(瓦面、φ1~5cmの塊面)

44 7.SYR/4 明褐色粘土質土(瓦面、φ2~5cmの塊面)

45 10YRS/6 黄褐色砂質土(瓦面、φ2~5cmの塊面)

46 10YRS/4 にぶい棕褐色砂質土(瓦面、φ2~10cmの塊面)

47 10YRS/6 黄褐色砂質土(瓦面、φ5cm程の塊面)

48 10YRS/6 にぶい棕褐色砂質土(瓦面、φ1~5cmの塊面)

49 10YRS/6 にぶい棕褐色砂質土(瓦面、φ1~5cmの塊面)

50 7.SYR/5 棕褐色粘土質土(瓦面、φ2~5cmの塊面)

51 7.SYR/4 棕褐色粘土質土(瓦面、φ1~5cmの塊面)

52 10YRA/4 棕褐色砂質土(瓦面、φ2~10cmの塊面)

53 10YRS/2 にぶい棕褐色砂質土(瓦面、φ5~10cmの塊面)

54 10YRS/3 にぶい黄褐色砂質土(瓦面、φ1~5cmの塊面)

断面3 北区・掘削壁

断面4 南区・掘削壁

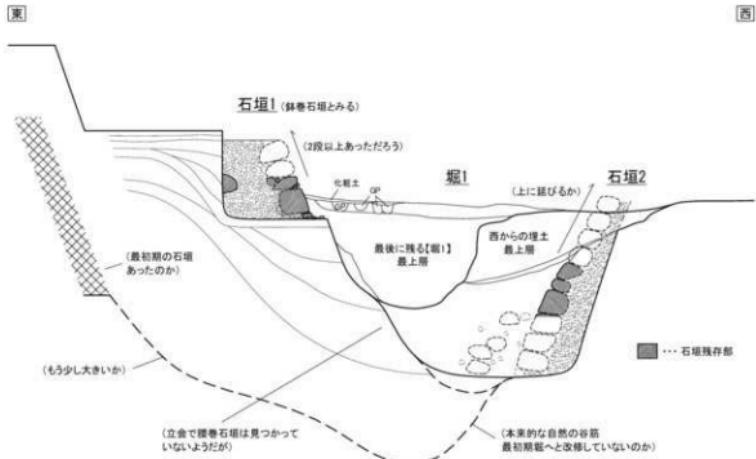
- | | |
|--|-------------------------------------|
| 1 10YR/4 棕褐色砂質土(瓦面・コンクリート井戸) 【複合土】 | 38 10YRA/2 黄褐色砂質土【GP】 |
| 4 10YR/2 黒褐色砂質土 | 39 10YRA/4 棕褐色砂質土 |
| 5 10YRA/4 棕褐色砂質土 | 40 5YR5/6 黄褐色砂質土 |
| 7 10YRA/4 棕褐色砂質土(やや堅質)にSYR4/4にぶい赤褐色粘土が
間に混じる(φ2~15cmの塊が多量面) | 41 7.SYR/4 棕褐色粘土質土(瓦面、φ2~10cmの塊面) |
| 8 10YRA/6 明褐色砂質土(2.SYR/2)灰褐色粘土が間に混じる
(φ15cm程の塊が中量面) 【落込4】 | 42 7.SYR/4 棕褐色粘土質土(瓦面、φ2~10cmの塊面) |
| 11 2.SYR/6 黄褐色砂質土(2.SYR/6)8褐色粘土が混じる【落込3】 | 43 7.SYR/4 棕褐色粘土質土(瓦面、φ1~5cmの塊面) |
| 12 2.SYR/6 黄褐色砂質土(2.SYR/6)8褐色粘土が混じる | 44 7.SYR/4 明褐色粘土質土(瓦面、φ2~5cmの塊面) |
| 14 2.SYR/6 黄褐色砂質土(2.SYR/6)8褐色粘土が混じる | 45 10YRS/6 黄褐色砂質土(瓦面、φ2~5cmの塊面) |
| 15 7.SYR/4 棕褐色粘土質土(1.SYR/4)15褐色粘土が混じる | 46 10YRS/4 にぶい棕褐色砂質土(瓦面、φ2~10cmの塊面) |
| 20 10YRA/4 棕褐色粘土質土(3.5m付近)15褐色粘土が中量面 | 47 10YRS/6 黄褐色砂質土(瓦面、φ5cm程の塊面) |
| 33 2.SYR/6 にぶい赤褐色粘土質土【GP】 | 48 10YRS/6 にぶい棕褐色砂質土(瓦面、φ1~5cmの塊面) |
| 34 10YRA/1 棕褐色砂質土【化成土】 | 49 10YRS/6 にぶい棕褐色砂質土(瓦面、φ1~5cmの塊面) |
| 35 10YRA/1 棕褐色砂質土【GP】 | 50 7.SYR/5 棕褐色粘土質土(瓦面、φ2~5cmの塊面) |
| 36 10YRA/2 黄褐色砂質土【GP】 | 51 7.SYR/4 棕褐色粘土質土(瓦面、φ1~5cmの塊面) |
| 37 10YRA/4 棕褐色砂質土【GP】 | 52 10YRA/4 棕褐色砂質土(瓦面、φ2~10cmの塊面) |

第28図 堀1断面図③④

用いて大名屋敷の段差境として再構築されたものなのか。調査区内で確認した堀1埋土を含めた堆積状況や掘り下げ調査からの情報のみではまだ断定的解釈は難しい。以下では、石垣1・石垣2、堀1の性格等や現場認識についても若干見当を加えて、現段階での理解を記しておく。

(4) 堀1について

堀1の西側壁に構築されていた石垣2は、検出分は狭いが東側の石垣1よりも、石英斑岩の矢穴の多く残る割り石石材を主体とし、東面する表面をかなり丁寧にそろえる意図がうかがえる。上部か2段目以上と間詰石が多く抜け落ちて、堀1内へ落石しているが、表面の仕上がりだけを見るかぎりでは、東側の石垣1よりも新相の印象が強い。しかし、石垣2は堀1の底部近くから立ち上げて構築している事が明らかであり、城郭施設の堀と上部施設をささえる目的を持った石垣であったと見るべきものである。また、上部主石材の落石や中位付近の間詰石の抜け方等からは、文禄末年の地震により、被害を受けている事も明らかである。加えて、石垣2とした残存部の上から落石上部にかかる西側からの埋土内の多数の金箔瓦等からも、石垣2と堀1は城郭施設それも指月城の石垣と断定的に理解してよいだろう。東側よりも新相にみえる石垣の様相は、中心部近くに構築されたことによるとみている。ただ、指月城内のどのあたりの石垣かについては、堀1は内堀と考えているが、堀1の北端・南端がどちらに曲がるのかによっても結論は大きく変わる。現状では、調査地よりも東側の高台に本丸を推定している既復元案が多いが、埋土やそれに含まれた金箔瓦等及び石垣1の様相等からは、西側に天守を含む本丸施設が存在していた可能性が高いと考えている。この問題は、また後述する。



第29図 石垣1・2と堀1の関係理解概念図

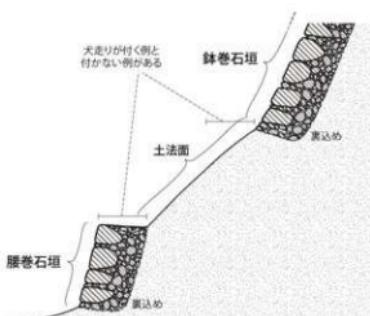
(5) 石垣と堀の関係

石垣1は、堀1及び東側の段差部肩にはば並走するように構築されており、残存部とその東側の掘方裏込めの様相からは、高さはさらに2段以上残存部を加えると4段以上は積み上げられてたと見てよいだろう。調査地東側の1段高い南北道路程度の高さまで組まれていたのかについて、現在の東側崖面から4m以上離れており、路面からはかなり低い。東側道部は若干でも積上げられ、崖面以西の当調査地は、同時期に石垣上部とともに削除が進められたことも考えられる。東側の高台を含む調査が必要である。近代以降に大きく進んだ石垣や東側高台西辺の理解は、ここでは一旦置く。残存状況や堀1や同埋土の理解に話を進める。

東側の石垣1は、欠失部を含み1～2段分の主石材が残存していた。石垣1は、南北方向に延び指月丘への南崖面に開口する自然の谷筋、あるいはそれを利用して構築されたと見られる城郭内の堀となる古段階の堀1を埋めて、整地された土層の上面に築造されている。断割り調査や本調査後の市保護課による補足調査等からも石垣1の東側掘方（栗石が入れられた掘方）より東側も、埋土の整地土層である。石垣1は、堀1の埋土の上面に胴木は用いず、丁寧な礫敷を主石材裏よりも少し西側にまで及ぼし、裏込め栗石に通じた礫敷上面に設置されて積み上げられている。この点は、調査開始当初に擬乱1の壁觀察からの、推測を含めてではあるがほぼ理解出来ていた。その上断割りや補足調査で金箔瓦片が含まれていた事も加えると、極単純に東側だけとの考え方も含めて堀1埋土と石垣1は、木幡城の初期段階の大名屋敷への改変時であると結論付けてしまう。しかし、現状の調査範囲の成果だけでこのように結論付けることは出来ないと考えている。

堀1は、東半を含めて元々の自然の谷地形を利用して、それを改変して構築されているとみてよいと考える。さらに次の段階に東半を埋めて、その埋土整地土層の西端部辺に石垣1を構築し、西半だけの堀1と一緒に共存する。その後堀1もほぼ完全に埋め戻され、石垣1だけが生き残り、大名屋敷の石垣付き段差境場となり、江戸時代の伏見城廃城時に姿をのこしながら廃絶するものと理解している。石垣1の構築時期に関しては、隠居城の後の指月城築城期間中の内でも後半の聚楽第の破却と伏見への部分移築の頃と考え

ている。破却物なども加えて本丸等の裏となる東側内堀とその東側高の造作の手直しを進める指月城の最終改築の頃と見ている。石垣1が堀1の下部にまで達していない理由に関しては、秀長築城とされる大和郡山城の内堀の西～北辺や、時代が指月よりは少し下る北近江の彦根城の内堀などにも残っている、いわゆる鉢巻石垣として構築されているとみている。鉢巻石垣の例は、信長が室町十五代将军足利明輝のために築城したとされる京都の



第30図 鉢巻石垣と腰巻石垣の断面模式図

上京区の旧二条城（天文元年、1569年）にも見られ、この例の場合犬走りが付き、下部に腰巻石垣を持っている所も確認されている。なお、旧二条城の石垣には、石仏・五輪塔・墓石等各種の石造物が多用されていた。本調査後の市保護課による補足調査で腰巻石垣は確認できなかったので、鉢巻石垣と、犬走りも若干不明瞭な状態で、中下部を工法面で短期間で仕上げとしたものとも考えている。しかし、この見方が絶対的解釈と理解とは考えていないが、可能性の高い見方の1つとして考えている。堀1の掘り下げ調査の過程と断面図の様相からも、現段階ではこの解釈が可能との立場をとっておく。石垣1の東側の堀1あるいは谷埋土から出土する金箔瓦については、隠居城から指月城の前半段階に位置付けることも出来るだろう。いずれにしても、堀1を含む堀から自然の谷地形埋土全体にセクションが残せる規模の調査により、より妥当性の高い理解を得る必要があるだろう。

以下では、検出した石垣と他の遺跡で検出されている同時代あるいは若干前後する石垣の比較と検討を加えて、さらに石垣の石材についても若干言及しておく。

(6) 石垣石材の大きさ、石の種類、間詰石等について

ここでは、まず石垣に使われていた主石材の大きさ（法量）や間詰石等について記し、次に主石材の種類について記し、石材の産地について触れる。そして最後に、織豊期の城郭石垣の発展の流れのなかで当調査地の石垣を考える。

主石材の大きさと間詰石 石垣の主石材とは、石垣を構成する基本材となっている大石・中石をいう。大石間の隙間にかまされている小石は間詰石と称している。間詰石は10cm大から20cm大程の小石を使う例が多いが、前後の数cmから30cmを超えるものもある。主石材が大きくなれば大きい間詰石も増える。間詰石は主石材を積み上げていく過程で補助的に必要な小石であり、積み上がり後には不必要になるものも少なくないが、大半は積み上がり後も残される例が一般的のようである。なお、石垣主石材の奥とその奥の掘方壁の間には裏込めと称される間詰石と同等かそれ以下の小石が大量に込められてクッション材的や水の通りの確保がなされている。また、今回の石垣1の裏込め内には一定の法則によるのか、大石・中石が単独あるいは並べて据えられていた。類例がありそうだが追究は今後としておく。ここで主題からは外れるが、石垣1・2の掘方には堆積岩の小石が大量に入れられていたが、遺物の出土は皆無であり、遺物からの構築時期の推定はできなかった。

主石材の大きさは表面の横縦さらに奥行きで立方体的に示すのがより良いとは考えているが、ここでは表面における横幅最大長を主に示し、縦幅については補助的に使うことがある。間詰石は数を数えて主石材1個について何個使用されているか算出しており、その数値を補助的に示しておく。勝龍寺城のものは、縦幅についてもグラフで示したが、表面で見てそれぞれの主石材は長い方を横に置いて積み上げることがこの組方では基本のようだ。

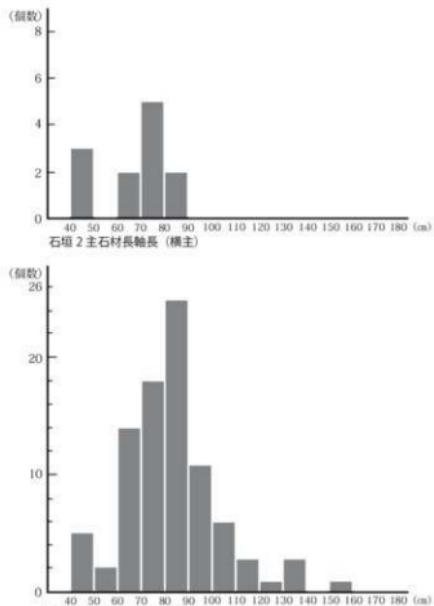
当調査地の堀1の東側の石垣1及び西側の石垣2の主石材の大きさは第31図にヒストグラムとして示した。石垣1は80cm台のものを中心に60cm台から90cm台程度の大石が主体

を成している。40cm台50cm台の小振りは少ないが逆に100cmあるいは150cmを超える大石が含まれている点は注意される。原位置を移動していたが石垣1等に使用されていたが堀内等への転落石などもほぼ同じ大きさの大石である。石垣1の大石間の間詰石は、10cm大から20cm大のものが中心である。主石材が0段あるいは1~2段目しか残っておらず、間

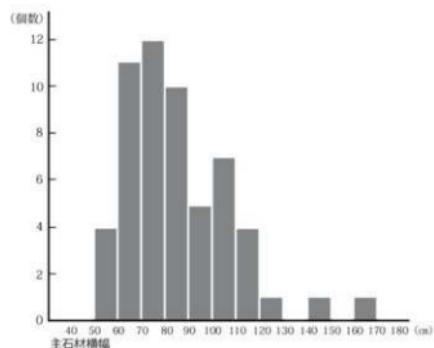
詰石の残存状況はよくない。石種は堆積岩が主体である。主石材1個に対する間詰石率は推定石を入れずに、3.9個と約4程である。

石垣2は資料数が少ないので等価な評価は避けるべきだろうが示しておく。40cm台の小振りを含むが70cm台を中心に60cm台から80cm台の大石が中心的ようだ。石垣1と比べると少し小さい方へ中心がずれるが、資料サンプル数からは石垣1とほぼ重なり、同じくらいの大石を主石材とした石垣と見てよいだろう。石垣2の間詰石は多くは地震で落石しており、堀内では間詰石ただどう小石を複数確認している。隙間が残っている場合には埋める小石を推定しており、間詰石の総数に推定石を入れている。石垣2の間詰石率は2.5個程度であった。上位部が残っていれば石垣1に近い数値と思われる。以下では比較資料を若干記す。

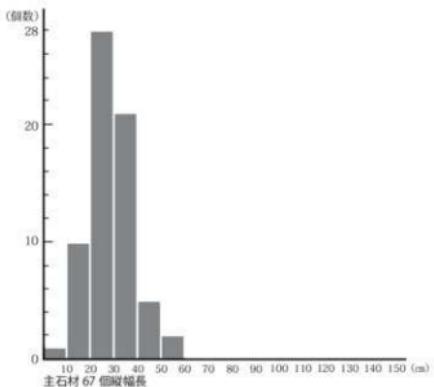
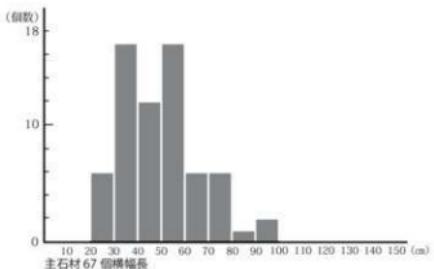
当調査地の北西近接地で2016年に関西文化財調査会（代表：吉川義彦）が行った指月城推定城内での調査によって発見された石垣は、30cmから50cm台の中・中大石も少なくないが、60cmから80cm台あるいは100cmを超える大石も含まれているようであり、当調査地の石垣とほぼ



第31図 当調査地検出石垣主石材法量グラフ



第32図 聚楽第石垣 SW105 主石材法量グラフ

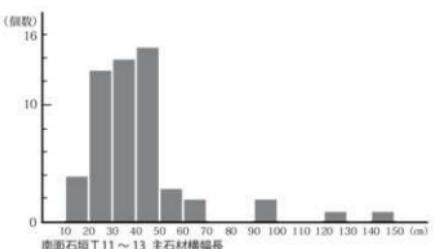


第33図 長岡京市勝龍寺跡北門石垣 SX264
(1560年～1570年代) 主石材法量グラフ

であり、かなり高い数値ではある。永禄12年（1569）に足利義昭（室町15代將軍）のために信長が築城した、通称旧二条城の石垣は、主石材等に石仏や墓石等の石造物を多用したことでも有名である。この城の石垣の主石材は、30cm前後から40cm台くらいの中石が中心的で、50cm台から70cm台くらいの大石も少なからず含まれている。石垣にもよるが、抜けていた

分の推定石を入れて3～5個程であった。時間的に少し古いこの二つの城の石垣主石材は後に示す織田期の天下人系の城郭石垣主石材より小振りの中石～中大石程度が中心である。

信長が天正7年（1579）に築城した近江の安土城は、石垣を多用した近世城郭の一定の完成領域に達した先駆的城郭である。グラフを提示で



第34図 安土城主郭南面石垣 T11～13 主石材法量グラフ

同様とみられる。堀底から大きく立ち上がる大石利用の指月城内の石垣とみてよいだろう。間詰石は多用されており率的には4～5個以上とみられるが、確定は報告書を待ちたい。一点の疑問は最上位石を除くと、主石材・間詰石ともに落石がないよう見える点である。地震に被災しているはずだが？である。

細川藤孝が永禄11年（1568）から改築した長岡京市の勝龍寺城の北門から入った西側石垣（東面）は発掘当初穴太の石工長老が来て穴太積みと評したことでも知られている。この石垣の主石材は30cm台から50cm台の中石的なものを中心に、少し小さい20cm台から、大きい60cm台から90cm台ぐらいのものが組まれていた。主石材間には多量の間詰石が組み込まれていた。この石垣では主石材は67個使用されており、間詰石は354個まで数えた。間詰石率は5.3個

きたものは少ないが、それ以外のものも含めて全体的にみると、主郭関係の石垣でも30cm台から50cm台くらいの中～中大石クラスが中心的にみえる。しかし、黒門等メイン通路関係では、60cm台から90cm台の大石も多く組み込まれており、さらに100cmあるいは150cmを超える大石もたくさん組み込まれている。最初とはいって天下人の城郭らしく大型石材を多用する方向性はすでにはっきり示している。間詰石が多用されている体部の主体を成す石垣では、もちろん石垣によって異なるが、主石材1個につき3～5個程である。

天正11年（1583）から始まる秀吉の大坂城の石垣の主石材は、少し大きくなるが40cm台から60cm台程の中大石が中心的なようであるが、70cm台から90cm台の大石も含まれている。大坂城の石垣が多く発見されれば100cmを超す大石例も数多く確認できるようになるだろう。詰ノ丸の東面と南面の石垣で数えられる範囲で数えた数値を示す。南面分は主石材が64個間詰石が212個であり、主石材1個あたりの間詰石率は約3.3個程、東面分は主石材75個で間詰石267個であり、間詰石率は3.7個程となる。実際には現場で数えると数値は動くが大勢的には十分目安になる数値であろう。しかし、間詰石の多用を含めて、主石材の大きさも安土城側に近く、割り面のものも少なく自然石の多さを含めて、織豊期の石垣のなかではやはり古相を持つものである。

天正14年（1586）秀吉が京内に築城した聚楽第の石垣主石材は60cm台から80cm台程の大石が中心的であり、そこに50cm台が少し、90cmから140cm台くらいの大石も多くくなっている。さらに150cmを超える大石も一定含まれている。間詰石は多用されているが、主石材は中心的サイズのものが大石化して、それよりさらに大きな超大石とでもすべきものまで含まれているので間詰石も大きなものも少なくない。大きさ的には、天下人秀吉の城として完成領域に達した感はある。慶長初め頃から始まる大坂城の拡大においては、さらに大石の多用は進むようであるが実態理解は資料の増加を待ちたい。間詰石の主石材に対する率は、3個前後の数値である。主石材の残り方も良くないので、上位の残る石垣が発見されればもう少しは増えるだろう。

主石材の大型化は織豊期の天下人の城郭においては確実に進行しており、聚楽第から伏見城でかなり大石主体レベルに達している。当調査地の石垣1・2とも大きさ面からも天下人秀吉の城郭の石垣といえる。仮に石垣1の築造が慶長期に下っても伏見指月城という秀吉の石垣に使われていた石を再利用していると理解される。主石材の大型化と場所によるさらなる超大石化は、石垣の石材の大きさや高さが天下人の権力の強さや威厳の大なるを示す基本要素となっていたからだろう。徳川の江戸城天守台などで大きさも極みに達するようだ。江戸城ではその大きな主石材は、面もきれいにはつて仕上げ加工されており、美しさが際立ったものとなっている。積み方も接面積み（切込ハギ）的となっている。

なお、間詰石は、石垣の残存状況の影響が大きく、確定数値で論じられない。しかし、概略的には織豊期といえる永禄年間の1560年代末頃から、1590年代前半の文禄あるいは慶長初年段階頃まで、近江を含む近畿中央部の天下人の居城を中心とした織豊期の城郭の石垣は、



第35図 石垣2写真

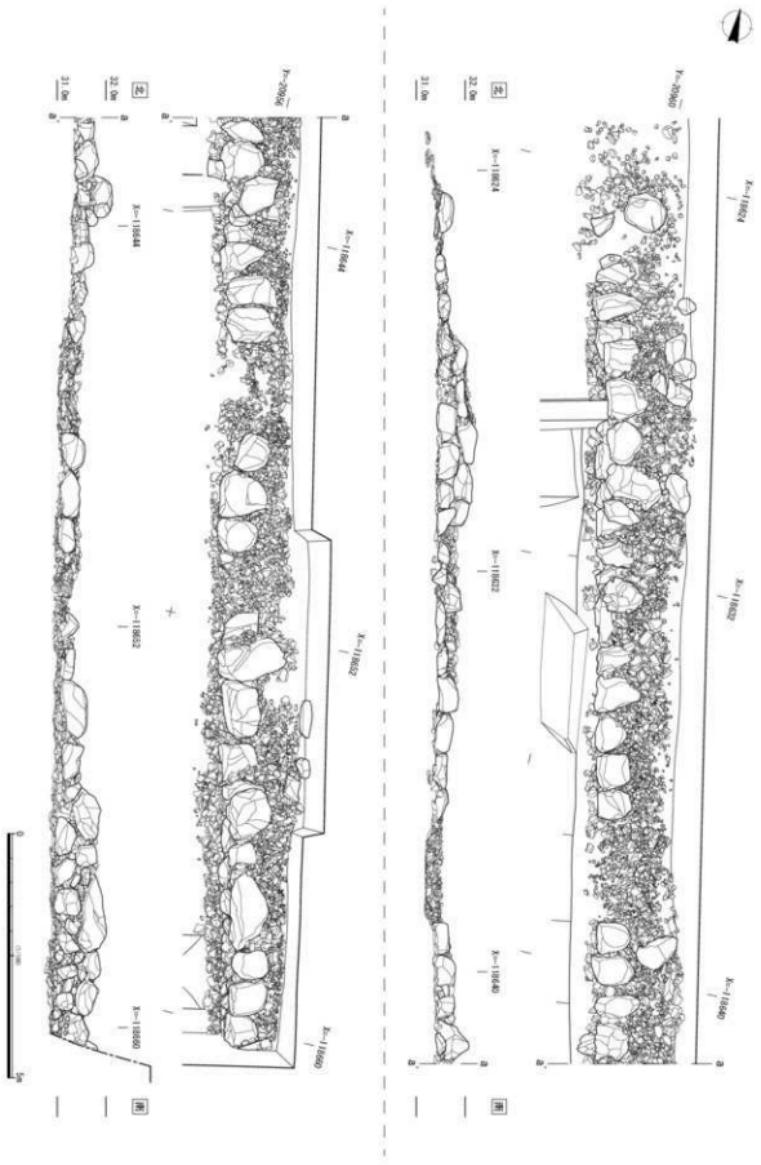
第4表 石垣2石材観察表

番号	用途	段位	原位置	石種記号	石種名称	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	長軸方向	奥下り(cm)	備考
西1	主	中～下	ほぼ保	QP*	石英斑岩	84	40		平行		
西2	主	中～下	ほぼ保	QP*	石英斑岩	78	35		直交		
西3	主	中～下	ほぼ保	QP*	石英斑岩	35	15+		直交		
西4	主	中～下	ほぼ保	QP*	石英斑岩	64	39		平行		
西5	主	中～下	ほぼ保	QP*	石英斑岩	78	44		平行		
西6	主	中～下	ほぼ保	QP*	石英斑岩	48	44		平行		
西7	主	中～下	ほぼ保	QP*	石英斑岩	70	57		平行		
西8	主	中～下	ほぼ保	QP*	石英斑岩	73	52		平行		
西9	主	中～下	ほぼ保	QP*	石英斑岩	60+	60		平行		失火あり
西10	主	中～下	ほぼ保	QP*	石英斑岩	75	13+		平行		墨底有り
西11	主	中～下	ほぼ保	QP*	石英斑岩	86	13+		平行		墨底有り
西12	主	中～下	ほぼ保	QP*	石英斑岩	20	16		直交		
西13	主	中～下	ほぼ保	QP*	石英斑岩	16	15		直交		
西14	主か元上か	移	QP*	石英斑岩	40+	20		直交		墨石	
西15	主か元上か	移	QP*	石英斑岩	40+	30		直交		墨石	
西16	主か元上か	移	QP*	石英斑岩	72+	35		平行		墨石	

*間詰石の多くは抜け落ちている。残っている間で十数個が落ちたと推定可。塗内が生だろう

間詰石を多用するタイプが中心であり、期間を通じてでは若干少なくなる傾向は認められるが、大きな減少傾向は示してはいないと見てよいだろう。主石材が自然石主体から割石に少し加工石も加わり始めた程度の変化とみえる。基本的には間詰石を多用した主石材の接点積み（面積積み）からは大きく脱却していないとも見られるが、割り石の部分加工がより多く加わってきており、接線積み（打込ハギ？）的積み上げ方へ歩を進めていると見ている。

角石の積み方も算木積み化の方向へは進むようだが本格的切り石の加工石（六面調整の長方形加工石）が見られないことと関係しているようで、完成領域の算木積みは見られないようだ。秀吉の大坂城の石垣などの角石も算木積み近くにはなっているが、完成領域には達していない。ただ、高石垣化はこの時期は確実に進行しており、石組の技術改良過程の理解は



第36図 石塚1平面・立面図

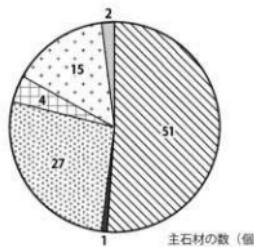
石垣の解体調査を増やしてさらに、追跡が必要だろう。主石材の種類と産地 石垣1、石垣2の石種は大きさを含めて石材の観察表（第5表～第7表）とグラフ（第37・38図）にまとめている。石材の種類が判るとその産地を知る大きな手掛かりとなる。産地が特定できれば、運搬等物流を考え理解でき、歴史上の人々の動きが可視化できるようになる。文字にして残っていない歴史的一面が見える。

東側の石垣1では、近年は深成岩の範疇で理解されている石英斑岩が半数強を占めている。次いでチャートや頁岩を中心とした堆積岩が残る大半を占めている。間詰石も両者がみられるようだが、堆積岩片の方が多數を占めている。西側の石垣2では、主石材のほぼすべてが石英斑岩であったが、間詰石には堆積岩が主なようである。

比較資料として聚楽第の報告を見ると、石垣SW105とされている石垣の主石材の石種は、花崗岩が主体であり、全体の83%強を占めており、その他ではチャートと砂岩などの堆積岩系が10%程度である。残る10%弱の内では、石英斑岩が4%強、ひん岩他が合わせて3%である。同じ京都の秀吉の城とはいえ、聚楽第と伏見では石種が大きく異なる。

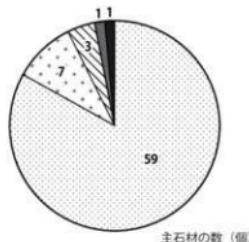
参考的には、勝龍寺城では西山（丹波）山系の堆積岩が主体のようである。安土城や彦根城など、湖東の城では、主に溶結凝灰岩（湖東流紋

石種記号	石種名称	個数
QP	石英斑岩	51
QP-GNCR	石英斑岩or片麻状花崗岩	1
SH	頁岩～粘板岩	27
SH-CH	頁岩～粘板岩orチャート	4
CH	チャート	15
HF	ホルンフェルス	2



第37図 石垣1と転落石主石材石種グラフ

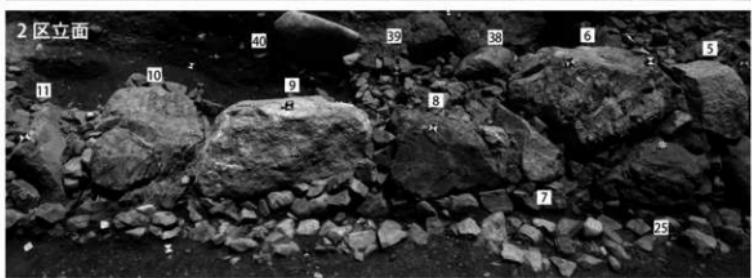
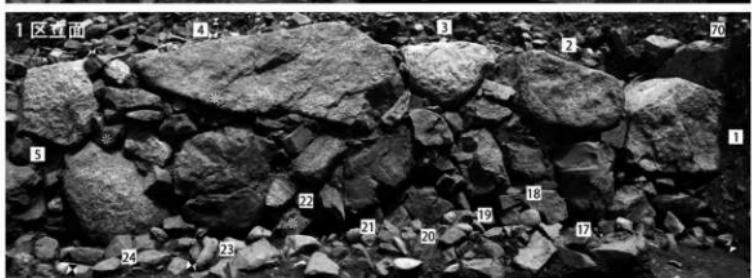
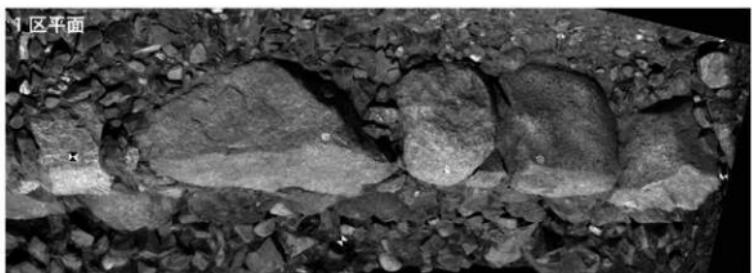
石種記号	石種名称	個数
GR	花崗岩	59
CH	堆積岩(チャート)	5
SS	堆積岩(砂岩)	2
QP	石英斑岩	3
PO	ひん岩	1
GPH	文象斑岩	1



第38図 聚楽第石垣SW105 主石材石種グラフ

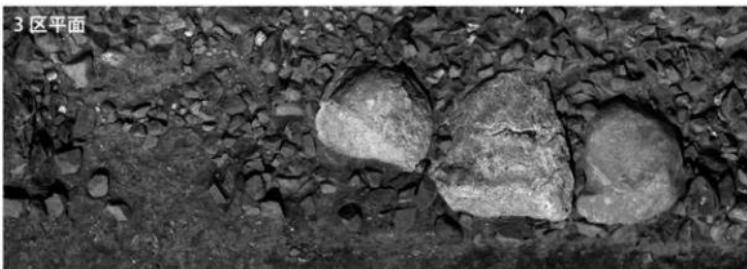


第39図 石垣1石材
掲載写真区分図

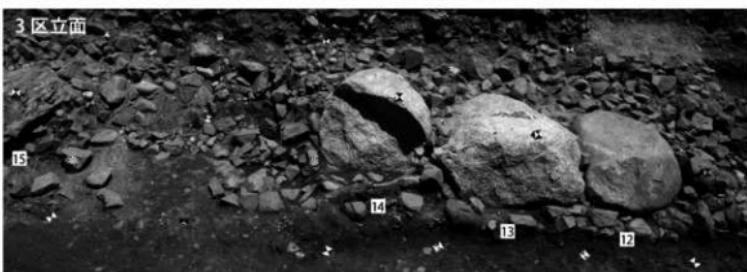


第40図 石垣1平面・立面写真(1・2区)

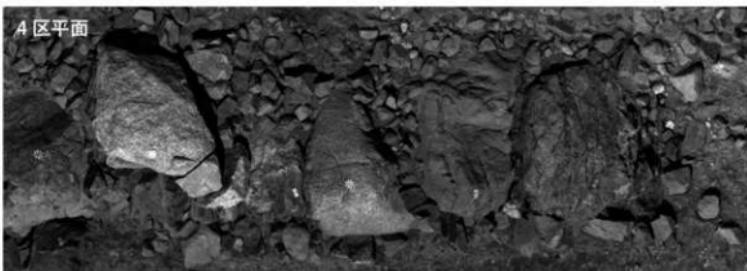
3区平面



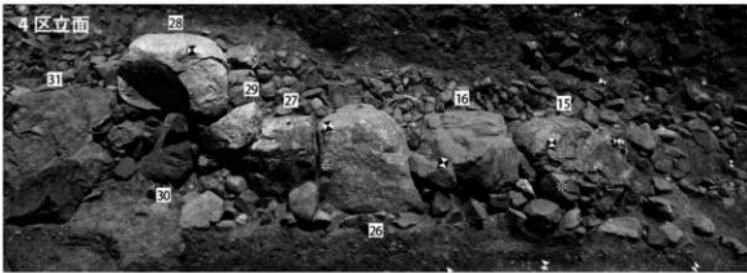
3区立面



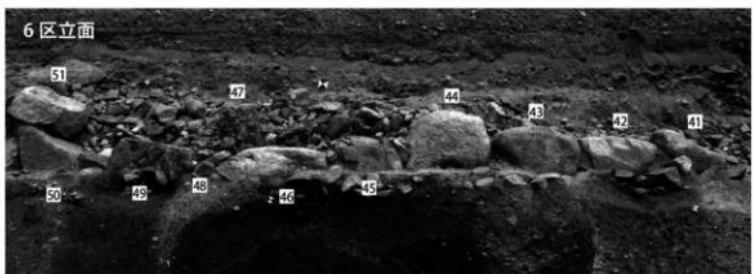
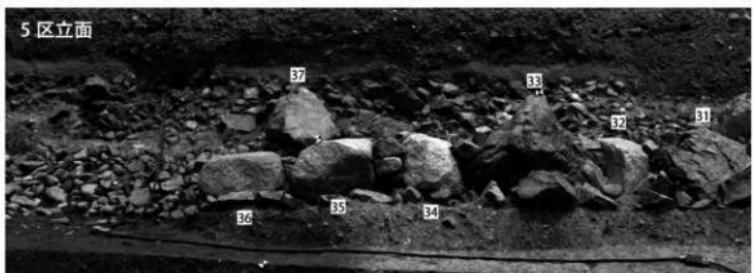
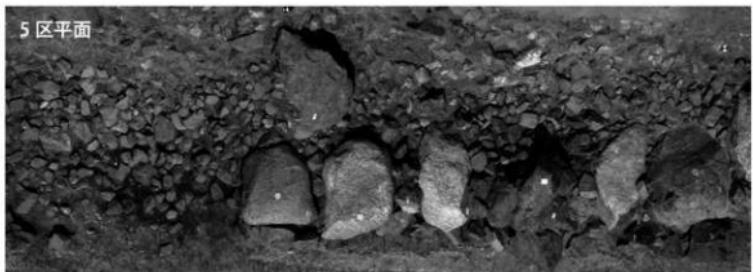
4区平面



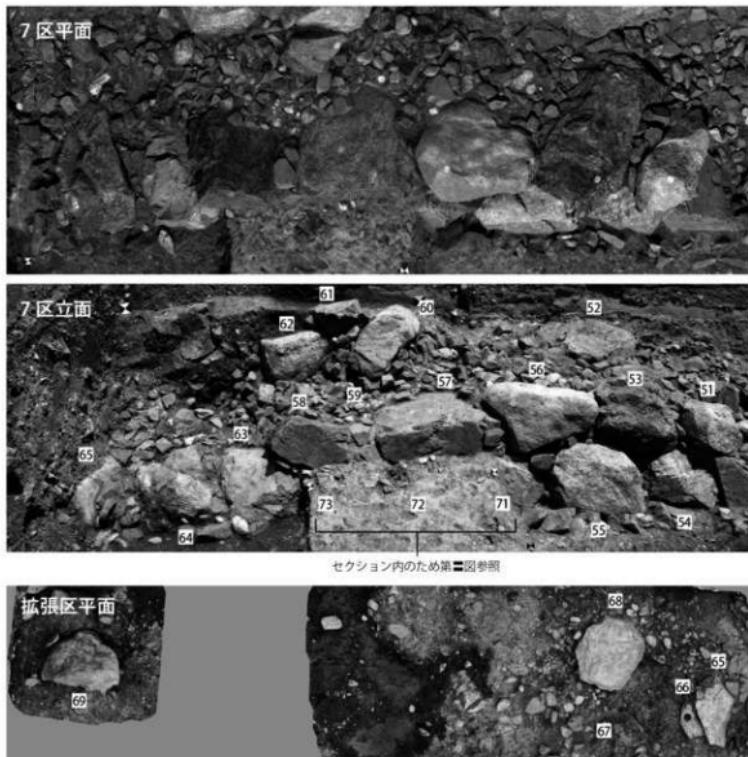
4区立面



第41図 石垣1平面・立面写真(3・4区)



第 42 図 石垣 1 平面・立面写真 (5・6 区)

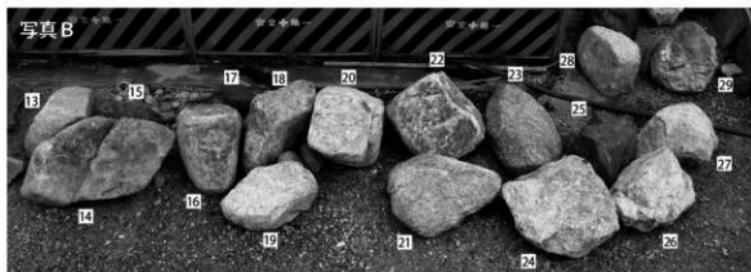
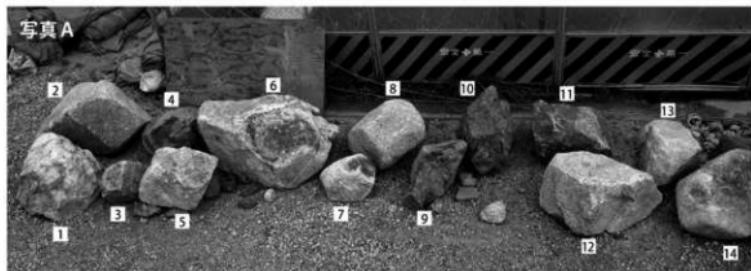


第 43 図 石垣 I 平面・立面写真 (7 区・拡張区)

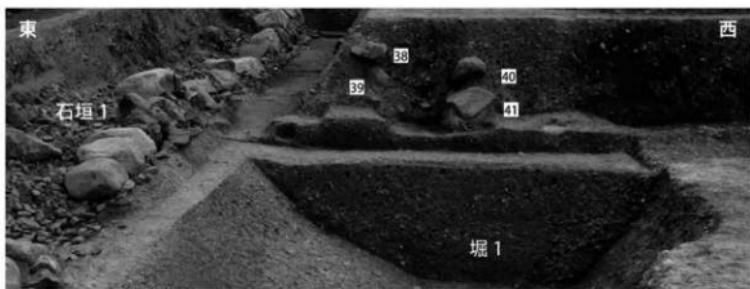
第 5 表 石垣 I 石材観察表

番号	用途	段位	原位置	石種記号	石種名称	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	長軸方向	奥下り(cm)	備考
東 1	主	1か	保	QP	石英斑岩	70	55	45	平行		穴穴あり
東 2	主	2	保	QP	石英斑岩	100	70	40	斜行		
東 3	主	2	保	QP	石英斑岩	75	50	35	直行		
東 4	主	2	保	QP	石英斑岩	150	50	45	平行		
東 5	主	2	保	QP	石英斑岩	65	45	45	直行		
東 6	主	2	保	CH	赤黒白チャート	105	80	55	直行		
東 7	主	1	保	QP	石英斑岩	85	45	35	直行		
東 8	主	1	保	SH	真岩～粘板岩	80	75	50	平行		
東 9	主	1	保	QP	石英斑岩	125	65	55	平行		
東 10	主	1	保	SH	真岩～粘板岩	130	70	35	直行		
東 11	主	1	保	HP	ホルンフェルス	85	45	45	直行		11～12固、36粒塊
東 12	主	1	保	HP	ホルンフェルス	80	70	40	直行		
東 13	主	1	保	QP	石英斑岩	100	95	90	直行		
東 14	主	1	保	QP	石英斑岩	80	70	60	平行		14～16固、2～3石程塊
東 15	主	1	保	CH	灰白チャート	115	70	40	直行		

番号	用途	段位	原位置	石種記号	石種名称	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	長軸 方向	奥下り (cm)	備考	
東 16	主	1	保	QP	石英斑岩	110	60	35	直行			
東 17	主	1	保	SH	頁岩～粘板岩		40	50	不明			
東 18	間詰		保	QP	石英斑岩		21	21	不明			
東 19	主	1	保	SH	頁岩～粘板岩		33	40	不明			
東 20	間詰		保	SH-CH	頁岩～粘板岩orチャート		28	22	不明			
東 21	主	1	保	SH	頁岩～粘板岩		45	55	不明			
東 22	間詰		保	GNGR	片麻状花崗岩		30	30	不明			
東 23	主	1	保	CH	チャート		50	60	不明			
東 24	主	1	保	QP	石英斑岩		55	50	不明			
東 25	主	1	保	CH	チャート		80	45	不明			
東 26	主	1	保	QP	石英斑岩	85	62	60	直行	18		
東 27	主	1	保	CH	チャート		65	51	34	直行	5	
東 28	主	2	保	QP	石英斑岩		95	75	30	斜行		
東 29	間詰		保	QP	石英斑岩		36	31	21	直行		
東 30	主	1	保	SH	頁岩～粘板岩		32	32	不明			
東 31	主	1	保	SH	頁岩～粘板岩		94	85	47	直行		
東 32	主	1	保	QP	石英斑岩		90	45	35	直行		
東 33	主	1	保	SH	頁岩～粘板岩		78	70	70	直行		
東 34	主	1	保	QP	石英斑岩		95	43	37	直行		
東 35	主	1	保	QP	石英斑岩		88	57	45	直行		
東 36	主	1	保	QP	石英斑岩		68	58	35	直行		36-41層、26種類
東 37	裏込		保	CH	チャート		94	62	38	斜行		
東 38	裏込		保	QP	石英斑岩		42	42	25			
東 39	裏込		保	SH	頁岩～粘板岩		45	43	35			
東 40	裏込		保	SH	頁岩～粘板岩		75	40	40			
東 41	主	1	保	QP	石英斑岩		70	65	35	直行		
東 42	主	1	保	QP	石英斑岩		68	67	35	平行		
東 43	主	1	保	QP-GNGR	石英斑岩or片麻状花崗岩	73	63	43	平行			
東 44	主	1	保	QP	石英斑岩	92	70	50	直行			
東 45	主	1	保	SH-CH	頁岩～粘板岩orチャート	75	56	30	直行			
東 46	主	1	保	QP	石英斑岩	96	34	30	平行			
東 47	主	2	保	CH	チャート		80	70	45	直行		
東 48	主	1	保	CH	チャート		60+	35	45	直行		
東 49	主	1	保	SH	頁岩～粘板岩		70	48	35	直行		
東 50	主	1	保	SH	頁岩～粘板岩		65	60	40	直行		
東 51	主	2	保	QP	石英斑岩		80	43	36	直行		
東 52	裏込		保	QP	石英斑岩		80	45	30	平行		
東 53	主	2	保	SH	頁岩～粘板岩	115	70	50	直行			
東 54	主	1	保	CH	チャート		70	50	40	直行		
東 55	主	1	保	QP	石英斑岩		80	72	50	直行		
東 56	主	2	保	QP	石英斑岩		80		45	直行		
東 57	主	2	保	SH	頁岩～粘板岩		85	80	30	平行		
東 58	主	2	保	SH	頁岩～粘板岩		73	66		直行		
東 59	裏込		保	CH	チャート		45	32	12			
東 60	裏込		保	QP	石英斑岩		50	52	35			
東 61	裏込		保	SH	頁岩～粘板岩		52	40	38			
東 62	裏込		保	QP	石英斑岩		47		38			
東 63	主	1	保	SH	頁岩～粘板岩		80	68	40	直行		
東 64	主	1	保	CH-SH	チャートor頁岩～粘板岩	98	52	35	直行			
東 65	主	1	保	QP	石英斑岩	107	47	35	直行			
東 66	間詰	1	保	QP	石英斑岩		50	20	26	直行		
東 67	主	1	保	SH	頁岩～粘板岩		46	38	15	斜行		
東 68	主	1	保	SH	頁岩～粘板岩		83	78	36	直行		
東 69	主	1	保	CH	チャート		77	68	30	平行	20	
東 70	主	3	保	QP	石英斑岩						不明	
東 71	主	1	保	CH	チャート		70+	65	50	直行		
東 72	主	2	保	SH	頁岩～粘板岩		36	40	30	不明		
東 73	主	1	保	CH-SH	チャートor頁岩～粘板岩		37	35	35	不明		



第44図 転落石材写真



第45図 東区南壁転落石材写真

第6表 転落石材観察表

番号	用途	段位	原位置	石種記号	石種名称	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	長軸方向	奥下り(cm)	備考
上 1	移			QP	石英斑岩	130	60	70	不明		
上 2	移			SHか	頁岩～粘板岩か	103	73	55	不明		
上 3	移			QP	石英斑岩	56	30	40	不明		
上 4	移			SH	頁岩～粘板岩	92	50	50	不明		
上 5	移			QP	石英斑岩	68	33	50	不明		
上 6	移			QP	石英斑岩	130	90	70	不明		
上 7	移			QP	石英斑岩	48	32	32	不明		
上 8	移			QP	石英斑岩	85	70	53	不明		
上 9	移			SH	頁岩～粘板岩	68	58	40	不明		
上 10	移			SH	頁岩～粘板岩	84	50	58	不明		
上 11	移			SH	頁岩～粘板岩	71	53	33	不明		
上 12	移			QP	石英斑岩	90	60	50	不明		
上 13	移			QP	石英斑岩	77	43	34	不明		
上 14	移			QP	石英斑岩	115	75	40	不明		
上 15	移			CH	赤チャート	44	42	26	不明		
上 16	移			QP	石英斑岩	88	50	50	不明		
上 17	移			QP	石英斑岩	46	36	30	不明		
上 18	移			QP	石英斑岩	80	30	64	不明		
上 19	移			QP	石英斑岩	68	51	30	不明		
上 20	移			QP	石英斑岩	93	50	50	不明		
上 21	移			QP	石英斑岩	80	70	50	不明		
上 22	移			QP	石英斑岩	90	70	55	不明		
上 23	移			QPか	石英斑岩か	110	61	30	不明	花崗岩か	
上 24	移			QP	石英斑岩	72	70	48	不明		
上 25	移			SH	頁岩～粘板岩(砂)	59	45	42	不明		
上 26	移			QP	石英斑岩	80	50	47	不明		
上 27	移			QP	石英斑岩	85	52	45	不明		
上 28	移			QP	石英斑岩	63	60	47	不明		
上 29	移			CHか	チャートか	88	60	40	不明		
上 30	移			SH	頁岩～粘板岩	86	50	50	不明		
上 31	移			QP	石英斑岩	67	59	34	不明		
上 32	移			QP	石英斑岩	78	58	35	不明		
上 33	移			CH	青チャート	60	58	40	不明		
上 34	移			SH	頁岩～粘板岩	62	62	40	不明		
上 35	移			CH	チャート	106	60	45	不明	上29と似る	
上 36	移			SH	頁岩～粘板岩	70	53	35	不明		
上 37	移			SH	頁岩～粘板岩(砂)	46	46	35	不明		
上 38	移			CH	チャート	55	50	27	不明	北トレンチ南壁中の石	
上 39	移			QP	石英斑岩		35	28	不明	北トレンチ南壁中の石	
上 40	移			CH-SH	チャートor頁岩～粘板岩	70	40	38	不明	北トレンチ南壁中の石	
上 41	移			QP	石英斑岩	75	60	37	不明	北トレンチ南壁中の石	

岩)、大坂城は秀吉の頃は堆積岩と花崗岩が混在的であるが、慶長期に入つて以降の拡張期や徳川の大坂城では、圧倒的に花崗岩が中心となつてゐる。江戸時代に入つて以降のいわゆる近世城郭では、京都の二条城を始め、関西から西日本では花崗岩の石垣が中心的となつてゐる。石垣造りの城郭の普及が瀬戸内の花崗岩の生産を飛躍発展を促すようである。以降花崗岩は西日本では一般的にも建築・土木に多用される。

伏見指月減少し拡大しても木幡伏見城で多用されたとみられる石英斑岩は、京都を始め他地域では石垣にほとんど使われてゐないようである。主石材を産地の面から見ると、伏見城関係の石英斑岩は現在の研究からは、京都府山科の音羽から府県境を大津側に越えた滋賀県大津市藤尾の山の石切場と理解してよいと考えている。又、ならぶ堆積岩は醍醐から宇治の山から切り出されたものと推測して大過ないと思われる。山科から宇治は旧国名では宇治郡であるが、宇治郡の東側山麓の石英斑岩・堆積岩の石切場は、指月を始めとする伏見の秀吉の城の石垣用石材を採取するために開発されたものと考えられる。なお、先行した聚楽第の花崗岩は北白川の花崗岩帯からの採取石が中心のようであり、瀬戸内産のものはまだ入っていないとみている。同第の堆積岩は北山山系のものだろう。

天下人やそれに追随する諸大名のいわゆる近世城郭の発展は、石垣の多用によって大量の石材確保が前提となるが、この膨大な石材ニーズは、単に石切場の確保という単純な対応にとどまらず、切り出しや加工技術、運搬、集石、スムーズな供給等、現代風には石材の生産と物流体制全般を発展させる。ある意味の産業革命的一面を持っており、石垣に限らず瓦や材木、他各種の産業を中世的世界から近世的世界へと変えていく。石垣に限れば、瀬戸内の花崗岩の切り出し運搬を含む産業的発展は、天下人や大名の城郭造りの発展が、大きな力となつてゐると考えられる。山科石=石英斑岩は変化の本格化の走りではあるだろうが、水運と結びつけた大きな発展が望めなかつたから江戸時代に入ると衰退していくようで、歴史からは早く姿を消していく。

信長や秀吉の城造りは、楽市楽座とその舞台の城下町によって商工業の発展を促すだけではなく、城造りと城下町造りそのものが現代の大公共事業であり、産業・文化の発展の大きな契機なのだろう。出来上がりれば上下のたくさんの人達がそこで集住し、生産と消費の集中化により都市的な物流経済が大きく発展を遂げていく。地方の大名城郭とともにう城下町もその地方にとつては地域経済の大きな起爆剤だっただろう。

織豊期の城郭石垣 石垣の主石材間にかまされた小石を間詰石と呼称しているが、この時代の間詰石とその様相は、近江を含む近畿中央部に展開する織豊系城郭石垣の表面の型式特徴という一面を持つてゐる。もちろん間詰石の多用とその結果は石を積み上げる工法を反映している点は言を要さない。しかし、表面の型式特徴の共通性をもつて、工法の同一性やその工法を使う工人集団が同一系統であるのかまでは言及できないが、それらの事を理解していく正しい入口には立てるだろう。型式学的観点を擲擲あるいは否定的に言うだけではなく、入り口としての型式学的観点を遺構にも及ぼして見るべきだろう。その先に技術論的理解を

進めるべきだろう。

また、一点だけ付け加えておくと、京都市営地下鉄烏丸線の発掘調査で発掘された推定旧二条城や長岡京市の勝龍寺城の石垣は、1970年代から80年代の発見当時、大津市穴太在住の穴太石工長老が実見してくれて、穴太積みでいいと言い、構築技法の特徴、その結果の石垣の構造理解の指導もいただいた。そして私達は、今ほど整備されていない安土城址や觀音寺城址まで足を運んで、残存する石垣を観察に行った。これらの城址の石垣表面の間詰石を多用した様相は、石材の差を越えて、基本的には共通性が高いと思ったし、今もそう見ている。後年安土城址は、主郭に限らず周辺大名屋敷の石垣等の調査も進み、印象の異なる石垣も存在していると報告されているが、主体は小石の間詰石を多用し、表面とともに主石材全体の法を強めに取り、個々の主石材では表面に出す面は、小さめの面で、奥行きを長く取り、奥を下げる基本工法をとっていると解される。積み上がっていくと下段の間詰石は抜けるものも出てくる（しかし全体に残すのもまた基本）。最下段には奥行きに直交して松材の胴木をかますこともよく使うらしい。旧二条城の石垣では松の胴木が残っていた例もあった。



当調査地 石垣 1



聚楽第石垣 SW105

【京都府理成文化財研究センター 2013
『京都府遺跡調査報告集第156編』】

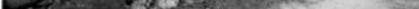


指月城北内堀東面石垣（関西文化財調査会 2016年度調査）

第46図 参考石垣資料（1）



長岡京市勝龍寺城北門石垣 SX264
【長岡京市埋蔵文化財研究センター 1991 「勝龍寺城発掘調査報告」】



城めぐりチャンネル (<https://akiou.wordpress.com/2015/06/21/azuchi-p4/>)



大阪市 HP (<https://www.city.osaka.lg.jp/hodoshiryo/kyoiku/0000525851.htm>)

第 47 図 参考石垣資料（2）

近年の安土城の発掘調査や研究によって、桃山時代に穴太の石工集団や穴太積み等の言葉は存在していなかったとの意見も出てきている。安土城の石垣構築に別系統の工人集団が参加していくても良いと考えるし、穴太とある文献史料が江戸時代中期以降であるので、穴太の石工集団が桃山時代には存在していなかったとの考えも立場を変えれば理解できる。しかし、地元に残る伝承や江戸時代中期以降であっても坂本の穴太に比叡山系の石垣工人が存在していたことは事実だろうし、彼らが穴太積みと称する石垣は現在にも伝わり、同じ系統の技法は桃山時代あるいは室町時代最末期まで遡ることも事実である。しかしこれを全体を整合的に理解出来ないので、一方的には使用しないが、江戸時代中期以降は穴太積みと称されてきた石積工法による石垣とは使う。

調査地の堀 1 の東側石垣（石垣 1）、西側石垣（石垣 2）ともに、間詰石が落ちてしまっている例も多いが表面に今も残る間詰石や落ちてなくなった隙間等からは石垣構築時に、間詰石を多用し、完成後にもその大半は抜くことなく残すタイプの石垣である。主石材の据え方も表面は小さい面を横長に据えて、奥行きが最も長く奥を下げて積み上げている。ただ、基底石下は胴木を使っておらず、小さめの板石を敷いて下げ沈み止めとしていた点は旧二条城などとは異なる。類似する表面の型式特徴を持つ石垣は、勝龍寺城や旧二条城、安土城、豊臣大坂城、聚楽第に認められる。これらの石垣は表面の様相にとどまらず、構築技法も基本的に共通しており、当時穴太衆（石工集団）と言われていたかは知らないが、後代穴太積みと呼称されるようになった石積工法で造られており、私は伝承的に言われている穴太積み石垣と仮称的に理解しておく。少なくとも勝龍寺城以降伏見指月城までは同一系統の石工集団が関わっていたと解して良いと考えている。伏見では指月城が地震で倒壊後に再築される木幡山（伏見山）伏見城を含めて慶長初期頃までは同一型式にまとめられる石垣が主流であったと考えている。石垣の工法や仕上がりが割石と加工石の大量導入と新工法の導入等で大きく様変わりしてゆくのは、関ヶ原の合戦も終わり、半島から帰国した諸大名が本格的な領国経営にのりだす江戸時代初期以降の近世城郭の築城ラッシュ期である。石垣は見た目にも大きく変わっていく。当調査で発見した石垣 1、石垣 2 ともに織豊期の天下人の城郭の石垣に主体的に用いられてきた技法による石垣型式の最終段階のものである点は変えることのない評価と考えている。

3. 遺物

(1) 出土状況の様相

桃山時代から江戸時代前期前半頃の遺構面は近現代も掘削工事により削平されている部分が多く、全体的には残存状況は良好とは言えない。この影響か、調査面積に比して、遺物出土量は多くはない。

北区堀1の西側平地上や西区の土坑・ピット等、近世初頭頃あるいは以降の江戸時代の遺構等から出土している土器・陶磁器類は少量にとどまっている。東区や北区の堀1埋土の直上で、石垣沿いに形成されていた小ピット群や同堀1の埋土から出土している土器・陶磁器類も極少ないが、金箔瓦を含む瓦類はたくさん出土している。全体的にも、地区を問わず瓦類が多数を占めている。

主にグレーの粘質土が堆積していた小ピット群は、層位的には堀1埋土上面に形成されており、その上に化粧土がかぶり考古学的な見方からは石垣に切り勝つ関係である。出土遺物には土師器皿や焼締陶器類が少数と瓦類の小片が少数みられる。これらは、17世紀（江戸前期）に下るものはほとんど含まれておらず、文禄年間から慶長初頭頃、あるいはそれ以前に位置付けられるものが大半を占めている。石垣1の掘方上面では、遺物が採取されておらず、小ピット群からの出土遺物のみからでは、石垣1の形成上限年代が文禄か慶長初頭頃かの結論は得られない。

堀1埋土からは、土器・陶磁器類は極少ないが、金箔瓦を含む瓦類が多数出土している。破片の状況は、金箔瓦、くすべ瓦とともに小片からかなり大きな破片まで多様だが、少ないながら完形の丸瓦までみられ。近地点で壊れたものが、近い所に埋められたという印象である。出土量的には南区の西側から入れられたと判断出来る埋土内に含まれていたものが圧倒的に多数を占める。その中では瓦類がまとまって最も多く、金箔瓦類も同層からの出土が最も多い。金箔あるいは赤漆が残っていたものなどは全体で577点程出土しているが、その7割以上はこの南区の堀の西側からの埋土出土品である。

出土瓦類の種類別に見ると、平瓦や丸瓦や谷瓦など、飾り要素をもたせない機能性のみで形成されている瓦類には金箔瓦はまったく見られなかった。しかし、軒平瓦、軒丸瓦、輪違瓦、青海波瓦、菊丸瓦、棟瓦を含めた方形や丸形の飾瓦と言われているもの、加えて鰐瓦、鬼瓦など装飾的要素をもつ瓦類は、ほぼすべてが金箔瓦、あるいは赤漆の残存から金箔瓦であったと推定できる。金箔瓦の種類も増え輪違い瓦などにも及び、軒丸瓦、軒平瓦にもそれまでには見られなかつた無文のものが加わる。報告書上での比較に過ぎないが、天下人秀吉の城であり先行する大坂城や聚楽第より、飾瓦系における金箔率は圧倒的に高く、種類毎での計算では9割を超えるものがほとんどである。広義の意味での飾瓦系はすべて金箔を施して、天守を中心とした城全体を黄金色で飾り立てていたものと理解してよいだろう。

指月城は完成から倒壊までの期間が短く、金箔の残存率も最も高いと考えられるので、一概に断定的には言えないし、伏見山伏見城天守や本丸の様相を把握する必要もあるが、現在の資料状

況からは、秀吉の城における金箔瓦の使用率は指月城すでに最高潮に達していたようで、最も飾り立てる事を意図した城が指月城であった事を示している様相ともいえる。なお、金箔瓦は漆に赤を混ぜ接着剤とし、主に文様の凸面に金箔を押す。金色が赤味をおび、最も華やぎを放つ。金箔瓦類は伏見指月城を理解する上で、重要な物証であることは言を要しない。少量しか出土していない土器・陶磁器類の中に、指月城より以前の平安時代から中世にかけての小片少量化したものが混入している。この少量の古手の資料は古代末期から中世にかけて、丘陵上面に宅地的土地利用があった事を示している。古い時代の遺構は大規模な築城工事によって削平的ダメージを受け、内包していた遺物も小片化し拡散したものと見られる。小片少量の遺物も古い時代の指月の丘の歴史を示す、重要な物証であることには変わりはない。

(2) 土器・陶磁器

ここでは、図を掲載した土器・陶磁器類の個々の説明を主に記す。なお遺物観察表（第9表）は章末に付いている。

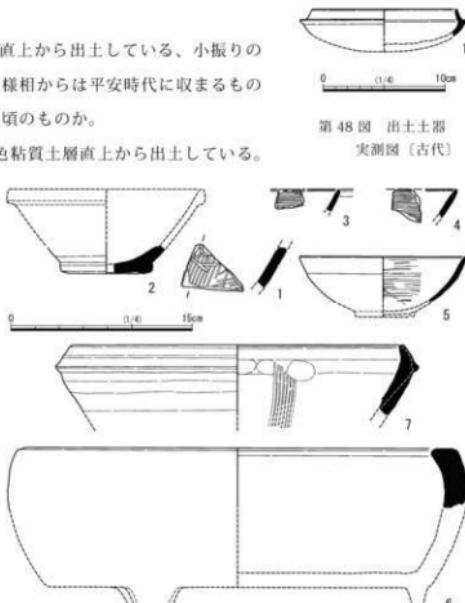
第48図の1は、東区堀1西側の遺構直上から出土している、須恵器环H身の口縁部小片である。推定口径は11.9cm、同受け部径は13.8cmである。体部の傾斜から器高はかなり浅くなっている。型的には、田辺編年のTK217の最新相あるいは少し後出するものであり、7世紀後半代のものと見ておく。

第49図の1は、東区堀1西側の直上から出土している、小振りの須恵器腹部小片である。タタキの様相からは平安時代に収まるものと見ている。丘の上に山荘があった頃のものか。

2は北区石垣1の西面沿いの、黄色粘質土層直上から出土している。

中国からの輸入白磁碗の底部片である。削り出し輪高台の形状や厚みからは、口縁部に太めの玉縁を持つものであろう。焼成は非常に甘く、橙色の陶胎である。平安時代後期でも12世紀後半代を中心位置付けておく。丘の上に御所の宮殿があった頃のものだろう。

3はGP13、4はGP76、5はGP38から出土している。いずれも北区石垣1の西端沿いに展開していたピット群である。3点とも瓦器の口縁部小片である。3・4の内面ヘラミガキは密より少し



第48図 出土土器 実測図〔古代〕

粗くなっている、外面にはヘラミガキが認められないので、13世紀から14世紀初めの鎌倉時代中から後半期のものと見ておきたい。

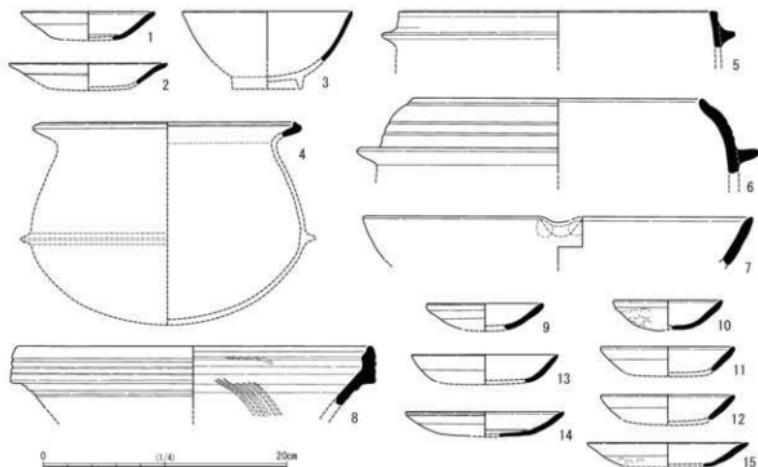
5は内面のみに間が広くなった暗文風のヘラミガキが施されている。推定口径は13.8cm程を測る、14世紀の鎌倉時代末期から室町時代前期頃に位置付けられると見ている。北朝側の御所があった頃のものか。

6は攪乱2から出土した古手混入品である瓦器火鉢片である。器表面に吸着させた炭素（黒色）は内面の1部にしか残っていない。原因は2次焼成であろうか。口縁の形状から、推定口径36.4cm程を測る大和産の丸形火鉢である。15世紀後葉から16世紀の室町時代後期頃のものであろう。

7は堀1の中層から出土した焼締陶器插鉢の口縁部片で、焼成状態や口縁形状から備前産ある。口縁部は三角形が上方へ少し発達し、外縁が縁帯状を呈するものとなっている。残存する1つの插目は8本か9本の櫛目で插目間の空き幅はかなり広い。型式的諸要素から15世紀後半頃に比定しておく。6の瓦器火鉢と7の備前産插鉢は、伏見の宮家の邸宅や関連する寺院が丘の上に建っていた頃の遺物である。

第50図の1・2は堀1最上層から出土している土師器皿Sである。1は推定口径11.0cm程、2は推定口径13.0cm程を測る。2点とも器壁は薄手感を残し、口縁内面に少し凹み内傾する端面が読み取れる。型式要素の状態からは、X期古の古相段階頃に位置すると見える。推定する実時間は1590年代前半頃前後である。堀1埋没時の下限を示す遺物と言える。

3は北区包含層から出土した中国明からの輸入染付碗である。推定口径14.0cm程を測る。体部外面下半に呉須による芭蕉文を描く。室町時代末期の16世紀代に中国明からの輸入品に類似



第50図 出土土器・陶磁器実測図〔安土・桃山時代〕

が見られる。

4は土師器裏形羽釜の口縁部であり、推定口径22cm程を測る。口縁部の成形・調整技法と結果形態や胎土等から大和産と見てよいだろう。16世紀後葉の桃山時代に比定しておく。

5は北区GP92から出土した瓦器羽釜の口縁部から羽根部を含む破片である。推定口径は26.2cm程を測る。外面は炭素を吸着させ黒色を呈する。胎土は少し甘く淡灰褐色から淡橙色である。羽根は萎縮して幅が狭くなり三角形の断面形状を呈する。15世紀末から16世紀初頃前後の楠葉産である。

6は北区GP44から出土した瓦器羽釜である。口縁部は内湾し、外面に2条の凹線を施してあり茶釜になる可能性が高い。底部は接合しないが同一個体の可能性が高い平底片があり、外面には使用痕であろうススが残っている。口縁端部の形態から河内北部から摂津産の可能性を考えている。室町時代末期から桃山時代前半の16世紀後半頃に比定しておく。

7は北区GP16から出土した瓦器鉢の口縁部であり小さな指で作り出した片口が付く。器表の炭素は焼け飛んでおり、器表面および胎土ともに淡橙色を呈している。口縁部の断面形態等からは大和産と見ておく。16世紀後半代に比定しておく。

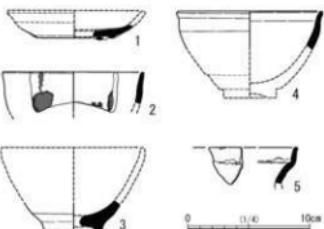
8は堀1最上層から出土した焼締陶器擂鉢の口縁部である。口縁部が上方へかなり発達して外面が幅広い縁帯状を呈し、そこに3条の凹線がめぐる。焼成は良好で堅く焼き上がって暗橙色を呈する。口縁部の型式特徴や焼き上がりの状態等からは、室町時代最末期から桃山時代前半頃の備前産擂鉢である。短期間ではあるが使用期間を見込んでおく。

9は北区P39から出土した土師器皿Sbで推定口径9.6cm程を測る。10・11・12は北区GP78から出土している。10は土師器皿Sbで推定口径9.0cm程、11は土師器皿Sで推定口径11.0cm程、12は土師器皿Sで推定口径11.0cm程を測る。13は北区P39から出土している土師器皿Sで推定口径12.0cm程を測る。14は北区GP26から出土している土師器皿Sで推定口径13.0cm程を測る。15は北区GP78から出土している土師器皿Sで推定口径13.2cm程を測る。

9から15は北区GP78を中心に類似したGP群から出土している京域主流派に属する土師器皿SbおよびSである。型式的特徴からはX期新の最新相からXI期古の古相段階の幅には収まるものと見ている。16世紀の80年代末期から90年代頃に比定しておく。

第51図の1は西区第1面直上から出土している、国産施釉陶器皿の底部である。少し緑味をおびた灰釉が施されており、形態等の特徴から美濃・瀬戸産小皿と見られる。

2は西区落込7から出土した鉄釉陶器塊である。濃い鉄釉をかけ流し文様風にしている。これも美濃・瀬戸産である。4は北区堀1から出土している、美濃・瀬戸産の鉄釉天目塊である。この天目塊は少し古相で16世紀後半代、1の灰釉陶器皿は16世紀後葉から17世紀初



第51図 出土陶器実測図
〔安土・桃山時代～江戸時代初頭〕

め頃、2の鉄軸陶器塊は16世紀末から17世紀前葉頃のものと見ている。

3は西区P5から出土した唐津の塊である。17世紀前葉頃のものと見ておく。5は南区東部地山直上面から出土した唐津の鉢であり、同じく17世紀前葉頃に比定できる。

第52図の1は南区第1面直上から出土している、土師器皿Sbの口縁片である。推定口縁9.9cm程を測り、口縁端部にススが付着しており、灯明皿に使用されていたものだろう。XI期新～ XIII期古の幅に收まり、17世紀中葉頃のものと見ておく。

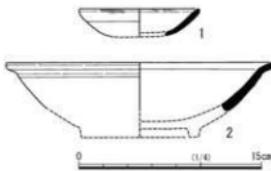
2は唐津の施釉陶器鉢か深皿だろう。推定口縁は22.0cm程を測る。内面は三鶴手の文様を施す。17世紀中葉から後半期の江戸時代前期後半頃のものと見ておく。

第53図の1は南区溝1から出土した肥前の染付碗である。口径10.1cm、器高5.5cmを測る。体部外面に草花文、内面見込みに小文様を呉須で描く。施釉は高台内を含めた全器表に施している。体部上端から口縁部が外方へ少し開いている。呉須の発色や全形状から17世紀後半頃から18世紀頃のものと見ておきたい。

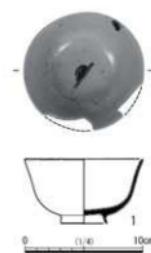
(3) 瓦類の概要

瓦類の出土様相 今回の調査で出土した遺物類は整理後にコンテナバット（約60cm×40cm×15cm大）にして、73箱程度である。土器陶磁器類（少數中世瓦含む）は2箱程、くすべ瓦に同じくくすべ瓦だが金箔を施した金箔瓦を含めた近世瓦類が合わせて71箱程となった。遺物全体では近世瓦類が97%程と高い出土率を占めていたことになる。金箔瓦類と関係する瓦類は一次点検の段階で完全に分離し、残存状態を保護する目的もあり、分類作業を加えた上で種類別の収納に切り替えているので、現状ではAランクの箱26箱の内22箱程となっている。71箱の内残る45箱はB・Cランクと扱っている。

金箔瓦を含む近世瓦類は、調査地全域から出土しているが、新しい遺構や包含層等から出土した桟瓦類等の江戸時代後期以降の瓦類は6箱程にとどまるので、近世瓦の大半は安土桃山時代に属するものであった。安土桃山時代の瓦類は、堀1埋土から出土したものが8割以上を占めている。堀1埋土のなかでも南区の堀1の西側から入れられた埋土からは、土器陶磁器類の出土量は他と同じく極少数にとどまったが、最も多数の瓦類が出土している。金箔瓦類も同理土層からの出土数が最も多い。金箔あるいは赤漆が残っており金箔が剥がれたことが判るもの及び関係性があるものなどは、調査地全体で577点程度出土しており、その内7割以上は、この南区の堀1の西側から入れられた埋土層からの出土品であった。なお、瓦類の出土遺構や土層については、実測図を掲載したものを中心に観察表に付記しており、参照されたい。



第52図 出土土器・陶器実測図
〔江戸時代前期〕



第53図 出土磁器実測図
〔江戸時代中期〕

出土した瓦の種類と金箔瓦率 今回の調査によって出土した瓦類は、平瓦・丸瓦などの機能目的のみを優先した機能瓦類と、(A) 機能性と装饰性を合わせ持つ瓦類、(B) 装飾的要素に魔除けの要素等を合わせ持つ瓦類、(C) 飾る目的を第一義として作られた狹義の飾瓦類など、(A)～(C)のそれらのすべての瓦類をまとめた広義の装饰系瓦類に大別される。

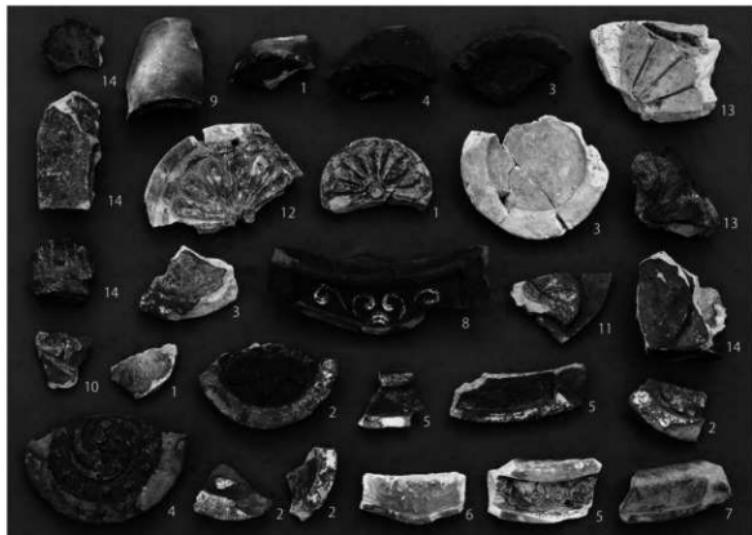
機能瓦類とした最も大量に出土している平瓦や丸瓦また同類だが少數派の谷瓦等では、金箔瓦は全く見られなかった。逆に装饰系と概括した瓦類は、ほぼすべてが金箔瓦あるいは金箔瓦であった可能性がある瓦であった。そのため装饰系瓦類は、その全体像の構成を理解する目的で、用途や使用箇所等によって中分類し、さらに形態や文様等の型式的諸要素を根拠として細別した。細別単位の名称等は既存の用語を準用している。細別単位の出土点数及びそれぞれの単位内の金箔やその接着剤の朱漆等が確認出来た個体数の全体に対する割合等は金箔瓦率として第8表に示している。中分類単位や全体分も同表に示した。(A)とした装饰系瓦類は、丸瓦と平瓦の軒先を飾る軒丸瓦と軒平瓦が主体を成す。文様によって軒丸瓦は桐文・菊文・巴文・ほとんど類例のない無文(日輪文)の四種に分けられる。軒平瓦でも、桐文・菊文・主に巴文に対応する唐草文や、同じく類例の少ない無文、と基本的には軒丸瓦と対応するように四種に分けられる。しかし、軒丸とは異なり軒平瓦は唐草文ながら一般的軒平瓦の瓦当と少し異形の、全形が滴水瓦風に似た滴水風の軒平瓦が其伴出土していたり、他に文様も菊と唐草が複合しているものなどもあり、かなり多彩となっている。理由は軒平瓦が軒丸と軒丸をつなぐ位置にあり、文様も地的に扱われ逆に多様性を増した可能性も考えられるが、後の課題としておきたい。滴水風については次で触れる。

平丸を問わずこれらの軒先瓦類の金箔瓦率は低いもので出土数に対して80%以上であり、高いものでは90%以上であり、100%のものまである。指月城の主要部の軒先瓦類は、すべて金箔瓦であった可能性が高く、事実そうだったのだろう。

(A) の範疇で位置付けられる熨斗瓦や、一面元々装饰的に作られているので(C)とも位置付けられる輪違い瓦や青海波瓦などは棟関係でまとめられる。これらはいずれも文様は持たず、小型の体



第54図 秀吉関係の金箔瓦



1. 菊丸瓦 2. 軒丸瓦桐文 3. 軒丸瓦日輪文(無文) 4. 軒丸瓦(三ツ)巴文 5. 軒平瓦菊文
 6. 軒平瓦桐文 7. 軒平瓦無文 8. 軒平瓦唐草文 9. 輪違い 10. 飾瓦方形劍花蓋文
 11. 飾瓦丸形桐文 12. 飾瓦丸形菊文 13. 鬼瓦 14. 軒丸瓦

第55図 出土した金箔瓦の主要な種類名称
(写真は巻頭図版1-2と同じ)

第7表 軒丸瓦・軒平瓦の文様の割合

軒丸瓦	126点	比率	軒平瓦	54点	比率
菊文	8点	6.3%	菊文	7点	13.0%
桐文	14点	11.1%	桐文	1点	1.8%
日輪文	33点	26.2%	無文	21点	38.9%
巴文	42点	33.3%	唐草文	17点	31.5%
不明	29点	23.0%	不明	8点	14.8%

※ 軒丸・軒平瓦とも菊文・桐文が少ない。

※ 軒丸瓦では、巴文(33.3%)が最も多く、次いで日輪文(26.2%)である。

※ 軒平瓦では、(日輪文に対応する)無文(38.9%)が最も多く、次いで唐草文(31.5%)である。

※ 大阪城関係や聚楽洞関係では巴文と唐草文が主体の位置を占めており、次いで菊文・桐文のようだ。

※ 他ではみられない(木幡山伏見城にも無い可能性が高い)日輪文(軒丸の無文)と(軒平の)無文が主体の一角、または主体をなしている点が注目される。

軒丸瓦	菊文 126点 6.3%(8)	桐文 11.1%(14)	日輪文(無文) 26.2%(33点)	巴文 33.3%(42点)	不明 23.0%(29点)
軒平瓦	菊文 13.0%(7点)	無文 38.9%(21点)	唐草文 31.5%(17点)	不明 14.8%(8点)	
		桐文 1.8%(1点)			

第8表 金箔瓦関係種類別数量とその統計表

金箔瓦関係種類名	数量(金箔瓦数量)	-----(金箔瓦率)
菊丸瓦	60点(59点)	-----(98.3%)
軒丸瓦菊文	10点(8点)	-----(80%)
軒丸瓦桐文	14点(14点)	-----(100%)
軒丸瓦日輪(無)文	35点(35点)	-----(100%)
軒丸瓦巴文	42点(37点)	-----(88.1%)
軒丸瓦様不明	29点(28点)	-----(96.6%)
	計130点(122点)	-----(93.8%)
軒平瓦菊文	7点(7点)	-----(100%)
軒平瓦桐文	1点(1点)	-----(100%)
軒平瓦無文	21点(18点)	-----(85.7%)
軒平瓦唐草文(一般的)	10点(10点)	-----(100%)
軒平瓦唐草文(滴水風)	7点(7点)	-----(100%)
軒平瓦文様不明	8点(8点)	-----(100%)
	計54点(51点)	-----(94.4%)
輪違い瓦	192点(157点)	-----(81.8%)
熨斗瓦か	2点(2点)	-----(100%)
青海波瓦	13点(12点)	-----(92.3%)
	計15点(14点)	-----(93.3%)
鳥伏間瓦	6点(5点)	-----(83.3%)
飾瓦方形刺花菱文	38点(38点)	-----(100%)
飾瓦方形か花菱文(+唐草)	1点(1点)	-----(100%)
飾瓦方形桐文	10点(9点)	-----(90%)
飾瓦丸形か桐文	1点(0点)	-----(0%)
飾瓦丸形菊文	5点(4点)	-----(80%)
飾瓦その他	6点(1点)	-----(16.7%)
	計61点(53点)	-----(86.9%)
鰐瓦	2点(2点)	-----(100%)
鬼瓦	57点(54点)	-----(94.7%)
総数	577点(517点)	-----(89.6%)

総数 577点	軒丸・軒平瓦 31.9%(184)	飾・輪・鬼瓦 20.8%(120)	菊丸・輪違い・熨斗・青海波・鳥伏間瓦 47.3%(273)
------------	----------------------	----------------------	----------------------------------

※ 熨斗瓦かを2点入れているが、他の熨斗瓦は入れていない。しかし、少し残っている可能性のあるものもあり、それらを金箔瓦関係とすると抽出した熨斗瓦だけ18点だが、他に3倍程出ており(×3で)44点程となるが金箔瓦関係は600点を超える。ただ熨斗瓦は金箔(の朱だけ含めて)の残り率は非常に悪いということになる。
…(一応はずす方向で対応)

部形態の同じ一面形を組み合わせて大棟等の側面を飾る。このため輪違いや青海波などは、外側となる端面のみを金箔で飾っている。文様と大きさが重なることもあり、表等では菊文軒丸瓦に近い位置で扱ったが、菊丸と称している菊文の小径の一群は、本来的には輪違いと組み合わせて使う棟を飾る瓦であり、本来的には（C）に属する瓦の一種である。ただ菊丸瓦の大きい径の一群は別の所を飾る小振りの丸型飾瓦であった可能性も十分ある。

熨斗瓦は金箔瓦とみてよいだろうものを2点しか確認出来ておらずまた青海波などの隙間を塞ぐ面戸瓦等にも問題を残すが、これら小型ながら数を使う棟関係の飾瓦類の金箔瓦率は、狭い端にしか金箔を貼らないにしては最も多数出土している輪違い瓦でも81.8%と高く、文様全体に金箔を貼る菊丸瓦類では、98%程とさらに非常に高い。棟の上面は分からぬが、大棟の側面も黄金で輝いていたようである。

鬼瓦と鰐瓦は（B）に属する。鳥伏間瓦は棟瓦関係で扱うべきとの意見もあるが、空へ鬼瓦等の角のように突き出すその姿と位置関係から、ここではこちらで扱っておく。すべてが破片でしか出土しておらず全形や大きさ等は推測の域を出ないが、鬼瓦や鳥伏間は一般的な大きさとみられるが、鰐瓦は小振りな方と見ている。これらの内、鬼瓦や鰐瓦では多くの破片で金箔や赤漆の付着が確認出来ている。朱漆は上の金箔が剥がれた本来接着剤であったものが多いと見られる。また、鬼瓦や鰐瓦片では赤漆というより赤色顔料的と見えるものがいくつかあり、他に飾瓦にも少數赤色顔料と見えるものがある。これらは、鰐瓦が安土城等で推測されているように金と赤（朱）色の二色で存在表現をアップしていた可能性も十分に考えられる。

報告書上の比較で概括的認識に過ぎないが、秀吉の城で先行する大阪城や聚楽第などより、装飾瓦系における金箔率は圧倒的に高く、種類毎での計算では8～9割を超えるものがほとんどである。この出土状況と様相からは、広義の意味では装飾瓦系はすべて金箔を施して、天守を中心とした城全体を黄金色で飾り立てていたものと理解してよいと考えている。現在の資料状況からは、秀吉の城における金箔瓦の使用率は指月城すでに最高潮に達していたようである。別角度から見ると、最も飾り立てる事を意図した城が指月城であった事を示している様相ともいえる。なお、今回の調査で出土した金箔瓦の各種類の代表例は第55図に示し、種類別の破片数は第8表に、また軒瓦類の出土点数とその比率等も第7表に表示した。

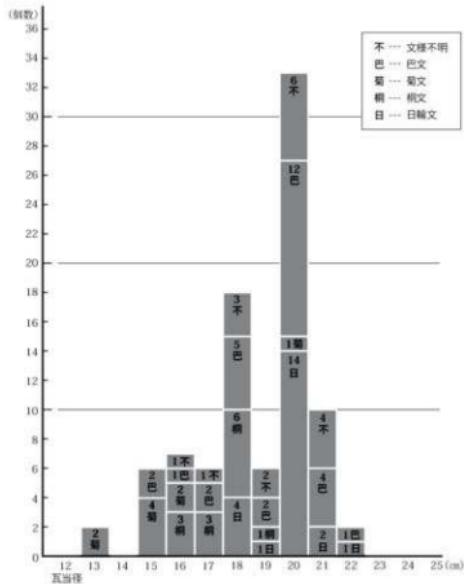
金箔軒丸瓦の文様と大きさ 軒丸瓦の文様には、不明とせざるを得ない小片のものなどをのぞくと、菊文、桐文、三ツ巴文など、大阪城や聚楽第など秀吉の居城では一般的と出来るものも少なからず出土している。軒平瓦では、対応するであろう菊文・桐文・唐草文及び組み合わせ文などが出土している。この内では、天皇が許可したとされる豊臣家の家文である桐文や菊文は、両者ともに多くはなく、無文と三ツ巴文軒丸瓦と無文と唐草文軒平瓦がそれぞれ多数を占めている。家文が最もよくのる軒丸瓦のなかには巴文、特殊な無文とするもの以外では五七桐と菊文以外は見られず、豊臣の臣下となる大名クラスの家文は全く含まれていない。

唐草文軒平瓦では、文様部のタテ幅が少し大きく、その下辺が下方へ三角状に少し突起する。滴水形の退化形態とも見られるているものが、かなりの量出土がみられる。大阪城や聚楽第ある

いは聚楽廻りでも一定量は必ず出土している。これらは研究者によれば豊臣家あるいは一族専用とも見られている。しかし、このタイプは日本国内では型式変遷を追うことはまだ難しく、同時に加藤清正の熊本城など大名の城郭や伏見の大名屋敷で、中国や半島の宮殿等に見られる本格的滴水瓦が使用されている例も少なくない。これらの点からも上述の軒平瓦は、今のところ滴水風軒平瓦と扱っている。いずれにしろ、天下人秀吉の居城では必ず見つけられる軒平瓦であり、秀吉との関係含めて今少し掘り下げた理解が必要だろう。

今回の調査地からの出土瓦には、上述してきた桐・菊・巴・唐草等の文様をもった秀吉の城では一般的ともいえる、軒丸・軒平の他に、凸文様をもたない特異な無文の軒瓦が含まれている。出土量的には、軒丸では三ツ巴文に次ぎ多く、軒平では最も多く、軒先瓦の内ではかなり大きな位置を占めている。この無文瓦は発見当初、文様を手抜きしたあるいは地元の研究者は蛇目文様との理解を得ているとも見られていたが、決してそのようなものではなく、円形の金箔をもつて文様としたと見るべきものであるとの理解を得ている。

その根拠として、瓦当面の凸部に限らず、四部全面及び軒丸瓦では内側段差の側面にまで金箔を丁寧に貼っている。このような金箔の施し方からは、縁部との段差はあるものの、円形の瓦当面全体に金箔を貼ることで、円形の黄金文様を表現したものと解すべきと見ている。日側を黄金色の丸、月側を銀色の丸とする日月文の日文の側、あるいは赤ではなく金黄色で示した日文か日ノ丸文、あるいは日輪文と見るべきである。これらの文様は桃山時代頃前後の胸具足や馬印など



第 56 図 軒丸瓦の瓦当径法量グラフ

の文様に類例が認められる。また、官軍が用いる「錦の御旗=錦旗」は、日月を金銀で描いた天皇を示す旗である。このように見ると縁部との段差側面を含む瓦当の凸面凹面の差異なく丸い瓦当全面に、金箔を透き間なく丁寧に施した軒丸瓦は、黄金の日ノ丸文あるいは日輪文と理解することが最も妥当な見方と考えられる。無文の軒平瓦は、縁段差部にも金箔を施さず、瓦当凹面と縁部の凸面だけに施し、重なる軒丸で見えない瓦当の両端にも金箔を施していない。これらの点からは、無文の金箔帯でつなぐ、かなり補助的な意味付けの軒瓦と見られる。無文の金箔軒

瓦の場合は、日輪文とすべき軒丸瓦が主役であろう。

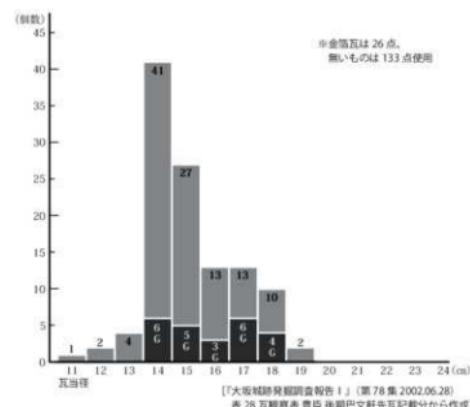
これらの日輪文の大きさを軒丸瓦の瓦当径で検討してみる。菊文は、20cm前後の大2が1点あるが、13cm前後から16cm前後が主で15cm前後が中心であり、小・中に重心がある。桐文は16cm台から19cm台前後までの間に分布し、18cm前後の大きさが主なようだ。巴文は15cm前後から22cm前後のうち大2の最も広い幅で分布している。18cm前後の大きさと20cm強の大2を中心とするようである。日輪文は大1の18cm前後から大2に収まるだろう。20cm前後あるいは強に重心があるとみえ、巴文の大1・大2の分布に重なるようだが、中クラスは見られない。

これらの軒丸瓦の瓦当径資料を集積して同様のグラフを作成すると、指月の丘の城跡の堀等から出土している金箔瓦の軒丸瓦類は、18cm前後の大きさと20cm前後の大きさを主体とするものであり、なかでも大2に最も中心があることが良く分かる。大2では巴文と日輪文の2軸を中心となっているが、日輪文がやや勝っている。

軒丸瓦の瓦当径に注目して、安土城、大坂城、聚楽第またそれらの城下の大名屋敷等から出土する軒丸瓦類でも、18cm前後、17.5cm～18.5cm台程の大1は一般的なようだが、20cm前後からか、大きい22cm台程の大2はほぼ見られない。方広寺関係の大仏瓦は例外で大4～5程あるので一旦置く。ただ、大きさを見ていると指月が特別と断じるよりは、豊臣時代に大きい方へ型式変化が進んだとの見方も出来る可能性があり、結論はおくるが、大きさも文様も特殊な瓦ではある。

日輪文は文様の面は先に記したが、伏見でも指月の丘西半域でしか確認出来ない軒丸瓦であり、地震後に建て替えられる木幡山（伏見山）伏見城関係や、その西に広がる大名屋敷関係でも出土は知られていない。その他の地域の織豊系の天下人の居城や同系統の城郭でも今のところ類例は知られていない。

しかし、指月ではその大きさとともに量的にも軒丸瓦大2のなかでは最も大きな位置を占め



第57図 大坂城軒丸瓦の瓦当径法量グラフ

ていることをこの資料は明確に示している。この少し大型の日輪文軒丸瓦が指月城の主要部分の建物を飾った、中心的軒先瓦と見て良いだろう。ここでの主題ではないが、先には天守も考えていたが、現在は明の使者との謁見用の御殿等の屋根を中心的に飾ったものとも考えている。

なお、金箔瓦に関しては他の飾瓦類にも菊文、桐文が多くみられるが、方形の種飾瓦には大坂城や聚楽第などでも使用されてい

た剣花菱文などがみられる。また、朱絵具と金箔の二色で飾った鬼瓦や鰐瓦などの破片もかなりの数出土している。金箔瓦を中心にした軒丸類などの織豊時代における型式変化、また各種の飾瓦の出現と増加、菊丸瓦、輪違い、青海波、それらに伴う面戸瓦などの発展など理解が必要である。

堀1 埋土出土のくすべ瓦と金箔瓦の製作技法 くすべ瓦と称した瓦は、平瓦は台型成形であり、側面はヘラケズリ、後ナデで仕上げ、凸面凹面はヘラミガキした丁寧な仕上げと見られる。丸瓦は粘土板成形の後筒状にして、後で半裁して2個体の丸瓦を作る、外面（凸面）はヘラミガキ的な丁寧な仕上げである。丸瓦の凹面は未調整なものが多く、切り離し痕を残すものが大半である。小さいが丸瓦とほぼ同様の作り方をしている輪違い瓦は出土点数が192点程度であり、すべての個体の凹面を調べた。鉄線跡を残すものは約91%、糸切り痕は1%弱で、残り8%程は不明であった。丸瓦はすべてを調べてはいないが、調べたものの中では、輪違い瓦と同様に90%前後の個体の凹面に鉄線切りの痕跡を残す。聚楽第の鉄線切り痕の割合より大きく増加している。軒平・軒丸は上述した作り方の平瓦・丸瓦に瓦当部を張り付けて成形している。瓦当部がはずれたと見られる丸瓦も凹面に鉄線切り痕が残るものを確認している。

鉄線切り痕をコビキBと称する研究もある。板状の丸瓦原材を作り出す際の糸切り（コビキA）から鉄線切り（コビキB）への変化が、量産への技術発展との見方が多い、首肯しておく。この技術は織豊系とされるなかでも、秀吉の城郭瓦の生産拡大のなかで発展すると理解される。これらの技術改良を進めながら秀吉の城郭や大仏の方広寺の瓦生産を支えた集団は、大和系を始めとする畿内系等も加わっているともみられるが、播磨の系統の工人集団を中心であったと見ていい。他の金箔を貼る（押す）いわゆる金箔瓦も土台の成形調整は、数で主体を成す平瓦・丸瓦と同じ基本技法で作られている。ただ、装飾的で立体的になるものも多く、貼り付けて立体物を造り出す技術や文様等を彫る各種の技術が加わっている事は明らかである。安土城の段階からすでに鰐瓦の大型化は始まっていたようであり、瓦の造形技術全体も天下人のニーズに対応するように急速に技術改良を進めたようである。

堀1 から出土した瓦類のなかでは装飾系と仮称的にまとめた各種の瓦の多くに金箔の残存や接着剤の朱漆を確認している。出土量も192点と多い輪違いの前端面では約82%程の157点の個体で金箔あるいは朱漆痕跡を確認している。金箔を貼った飾瓦系と概括した各種の瓦類も平・丸瓦同様に器表面に炭素を吸着させたいわゆるくすべ瓦類である。炭素による黒色を基本とするくすべ瓦類の見えるべき器表面は、制作過程の後半でほぼ全面にいわゆるヘラミガキを施している。金箔はその丁寧な平滑面に貼り付けている。

金箔を貼る部分は、軒瓦類他、文様を陽刻している飾瓦系の場合も、ほぼすべてが出っ張った文様と周縁の高縁部上面に貼り付けている。文様と高縁部とともに金箔によってさらに浮き上がることとなる。しかし、大量の金箔瓦の出発点とも言える信長の安土城では陽刻の文様間の底面に金箔を貼っており、出っ張る文様と周縁高縁部は貼られておらず、黒色のままである。しかし秀吉の城では大坂城以来、伏見城まで先述の貼り方を踏襲している。信長と秀吉のデザイン感覚



第 58 図 伏見指月城堀 1 他から出土する軒丸瓦日輪文の理解に向けて（概念図）

の差であるだろうが、信長は家紋の強調などにはあまり興味がなかった可能性を感じる。逆に秀吉は天皇から許可された菊や五七桐文様の強調にこだわったものとも十分に考えられる。日輪文は考察に譲るが、家紋等とは別次元の、日光の生まれ変わりとしての始祖王であるとの秀吉個人を象徴する文様である。金箔の貼り方も凹みや段差等を含む丸い瓦当の前面すべてに金箔を貼り、前面全体を金の日ノ丸としている。

基本的には金箔は朱漆を接着剤として貼り付けられている。しかし、接着剤としての用途が主目的の朱漆ではあるが他の色でなく朱とした別の目的は、朱色地に薄い金箔を貼ることにより、より派手やかな黄金色となることを知った上で選択であったと推測される。印刷業界でいう赤金の効果を狙っているのだろう。逆に平安時代後期以降に多くなる金文字を使う写経文などの地には紺地を使い、控えめの落ち着いた華やぎを演出している。黄金色を含む彩色の知識はこの頃にはかなり進んでいたようである。なお、鬼瓦や鰐瓦等は朱色のまま残す部分と金箔を貼る部分の2色で表現している例が安土城等の復元で考えられている。当遺跡の今回の出土片だけでは断定的な理解は得られなかったが、部位によって朱だけが鮮やかに残っている例もあり、金と朱の二色表現の飾瓦の存在はほぼ校訂しているが、もう少し検討は続けるべきだろう。

出土瓦の破片の在り方から考える 堀 1 土壌中層から出土している大量の瓦類は、種類の多様な金箔瓦をたくさん含んでおり、その金箔瓦類は金箔や接着剤の朱漆が良く残っているという特徴を持っている。しかし、完形品や大片が意外と少なく、割れ口の角に鋭さを残した中～小片が多い点も大きな特徴に見える。加えて接合率も意外と低かったが、この点はもう少し広く掘れて

おれば変わる可能性可能性は高いが。もう 1 点加えておくと土器・陶磁器類があまり含まれていなかった点も特徴ではある。出土状況からは、これらの遺物が日常的に徐々に廃棄されて徐々に埋没したものではないことは、よくわかる。

このような瓦類破片の出土状況も、整理・研究から見えてきた瓦の各種類の型式的要素のつまりの良さ等を加えて、一つの見方を記す。瓦類は同一系統の工房で一気に量産され、金箔を貼る工房も 1 つあるいは極少いが一気の量産であったようだ。後で詳細は記すが、破片での金箔瓦率は全体で 90% 程である。これらの瓦類は金箔の残りの良さなどからは屋根にのっていた期間が非常に短かったと考えられる。そのような瓦類が、激震により建物の倒壊とともに落下し、破壊した。しかし、そのまま埋まらず、瓦礫が一気に整理され近くの堀へ埋設されたものであるとの解釈が最も妥当性が高いだろうと考えている。堀 1 の西側に推定される金箔瓦をたくさん使った建物、炊事場等とは距離のある城郭内のハレの儀式に使われるような主要建物であったと推定される。現在では、天守よりは大広間を持った御殿等例えば二条城の二ノ丸御殿に類する建物を考えてはと思っている。

以下では図や写真を掲載した出土瓦について挿図・図版に沿うかたちで概要を記す。また、後には各個体の観察表（第 10 表）も掲載している。

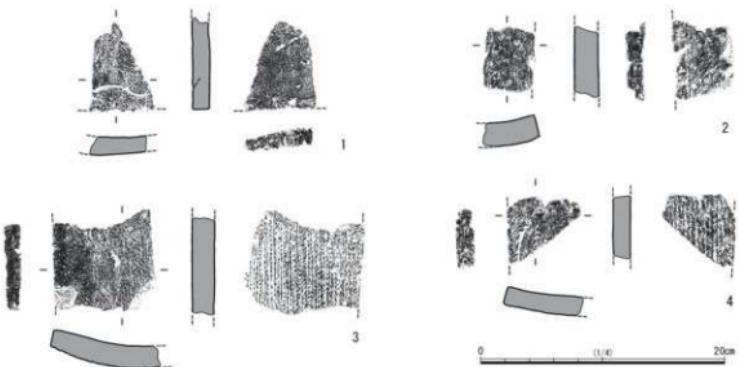
(4) 瓦類の種類別観察

ここでは、実測図・写真・表等に掲載した瓦類を、それぞれの個体が共有する属性等について記し、種類別に文様や型式的特徴についても記す。記述は図版番号に沿うかたちで進める。

図版 1 ~ 18 に掲載した瓦類は、堀 1 埋土等から出土している金箔瓦関係を中心としたものである。分類に基づいて種類毎にまとめる形で各図版を組んでいるが、図版への掲載分はそれぞれの種類の全個体ではないので表にしか記載しないものがある点は注意されたい。逆に表には種類別のすべての個体を掲載している。本文中に載せた種類別の瓦当径別個体数グラフなどは、表にしかない個体のデータも使っている。なお、図を載せた金箔瓦もカラー印刷に出来なかったので、図版中に金箔の残るものに G、接着剤の朱漆の残るものに R、漆が変色して朱がわからないものには J を付した。

図版 19 ~ 26 は、金箔が付いていない瓦類であり、器表面に炭素を吸着させて黒色に仕上げた瓦という意味で、くすべ瓦類と総称してまとめた。時代的にはすべて近世あるいは以降の瓦類である。堀 1 埋土から金箔瓦と共に丸瓦や平瓦はこれらの図版の前半中心に載せている。

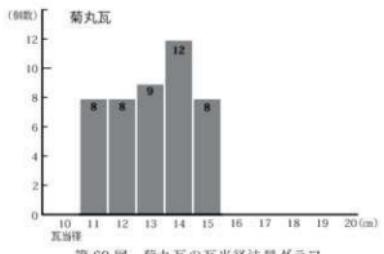
古手の瓦類 第 68 図の瓦類は、新しい時代の層・遺構等への古手の混入品と出土した平瓦類である。1 は堀 1 埋土上層、3 は堀 1 埋土中、2 は溝 10、3 は溝 11 から出土している。1 は瓦質的である。凹面に明瞭に布目痕を残し、凸面はナデを加えている。2 はくすべ瓦に近い瓦質である。凹面はナデか、凸面は平行的な繩目タタキ痕が残る。3 は須恵質である。凹面は板ナデ風の仕上げで凸面には平行繩目タタキ痕である。4 は瓦質である。凹面に一部糸切り痕を残し、凸面は平行繩目タタキ痕を残す。これらの平瓦類は平安時代後期から室町時代初め頃の 11 世紀末頃



第 59 図 古手の瓦実測図 ($S = 1 : 4$)

から 14 世紀頃の幅の中に位置付けられると見ている。同期の時代に指月の丘陵上に建っていた伏見山荘や院御所として使用された事も知られている宮殿あるいは関連寺院等に使用されていたものと見ておきたい。

菊丸瓦 圖版 1 と圖版 2 (上 2/3 程) には金箔菊丸瓦をまとめている。60 点出土しているもの内 40 点を図示している。菊丸瓦は輪違い瓦列との間に刺し込んで(小)菊丸の横一列を形成して、合わせて大棟等を飾る小振りの瓦である。瓦当部含めて全形は軒丸瓦に近いが、丸瓦部にあたる部分は、丸瓦より幅が狭く長さも短く、少し湾曲した板状を呈する。この柄上の部分を棟の側面に刺し込んで設置する。瓦当径が計測出来たものは 44 点である。瓦当径は 11.0cm 前後のもの



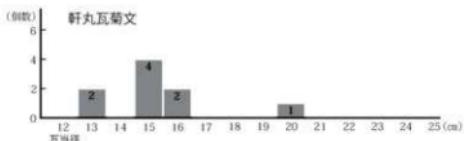
第 60 図 菊丸瓦の瓦当径法量グラフ

から 15.0cm 前後のものまであり、瓦当径階級別に大きく差なく 8 ~ 10 個程ずつ出土している。棟の規模によって 11 ~ 12cm 程のものと、13 ~ 15cm 程のものを使い分けていたものと推測している。

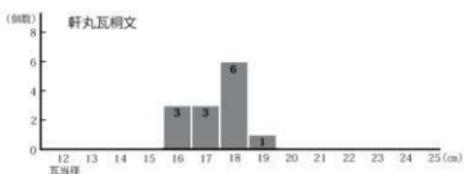
瓦当面は軒丸瓦と比較すると、軒丸には常付く文様周りの帶状の高めの縁が付かないものが主体であり、縁無しがこの時期のもの

の特徴となっているようだ。菊文様は桃山時代のものは複弁表現が多いが、この指月の資料も複弁表現が主体である。金箔は他の軒丸などと同様に、文様の凸部上面に貼っており、瓦当凹面には貼っていない。しかし、小振りなので凹面の隙間が狭く、一見小さい金丸に見える。金箔瓦率は 60 点中 59 点に金箔あるいは赤漆等の接着剤が残っており、98.3% と非常に高い。

軒丸瓦菊文 圖版 2 (下 1/3 程) には軒丸瓦菊文の 10 点出土したもの内 5 点を掲載した。瓦当径が計測出来たものは 9 点である。瓦当径は 1 が径 12.9cm、表にある 2 は径 12.6cm を測る小型であり菊丸と大差ないが、高縁が付き軒丸としている。他は 15.0cm 前後 (4・6・7) から



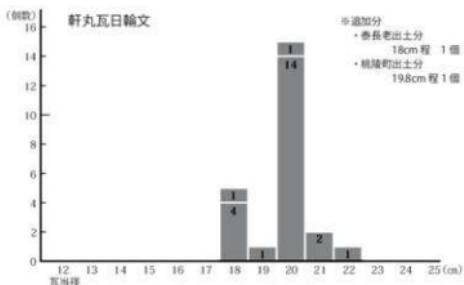
第61図 軒丸瓦菊文の瓦当径法量グラフ



第62図 軒丸瓦桐文の瓦当径法量グラフ

を掲載したが、瓦当径計測は13点出来た。図側では2が16.0cm、12が16.4cm、3が16.8cm、4が17.4cm、5が17.6cm、9が17.4cm、6・7・8が18.0cm、10が10.2cm、13が18.8cm程を測る。表のみのものを加えてみると、15.0cm前後と16.0cm前後のものがそれぞれ3点で合わせると中サイズも6点となる。しかし、18.0cm前後のものが6点と、1階級では大1が最も多い。19.0cm前後が1点あるがそれ以上のものは見られない。文様に関しては、花弁部が残るもののが少ないが、大きさや類品などとの関係からは、五七の桐の一部が中心と見ている。出土品のすべてには、金箔や漆が残っており、表のみの分も含めてすべてが金箔瓦と判断できるので、金箔瓦率は100%である。金箔は他と同様、文様の凸部と高縁上面である。

軒丸瓦日輪文（無文） 無文とも言える日輪文の軒丸瓦は35点出土した内の19点を図版4に掲載した。瓦当径の計測が可能なものは22点あった。小径のものではなく、20.0cm前後の大2と見られるものが最も多く14点を数え、次いで18.0cm前後の大1が4点と続く。この文様のものは小や中は作られていないようである。表だけのものも含めてすべてで金箔と朱漆あるいはそれが変色したと思われる暗褐色の漆が確認出来るので、金箔瓦率は100%と最も高いクラスである。



第63図 軒丸瓦日輪文の瓦当径法量グラフ

16.0cm台(8・9)などが多く、20.0cm前後のものが1点出土しており、菊丸よりは大きいが他の軒丸瓦関係から見ると小さい径側に重心がある。文様の花弁は複弁表現が主体であり、金箔は文様凸部上面と高縁部上面に貼った秀吉型とも言える貼り方である。10点中8点に金箔等が残るので金箔瓦率は80%程度である。

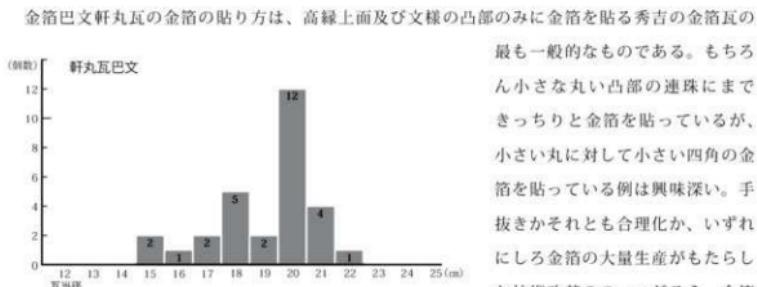
軒丸瓦桐文 図版3には軒丸瓦桐文を出土数14点のうち12点

日輪文の金箔の貼り方は、平たい瓦当底面全体から、高縁部上面及び底面から高縁部へ立ち上がる段の側面に及ぶので、瓦當前面の全面に金箔を貼りつけて仕上げている。出土してこの文様軒丸瓦に分類した全個体で、段部側面を含む形で3面あるいは2面で金箔あるいは漆(朱がわかるものが大半)を確認している。瓦当内の内

側はどこにも隙間なく金箔が貼られており、瓦当全形で金の日ノ丸である日輪を表現していると私には見える。20.0cm前後の大2の日輪文軒丸瓦は城の中の最も主要な建物の表面(前面)を飾っていたと見て大過ないと考える。この日輪文軒丸瓦がたくさん出土した南区の堀1埋土が示す、堀1の西方に指月城の最も主要な建物が建っていたと考えている。指月城も天下人秀吉の造った初期の近世城郭であり、天守を想定するのが一般的な見方であろう。しかし、見えてきた指月城の特殊性からは、明の使節との謁見の大広間がある御殿等を考えた方が妥当性が高いと思われる。今後の発掘に期待したい。

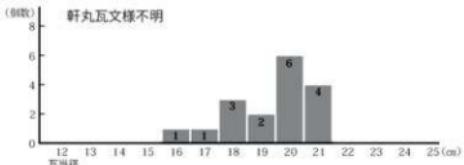
軒丸瓦巴文 図版5・6には、軒丸瓦巴文を出土42点の内29点実測図と写真で掲載した。42点の内瓦当径が計測出来たものは実測図分とは少しずれるが、同じく29点であった。文様は確認出来るものはすべて三ツ巴文である。主文様と高縁部の間に連珠文がめぐる。平安時代後期の中世に入って以来の極一般的な軒丸瓦の瓦当文様である。安土城以来の金箔瓦の文様のなかでも、織豊期を通じて軒丸瓦の文様のなかでは常に主体を成す位置を占め続けており、圧倒的多数である例の方が多いだろう。この指月城でも軒丸瓦のなかではやはり一番たくさん出土しているが、日輪文と合わせて主体という印象が強いので、興味ある変化ではある。

瓦当径大きさ面では、15.0cm前後や16.0cm前後、17.0cm前後の小中の大きさのものも一定量出土しているが、18.0cm前後の大1が5点、20.0cm前後の大2が12点と大2に組み込める21.0cm台前後4点や22.0cm前後1点と、幅のある出方のなかでも大2以上が最も多い。大1や大2に重心のある出土状況は日輪文と通じる。しかし、日輪文との関係等は今後の課題の一つである。



第64図 軒丸瓦巴文の瓦当径法量グラフ

軒丸瓦文様不明 図版6(下段)に文様不明とした金箔瓦片を1点掲載した。文様不明の軒丸瓦は計29点出土しており、うち瓦当径計測が可能なものが16点である。瓦当径分布幅は巴文の



第65図 軒丸瓦文様不明の瓦当径法量グラフ

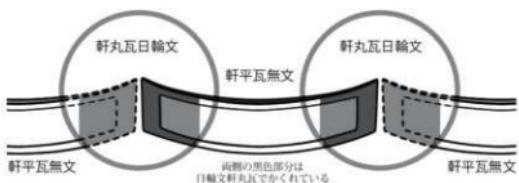
ものと同様、中くらいから大1・大2まで見られ、大2が最も多く6点を数える。金箔瓦率は29点のうち28点で金箔か朱漆等を確認しており、96.6%と高い。このような今のところ文様不明資料と言わざるを得ないものである

が、瓦当径の一面からは日輪文あるいは巴文の可能性が高く、判明している分に不明の大1と大2を加えると大2の最も大きい瓦当径の軒丸瓦が圧倒的に多数を占めていることがわかる。文様が不明でも瓦当径の大きいものが主体であることは、指月城の主要建物は基本的には大2の大型の金箔軒丸瓦によってドレスアップされていたとの見方の妥当性をフォローしているものと考えられる。

金箔軒平瓦関係 図版7・8には、金箔軒平瓦関係を、菊文、桐文（滴水風）、無文、唐草文（一般的）、唐草文（滴水風）の順に並べている。

金箔軒平瓦関係の金箔の貼り方は、すべての種類で文様の凸部面と高縁部の上面に限られており、軒丸瓦巴文や同桐文、同菊文に共通する。ただ、軒平瓦瓦当両側の幅のある縁には一部の例を除くと貼らない。軒丸瓦と重なる部分にまでは金箔を貼らないというある種の合理性であろう。滴水風もすべて同様である。無文は瓦当面に貼る横幅が少し狭い傾向があるが、基本的には他の文様の軒平と共に通する貼り方である。無文の軒丸は瓦当径の大きい大2が主体のためとみられる。しかし、軒丸瓦無文（日輪文としたもの）とは、異なる所がある点は注意が必要である。平らな瓦当底面と高縁上面に貼る点は共通するが、無文の軒丸側では必ず貼る高縁と底面との段差部側面には金箔を貼っていない。同じ無文でありますながら表現意図の差を原因とする差異であろうと見ている。無文の金箔瓦の場合軒丸側には隙間なく金箔をはることによって日ノ丸=日輪文様を表現する本来的目的を持って作られたものと考えられる。しかし、軒平無文瓦の場合は、日輪文軒丸瓦のつなぎ的意味しかもっていなかったことに因ると解している。なお、金箔の接着剤は変色しておりわかりにくいもの（Jとしているもの）はあるが、朱漆が基本であるとわかるものが大半である。

軒平瓦関係の金箔瓦率は、菊文で7点の内7点がすべて付き100%、桐文は1点だが金箔が



第66図 軒平瓦無文と軒丸瓦日輪文（無文）の軒組み概念図

残っており同じく100%である。他の唐草文（一般的）も10点で10点で100%、同じく唐草文だが滴水風の場合も8点で8点で100%である。1つ例外は無文のもので、最も多い21点を

数えているが金箔等の残るものは 18 点と、金箔瓦率は 85.7% にとどまるが、決して低い数値ではない。軒平瓦全体では計 54 点の内 51 点が金箔瓦と判断できるので金箔瓦率は 94.4% となり、軒丸全体に近い数値となる。

軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせは、菊文は菊文、桐文は桐文、無文は無文とであろうが、巴文は多くの例でも唐草文軒平瓦であり、当調査地出土品も同様の組み合わせで理解してよいだろう。下記の滴水風の唐草文軒平瓦も巴文軒丸瓦と組み合うのであろう。

文様と形状について追記しておく。軒平瓦の菊文は、重弁の花文と両側に葉文によって構成されている。菊文軒丸瓦と対になるのだろう。滴水風の形をとる桐文の軒平瓦では中央に五三の桐花文と下に三枚の葉文を配しているが、両側は唐草文を配する複合の文様構成である。無文は瓦当底面に文様を持たず金箔を底面と高縁部に貼るだけで飾っており、無文と表現している。軒平瓦の大きさで若干気になる点は、1 つは瓦当面の縱幅の広・狭である。各文様にあるようだが、使用屋根建物の差異によるのか、今後の課題としておく。形の問題で、瓦當下端の縁が若干下方へ尖り出る滴水風とした軒平瓦に触れておく。本来に中国や朝鮮等の周辺諸国の中宮殿等に使用されている軒瓦は下縁が下方へ大きく三段の葉先状に垂れ下がり、中央のものが下方突起している。日本では高麗瓦と称している。滴水風としたものは、この本来の滴水形瓦の型式的退化形とも考えられるが、平瓦と瓦当のとり付き部の角度が全く異なり、120 度程に開いてとり付いている。滴水風は他の日本の軒平と同様に平瓦と瓦当面のとり付き角は 90 度である。形ではなく基本構造が大きく異なり、直接的な型式変化で繋ぐにしては無理がある。滴水風軒平瓦は豊臣関係の城郭ではよく出土するので理解が進みたいが、理解は将来としておく。

輪違い瓦・青海波瓦・青海波面戸瓦 図版 9 では輪違い瓦を掲載している。図版 10 (上半) では青海波瓦と青海波面戸瓦を載せている。輪違い瓦は小形の丸瓦状を呈する瓦である。少し広い側の半円弧状の端面を上下逆転させたりして横に組み合わせて大棟等の側面を飾る瓦である。青海波瓦も輪違い瓦よりも半径の大きい弧を波状に組み合わせて、同様に大棟等を飾る。青海波面戸瓦は青海波瓦の組み合わせで生じた文様内の隙間を埋める瓦である。輪違い瓦と青海波瓦とともに表面で文様を構成する端面に金箔を貼って金箔瓦としている。今回出土した少數の青海波面戸瓦では金箔等を確認出来なかったが、今後発見される可能性が大きく、その時に検討したい。

金箔瓦であった可能性のあるもの含めて輪違い瓦は 192 点出土していて、その内 157 点で金箔あるいは朱漆等を確認しており、金箔瓦率は 81.8% 程度である。他と比べて少ないようにも見えるが、金箔を貼っていた面の狭さからは、かなり高い数値と見るべきと思う。青海波瓦は少なく 13 点にとどまり、うち 12 点が金箔瓦であった。金箔率は 92.3% 程度高い。面戸瓦は 1 点のみで金箔の確認はない。

輪違い瓦の製作技法の情報を先にも一部記したが、ここでも触れる。輪違い瓦の製作技法は丸瓦と基本的には共通するもので、板状に切った原材料を筒状に丸めた後、半裁して 2 個の輪違い瓦を作る。輪違い瓦の凸面はナデあるいはミガキを加えて平滑に丁寧に仕上げているが、凹面には初期のタラ作りの際に付いた切り痕跡を残したものが多い。今回金箔瓦の枠内で扱った輪違

い瓦は全部で 192 点であったが、その内 175 点、鉄線切りの痕跡を確認しているが、糸切り痕跡は 1 点のみしか確認しておらず、残る 16 点は不明であった。全体に鉄線切りの占める割合は 91% 程と非常に高いものである。

鳥伏間瓦 図版 10（下半）には、鳥伏間瓦の部位片を掲載している。鳥伏間瓦は大棟の両端の鬼瓦の上部等で上空へ角のように突き出し、前面は軒丸瓦状の文様が付く例が多い。今回の出土片では、1・2・3 は先端の瓦当部片である。1・2 は瓦当径がそれぞれ 22cm 程を測り、軒丸の大 2 程の瓦当である。文様は両者ともに巴文であり、朱漆や金箔の残りは良い。3 は瓦当径 24cm 程と軒丸ではほとんど見られない大きなものである。瓦当底面には文様は見られず平らである。朱漆が底面から段の側面、高縁部上面全体に良く残っており、金箔も 3 面とともに残りが確認出来る。このような状態からは小片ながら（無文）日輪文の鳥伏間瓦であると断定的に理解出来る。鳥伏間の瓦当に日輪文が使われている事の意味はかなり大きく、注目すべき資料と考えている。なお、鳥伏間瓦片は 6 点出土しているが、内 5 点は金箔瓦と言えるので、金箔瓦率は 83.3% 程である。

飾瓦類 図版 11・12 には狹義の飾瓦類を掲載している。これらは円形あるいは方形の基盤に凸状の文様を作り出したものであり、金箔は文様の凸面に赤漆を接着剤として貼っている。秀吉の金箔瓦技法としては一般的なものであり、他の飾瓦もすべて同様である。この方形の剣花菱文飾瓦も他の各種の瓦同様によく割れており、接合で 2 辺を復元できた例はない。しかし同一個体片の可能性のあるものを、参考資料と文様等を手掛かりにして一定の大きさの横長の長方形内に並べてみて、基盤の大きさと文様の復元を試みた。1 個体的に集合させた破片は 1 ~ 4、5 ~ 8、9 ~ 13、14 ~ 18、19 ~ 23 で隙間は多いがそれ 1 枚で計 5 枚に復元出来た。5 枚の基盤の大きさは、横長方形で横 18cm × 縦 12cm 程がおさまりが最も良い。豊臣後期の大坂城跡で出土する同文の方形飾瓦にはほぼ同じ大きさのものがある。文様は対角に × 状に本来的な剣形を配しその間で四方に花菱の花弁を配している。対角四方の角近くには釘穴が四ヶ所付くので、それで壁等へ貼り付けて飾りとするものであろう。文様の剣花菱文の剣がかなり写実的な形状である点が逆に特異を感じさせるが、文様の型式的まとまりは良い。いずれかの大名も家紋などではなく、出雲大社の剣花菱に似ている印象であるが、秀吉との関係含めて理解は今後としておく。唐草の文様がからむ大きい花菱唐草文 13 の 1 点を加えて、剣花菱文の方形飾瓦 38 点で計 39 点の方形飾瓦はすべてで朱漆や金箔を確認しているので、金箔瓦率は 100% である。

方形桐文の飾瓦は計 10 点出土している。1 と 2 では五七の花部が確認出来、6 では釘穴が残っていた。大きさは剣花菱に近似するものだろう。10 点の内 9 点で金箔等が確認出来、金箔瓦率



第 67 図 鳥伏間瓦日輪文の軒端正面模式図

は90%である。

図版12の上2/3程は丸形か外形不明の飾瓦を掲載している。飾瓦丸形桐文1は丸形基盤の径は24cm程であり、桐文の葉文部が少し残っている。丸形菊文1と5は重弁の花文をかなり立体的に付けている。円形の基盤径は1が25cm程で5は30cm程を測る大型品である。丸形の菊文飾瓦は5点出土しており、4点で金箔等が確認出来るので、金箔瓦率は80%程である。

基盤の形がわからない飾瓦には菊文、棟込瓦龟甲文、方形二重菱形文等の他、文様の不明なものなど、合わせて6点出土しているが、金箔等の残りは悪く、金箔瓦率は16.7%程であり、例外的に低い。

熨斗瓦・鰐瓦 図版13には熨斗瓦かを2点、熨斗瓦関係を4点、鰐瓦片を2点掲載している。熨斗瓦関係としたものもここで載せたが、外形的にも確實に熨斗瓦とわかるものは端面等で確認できていない。しかし、熨斗瓦かとした2点との関係資料としてここで扱っている。熨斗瓦は金箔瓦関係の総数には入っていない。ここに掲載した熨斗瓦はすべて平瓦を半裁したいわゆる割り熨斗瓦である。これら以外に14点、合わせて18点の熨斗瓦片が出土している。熨斗瓦かとした2点には、それぞれ金箔と漆片が確認出来ている。現状では青海波瓦片に入れるべきかとも考えているが、検討の余地が残っているのでこのまま報告しておく。

鰐瓦片は少なく、ここに載せた2片に限られる。1は線彫りの鱗がわかる破片であり、腹部の一部であろう。2は尾鱗部の破片である。両者は同一個体の可能性があり、小振りの鰐瓦と推定される。両者ともに金箔・朱漆が確認出来る。

鬼瓦 図版14～18には鬼瓦片を掲載した。鬼瓦は表にだけ載せた分も入れると57点出土しているが、この内39点は実測図を掲載している。鬼瓦は偏平な菊文等を貼り付けた偏平なものや、顔を立体的に造形するものなど各種のものがあるようだ。17・18・21～24等も縁部から下部の鱗部などの一部であろう。1～8等は鬼瓦の縁部片である。11は飾瓦等にもみられる菊の花弁のみを乳文としたもので、家紋を中心とした偏平な鬼瓦の一部を構成するものだろう。12は大きな連珠の1つである。21は連珠が取れた痕だろうか。22にも少し小さい連珠を載せている。これら以外のものは鬼の顔を構成する部位である。牙あるいは角（46・49・50など）などの他、髭、眉毛、髪等の破片とみている。なお、31として載せたものは鰐瓦片になる可能性も残ると考えている。

いずれにしても鬼瓦片としたのは多彩で結論の出ない部位も多く、複数の個体のものが含まれるとみている。これらの多数の鬼瓦片は想定する主要建物には大棟の他、下り棟などいくつかの棟が造られており、各棟の先には必ず鬼瓦を設置していたのであろう。鬼瓦片とした破片は計57点であり、内54点では金箔あるいは朱漆を確認しているので、計算上は金箔瓦率94.7%程にもなる。しかし、個体にすると御殿一棟分とすれば、多くて6個体程であり、鬼瓦はすべて金と漆で飾られていたものと考えられる。なお、朱漆としたもののなかに、ニカワの入った朱色の顔料である可能性のあるものもある。化学的検討を加えられなかったので回答は今後の課題である。鬼瓦と鰐瓦に関しては金箔と朱色の二色彩色える可能性も検討を続けたい。

金箔瓦関係まとめ ここで金箔瓦関係の概説を終わる。各種類の金箔瓦率は、前で第8表にまとめて掲載している。金箔瓦として扱った全破片は577点であるが内517点では金箔・朱漆・朱かわからなかったが漆とできるものが確認出来ており、金箔瓦率は $517 \text{ 点} \div 577 \text{ 点} \times 100 = 89.6\%$ となり、約90%が金箔瓦であった。やはり非常に金箔の残りの良い一級資料ではある。歴史を背負っている面からは非常に重要な考古的物資料ではある。

その他の瓦類について 堀1埋土内から出土しており、安土・桃山時代の指月城に関連する瓦類ではあるが、金箔や朱漆等を本格的に使っていない、あるいは瓦当の欠失により確認不可能な軒先瓦の丸瓦部・平瓦部等の瓦類を図版19~24で掲載している。これらの瓦類はすべて表面に炭素吸着させて黒色に仕上げる瓦類であり、いわゆるくすべ瓦としてまとめられる。なお金箔瓦としてまとめたものについても瓦当を含めた体部はすべていわゆるくすべ瓦の範疇に入り、丸瓦や平瓦など基本的なものの製作技法と金箔瓦としたものとは共通している。瓦類の金箔瓦類とくすべ瓦類の大別は、本質的にはあくまで報告のための便宜上の名称区分にすぎない。

なお図版25・26に掲載した桟瓦類や塀瓦等は、堀1が理設し廢絶された後の、主に堀1より西側の江戸時代後期以降の新しい時期の遺構や包含層から出土したものである。これらは年代も江戸時代後期から近代初頭頃と新しい。

平瓦・軒平瓦（くすべ） 図版19・20はくすべ平瓦を合わせて10点掲載しているが、平瓦類は合わせて36点表に登録している。全形の残ったものは無く、半分以下の破片が中心で、当時の平瓦の大きさは確認出来なかった。表に掲載した分を含めて、すべて器表面に残った製作技法痕跡は共通していた。凹面はタタラ作りの一枚板への切り離れ痕跡の残るものはほとんどない。ハナレ砂痕跡が残るものもあるが、丁寧なナデ痕跡の上に台型のアタリ痕が重なった平滑な仕上げのものが多い。凸面は台型上での調整の際の丁寧なナデ仕上げ痕を残すものがほとんどである。四方の端面はヘラケズリの後ナデがかぶるとみられる。技法痕跡からは、いわゆるタタラ作りにより切り出された1枚成形後に台型にのせて調整を加えて仕上げとする1枚作りであると理解される。図示はしていないが、観察表中の軒平瓦5・6は堀1埋土中層から出土した瓦当欠失の個体で、残る平瓦部の技法痕跡は上述の平瓦類と共通している。他の軒平瓦の平瓦部としている軒平瓦2~4も遺構や土層へ古手の混入品として出土したものであるが技法痕跡や焼き上がりから見て、指月城に関連する同時代の瓦とみてよいだろう。唯一瓦当の残っていた軒平瓦1は瓦当の縦幅が3.6cm程と狭い瓦當で唐草が少し残っている。これについては出土層からは桃山末期から江戸時代初頭に下り、大名屋敷地化してからの瓦の可能性がある。

丸瓦・軒丸瓦（くすべ） 図版21~23には、くすべの丸瓦8点を掲載したが表では29点登録している。他に小片も多く出土しているが平瓦にくらべると少數ながら大きい破片や例外的に完全に近いもの（丸瓦8）も1点ではあるが見られた。平瓦より若干なりとも大片の多いのは径が小さくやや厚手で半円形が強度を増していることによるのか。製作技法痕は凸面にはほどすべてが幅に広狭はあるが縦方向の丁寧なヘラミガキ痕を残すものが大半である。内面にはヘラミガキが施されないので、タタラ作りの切り離し痕の残るものやその上に衣目あるいは繩紐状の痕跡が

残るものも見られる。1枚板切り離しのいわゆるタタラ作りの切り離し痕跡は、図を載せた2～5、7～9及び12の8点及び15点合わせて23点は、鉄線切りによる痕跡かあるいはその可能性が高いものである。残りの内2・16・18の3点では糸切り痕であり、他は不明が3点である。図あるいは表に掲載したのもでの糸切り率が $3 \div 29 \times 100$ であり、約10.3%程となり、かなり低くなっている同じく鉄線切り痕を持つものは23点であり、29点の内では79.3%程の高い数値を示す。ここには掲載しなかったが、別に大小片100点程を点検した結果では90点以上で鉄線切り痕を確認しており、率は90%を超える。糸切りは数点にとどまるので掲載分を合わせても2桁にはとどかなかった。複数以上の生産工房のほとんどが、技法として糸切りは残っているようだが、鉄線切りへ転換していたと見てよいだろう。なお、5と24では鉄線切り痕跡の上に棒状タタキとされる痕跡を、3と26では離間用のためといわれる網状の紐痕跡を確認している。しかし、これらの痕跡を残すものはそれほど多くはない。

ほぼ完形の丸瓦8は、半球形に近い横幅が16cm程で、玉縁部まで入れた長さが30cm程である。軒丸の瓦当径を参考すると中ぐらいの大きさの瓦当が付く丸瓦サイズのようである。ほぼ横幅がわかる丸瓦5は横幅が19cm程であり、推定径からは軒丸瓦の丸瓦部とすれば、大2に当たる大きい軒丸瓦當に付くものと推測される。いずれにしろ同じ屋根には用いられてはいなかっただろう。軒先瓦の大きさの多様性や丸瓦にもいくつかの大きさのものが存在している点からは、近い敷地に大小の建物も複数以上存在していたことを示しているのだろう。

軒丸瓦の丸瓦部は7点登録しているが、1～3及び7の4点は堀1内の埋土内から出土している。これらは先に記した多くの丸瓦と同じ製作技法痕を残すものが主であり、同じ工房で同一工房で同一技法で量産されたものと見ている。玉縁近くで釘穴を確認している4と続く5と6の3点も新しい層、遺構への混入品として出土したものであるが、上述してきた瓦類の多くは同様に桃山時代の指月城に使われた瓦類を見てよいだろう。

面戸瓦・谷瓦 図版24（中段）に載せている面戸瓦類は先に1点だけ図示している青海波面戸瓦とは異なり熨斗瓦の下段と丸瓦や平瓦との間に生じる隙間を埋める目的の瓦である。成形は丸瓦を分割しているようである。出土遺構はそのほとんどが堀1埋土関係であり、金箔瓦と共に出土したものである。図版24（下段）に図を載せた谷瓦は、屋根面の出合い部分に使用する限定用途の瓦類である。破片を6点確認しているが、図示したものを含めて堀1埋土から面戸瓦等に共伴して出土している。今のところこれらの両者の瓦では金箔や朱漆を確認していないが、実用本意の瓦類ではあるが金箔瓦同様に、指月城に直接関連した瓦類の2種ではある。

近世末以降の瓦類 図版25には桟瓦関係の実測図を載せている。桟瓦は本来平瓦と丸瓦を合わせて1枚の瓦としたもので、初期は丸瓦と平瓦とわかるものを合わせていた。しかし、量産が進むと波形へと洗練されていく。葺く際に四角が四枚重なる事を防ぐために、対角の二方を小方形の入角としている。京都で開発されたようだが出現は江戸時代前期の17世紀後半とされている。製作技法は一枚作りの台型成形であり、軒瓦の場合は桟瓦の前に瓦当を貼り付けて成形している。軒桟瓦1もそのように作られていることがわかる。桟瓦の場合上面となる凹面大きい側、

又下面となる凹面の大きい側ともに丁寧にヘラミガキする例が一般的なようだ。棟瓦 1・3 含む 6 点ともに同様の技法痕跡を持っている。全形のわかる資料は少ないが、1 では横幅 28.6cm を測る。縱幅はこの資料ではわからないが、類例からは少し長い 32 ~ 3cm 程とは推測される。

図版 26 に載せた崩瓦は炭素の吸着具合を含む焼き上がりや器表面に残る技法痕の共通性から先述の棟瓦と同じ工房あるいは産地で作られたものと見られる。大きさは 29cm 程 × 44cm 程の平たい長方形形状を呈する長方形の板状の片側縁のみ二重にして少し段差を付ける。段差部を重ね部としながら崩の屋根に一列に並べて設置する、崩の屋根専用の瓦である。

棟瓦・崩瓦は同じ近世末以降の遺構から出土しており、同じ屋敷の施設で同時期に使用されていたものが同時に廃絶されたものと見ている。江戸時代後期から明治時代前半の幅には収まる資料と見ている。

第 9 表 出土土器・陶磁器観察表

標記 番号	陶輪 番号	図版 番号	地区	遺構・層位	種類・基形	寸 (推定値)	器高 (現存高)	色調	備考
第48回	1	15	西区	小堀上面	直底器 (环身)	(底 11.9)	(H2.2)	外面：灰 口縁～内面：灰白	古墳時代末期? ～後半
第49回	1	15	南区 菓部	小堀上面	直底器 備	—	—	オーバープ	(古代) 平安
第49回	2	15	北区 北東部	石垣? 西面	輪入白磁 瓷	(底 6.7)	(H2.3)	軽土：褐	12c 後半
第49回	3	15	北区 SE	GP13	瓦器 壁	(推定 H 14.5)	(H1.8)	軽土：灰白 内面：灰	13c ~ 14c 初
第49回	4	15	北区 SE	GP76	瓦器 壁	(推定 H 14.6)	(H2.3)	軽土：灰白 内面：灰	13c ~ 14c 初
第49回	5	15	北区 SE	GP38	瓦器 壁	(底 13.8)	(H3.8)	軽土：灰白 体部：灰	14c
第49回	6	15	覆瓦?		瓦器 大鉢	(φ 36.4) (底 A.36.0)	(H5.4)	外面：灰白 軽土、内面：灰	15c 後半 ~ 16c
第49回	7	15	南区 E	西からの理工中層	直筒陶器	(φ 27.6)	(H6.8)	軽土：明赤鵠	15c 後半
第50回	1	15	南区 E	壁1 屋上層	土師器 直S	(底 A.36.0)	(H2.3)	浅黄	16c
第50回	2	15	南区 E	壁1 屋上層	土師器 直S	(φ 13.0)	(H1.7)	浅黄	16c
第50回	3	6	北区 SE	西側屋下	明染 瓷	(φ 14.0)	(H1.1)	軽土：白 釉：透明	16c
第50回	4	15	南区 E	南壁整形	土師器 变形羽茎	(φ 22.0)	(H1.4)	浅黄褐 (アンバタ)	大和型 16c 後葉
第50回	5	15	北区 SE	GP92	瓦器 羽茎	(φ 26.2) (羽茎 A.26.0)	(H2.9)	軽土：灰白 口縁から外側は 赤土、内面は灰白	南朝型 15c 実 ~ 16c 初
第50回	6	15	北区 SE	GP44	瓦器 羽茎 (茶垂か)	(φ 24.5) (羽茎 A.33.0)	(H6.1)	外面：灰白 内面：灰	16c 後半
第50回	7	15	北区 SE	GP16	瓦器 脚 (片口)	(φ 32.0)	(H3.9)	外面：淡黄 内面：灰白	16c 後半
第50回	8	15	南区 E	壁1 屋上層	直筒陶器 直筒桂枝	(φ 30.0)	(H5.1)	軽土：にぶい褐 器表面ににぶい赤褐色	16c 後半 (第3回半葉?)
第50回	9	15	南区 SW	p1139	土師器 直S?	(φ 9.6)	(H2.1)	褐	16c 第4四半期
第50回	10	15	北区 SE	GP78	土師器 直S	(φ 9.0)	(H2.5)	浅黄	16c 第4四半期
第50回	11	15	北区 SE	GP78	土師器 直S	(φ 11.0)	(H2.0)	にぶい褐	16c 第4四半期
第50回	12	15	北区 SE	GP78	土師器 直S	(φ 11.0)	(H2.1)	浅黄・にぶい褐	16c 第4四半期
第50回	13	15	北区 SW	p1139	土師器 直S	(φ 12.0)	(H2.3)	浅黄	16c 第4四半期
第50回	14	15	北区 SE	GP26	土師器 直S	(φ 13.0)	(H2.0)	浅黄	16c 第4四半期
第50回	15	15	北区 SE	GP78	土師器 直S	(φ 13.2)	(H2.0)	灰白 (アンバタ)	16c 第4四半期
第51回	1	15	西区	第1面溝跡	国産施釉陶器 瓦箱 里	(底 A.6.0)	(H1.1)	軽土：白～灰白 釉：灰オーバープ	美濃・瀬戸 16c 後葉～17c 初
第51回	2	15	西区	落込?	国産施釉陶器 鉢 天井鉢	(φ 11.6)	(H3.1)	軽土：灰白 釉：褐	美濃・瀬戸 17c 中葉～後半
第51回	3	15	西区	p115	国産施釉陶器 唐津 壁	(底 A.4.8)	(H2.5)	軽土：にぶい褐 釉：白	17c 南葉
第51回	4	15	北区 窯	壁1 北壁清掃	国産施釉陶器 鉢 天日焼	(φ 12.0)	(H3.1)	軽土：灰白 釉：褐～黒褐色	美濃・瀬戸 16c 後半
第51回	5	15	南区 菓部	小堀上面	国産施釉陶器 唐津 鉢 (向付) (口縁がくら)	(口縁 A.6.0)	(H3.0)	軽土：にぶい褐 釉：灰黄褐色 内面：口縁：黑	17c 南葉
第52回	1	15	南区 菓部	第1面溝跡	土師器 直S (打明里)	(φ 9.9)	(H2.3)	にぶい相	17c 中葉
第52回	2	15	南区 W	壁1面溝跡下	国産施釉陶器 唐津 鉢	(φ 22.0)	(H3.9)	軽土：灰白 釉：灰褐	三島手 17c 中葉～後半
第53回	1	15	南区 C	裏1	国産施釉陶器 瓦付 鉢	(φ 10.1)	(H5.5)	軽土：白 釉：透明釉	17c 後半～18c

法量の単位：cm

第10表 出土瓦観察表

埠区 番号	地圖番号 (種別番号)	地区	遺構・層位	瓦種類	金 G	津 J	朱 R	真当量 (cm)	破片の形状 (cm)	重量 (g)
第59区 1		南区 E	第1 直上層/上層(写真同様)	平瓦					6.4×6.0×1.5	80
第59区 2		南区 C 7	唐10	平瓦					9.5×9.0×1.9	79
第59区 3		北区 M/S/SE	第1 中層	平瓦					7.6×6.1×1.6	220
第59区 4		南区 C	唐11	平瓦					6.5×6.0×2.0	64
國版1	菊 H.1	南区 E	第1 西からの埋土中層	前丸瓦	○	○	○	φ14.0	14.0×9.3×4.1	426
國版1	菊 H.2	北区 M/S/SE	第1 中層	前丸瓦	○	○	○	φ11.1	11.1×11.0×6.2	319
國版1	菊 H.3	南区 E	第1 直上層	前丸瓦	○	○	○	φ11.3	10.5×9.0×2.0	208
國版1	菊 H.4	南区 E	第1 上層	前丸瓦	○	○	○	φ11.2	8.2×5.5×1.6	79
國版1	菊 H.5	北区 M/S/SE	第1 中層	前丸瓦	○	○	○	φ12.0	8.0×8.8×1.6	95
國版1	菊 H.6	南区 E	石1 直上層/西側掘口下	前丸瓦	P			φ10.7	10.1×8.6×1.2	165
國版1	菊 H.7	北区 中央部	飛瓦(瓦頭)	前丸瓦	○	○	○	φ11.8	9.4×6.0×1.7	99
國版1	菊 H.8	北区 私塹	石1 直上層/西側掘口下	前丸瓦	○	○	○	φ12.0	7.7×4.2×1.5	53
國版1	菊 H.9	南区 E	第1 直上層	前丸瓦	○	○	○	φ11.2	7.4×4.6×1.2	53
國版1	菊 H.10	南区 E	第1 直上層/上層	前丸瓦	○	○	○	φ11.2	6.2×4.8×1.5	38
國版1	菊 H.11	東区	石1 直上層/西側掘口下	前丸瓦	○	○	○	φ11.0	6.2×3.4×1.2	105
—	菊 H.12	北区 M/S/SE	第1 下層	前丸瓦	P		○	φ11.0	6.0×3.3×1.2	13
—	菊 H.13	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ11.6	7.2×2.3×1.5	36
國版1	菊 H.14	北区 NF	第1 直上層	前丸瓦	○	○	○	φ13.0	9.8×6.0×1.6	12
國版1	菊 H.15	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ13.0	10.7×3.8×1.5	166
國版1	菊 H.16	南区 E	第1 直上層	前丸瓦	○	○	○	φ13.0	10.9×6.7×1.4	215
國版1	菊 H.17	南区 E	第1 上層	前丸瓦	○	○	○	φ13.0	8.5×6.2×1.3	110
國版1	菊 H.18	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ13.0	7.5×6.2×1.4	88
國版1	菊 H.19	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	P		○	φ13.9	9.7×7.0×1.8	110
國版1	菊 H.20	南区 E	第1 西からの埋土下層	前丸瓦	○	○	○	φ14.0	8.9×3.0×1.6	54
國版1	菊 H.21	北区 M/S/SE	第1 中層	前丸瓦	○	○	○	φ12.2	6.2×2.3×1.4	25
國版1	菊 H.22	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ11.6	11.6×6.3×1.9	154
國版1	菊 H.23	北区 SF	新利1(東底部)積土	前丸瓦	○	○	○	φ11.8	9.3×6.5×5.5	163
國版1	菊 H.24	南区 C	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ12.6	10.9×7.3×2.3	161
國版2	菊 H.25	南区 E	第1 西からの埋土中層	前丸瓦	○	○	○	φ13.8	6.5×3.2×2.0	29
國版2	菊 H.26	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ13.8	5.0×4.3×1.9	49
—	菊 H.27	南区 E	第1 西からの埋土中層	前丸瓦	○	○	○	φ—	7.8×6.4×1.7	68
國版2	菊 H.28	北区 M/S/SE	第1 中層	前丸瓦	○	○	○	φ13.6	11.5×6.5×5.3	231
國版2	菊 H.29	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ13.8	12.0×6.5×1.4	162
國版2	菊 H.30	南区 E	第1 面清掃	前丸瓦	○	○	○	φ13.0	6.6×6.0×1.5	67
—	菊 H.31	北区 NF/SE	第1 下層	前丸瓦	○	○	○	φ12.0	6.4×4.8×1.7	47
國版2	菊 H.32	北区	内土 表鉢	前丸瓦	○	○	○	φ13.0	9.3×6.3×2.6	102
國版2	菊 H.33	北区	内土 表鉢	前丸瓦	○	○	○	φ14.4	8.4×5.9×1.4	79
國版2	菊 H.34	南区 C	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ13.6	7.6×5.1×1.8	67
—	菊 H.35	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ—	6.5×3.6×1.2	23
國版2	菊 H.36	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ—	4.5×2.3×1.2	22
國版2	菊 H.37	東北区 SE	石1直上層/西側掘口(北)	前丸瓦	○	○	○	φ12.6	8.0×7.5×2.0	112
國版2	菊 H.38	東区 SE	石1直上層/西側掘口(北)	前丸瓦	○	○	○	φ15.0	5.5×4.6×2.0	38
—	菊 H.39	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ15.0	5.2×2.8×2.1	36
國版2	菊 H.40	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ—	8.2×5.3×3.0	110
國版2	菊 H.41	南区 E	第1 上層	前丸瓦	○	○	○	φ14.0	6.6×4.4×1.4	60
—	菊 H.42	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ—	7.1×4.3×2.5	67
—	菊 H.43	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ—	6.5×3.1×1.9	58
國版2	菊 H.44	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ15.4	8.3×6.8×2.0	101
國版2	菊 H.45	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ15.0	10.0×6.2×5.2	201
國版2	菊 H.46	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ14.2	12.0×6.3×5.7	274
國版2	菊 H.47	南区 E	第1 上層	前丸瓦	○	○	○	φ15.0	9.4×6.4×2.4	157
—	菊 H.48	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ15.0	8.6×4.5×2.1	65
國版2	菊 H.49	北区	内土 清掃	前丸瓦	○	○	○	φ15.4	9.1×7.2×2.1	154
國版2	菊 H.50	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ14.0	10.8×6.0×3.0	217
—	菊 H.51	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ—	3.1×2.6×1.7	14
—	菊 H.52	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ—	3.7×1.7×1.1	6
—	菊 H.53	南区 E	第1 西からの埋土中層	前丸瓦	○	○	○	φ—	2.2×2.3×2.1	11
—	菊 H.54	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ—	4.8×4.2×1.9	39
—	菊 H.55	南区 E	第1 上層	前丸瓦	○	○	○	φ—	2.3×1.9×1.3	2
—	菊 H.56	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ—	4.3×2.3×1.4	20
—	菊 H.57	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ—	6.7×2.8×1.7	20
—	菊 H.58	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ—	5.7×2.4×2.2	20
—	菊 H.59	南区 E	第1 西からの埋土直上層	前丸瓦	○	○	○	φ—	4.3×2.7×1.9	22
—	菊 H.60	南区 E	第1 上層	前丸瓦	○	○	○	φ—	10.0×10.0×1.9	270
國版2	軒丸瓦文2	北区	内土 表鉢	軒丸瓦 菊文	○	○	○	φ12.9	12.5×11.4×1.6	146
—	軒丸瓦文2	南区 E	第1 西からの埋土直上層	軒丸瓦 菊文	○	○	○	φ12.6	4.5×3.2×1.4	23
—	軒丸瓦文2	南区 E	第1 西からの埋土直上層	軒丸瓦 菊文	○	○	○	φ15.0	4.0×4.5×2.2	48
國版2	軒丸瓦文2	南区 E	第1 西からの埋土直上層	軒丸瓦 菊文	○	○	○	φ15.0	10.0×9.2×1.8	146
—	軒丸瓦文2	北区 NE/SE	第1 中層	軒丸瓦 菊文	○	○	○	φ14.8	10.5×6.7×1.4	155
國版2	軒丸瓦文2	南区 E	第1 中層	軒丸瓦 菊文	○	○	○	φ15.4	8.1×3.2×2.5	61
—	軒丸瓦文2	北区 NE	石1 直上層/黄褐色粘土下層	軒丸瓦 菊文	○	○	○	φ16.2	9.0×8.2×0.8	158
—	軒丸瓦文2	南区 E	第1 上層	軒丸瓦 菊文	○	○	○	φ16.4	5.8×3.3×2.4	43
—	軒丸瓦文3	南区 E	第1 西からの埋土中層	軒丸瓦 菊文	○	○	○	φ20.0	10.7×8.2×2.0	182
—	軒丸瓦文3	北区 SE	新利1(東底部)近代理土	軒丸瓦 菊文	○	○	○	φ16.0	5.3×3.9×1.8	30
國版2	軒丸瓦文3	南区 E	第1 上層	軒丸瓦 菊文	○	○	○	φ16.4	11.2×9.0×1.9	225
國版2	軒丸瓦文3	南区 E	第1 上層	軒丸瓦 菊文	○	○	○	φ16.8	10.2×6.5×1.8	131
國版2	軒丸瓦文3	北区 SE	第1 (名張部)	軒丸瓦 菊文	○	○	○	φ17.4	12.4×4.2×1.7	95
國版2	軒丸瓦文5	南区 E	第1 上層	軒丸瓦 菊文	○	○	○	φ17.6	17.3×11.0×2.5	378

辨認番号	辨認番号(別冊番号)	地区	遺構・層位	瓦種類	金 G			銀 J			銅 R			瓦当径 [cm]	破片の収量 [g]	重量 [g]
					金 G	銀 J	銅 R	金 G	銀 J	銅 R	金 G	銀 J	銅 R			
国版3	軒丸頭文	北区 NE/SE	塙I 中層 (西側)	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.0	9.3×7.0×2.2	166
国版4	軒丸頭文大	南区 E	塙I 上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.0	8.1×5.5×1.3	121
国版5	軒丸頭文	北区 南西部	第1面 清層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.0	8.0×5.5×1.7	126
国版6	軒丸頭文	北区 SE	断削9 I (東張) 近現代耕土	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ17.4	6.5×5.7×2.2	103
国版7	軒丸頭文10	北区	瓦土 表鉢	新丸瓦・鰐文	少	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.2	16.0×10.0×2.9	391
国版8	軒丸頭文11	南区 E	塙I 中層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.4	9.4×7.1×2.0	160
国版9	軒丸頭文12	南区 E	塙I 上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ16.4	7.1×5.5×1.2	97
国版10	軒丸頭文13	南区 E	塙I 上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.8	12.2×6.0×1.8	178
—	軒丸頭文14	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	3.1×2.7×1.2	9
国版11	軒丸頭文15	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.0	8.5×4.3×1.4	115
国版12	軒丸頭文16	南区 E	塙I 西からの明土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.4	5.5×3.6×1.7	64
国版13	軒丸頭文17	南区 E	塙I 中層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.4	9.8×8.0×0.8	251
国版14	軒丸頭文18	北区 NE/SE	塙I 中層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.2	6.2×4.0×2.0	59
国版15	軒丸頭文19	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	少	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.5	18.8×36.8×3.0	728
国版16	軒丸頭文20	北区 北部	近代理地土 (大露庭)	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.0	15.5×10.4×7.0	738
国版17	軒丸頭文21	南区 E	土上土 (復土)	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.2	13.8×9.5×4.0	258
国版18	軒丸頭文22	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.6	8.0×4.5×2.2	168
国版19	軒丸頭文23	南区 E	古代以降埋地土	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.0	4.0×4.3×1.1	55
国版20	軒丸頭文24	南区 E	塙I 中層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.2	6.8×4.8×2.0	58
国版21	軒丸頭文25	北区 南部	第1面 清層	新丸瓦・鰐文	少	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.2	7.0×5.5×2.0	85
—	軒丸頭文26	南区 E	塙I 西からの埋土中層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.2	6.1×3.2×3.5	114
国版27	軒丸頭文27	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.4	8.6×5.3×3.4	175
国版28	軒丸頭文28	南区 E	塙I 最上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.2	7.0×8.5×3.5	93
国版29	軒丸頭文29	南区 E	塙I 上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.4	9.0×5.5×3.0	132
国版30	軒丸頭文30	南区 E	塙I 最上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.4	7.2×10.2×5.0	449
国版31	軒丸頭文31	南区 E	塙I 上層	新丸瓦・鰐文	少	少	○	○	○	○	○	○	○	φ20.4	10.7×7.9×3.0	280
—	軒丸頭文32	南区 E	塙I 中層	新丸瓦・鰐文	少	少	○	○	○	○	○	○	○	φ20.4	8.8×3.7×3.0	97
—	軒丸頭文33	南区 E	塙I 西からの埋土中層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.4	9.5×3.8×3.7	113
国版34	軒丸頭文34	南区 E	塙I 上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ21.0	12.0×8.6×8.2	225
国版35	軒丸頭文36	南区 E	塙I 上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ21.6	6.2×2.0×3.0	96
—	軒丸頭文37	南区 E	石垣I 西側 (東壁) 塙I 最上層/上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	9.7×4.3×1.8	107
—	軒丸頭文38	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	9.5×3.9×1.9	68
—	軒丸頭文39	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	少	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	6.5×5.0×2.5	162
—	軒丸頭文40	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	7.0×2.5×2.2	55
—	軒丸頭文41	北区 NE	塙I 最上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	6.1×5.0×2.5	71
—	軒丸頭文42	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	5.7×3.0×2.0	39
—	軒丸頭文43	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	6.7×2.8×2.1	25
—	軒丸頭文44	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	5.8×2.1×2.2	28
—	軒丸頭文45	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	5.2×3.0×2.2	31
—	軒丸頭文46	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	5.4×3.1×1.9	29
—	軒丸頭文47	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	5.0×3.1×1.2	7
—	軒丸頭文48	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	3.0×2.9×0.6	8
—	軒丸頭文49	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・鰐文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	3.0×2.9×0.6	8
国版50	軒丸頭文50	南区 E	塙I 西側腹下?	新丸瓦・巴文	少	○	○	○	○	○	○	○	○	φ14.7	13.0×5.5×1.9	132
国版51	軒丸頭文51	北区 NW	p111	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ15.0	13.4×7.5×2.0	185
国版52	軒丸頭文52	北区 NW	p111	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ16.2	16.0×8.2×2.7	308
国版53	軒丸頭文53	北区 NW	土机2	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ16.8	16.0×7.6×2.5	237
国版54	軒丸頭文54	北区 NW	松原	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ17.2	16.0×6.7×4.0	247
国版55	軒丸頭文55	南区 E	塙I 西からの埋土中層	新丸瓦・巴文	少	少	○	○	○	○	○	○	○	φ18.0	8.5×3.6×2.0	119
国版56	軒丸頭文56	南区 E	塙I 最上層/上層 (等高面清層)	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.5	3.3×3.9×0.5	292
—	軒丸頭文57	北区 NW	石垣I 西面 黃灰土質實土	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.0	4.0×3.8×2.7	13
国版58	軒丸頭文58	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.0	13.5×17.7×5.3	900
国版59	軒丸頭文59	南区 E	塙I 西からの埋土中層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.4	10.0×8.6×4.8	111
国版60	軒丸頭文60	南区 E	土上 (復土)	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.4	10.7×12.2×6.0	413
国版61	軒丸頭文61	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ18.6	5.6×5.0×2.5	65
国版62	軒丸頭文62	南区 E	塙I 西からの埋土中層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ19.5	7.9×7.0×5.5	266
国版63	軒丸頭文63	南区 E	石垣I 西側腹下?	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ19.6	7.1×4.8×2.5	56
国版64	軒丸頭文64	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ19.8	8.6×8.0×5.2	331
国版65	軒丸頭文65	南区 E	小籠上面	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ19.8	34.1×7.9×7.8	557
国版66	軒丸頭文66	南区 E	塙I 中層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ19.9	19.9×13.6×2.7	730
国版67	軒丸頭文67	北区 NW/NE	塙I 西からの埋土中層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.0	13.7×9.4×2.3	225
国版68	軒丸頭文68	南区 E	塙I 西からの埋土中層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.0	7.4×9.1×2.8	178
国版69	軒丸頭文69	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.0	13.0×10.2×3.2	267
国版70	軒丸頭文70	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.2	7.5×5.5×2.6	99
国版71	軒丸頭文71	南区 E	塙I 西からの埋土中層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.4	7.6×4.6×2.7	103
国版72	軒丸頭文72	南区 E	塙I 最上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.4	8.3×5.5×2.6	111
国版73	軒丸頭文73	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.4	10.7×5.7×3.4	194
国版74	軒丸頭文74	南区 E	古代以降埋地土 (蘿蔓)	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.5	8.0×7.0×2.5	169
国版75	軒丸頭文75	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.5	8.3×10.6×0.4	369
国版76	軒丸頭文76	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ20.8	5.8×7.0×2.5	218
—	軒丸頭文77	北区 NW/SE	塙I 上層/中層 (西側)	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ21.4	7.5×7.0×4.2	71
国版78	軒丸頭文78	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ21.8	8.2×8.0×2.5	155
国版79	軒丸頭文79	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	8.5×9.3×3.8	211
国版80	軒丸頭文80	南区 E	塙I 最上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	3.7×10.3×2.5	367
—	軒丸頭文81	南区 E	塙I 最上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	8.3×9.3×1.7	98
—	軒丸頭文82	南区 E	塙I 最上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	8.3×9.3×1.7	98
—	軒丸頭文83	南区 E	塙I 西からの埋土上層	新丸瓦・巴文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	φ—	6.0×4.5×1.5	56

埋蔵年 番号	複数番号 (種別番号)	地区	遺構・層位	瓦種類	金 G	銀 J	銅 K	朱 R	瓦当個 (ea)	破片の面量 (ea)	重量 (g)
—	軒瓦又36	南区 E	小礫上面	軒瓦 巴文	少	少	少	少	2,6×3,6×1,9	39	
—	軒瓦又37	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒瓦 巴文	○	○	○	○	6,3×5,2×1,7	37	
—	軒瓦又38	北区 E/SR	古代 陪葬	近代式埋土 (大縁頭) 並部	軒瓦 巴文	少	少	少	9,3×7,2×4,1	229	
—	軒瓦又39	東区	—	軒瓦 巴文	少	少	少	少	6,4×6,6×1,5	45	
—	軒瓦又40	北区 E/SR	第1 上層	軒瓦 巴文	少	少	少	少	5,0×3,7×1,6	34	
—	軒瓦又41	南区 E	第9	軒瓦 巴文	○	○	○	○	7,4×5,2×1,3	66	
—	軒瓦又42	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒瓦 巴文	少	少	少	少	5,3×2,5×1,3	18	
—	軒瓦又43明3	南区 E	第1 上層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	13,1×7,5×3,4	133	
—	軒瓦又43明2	南区 E	第1 最上層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	16,0	13,1×7,5×3,4	133
—	軒瓦又43明3	南区 E	第1 上層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	16,6	6,7×3,6×2,5	60
—	軒瓦又43明4	南区 E	第1 最上層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	17,5	6,6×2,9×3,5	61
—	軒瓦又43明5	南区 E	第1 中層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	18,0	6,2×2,9×1,9	15
—	軒瓦又43明6	南区 E	第1 中層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	18,0	6,4×3,4×2,1	37
—	軒瓦又43明7	北区 NE/SR	第1 西からの埋土最上層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	18,8	5,7×4,6×3,1	79
—	軒瓦又43明8	北区 NE/SR	埋瓦2	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	19,0	10,0×11,8×3,0	610
—	軒瓦又43明9	北区 NE/SR	第1 中層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	19,6	6,8×2,7×2,7	37
—	軒瓦又43明10	南区 E	第1 上層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	19,6	6,2×3,4×2,5	55
—	軒瓦又43明11	南区 E	古代式墳地盤 (縁頭)	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	19,8	9,0×2,9×2,6	71
—	軒瓦又43明12	南区 E/C	第1 西からの埋土半層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	20,2	4,2×1,9×2,4	47
—	軒瓦又43明13	南区 E	古代式埋土	軒瓦 巴文種不明	少	少	少	少	20,2	10,1×4,7×2,5	100
—	軒瓦又43明14	南区 E	小礫上面	軒瓦 巴文種不明	少	少	少	少	20,1	8,0×3,2×3,0	96
—	軒瓦又43明15	北区 NW	p123	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	20,6	15,5×12,3×5	563
—	軒瓦又43明16	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	20,8	8,4×4,5×4,8	78
—	軒瓦又43明17	南区 E	第1 上層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	20,8	5,2×3,9×2,6	48
—	軒瓦又43明18	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	21,0	3,6×3,2×1,6	17
—	軒瓦又43明19	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒瓦 巴文種不明	少	少	少	少	—	4,5×4,7×2,6	49
—	軒瓦又43明20	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	—	5,7×2,5×3,0	27
—	軒瓦又43明21	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	—	3,8×0,6×2,1	25
—	軒瓦又43明22	南区 E	第1 西からの埋土中層	軒瓦 巴文種不明	少	少	少	少	—	3,6×2,2×3,0	17
—	軒瓦又43明23	南区 E	第1 西からの埋土中層	軒瓦 巴文種不明	少	少	少	少	—	3,0×2,2×1,2	7
—	軒瓦又43明24	南区 E	第1 西からの埋土上層	軒瓦 巴文種不明	少	少	少	少	—	2,4×1,5×1,5	8
—	軒瓦又43明25	南区 E	第1 西からの埋土上層	軒瓦 巴文種不明	少	少	少	少	—	1,5×1,7×1,0	2
—	軒瓦又43明26	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒瓦 巴文種不明	少	少	少	少	—	2,9×1,5×0,6	3
—	軒瓦又43明27	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	—	2,5×1,9×0,8	1
—	軒瓦又43明28	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	—	1,2×0,7×0,4	1
—	軒瓦又43明29	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒瓦 巴文種不明	○	○	○	○	—	3,0×1,1×0,8	3
—	軒瓦又43明30	南区 E	第1 西からの埋土中層	軒瓦 巴文種不明	少	少	少	少	—	1,7×0,8×1,7	4
—	軒平又1	南区 E	第1 最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	16,0×5,5×2,5	298	
—	軒平又2	北区 NE/SR	第1 中層	軒平 巴文	少	少	少	少	13,7×6,4×0,9	330	
—	軒平又3	北区	椎土 未採	軒平 巴文	○	○	○	○	13,7×6,9×0,6	354	
—	軒平又4	南区 E	第1 最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	10,5×5,5×4,0	247	
—	軒平又5	南区 E	第1 最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	8,1×5,5×3,7	121	
—	軒平又6	南区 E	第1 最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	8,0×5,0×2,7	77	
—	軒平又7	南区 E	第1 最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	7,9×6,8×3,3	76	
—	軒平又8	西区 W	第1 間べた面 (下層)	軒平 巴文 (清水屋)	○	○	○	○	12,0×4,3×3,2	235	
—	軒平又9	南区 E	第1 西からの埋土最上層/上層	軒平 巴文	○	○	○	○	19,1×2,7×4,4	520	
—	軒平又10	南区 E	第1 最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	7,4×6,8×3,7	143	
—	軒平又11	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	少	少	少	少	13,9×7,0×6,8	484	
—	軒平又12	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	少	少	少	少	10,5×6,9×7,1	372	
—	軒平又13	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	少	少	少	少	9,5×6,0×4,3	189	
—	軒平又14	南区 E	第1 最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	11,5×6,7×3,4	283	
—	軒平又15	南区 E	第1 最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	10,7×6,6×0,6	221	
—	軒平又16	南区 E	第1 中層	軒平 巴文	○	○	○	○	11,2×6,7×5,9	314	
—	軒平又17	北区 NE/SR	第1 中層	軒平 巴文	○	○	○	○	13,7×6,7×3,9	365	
—	軒平又18	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	10,3×6,6×0,9	285	
—	軒平又19	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	7,0×5,5×5,4	137	
—	軒平又20	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	11,8×6,9×7,3	274	
—	軒平又21	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	9,5×6,0×8,0	189	
—	軒平又22	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	8,0×5,6×3,3	109	
—	軒平又23	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	9,4×5,5×3,3	110	
—	軒平又24	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	8,5×6,4×2,7	89	
—	軒平又25	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	5,8×3,6×3,5	72	
—	軒平又26	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	少	少	少	少	6,2×3,6×2,9	28	
—	軒平又27	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	4,5×2,1×2,7	21	
—	軒平又28	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	2,4×1,6×1,6	17	
—	軒平又29	南区 E	第1 西からの埋土最上層	軒平 巴文	○	○	○	○	2,4×1,6×2,0	6	
—	軒平又30	北区 NE/SR	第1 中層 (薄)	軒平 巴文	○	○	○	○	5,5×4,0×3,0	44	
—	軒平草又1	北区 NE/SR	第1 西からの埋土最上層	軒平 唐草文	○	○	○	○	8,6×4,6×2,6	79	
—	軒平草又2	南区 E	第1 上層	軒平 唐草文	○	○	○	○	6,1×4,7×3,3	85	
—	軒平草又3	北区 NE/SR	第1 下層	軒平 唐草文	○	○	○	○	7,0×5,6×4,0	161	
—	軒平草又4	南区 E	第1 西からの埋土下層 (石函2箇所)	軒平 唐草文	○	○	○	○	7,0×5,1×3,4	129	
—	軒平草又5	南区 E	第1 西からの埋土下層 (石函2箇所)	軒平 唐草文	○	○	○	○	9,5×5,5×7,7	220	
—	軒平草又6	—	上土 (残土)	軒平 唐草文	○	○	○	○	11,1×5,2×4,0	228	
—	軒平草又7	東区/南区 E	石臼1 西面 蒼灰付黏土質上	軒平 唐草文	○	○	○	○	5,5×4,0×3,0	44	
—	軒平草又8	南区 E	西面 (北張)	軒平 唐草文	○	○	○	○	8,6×4,6×2,6	79	
—	軒平草又9	南区 E	第1 西からの埋土中層	軒平 唐草文	○	○	○	○	6,1×4,7×3,3	85	
—	軒平草又10	南区 E	第1 中層	軒平 唐草文	○	○	○	○	7,0×5,6×4,0	161	
—	軒平草又11	北区 NE/SR	第1 中層	軒平 唐草文 (清水屋)	○	○	○	○	27,0×2,7×7,7	1090	
—	軒平草又12	北区	椎土 未採	軒平 唐草文	○	○	○	○	12,1×6,8×4,8	237	
—	軒平草又13	南区 E	第1 最上層	軒平 唐草文 (清水屋)	○	○	○	○	8,5×5,7×5,7	235	
—	軒平草又14	南区 E	小礫上面	軒平 唐草文 (清水屋)	少	少	少	少	12,1×4,9×2,8	192	

地図番号	地図番号(測量番号)	地区	道・橋・層位	瓦種類	金 G	銀 J	銅 R	瓦当幅 (cm)	破片の伝量 (g)	重量 (g)
—	野子草文15	街区 E	坂上層	野子瓦、漁草文(漁水風)	○	○	○	5.2×4.5×3.9	65	
—	野子草文16	北区 NE/SW	坂上 中層	野子瓦、漁草文(漁水風)	△	△	○	6.4×2.2×5.6	192	
—	野子草文17	街区 E	坂上層	野子瓦、漁草文(漁水風)	○	○	○	6.5×2.0×4.2	39	
—	野子文種不明1	—	上げ土(残土)	野子瓦、文種不明	△	○	○	6.8×4.6×4.0	103	
—	野子文種不明2	北区 NE	坂上 下層	野子瓦、文種不明	○	○	○	6.8×4.6×3.7	129	
—	野子文種不明3	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	野子瓦、文種不明	○	○	○	6.8×5.5×2.4	86	
—	野子文種不明4	街区 E	坂上 地下層	野子瓦、文種不明	○	○	○	7.1×4.6×2.7	85	
—	野子文種不明5	街区 C	第1面 坡下T字	野子瓦、文種不明	△	○	○	6.0×5.4×4.5	64	
—	野子文種不明6	北区 SE	坂上 地下層(大走り回)	野子瓦、文種不明	○	○	○	3.3×3.0×0.9	25	
—	野子文種不明7	街区 E	坂上 層	野子瓦、文種不明	○	○	○	5.0×2.0×1.5	26	
—	野子文種不明8	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	野子瓦、文種不明	○	○	○	2.9×2.6×2.1	8	
国造9	輪造V-1	街区 E(北低張)	坂上 西かららの理工大学上層/中層	輪造V-1	○	○	○	24.0×14.6×2.3	779	
国造9	輪造V-2	北区 NE/SW	坂上 地下層	輪造V-1	○	○	○	11.7×14.6×3.9	917	
国造9	輪造V-3	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	11.7×16.8×2.0	584	
国造9	輪造V-4	街区 E	坂上 地下層	輪造V-1	○	○	○	10.5×10.0×2.0	284	
国造9	輪造V-5	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	9.5×8.0×2.6	233	
国造9	輪造V-6	北区 NE/SW	坂上 地下層	輪造V-1	○	○	○	9.0×11.8×1.7	211	
—	輪造V-7	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	8.5×9.0×1.3	205	
国造9	輪造V-8	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	9.5×9.5×1.7	187	
国造9	輪造V-9	街区 E	坂上 西かららの理工大学中層	輪造V-1	○	○	○	7.7×9.5×1.7	148	
—	輪造V-10	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	7.5×9.0×1.7	150	
国造9	輪造V-11	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	7.8×8.8×1.8	177	
国造9	輪造V-12	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	10.1×10.1×1.8	215	
—	輪造V-13	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	8.0×9.5×2.0	231	
国造9	輪造V-14	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	8.0×9.7×1.9	185	
国造9	輪造V-15	街区 E	坂上 地下層	輪造V-1	○	○	○	7.3×9.5×1.7	151	
—	輪造V-16	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.5×8.0×1.9	149	
—	輪造V-17	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	7.4×8.0×2.0	143	
—	輪造V-18	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	7.5×7.8×1.5	137	
国造9	輪造V-19	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	8.0×6.0×1.8	93	
—	輪造V-20	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.4×6.2×1.5	81	
国造9	輪造V-21	北区 NE/SW	坂上 中層	輪造V-1	○	○	○	11.2×15.7×1.5	300	
国造9	輪造V-22	北区 NE/SW	坂上 中層	輪造V-1	○	○	○	8.8×14.9×1.5	219	
—	輪造V-23	街区 E	坂上 西かららの理工大学中層	輪造V-1	○	○	○	8.4×13.1×1.3	230	
—	輪造V-24	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	9.0×11.8×1.6	199	
—	輪造V-25	街区 E	坂上 地下層	輪造V-1	○	○	○	9.0×9.3×1.7	173	
—	輪造V-26	街区 E	坂上 地下層	輪造V-1	○	○	○	10.0×8.7×1.9	193	
—	輪造V-27	街区 E	坂上 西かららの理工大学下層	輪造V-1	○	○	○	6.6×7.7×1.8	107	
—	輪造V-28	西区 N	第1面 ベース面(丁層)	輪造V-1	○	○	○	6.5×7.7×1.8	63	
—	輪造V-29	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	7.5×9.5×1.9	182	
国造9	輪造V-30	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	11.5×14.5×2.0	473	
—	輪造V-31	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	8.5×6.0×2.0	122	
—	輪造V-32	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	9.7×6.0×1.9	136	
—	輪造V-33	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	7.5×5.3×1.7	98	
—	輪造V-34	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.2×9.0×1.5	139	
—	輪造V-35	街区 E	坂上 地下層	輪造V-1	○	○	○	7.4×8.1×1.7	144	
—	輪造V-36	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.5×6.3×1.5	122	
—	輪造V-37	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.5×6.3×1.9	131	
—	輪造V-38	街区 E	坂上 西かららの理工大学中層	輪造V-1	○	○	○	6.9×11.0×1.9	182	
—	輪造V-39	街区 E	坂上 西かららの理工大学中層	輪造V-1	○	○	○	7.5×6.0×2.0	150	
—	輪造V-40	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	7.4×6.0×1.9	101	
—	輪造V-41	街区 E	坂上 西かららの理工大学中層	輪造V-1	○	○	○	6.7×7.7×1.7	108	
—	輪造V-42	街区 E	坂上 西かららの理工大学中層	輪造V-1	○	○	○	7.3×8.7×1.9	155	
—	輪造V-43	街区 E	坂上 西かららの理工大学中層	輪造V-1	○	○	○	5.1×9.5×1.8	141	
—	輪造V-44	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.5×8.3×1.7	117	
—	輪造V-45	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	7.2×7.5×1.6	98	
—	輪造V-46	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.7×7.7×1.7	87	
—	輪造V-47	街区 E	坂上 西かららの理工大学中層	輪造V-1	○	○	○	5.5×8.9×1.6	92	
—	輪造V-48	街区 E	坂上 上層	輪造V-1	○	○	○	6.2×9.4×1.7	126	
—	輪造V-49	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.1×7.2×1.7	100	
—	輪造V-50	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	7.2×9.3×1.9	117	
—	輪造V-51	街区 E	坂上 西かららの理工大学中層	輪造V-1	○	○	○	6.5×6.2×1.8	77	
—	輪造V-52	街区 E	坂上 地下層	輪造V-1	○	○	○	5.4×8.4×1.8	106	
—	輪造V-53	北区 SE	坂上 中層	輪造V-1	○	○	○	7.7×8.8×1.6	108	
—	輪造V-54	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	5.1×7.7×1.5	78	
—	輪造V-55	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	5.5×6.6×1.7	85	
—	輪造V-56	街区 F	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.6×8.7×1.5	77	
—	輪造V-57	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.1×6.0×1.8	69	
—	輪造V-58	街区 E	坂上 西かららの理工大学中層	輪造V-1	○	○	○	5.5×6.6×1.7	65	
—	輪造V-59	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.3×6.7×1.6	79	
—	輪造V-60	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.3×9.6×1.9	106	
—	輪造V-61	北区 NE/SW	坂上 中層	輪造V-1	○	○	○	7.5×6.6×1.6	96	
—	輪造V-62	北区 NE/SW	坂上 地下層	輪造V-1	○	○	○	7.6×6.3×1.6	123	
—	輪造V-63	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.5×6.2×1.6	111	
—	輪造V-64	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	5.5×5.3×1.6	81	
—	輪造V-65	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	5.5×6.3×1.6	71	
—	輪造V-66	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.5×5.5×1.5	67	
—	輪造V-67	街区 E	坂上 西かららの理工大学上層	輪造V-1	○	○	○	6.0×6.0×1.8	109	
—	輪造V-68	街区 E	坂上 地下層	輪造V-1	○	○	○	7.7×5.0×1.6	72	

埋設番号	機器番号 (機器番号)	地区	遺構・層位	瓦類型	金 G	銀 J	銅 K	瓦当径 (cm)	破片の長さ (cm)	重量 (g)
—	輪造1-69	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	6.4×7.2×2.1	99	
—	輪造1-70	南区 E	壁1 西からの埋土上層 上子土(残土)	輪造1瓦	○	○	○	5.7×6.1×1.5	63	
—	輪造1-71	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	7.2×6.8×1.7	99	
—	輪造1-72	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	△	○	○	6.6×7.7×2.0	97	
—	輪造1-73	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	6.0×6.0×1.7	92	
—	輪造1-74	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	7.0×6.2×1.5	54	
—	輪造1-75	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	△	○	○	5.5×6.6×1.6	69	
—	輪造1-76	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	7.2×6.8×2.1	74	
—	輪造1-77	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	7.7×3.8×1.7	67	
—	輪造1-78	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	△	○	○	5.5×6.8×1.5	51	
—	輪造1-79	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	5.8×4.7×1.5	55	
—	輪造1-80	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	7.3×4.4×1.8	77	
—	輪造1-81	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	4.4×7.5×1.5	60	
—	輪造1-82	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	5.2×6.9×1.4	52	
—	輪造1-83	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	△	○	○	5.0×5.1×1.6	54	
—	輪造1-84	北区 N/E/S	壁1 中層	輪造1瓦	○	○	○	5.7×5.9×1.3	31	
—	輪造1-85	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	6.6×4.5×1.6	54	
—	輪造1-86	北区 S/W	清灰(焼成)	輪造1瓦	○	○	○	6.0×4.6×1.9	51	
—	輪造1-87	北区 S/W	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	5.3×4.2×1.5	57	
—	輪造1-88	北区 S/W	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	6.6×4.5×1.6	54	
—	輪造1-89	北区 S/W	壁1 下層	輪造1瓦	○	○	○	5.5×5.9×1.4	55	
—	輪造1-90	北区 S/W	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	6.3×4.3×1.8	67	
—	輪造1-91	南区 E	壁1 上層	輪造1瓦	○	○	○	3.4×5.9×1.4	45	
—	輪造1-92	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	3.6×5.8×1.5	54	
—	輪造1-93	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	6.0×5.0×1.5	49	
—	輪造1-94	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	△	○	○	4.0×4.1×1.9	51	
—	輪造1-95	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	5.1×4.2×1.6	63	
—	輪造1-96	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	5.7×4.2×1.4	61	
—	輪造1-97	北区 N/E/S	壁1 中層	輪造1瓦	○	○	○	4.1×5.7×1.5	48	
—	輪造1-98	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	4.5×4.3×1.6	68	
—	輪造1-99	北区 N/E/S	壁1 中層	輪造1瓦	○	○	○	4.8×6.4×2.1	58	
—	輪造1-100	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	5.3×4.1×1.7	50	
—	輪造1-101	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	6.0×3.0×1.5	29	
—	輪造1-102	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	4.2×5.0×1.3	34	
—	輪造1-103	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	3.9×4.9×1.3	32	
—	輪造1-104	北区 E	p187	輪造1瓦	○	○	○	3.8×5.0×1.5	38	
—	輪造1-105	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	△	○	○	4.7×4.5×1.5	31	
—	輪造1-106	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	3.6×4.1×1.3	23	
—	輪造1-107	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	4.7×5.4×1.6	48	
—	輪造1-108	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	4.6×4.7×1.6	52	
—	輪造1-109	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	5.2×4.2×1.8	48	
—	輪造1-110	北区 N/E/S	壁1 中層	輪造1瓦	△	○	○	4.5×4.3×1.7	48	
—	輪造1-111	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	4.0×4.6×1.2	39	
—	輪造1-112	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	4.5×4.1×1.6	38	
—	輪造1-113	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	5.5×3.0×2.0	43	
—	輪造1-114	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	5.0×3.9×1.5	33	
—	輪造1-115	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	4.3×4.5×1.5	40	
—	輪造1-116	南区 E	南壁前	輪造1瓦	○	○	○	5.0×4.2×1.6	49	
—	輪造1-117	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	4.6×3.5×1.7	36	
—	輪造1-118	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	4.7×6.6×1.8	66	
—	輪造1-119	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	5.0×3.5×1.9	37	
—	輪造1-120	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	4.4×5.8×1.9	41	
—	輪造1-121	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	5.2×3.4×1.6	27	
—	輪造1-122	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	4.7×3.9×1.7	27	
—	輪造1-123	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	4.6×3.2×1.5	33	
—	輪造1-124	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	4.7×4.6×1.8	38	
—	輪造1-125	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	3.6×4.0×1.4	24	
—	輪造1-126	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	3.6×3.4×1.8	29	
—	輪造1-127	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	4.3×4.5×1.6	27	
—	輪造1-128	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	4.0×4.6×1.5	38	
—	輪造1-129	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	3.7×3.3×1.8	25	
—	輪造1-130	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	3.2×3.7×2.1	26	
—	輪造1-131	南区 E	壁1 上層	輪造1瓦	○	○	○	3.6×3.8×2.0	21	
—	輪造1-132	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	3.8×3.8×1.5	17	
—	輪造1-133	北区 N/E/S	壁1 下層	輪造1瓦	○	○	○	3.1×3.7×1.5	19	
—	輪造1-134	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	4.0×2.7×1.5	13	
—	輪造1-135	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	2.4×2.2×2.0	17	
—	輪造1-136	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	3.6×3.5×1.4	19	
—	輪造1-137	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	2.3×2.8×1.7	15	
—	輪造1-138	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	3.3×2.9×2.0	18	
—	輪造1-139	南区 E	壁1 西からの埋土中層	輪造1瓦	○	○	○	3.7×2.4×1.4	20	
—	輪造1-140	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	△	○	○	3.1×2.6×1.6	12	
—	輪造1-141	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	2.8×2.2×1.7	10	
—	輪造1-142	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	2.6×2.3×0.8	5	
—	輪造1-143	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	2.1×2.9×0.6	3	
—	輪造1-144	南区 E	壁1 西からの埋土上層	輪造1瓦	○	○	○	2.0×2.0×1.0	5	
—	輪造1-145	北区 S	中层	輪造1瓦	○	○	○	2.0×3.6×1.7	134	
—	輪造1-146	北区 S	石垣1 西側露下1(北)	輪造1瓦	○	○	○	8.6×10.8×1.6	87	
—	輪造1-147	東区	石垣1 西側露下1(北)	輪造1瓦	○	○	○	6.8×6.5×2.0	100	

地図 番号	地図番号 (地図番号)	地区	道・府・署位	瓦種類	合 G	率 J	免 R	瓦面積 (cm)	破片の面積 (cm)	重量 (g)
—	篠島1-14	美沢	石垣(西側離下げ(上記))	縦縫い瓦				9.2×11.0×1.7	208	
—	篠島1-15	北区 SE	石垣(西側離下げ)	縦縫い瓦				5.3×9.4×1.6	57	
—	篠島1-16	北区 SE	石垣(西側離下げ)	縦縫い瓦				6.1×8.8×1.6	98	
—	篠島1-17	北区 E	垣1 番上層	縦縫い瓦				8.5×11.2×1.6	165	
—	篠島1-18	北区 E	垣1 番上層	縦縫い瓦				5.5×8.4×1.6	88	
—	篠島1-19	北区 E	垣1 番上層	縦縫い瓦				8.2×10.7×1.6	121	
—	篠島1-20	北区 E	垣1 番上層	縦縫い瓦				8.2×11.0×1.8	192	
—	篠島1-21	北区 E	垣1 番上層	縦縫い瓦				10.8×10.0×2.4	257	
—	篠島1-22	北区 E	垣1 番上層	縦縫い瓦				8.0×9.2×1.6	125	
—	篠島1-23	北区 E	垣1 番上層	縦縫い瓦				7.6×10.0×1.7	279	
—	篠島1-24	北区 E	垣1 番上層	縦縫い瓦				7.0×9.9×1.7	75	
—	篠島1-25	北区 E	垣1 西からの方土上層	縦縫い瓦				9.0×10.7×1.6	189	
—	篠島1-26	北区 E	垣1 西からの方土上層	縦縫い瓦				5.1×8.6×1.7	85	
—	篠島1-27	北区 E	垣1 番上層	縦縫い瓦				10.0×9.7×1.7	252	
—	篠島1-28	北区 E	垣1 番上層	縦縫い瓦				8.2×9.7×1.4	164	
—	篠島1-29	北区 NE/SW	垣1 中層	縦縫い瓦				10.2×9.8×1.6	216	
—	篠島1-30	北区 NE/SW	垣1 中層	縦縫い瓦				7.1×8.8×1.6	72	
—	篠島1-31	北区 E	垣1 西からの方土上層	縦縫い瓦				9.0×10.8×1.6	259	
—	篠島1-32	北区 E	垣1 西からの方土上層	縦縫い瓦				8.2×9.8×1.6	182	
—	篠島1-33	北区 E	垣1 番上層	縦縫い瓦				5.0×8.6×1.7	64	
—	篠島1-34	北区 E	垣1 番上層	縦縫い瓦				7.9×8.2×1.6	131	
—	篠島1-35	北区 E	垣1 西からの方土上層	縦縫い瓦				7.5×9.8×1.6	181	
—	篠島1-36	北区 E	垣1 西からの方土上層	縦縫い瓦				7.5×10.0×1.9	175	
—	篠島1-37	北区 E	垣1 上層	縦縫い瓦				7.8×8.9×1.7	177	
—	篠島1-38	北区 E	石垣(西側(東側)第1最上層)/上層	縦縫い瓦				8.0×9.8×1.7	147	
—	篠島1-39	北区 NE/SW	垣1 宇摩ノ下層(宇摩真御津)	縦縫い瓦				6.7×7.1×1.6	165	
—	篠島1-40	北区 E	垣1 中層	縦縫い瓦				8.8×12.8×1.3	142	
—	篠島1-41	北区 E	垣1 中層	縦縫い瓦				6.0×9.8×1.7	123	
—	篠島1-42	北区 E	垣1 下層	縦縫い瓦		少		10.7×7.8×1.8	178	
—	篠島1-43	北区 E	垣1 下層	縦縫い瓦		少		7.8×8.8×3.1	123	
—	篠島1-44	北区 E	垣1 下層	縦縫い瓦		少		6.2×9.8×1.6	87	
—	篠島1-45	北区 E	垣1 中層	縦縫い瓦		少		9.6×9.7×1.5	129	
—	篠島1-46	北区 E	垣1 中層	縦縫い瓦		少		5.9×9.7×2.1	66	
—	篠島1-47	北区 E	垣1 西からの方土中層	縦縫い瓦		少		8.1×9.2×1.3	129	
—	篠島1-48	北区 NE/SW	垣1 下層	縦縫い瓦		少		7.8×7.0×1.7	131	
—	篠島1-49	北区 E	垣1 下層	縦縫い瓦		少		5.9×9.3×1.6	38	
—	篠島1-50	北区 E	石垣(西側離下げ)	縦縫い瓦				7.8×10.0×1.8	189	
—	篠島1-51	北区 E	断削1号(東張版) 塗土	縦縫い瓦				5.2×5.5×1.6	52	
—	篠島1-52	北区 E	垣1 下層	縦縫い瓦				8.1×9.3×1.6	141	
—	篠島1-53	北区 E	垣1 下層	縦縫い瓦				8.0×9.6×1.8	208	
—	篠島1-54	北区 E	垣1 下層	縦縫い瓦				6.5×9.2×1.2	47	
—	篠島1-55	北区 E	垣1 下層	縦縫い瓦				9.0×14.4×1.6	304	
—	篠島1-56	北区 E	垣1 下層	縦縫い瓦				9.9×7.8×1.6	239	
—	篠島1-57	北区 E	垣1 番上層	縦縫い瓦				12.6×13.2×1.6	436	
—	篠島1-58	北区 E	垣1 番上層	縦縫い瓦				12.5×13.8×1.6	363	
—	篠島1-59	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			11.0×8.3×2.1	245	
—	篠島1-60	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			9.6×4.3×2.0	129	
—	篠島1-61	北区 E	垣1 西からの方土中層	青瓦	少			8.6×6.0×1.7	88	
—	篠島1-62	北区 E	垣1 西からの方土中層	青瓦	少			10.0×7.0×1.9	133	
—	篠島1-63	北区 E	垣1 西からの方土下層(石垣2東側)	青瓦	少			8.8×9.5×1.6	166	
—	篠島1-64	北区 E	垣1 西からの方土下層	青瓦	少			13.2×7.7×2.1	273	
—	篠島1-65	北区 E	垣1 下層	青瓦	少			11.2×6.0×1.7	129	
—	篠島1-66	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			8.3×5.6×1.7	88	
—	篠島1-67	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			5.1×3.7×1.6	34	
—	篠島1-68	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			7.6×3.9×1.6	55	
—	篠島1-69	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			5.2×3.0×1.8	27	
—	篠島1-70	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			5.3×3.0×1.7	26	
—	篠島1-71	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			4.5×3.0×2.2	42	
—	篠島1-72	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			13.2×7.7×2.1	273	
—	篠島1-73	北区 E	垣1 下層	青瓦	少			11.2×6.0×1.7	129	
—	篠島1-74	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			8.3×5.6×1.7	88	
—	篠島1-75	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			5.1×3.7×1.6	34	
—	篠島1-76	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			7.6×3.9×1.6	55	
—	篠島1-77	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			5.2×3.0×1.8	27	
—	篠島1-78	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			5.3×3.0×1.7	26	
—	篠島1-79	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦	少			4.5×3.0×2.2	42	
—	篠島1-80	北区 NE/SW	垣1 中層	青瓦	少			12.3×4.3×1.9	99	
—	篠島1-81	北区 NE/SW	垣1 番上層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		16.4×9.5×1.6	315	
—	篠島1-82	北区 E	垣1 中層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		12.0×12.3×4.6	324	
—	篠島1-83	北区 NE/SW	垣1 中層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		11.0×7.0×6.0	109	
—	篠島1-84	北区 E	垣1 番上層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		12.1×12.8×5.6	366	
—	篠島1-85	北区 E	垣1 上層	青瓦(伊豆瓦)	少	少		10.5×5.3×7.7	274	
—	篠島1-86	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		12.0×10.6×5.8	232	
—	篠島1-87	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		7.7×8.7×1.2	49	
—	篠島1-88	北区 E	垣1 番上層	青瓦(伊豆瓦)	少	少		5.0×3.8×1.3	29	
—	篠島1-89	北区 E	垣1 中層/下層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		11.0×12.0×1.8	185	
—	篠島1-90	北区 E	垣1 番上層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		6.5×5.9×1.2	61	
—	篠島1-91	北区 E	垣1 中層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		7.7×4.8×1.1	39	
—	篠島1-92	北区 E	垣1 番上層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		9.9×8.0×1.4	145	
—	篠島1-93	北区 E	垣1 中層(原西御學)	青瓦(伊豆瓦)	少	○		6.0×5.1×1.0	26	
—	篠島1-94	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		7.0×8.5×1.2	61	
—	篠島1-95	北区 E	垣1 番上層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		6.1×5.2×0.9	38	
—	篠島1-96	北区 E	垣1 中層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		6.0×4.9×1.1	60	
—	篠島1-97	北区 E	垣1 番上層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		7.2×6.1×1.1	69	
—	篠島1-98	北区 E	垣1 番上層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		5.4×3.3×1.2	49	
—	篠島1-99	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		7.4×5.2×1.1	66	
—	篠島1-100	北区 E	垣1 西からの方土上層	青瓦(伊豆瓦)	少	○		6.2×4.6×1.1	33	

標図 番号	撮影番号 (撮影番号)	地 区	度 横・層 位	瓦種類	金 G	牌 J	朱 R	瓦当径 (mm)	吸水率 の量 (%)	重量 (g)
標図11	瓦花文15	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		5.4×6.3×1.2	30	
標図11	瓦花文16	南区 E	壁1 理土上層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		6.2×6.2×1.1	33	
—	瓦花文17	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		6.8×6.3×0.9	17	
標図11	瓦花文18	南区 E	壁1 理土上層	瓦五 方形耐候花瓦文	タ	○		7.4×6.1×1.2	17	
標図11	瓦花文19	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		6.7×6.2×1.8	88	
標図11	瓦花文20	南区 E	壁1 西からの理土中層	瓦五 方形耐候花瓦文	タ	○		3.9×3.7×1.2	61	
標図11	瓦花文21	南区 E	壁1 爪上層	瓦五 方形耐候花瓦文	タ	○		9.5×6.1×1.5	26	
標図11	瓦花文22	南区 E	近代瓦時塵地土	瓦五 方形耐候花瓦文	タ	○		8.5×6.6×1.4	71	
標図11	瓦花文23	南区 E	壁1 西からの理土下層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		6.0×6.2×1.1	66	
標図11	瓦花文24	南区 E	壁1 西からの理土中層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		6.3×6.4×1.9	39	
標図11	瓦花文25	南区 E	壁1 爪上層	瓦五 方形耐候花瓦文	タ	○		3.7×6.0×1.2	44	
標図11	瓦花文26	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 方形耐候花瓦文	タ	○		6.5×6.4×1.1	31	
標図11	瓦花文27	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		6.7×6.0×1.3	25	
—	瓦花文28	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		3.6×3.9×1.2	19	
—	瓦花文29	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		3.2×3.1×1.4	19	
—	瓦花文30	南区 E	壁1 西からの理土中層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		3.4×2.8×1.2	19	
—	瓦花文31	南区 E	壁1 西からの理土中層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		3.5×2.5×1.3	16	
—	瓦花文32	南区 E	壁1 爪上層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		3.6×3.2×1.4	15	
—	瓦花文33	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		6.6×3.0×1.2	15	
—	瓦花文34	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		4.2×3.9×1.5	29	
—	瓦花文35	南区 E	壁1 中層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		6.1×3.3×1.2	15	
—	瓦花文36	南区 E	壁1 西からの理土中層	瓦五 方形耐候花瓦文	タ	○		3.8×2.2×1.3	18	
—	瓦花文37	南区 E	壁1 西からの理土中層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		2.2×1.7×0.8	3	
—	瓦花文38	南区 E	壁1 西からの理土中層	瓦五 方形耐候花瓦文	○	○		2.3×2.0×1.0	7	
標図11	瓦花文草1	西区	土坑1	瓦五 方形の瓦花唐草文	サ			15.6×1.2×1.9	300	
標図12	方形桟1	南区 E	壁1 西からの理土下層	瓦五 方形桟文	○	○		6.2×6.6×6.6	128	
標図12	方形桟2	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 方形桟文	○	○		7.1×6.2×1.6	72	
標図12	方形桟3	南区 E	壁1 中層	瓦五 方形桟文	○	○		7.7×6.1×1.2	38	
標図12	方形桟4	南区 E	第1面 暫子1#	瓦五 方形桟文	○	○		6.3×5.5×1.5	36	
標図12	方形桟5	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 方形桟文	○	○		6.3×4.4×1.6	33	
標図12	方形桟6	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 方形桟文	○	○		4.0×3.5×1.3	29	
—	方形桟7	南区 E	壁1 西からの理土中層	瓦五 方形桟文	○	○		3.5×1.5×1.2	5	
—	方形桟8	南区 E	壁1 西からの理土中層	瓦五 方形桟文	○	○		2.7×2.7×1.4	9	
—	方形桟9	北区 ME/SF	壁1 上層(壁・西壁)	瓦五 方形桟文	○	○		3.5×1.8×1.5	5	
—	方形桟10	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 方形桟文	○	○		4.1×2.9×1.2	22	
標図12	丸形瓦1	北区 SR	石垣1 黃色瓦質實土	瓦五 丸形瓦	○	○		12.0×6.5×2.6	280	
標図12	丸形瓦2	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 丸形瓦	○	○		19.8×13.2×2.8	716	
標図12	丸形瓦22	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 丸形瓦	○	○		12.3×12.1×3.5	704	
—	丸形瓦3	南区 E	壁1 中層	瓦五 丸形瓦	タ	○		7.2×4.7×2.9	88	
標図12	丸形瓦4	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 丸形瓦	○	○		7.9×4.1×2.2	126	
標図12	丸形瓦5	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 丸形瓦	○	○		7.8×9.9×1.5	107	
標図12	丸形瓦6	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦五 丸形瓦	○	○		13.0×11.5×3.5	390	
標図12	丸形瓦7	南区 E	壁1 西からの理土上層/中層	瓦五 形不規花瓦文	○	○		9.0×7.5×1.6	117	
標図12	丸形瓦8	南区 E	壁1 爪上層	瓦五 形不規花瓦文	タ	○		17.0×14.5×2.3	716	
標図12	丸形瓦9	南区 E	第1面 一面	瓦五 形不規花瓦文	タ	○		6.7×3.7×1.4	34	
—	丸形瓦10	南区 E	壁1 爪上層	瓦五 形不規花瓦文	タ	○		7.7×6.7×3.2	152	
標図12	丸形瓦11	南区 E	壁1 爪上層	瓦五 形不規花瓦文	○	○		12.7×10.8×4.1	280	
標図12	丸形瓦12	南区 E	壁1 爪上層	瓦五 形不規花瓦文	○	○		14.0×6.6×2.1	342	
標図12	丸形瓦13	南区 E	壁1 爪上層	瓦五 形不規花瓦文	○	○		6.5×5.1×2.3	81	
標図12	丸形瓦14	南区 E	壁1 西からの理土上層/中層	瓦斗 五瓦頭	○	○		14.0×10.3×2.0	281	
標図12	丸形瓦15	南区 E	壁1 西からの理土下層	瓦斗 五瓦頭	○	○		10.5×10.2×2.2	310	
標図12	丸形瓦16	南区 E	壁1 中層	瓦斗 五瓦頭	○	○		15.2×9.9×1.9	359	
標図12	丸形瓦17	南区 E	壁1 爪上層	瓦斗 五瓦頭	○	○		13.5×10.6×2.1	355	
標図12	丸形瓦18	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦斗 五瓦頭	○	○		13.5×9.6×1.8	297	
標図12	丸形瓦19	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦斗 五瓦頭	○	○		14.0×16.3×1.9	606	
標図12	丸形瓦20	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦斗 五瓦頭	○	○		5.4×4.0×1.8	53	
標図12	丸形瓦21	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦斗 五瓦頭	○	○		5.5×2.3×2.0	83	
標図12	丸形瓦22	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦斗 五瓦頭	○	○		10.7×6.2×2.9	248	
標図12	丸形瓦23	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦斗 五瓦頭	○	○		11.1×8.2×2.5	320	
標図12	丸形瓦24	南区 E	壁1 中層	瓦斗 五瓦頭	○	○		8.5×2.3×2.0	157	
標図12	丸形瓦25	南区 E	壁1 中層	瓦斗 五瓦頭	○	○		8.8×6.2×1.9	159	
標図12	丸形瓦26	南区 E	壁1 中層	瓦斗 五瓦頭	○	○		7.5×17.5×2.0	317	
標図12	丸形瓦27	南区 E	壁1 下層	瓦斗 五瓦頭	○	○		8.8×6.8×1.5	85	
標図12	丸形瓦28	南区 E	壁1 下層	瓦斗 五瓦頭	○	○		8.1×6.6×2.0	95	
標図12	丸形瓦29	北区 ME	壁1 滅跡	瓦斗 五瓦頭	○	○		8.8×7.6×2.1	140	
—	丸形瓦30	北区 ME/SF	壁1 中層	瓦斗 五瓦頭	○	○		8.0×5.6×1.7	69	
標図12	丸形瓦31	北区 ME/SF	壁1 中層	瓦斗 五瓦頭	○	○		11.0×7.0×1.4	172	
標図12	丸形瓦32	—	新利1 (東松浜) 織土1#	瓦斗	○	○		13.5×10.5×2.0	401	
標図12	丸形瓦33	—	上1# (残土)	瓦斗	タ	○		16.0×15.9×2.5	617	
標図14	丸瓦1	南区 E	壁1 爪上層	瓦瓦	○	○		15.0×9.5×1.7	789	
標図14	丸瓦2	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦瓦	○	○		14.9×9.9×6.8	756	
標図14	丸瓦3	北区 ME	壁1 中層	瓦瓦	タ	○		15.4×10.8×6.7	666	
標図14	丸瓦4	北区 ME	壁1 中層	瓦瓦	○	○		16.8×9.0×3.4	431	
標図14	丸瓦5	南区 C	砾込2	瓦瓦	○	○		10.4×6.6×4.0	315	
標図14	丸瓦6	南区 E	壁1 爪上層	瓦瓦	○	○		11.0×7.8×5.0	343	
標図14	丸瓦7	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦瓦	○	○		8.5×6.0×5.0	181	
標図14	丸瓦8	南区 E	壁1 西からの理土上層	瓦瓦	○	○		8.5×6.0×3.1	136	
標図14	丸瓦9	北区 EC	石垣1 棚出	瓦瓦	○	○		8.0×3.2×5.3	179	
—	丸瓦10	南区 E	壁1 爪上層	瓦瓦	○	○		8.0×4.0×3.3	76	

地図番号	測量番号	地区	遺構・層位	瓦理類	合計	標準J	免R	瓦当径(cm)	破片の重量(g)	重量(g)
国版15	鬼丸11	近江、近	城下 潟野	瓦	シ	シ		18.0×14.8×5.0	185	
国版15	鬼丸12	近江、近	城下 中村	瓦	シ	シ		9.8×7.6×5.8	332	
国版15	鬼丸13	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	シ	シ		10.5×9.0×2.8	261	
国版15	鬼丸14	近江、近	城下 上層	瓦	シ	シ		11.5×8.5×4.0	196	
国版15	鬼丸15	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	シ	シ	○	6.3×4.3×2.5	52	
国版15	鬼丸16	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	11.9×11.4×3.2	538	
国版16	鬼丸17	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	14.5×11.6×7.0	261	
国版16	鬼丸18	近江、近	城下 中村	瓦	○	○	○	10.6×6.3×3.7	182	
—	鬼丸19	近江、近	城下 上層	瓦	シ	シ		11.5×10.8×6.0	963	
—	鬼丸20	近江、近	第2回 梅田	瓦			○	8.5×6.2×3.9	233	
国版16	鬼丸21	近江、近	城下 西からの埋土中層	瓦	シ	シ		21.0×17.0×6.0	2130	
国版16	鬼丸22	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	13.5×10.0×4.0	864	
国版16	鬼丸23	近江、近	城下 中村	瓦	○	○	○	15.5×8.0×6.0	593	
国版16	鬼丸24	近江、近	古代墳原(重複削制)	瓦	○	○	○	16.0×16.0×8.5	1625	
—	鬼丸25	近江、近	城下 西からの埋土中層	瓦	○	○	○	7.5×6.1×2.7	130	
—	鬼丸26	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	8.2×4.3×2.2	72	
—	鬼丸27	近江、近	第1回 清掃	瓦	○	○	○	6.6×4.3×4.6	101	
—	鬼丸28	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	6.9×3.8×1.4	25	
—	鬼丸29	近江、近	城下 西からの埋土中層	瓦	○	○	○	4.4×4.0×3.8	37	
—	鬼丸30	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	3.8×2.9×1.5	16	
国版17	鬼丸31	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	8.1×7.8×3.7	121	
国版17	鬼丸32	近江、近	城下 上げ土(陥土)	瓦	○	○	○	5.4×3.5×2.5	34	
国版17	鬼丸33	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	17.0×13.8×7.7	1386	
—	鬼丸34	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	6.9×2.3×2.2	16	
国版17	鬼丸35	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	6.8×3.0×2.5	13	
国版17	鬼丸36	近江、近	城下(北松山) 城下から西の埋土上層	瓦	○	○	○	8.0×7.1×4.0	300	
国版17	鬼丸37	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	10.0×7.7×5.5	299	
国版17	鬼丸38	近江、近	城下 西からの埋土中層	瓦	○	○	○	10.8×6.5×5.5	265	
—	鬼丸39	近江、近	古代以墳原地	瓦	○	○	○	6.2×3.7×2.7	53	
国版17	鬼丸40	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	5.5×3.0×1.0	16	
国版17	鬼丸41	近江、近	城下(北松山) 城下から西の埋土上層/中層	瓦	○	○	○	10.7×8.0×8.8	14	
—	鬼丸42	近江、近	城下 西からの埋土上層/中層	瓦	○	○	○	3.8×2.4×2.0	19	
—	鬼丸43	近江、近	城下 最上層	瓦	○	○	○	2.5×2.2×1.1	5	
国版17	鬼丸44	近江、近	城下 中層	瓦	○	○	○	6.8×1.9×0.8	16	
—	鬼丸45	近江、近	城下 上層	瓦	○	○	○	6.2×3.5×0.8	14	
国版17	鬼丸46	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	6.9×3.4×2.6	27	
—	鬼丸47	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	6.1×3.7×2.5	61	
国版17	鬼丸48	近江、近	上げ土(陥土)	瓦	○	○	○	6.0×5.0×0.5	129	
国版17	鬼丸49	近江、近	城下 最上層	瓦	○	○	○	6.5×6.1×4.6	127	
国版18	鬼丸50	近江、近	城下(北松山) 城下から西の埋土上層	瓦	○	○	○	11.0×7.7×4.6	293	
国版18	鬼丸51	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	6.8×3.3×3.0	56	
国版18	鬼丸52	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	8.5×1.6×0.9	170	
—	鬼丸53	近江、近	石垣(西側削下)7	瓦	○	○	○	6.8×5.2×0.6	296	
—	鬼丸54	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	8.8×6.0×0.5	266	
国版18	鬼丸55	近江、近	城下 西からの埋土上層	瓦	○	○	○	11.5×6.8×0.8	291	
国版18	鬼丸56	近江、近	城下 西からの埋土中層	瓦	○	○	○	13.7×12.6×4.6	732	
国版18	鬼丸57	近江、近	城下 西からの埋土中層	瓦	○	○	○	16.7×11.0×4.3	848	
国版19	平丘1	近江、近	城下 西からの埋土中層	瓦	○	○	○	13.8×11.0×2.8	692	
—	平丘2	近江、近	城下 最上層	平瓦				13.5×20.6×2.4	732	
—	平丘3	近江、近	城下 西からの埋土上層	平瓦				11.5×13.2×2.3	908	
国版19	平丘4	近江、近	城下 西からの埋土上層	平瓦				14.6×23.8×2.2	973	
国版20	平丘5	近江、近	城下 最上層	平瓦				16.2×26.0×2.1	927	
国版20	平丘6	近江、近	城下 西からの埋土上層	平瓦				16.5×23.0×2.1	1014	
—	平丘7	近江、近	城下 西からの埋土中層	平瓦				14.0×17.0×2.0	895	
—	平丘8	近江、近	城下 西からの埋土中層	平瓦				14.7×13.0×2.0	685	
—	平丘9	近江、近	城下 西からの埋土上層	平瓦				9.3×21.0×2.0	697	
—	平丘10	近江、近	城下 平土	平瓦				14.5×15.2×1.8	534	
国版19	平丘11	近江、近	城下 清掃	平瓦				9.0×17.2×1.8	610	
国版20	平丘12	近江、近	断削1(東松山) 近現代墳上	平瓦				16.5×16.2×1.5	502	
—	平丘13	近江、近	城下 中層	平瓦				11.1×14.3×2.1	283	
—	平丘14	近江、近	城下 最上層(写真前清掃)	平瓦				12.0×10.6×1.4	294	
—	平丘15	近江、近	古代以墳原地(礫叢)	平瓦				11.1×12.0×1.4	220	
国版19	平丘16	近江、近	城下 西からの埋土上層	平瓦				10.7×15.0×2.0	502	
—	平丘17	近江、近	平土	平瓦				11.6×6.9×2.3	238	
—	平丘18	近江、近	城下 西からの埋土下層	平瓦				11.5×10.0×2.4	366	
国版19	平丘19	近江、近	城下 西からの埋土上層	平瓦				12.7×11.3×2.2	663	
—	平丘20	近江、近	城下 最上層	平瓦				11.6×14.3×2.2	505	
—	平丘21	近江、近	城下 上層	平瓦				7.9×9.0×1.8	36	
—	平丘22	近江、近	(廣大清掃1)	平瓦				6.0×9.0×1.8	153	
国版19	平丘23	近江、近	城下 西からの埋土上層	平瓦				10.8×10.0×1.5	197	
—	平丘24	近江、近	城下 下層	平瓦				7.0×5.0×1.8	80	
—	平丘25	近江、近	城下 下層	平瓦				6.5×6.0×1.8	84	
国版19	平丘26	近江、近	城下	平瓦				9.2×5.7×1.7	124	
—	平丘27	近江、近	城下 上層	平瓦				9.6×9.8×1.8	178	
—	平丘28	近江、近	城下 西からの埋土上層	平瓦				11.7×9.6×0.8	301	
—	平丘29	近江、近	城下 西からの埋土上層	平瓦				9.8×9.6×2.1	185	
—	平丘30	近江、近	城下 中層	平瓦				9.0×8.1×1.7	154	
—	平丘31	近江、近	城下 西からの埋土上層	平瓦				9.8×5.5×0.8	120	
—	平丘32	近江、近	城下 西からの埋土上層	平瓦				8.3×5.5×1.8	86	

擇固番号	地図番号 (機別番号)	地区	測量・層位	瓦種類	金 G	積 J	朱 N	瓦当種 (cm)	破片の法量 (cm)	重量 (g)
—	平丸33	南区 E	層1 西からの理土疊上層	平瓦					5.3 × 6.6 × 1.4	60
—	平丸34	南区 E	層1 西からの理土疊上層	平瓦					6.0 × 8.8 × 2.2	35
—	平丸35	南区 E	層1 築上層	平瓦					7.1 × 3.4 × 1.9	54
—	平丸36	南区 E	層1 西からの理土疊上層	平瓦					4.0 × 4.5 × 2.2	53
—	丸丸1	南区 C/W	漢代漆構2	丸瓦					7.3 × 13.6 × 2.4	308
漢版21	丸丸2	北区 SE	漢足2	丸瓦					10.8 × 13.6 × 2.0	329
漢版21	丸丸3	北区 SE	層1 下層	丸瓦					20.0 × 17.0 × 2.7	768
漢版21	丸丸4	東区/NDC E	石垣1 西面 にぶい黄色粘質土	丸瓦					13.8 × 20.8 × 2.2	891
漢版21	丸丸5	南区 E	石垣1 西側 第1-3面 ペース面	丸瓦					18.5 × 20.0 × 2.5	1176
—	丸丸6	南区 E	層1 西からの理土疊上層	丸瓦					16.0 × 21.5 × 2.2	1659
漢版22	丸丸7	南区 E	層1 西からの理土疊上層	丸瓦					15.4 × 19.3 × 2.7	1382
漢版23	丸丸8	南区 E	層1 築上層	丸瓦					15.6 × 20.4 × 2.3	1992
—	丸丸9	南区 E	層1 築上層(上層) 破壊前構造	丸瓦					15.6 × 20.0 × 1.8	1028
—	丸丸10	南区 E	層1 築上層	丸瓦					13.2 × 19.3 × 2.4	777
—	丸丸11	南区 E	層1 築上層	丸瓦					10.7 × 20.3 × 1.8	553
漢版21	丸丸12	南区 E	古代漆塗壁土	丸瓦					10.5 × 13.3 × 1.8	363
—	丸丸13	北区 SE	所附ケ1(東底泥) 近現代耕土	丸瓦					12.2 × 19.3 × 2.1	503
—	丸丸14	北区	内土 表様	丸瓦					15.0 × 21.7 × 2.2	842
—	丸丸15	北区	内土 表様	丸瓦					13.3 × 15.8 × 2.0	604
—	丸丸16	南区 E	層1 西からの理土中層	丸瓦					11.0 × 19.0 × 2.2	422
—	丸丸17	北区 西隣/SW	落込2 清掃(p11)	丸瓦					15.2 × 19.0 × 2.2	435
—	丸丸18	南区 E	層1 西からの理土中層	丸瓦					8.8 × 13.7 × 2.5	323
—	丸丸19	南区 E	層1 西からの理土中層	丸瓦					10.0 × 19.1 × 2.7	263
—	丸丸20	北区 NE/SW	層1 中層	丸瓦					12.8 × 19.5 × 2.1	488
—	丸丸21	北区 SE	石垣1 西側斜下げ	丸瓦					10.5 × 19.2 × 2.7	289
—	丸丸22	南区 E	層1 西からの理土上層	丸瓦					10.2 × 19.5 × 2.7	112
—	丸丸23	南区 E	層1 西からの理土中層	丸瓦					9.2 × 17.1 × 2.7	221
—	丸丸24	南区 E	層1 西からの理土疊上層	丸瓦					8.3 × 19.0 × 2.3	199
—	丸丸25	南区 E	層1 上層	丸瓦					5.7 × 17.9 × 2.2	165
—	丸丸26	南区 E	層1 西からの理土疊上層	丸瓦					8.2 × 18.7 × 2.7	165
—	丸丸27	北区 NE/SW	層1 下層	丸瓦					6.2 × 16.8 × 2.0	105
—	丸丸28	南区 E	層1 上層	丸瓦					5.5 × 18.3 × 2.0	65
—	丸丸29	南区 E	層1 上層	丸瓦					3.6 × 18.4 × 2.2	83
—	丸丸31	南区 E	層1 西からの理土下層石垣2重側	丸瓦					16.0 × 19.0 × 2.3	797
—	丸丸32	南区 E	層1 築上層	丸瓦					10.3 × 16.6 × 2.9	352
—	丸丸33	南区 E	層1 西からの理土疊上層	丸瓦					10.0 × 19.5 × 2.8	350
—	丸丸34	南区 E	層1 西からの理土疊上層	丸瓦					14.5 × 19.2 × 2.1	479
—	丸丸35	北区 拾拾	GP93	丸瓦					12.0 × 16.5 × 1.6	293
—	丸丸36	北区 拾拾	第1曲 清掃	丸瓦					12.5 × 17.8 × 2.7	729
—	丸丸37	南区 E	第1曲 壁下げ 整形柵	丸瓦					10.0 × 19.5 × 2.3	149
—	丸丸38	北区 SE	層1 上層	丸瓦					10.0 × 17.0 × 1.2	126
—	丸丸39	南区 E	層1 上層	丸瓦					5.0 × 16.7 × 1.5	76
—	丸丸40	南区 E	層1 上層	丸瓦					16.0 × 19.5 × 2.7	510
—	丸丸41	北区 拾拾	GP93	丸瓦					9.5 × 15.5 × 1.7	451
—	丸丸42	北区 拾拾	第1曲 清掃	丸瓦					11.5 × 18.2 × 2.2	560
—	丸丸43	南区 E	第1曲 壁下げ 整形柵	丸瓦					9.5 × 19.0 × 2.2	225
—	丸丸44	南区 E	層1 上層	丸瓦					9.0 × 18.2 × 1.5	174
—	丸丸45	北区 南西隅	石垣1 西面 黄色粘質土直上	平平瓦					13.0 × 16.5 × 2.0	370
—	平丸46	南区 E	第1曲 壁下げ	平平瓦					5.0 × 16.7 × 1.5	76
—	平丸47	南区 E	第1曲 壁下げ	平平瓦					16.0 × 19.5 × 2.7	510
—	平丸48	南区 E	近代漆塗壁土	平平瓦					9.5 × 15.5 × 1.7	451
—	平丸49	南区 E	層1 西からの理土中層	平平瓦					11.5 × 18.2 × 2.2	560
—	平丸50	南区 E	層1 西からの理土中層	平平瓦					9.5 × 19.0 × 2.2	225
—	平丸51	南区 E	層1 西からの理土疊上層	平平瓦					9.0 × 18.2 × 1.5	174
—	平丸52	南区 E	層1 西からの理土疊上層	平平瓦					13.0 × 16.5 × 2.0	370
—	平丸53	南区 E	層1 西からの理土上層	平平瓦					11.0 × 19.8 × 1.6	370
—	平丸54	南区 E	層1 中層	平平瓦					9.3 × 19.9 × 2.2	266
—	平丸55	北区 NE/SW	層1 上層(右端)(西壁)	平平瓦					11.5 × 19.3 × 2.2	226
—	平丸56	南区 E	層1 西からの理土中層	平平瓦					13.0 × 19.8 × 1.8	340
—	平丸57	北区 NE/SW	層1 中層	平平瓦					20.0 × 19.0 × 2.3	517
—	平丸58	南区 E	層1 上層	平平瓦					12.1 × 18.2 × 3.9	179
—	平丸59	北区 NE/SW	層1 中層(西壁)	平平瓦					8.0 × 19.0 × 4.9	133
—	平丸60	北区 SE	層1 通縫	平平瓦					10.0 × 19.5 × 4.9	318
—	平丸61	南区 E	層1 西からの理土疊上層	平平瓦					10.4 × 19.4 × 5.8	341
—	平丸62	南区 E	層1 西からの理土上層	平平瓦					9.9 × 18.7 × 3.5	199
—	平丸63	南区 E	近代漆塗壁土	和粘瓦					11.0 × 19.0 × 5.0	272
—	丸丸1	南区 E/C	石垣1 西側斜下げ 層1	丸瓦					28.6 × 13.5 × 1.5	726
—	丸丸2	南区 E/C	石垣1 西側斜下げ 層1	丸瓦					23.0 × 13.5 × 1.6	740
—	丸丸3	南区 E	石垣1 西側斜下げ	丸瓦					26.0 × 13.0 × 1.7	735
—	丸丸4	南区 E	石垣1 西側斜下げ	丸瓦					24.5 × 13.1 × 0.7	620
—	丸丸5	南区 E	石垣1 西側斜下げ	丸瓦					13.5 × 19.0 × 1.5	385
—	丸丸6	南区 E	層1	丸瓦					23.5 × 19.0 × 1.8	865
—	丸丸7	南区 E/C	石垣1 西側斜下げ 層1	丸瓦					44.3 × 29.0 × 1.8	2790

参考文献12.イ

108

第4章 総括

伏見指月城の復元案について

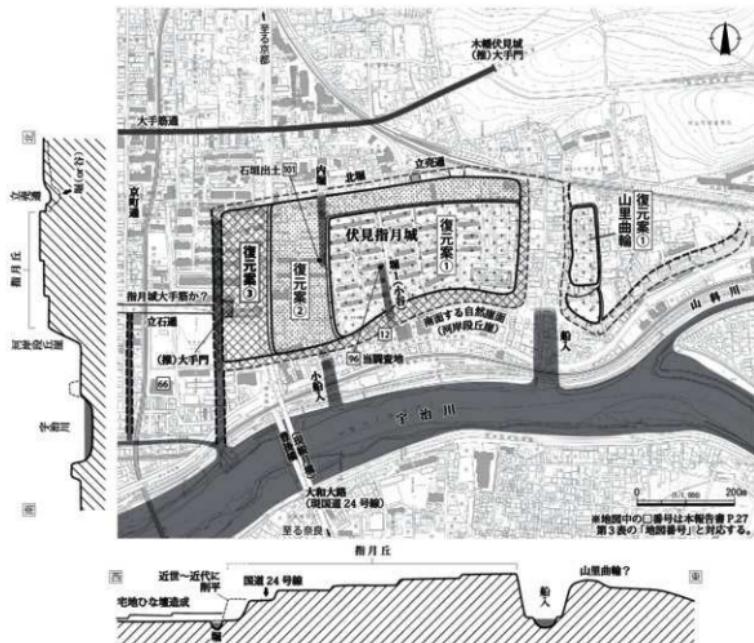
2015年度の発掘調査成果を中心として、昭和から平成にかけて指月の丘周辺で実施された各種の既遺跡調査によって多くの調査成果を得ている。これらの調査成果に、丘陵の地形や地質的成り立ちおよび現地表面に残る歴史的な微地形の痕跡を確認し理解することを目的とした現地踏査（2019年に「指月城を考える会」として、桃山高校の村山先生と生徒さんたちと3回にわたり実施）の成果による新知見を加えると、外郭レベルではあるが新しい復元私案を考えることができ、図面で提示している。

指月城の復元案は、1971年「豊臣秀吉の居城 繁榮第・伏見城篇」に桜井成広が示したもののが最も古い。それ以降、平成に入ってから、京都市や京都府の埋蔵文化財研究者によっていくつかの案が示されている。最近、市文化財保護課の組織名でも新しい復元案が示された。それぞれの復元案の外郭については図で示している。桜井の復元案の西限は国道24号線ラインより50m程か東に位置する。後出の既成の復元案は、国道24号の東辺南北ラインを西限とするものが多く、私案に関してはそれらを西へ大きく越えていることが特徴である。

京都市埋蔵文化財研究所が2009年に実施した立売り通りと国道24号線の交差点の南東部における小発掘調査で検出された、安土桃山時代とされている北西角を持つとみられている石垣と西側堀（？）が、指月城西限の根拠とされているようである。報告されている調査成果を見ても城の西限の根拠となる条件を満たしていない。東西方向の立売り通り沿いに城北堀を想定している点については、異論のないところである。立売りラインの堀も、もともとの自然地形の西へ延びる谷筋を利用していると見ていている。この谷と重なる堀の凹みは、アスファルト面でもゆるい凹みとして確認できるが、この路面上のゆるい凹状は国道24号線の交差点を西へ横断していると私には見える。国道24号線から西側団地内の調査が出来れば確認できるだろう。

2010年に西近畿文化財研究所が実施した桃陵団地内の発掘調査によって発見された、現地形に残る東西の段差とそれに沿う南北堀も重要な根拠としている。加えて同団地南側の立石通りを指月城の大手筋と想定しており、同通りの国道24号線近くのクランクは虎口跡と考えている。伏見指月城の大手門はこの付近に想定してもよいだろう。このクランクの北側の三角広場には、門扉の軸受けの円孔を穿った大石が1つ置かれている。関係者によると北側の桃陵団地内の発掘調査で出土したものとのことである。江戸時代の寺院等に普及する門扉の軸受けとは違うが、江戸時代初頭以降の伏見奉行所関係のものか、伏見指月城に関連するものかの判断は難しいが興味の尽きない歴史資料となる遺物である。

本丸に関しては、跡の説も桜井の案を踏襲しているのか指月の丘の東部高所に求める案が多いが、このような城構造の常識的見方を置いて、秀吉が追究した見せびらかす城という観点からは、立石通りから見通せる推定大手門から入ってかなり近い、城の中央部の南西部付近と想定しても



復元案	出 典（参考文献）
①	1971 桜井成広「豊臣秀吉の居城」楽章第・伏見編 日本城郭資料館出版会
②	2010 森島康雄「それでも指月伏見城はあった」京都府埋蔵文化財論集 第6集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
	2010 山本雅和「发掘ニュース 95」リーフレット京都No.261 (2010年10月) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所京都市考古資料館
	2019 「伏見城跡・指月城跡見地説明会資料 図4 指月城復元図（実）」京都市文化財保護課
③	2021 小森俊寛 本報告書掲載

第68図 伏見指月城範囲復元案

よいと考えている。小椋堤上に新設された奈良街道から北方を見上げたあたりの位置になる。南北堀の西からの埋土中から出土する金箔瓦を中心とする瓦類の質量的出土状況も左証となる可能性は高い。

明の使節は、宇治川からの遠望とは違い、伏見の浜（港）に上がり、立石通りを東へ向かうと、迫るがごとくしてそびえ立つ金箔瓦に輝く本丸が目に飛び込み、驚愕したものとも想像される。大手門に向かうと益々大きくなる。そんな演出効果まで考えていたのではないか。本丸は大手門にかなり近い位置と考えても良いだろう。また、奈良から小椋堤を北上し、豊後橋を渡る頃には、目前に本丸が迫る。南からの目も計算されているものとも考えている。

なお、昨年頃からは推定本丸に近い城西半部に世界遺産の二条城の二ノ丸御殿に匹敵する明の使節との謁見用の御殿が立てられていたとの推定も必要だろうと考えている。もちろん、金箔瓦や金銅の飾り金具で絢爛豪華に飾りたてられた、二ノ丸御殿のモデルとなるような立派な御殿

と想像される。

指月城の東辺は舟入りのある谷筋の西肩、北辺を画する北堀は立堀り通りに重なり、国道24号線を西へ越えて延び、西辺の南北堀へと折れてつながると推定される。南辺を画する丘陵の南面する段丘崖は、舟入り西辺の東端から西方へつらなり、国道24号線を西へ越えて西辺の堀ラインと直行するあたりまで続いている。この崖は丘陵の南限を成すだけではなく、指月城の南限を画していることとなる。伏見指月城の東西南北の指定外辺間の距離から算出すると城の面積は、南北約265m×東西約60m = 162,000m² 程となる。伏見指月城は、地質的・考古的な踏査などの現地調査成果を基に、復元出来る自然形成の指月の丘陵の上面全体を城郭エリアとして形成されたようである。天下人の城としてはサイズ的に近い城は、家康が大御所政治（院政）を行った静岡県にある駿府城の内堀内郭部（179,685m²）である。しかし、太閤秀吉の城としては、かなりこぢんまりしている。城としているので一応の基本的防御は考えても、当時の秀吉には防御などは指月城築城目的の境外であったと理解してよいだろう。なお城内の造成は、西へゆるく段下りする、郭単位の雑壇造成だっただろう。現団地内の雑壇に桃山時代の残影が見てとれる。しかし、本丸は東の最上壇ではなく、かなり下った西半側に位置していると推測している。

「日輪文」金箔瓦に込めた秀吉の思い

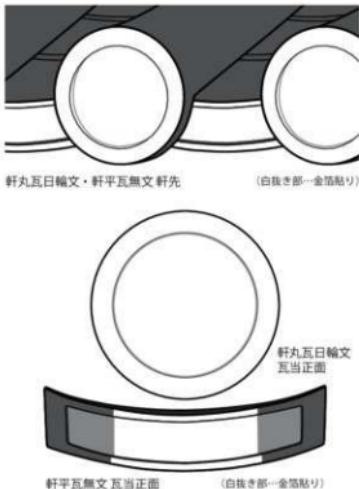
金箔瓦で飾る天下人の城は、織田信長の安土城から始まる。天下人の跡を継いだ秀吉の大坂城、聚楽第、伏見城も金箔で豪華に装飾される。2015年の調査によって主に堀から出土した金箔瓦には、軒丸瓦、軒平瓦の他、蟻や鬼瓦等各種の飾瓦類が見られ、端的に言うと、平瓦の凹面と丸瓦の凸面等をのぞくと棟関係の各種の瓦（熨斗瓦や飾りの輪違い小菊他）の側面を含め、飾り瓦の要素をもつ瓦類のほとんどに金箔が施されていた。他の城と比較しても、飾り瓦的瓦における金箔瓦率はこの指月城が、最も高いと見ている。伏見城関係で出土した金箔瓦を写真にまとめている。

2015年の発掘調査からは、軒丸瓦の文様には、菊文、桐文、三ツ巴文など、大坂城や聚楽第などにもよく見られる、天下人秀吉の居城では一般的なものも多数出土している。軒平瓦では、菊文と桐文、三ツ巴文に対応する唐草文が出土する。天皇が許可した豊臣家の家文である桐文、同様に許可された菊文は両者ともに少なく、軒丸瓦三ツ巴文と軒平瓦唐草文が多数を占める。なお、唐草文軒平瓦では下辺中心が下方へ三角状に少し突起する、滴水形の退化形態とも見られるものが一定量出土しており、この瓦は大坂城や聚楽第あるいは聚楽廻りでも必ず出土している。これらは豊臣家あるいは一族専用とも見られる。これらの金箔瓦は高い縁部と文様の凸部上面に金箔を押しており、文様間の凹部に金箔を押す安土城に用いられた織田系のものとは異なる、豊臣系の金箔瓦である。この他に、特異な無文の軒丸瓦・軒平瓦が含まれている。出土量は軒丸瓦で三ツ巴文に次ぎ多く、軒平瓦では最も多く、大きな位置を占める。この無文瓦は、発見当初、文様を手抜きしたとも、あるいは蛇の目文とも見られていたが、そのようなものではなく、金箔をもって円い文様としたものである。

その根拠として、瓦当面の凸部に限らず、凹部全面及び軒丸瓦では内側段差の側面にまで金箔を施している。凹面の周縁部付近から段差側面あたりまで金箔を施さず黒色の地肌が円形のすき間の圓線を呈していれば、蛇の目文との解釈も可能だろう。しかし、金箔の施し方からは、縁部との段差はあるものの、円形の瓦当面全体に金箔を押すことで、円形の金色文様を表現したものと解すべきで、日側を金色の丸、月側を銀色の丸とする日月文の日文の側、あるいは赤ではなく金色で示した日ノ丸文あるいは日輪文と見るべきである。これらの文様は戦国時代では金色・赤色ともに日ノ丸の旗印などに、また桃山時代頃以降では兜の前立てや胸具足など文様に類例が認められる。また、官軍が用いる「錦の御旗=錦旗」は、日月を金銀で刺繡し、または描いた金地の錦旗である。ただ、幕末の鳥羽・伏見の戦いで、伏見で薩長軍が掲げた「錦の御旗」は、同戦の絵画資料では金色の菊文と同日輪文のようにも見える。このように見ると縁部との段差側面を含む瓦当の凸面凹面の差異なく丸い瓦当全面に、金箔を隙間なく丁寧に施した軒丸瓦は、日ノ丸文でもよいが秀吉の日輪伝承との関連からも日輪文と理解することが最も妥当と考えられる。無文の軒平瓦は、段差部に金箔を施さず、瓦当凹面と縁部の凸面だけに施し、軒丸瓦当の両端にも金箔を施していない。無文の軒平瓦は、日輪文の間を金箔帯でつなぐ補助的な意味付けの軒瓦と見られる。

日輪文の軒丸瓦の瓦当径は21cm前後、18cm強の2種類に限られる。巴文は21cm前後・18~19cm台・14~17cm程・13cm以下がみられ、サイズのバリエーションが最も豊富。桐文と菊文は14~16cm台程が主体。量的にも多数の日輪文と巴文が、大きい瓦当径のものまで含み、なかでも日輪文のみが大きい瓦当径しかない点は注目される。金箔軒丸瓦日輪文は、天守など本丸等の主要建物の中心的軒瓦であったと見てよいと考えている。

これまで別の調査で出土した金箔軒丸瓦日輪文の分布は、実物あるいは写真が確認できる資料では、立売通以南から指月南崖面、東は現調査地と南崖面谷開口部付近をつなぐ南北ライン附近、西は桃陵中学校現体育館に囲まれたごく狭い範囲に限られている。指月城推定範囲の北限であり、北堀説もある立売通より北に広がる大名屋敷跡や、木幡の伏見城域の発掘調査では出土例が確認できない。このような既資料の出土状況や、今回の調査地の指月城の内堀と見ていれば内堀の埋土から、多数出土している金箔軒丸瓦無文（無文の軒平瓦も含めて）は、明の使節に見せつけるため指月城にのみ限定的に使用する目的で製作された軒丸瓦であり、日輪を具現的に示す文



第69図 軒丸瓦日輪文と軒平瓦無文の模式図

様瓦=金箔軒丸瓦日輪文としてよいだろう。金箔軒丸瓦日輪文は老齢期に入った秀吉という当時の天下人の上にある最高為政者の、政治的、権力的思いや意図を示し、それを理解出来る希少な歴史的価値の非常に高い考古的物質史料であると考えている。

指月丘陵上における文禄3年（1594）から始まる新城築造の主目的は、明の使節を迎えて秀吉が、直接半島での戦の正当性を明に認めさせる交渉の場としての城を造ることであったと理解してよいだろう。文禄2年（1593）に小西行長らが進めていた文禄の役の講和交渉に際して、完成した大坂城があるにもかかわらず秀吉は明の使節を、伏見の城へと呼んだとなっている。使節を呼ぶことを意図して翌年（1593）正月から本格的な城郭造りを始めている。これらの一連の動きと位置付けが妥当であるならば、文禄の伏見の城の築城では明の使節に、秀吉の権力と財力を見せつける事が第一義的目的であり、どのように飾り立て、見せびらかすのかが最大の課題であったと理解される。

この内容を考える上で、前提的理説が必要な歴史的事象がある。秀吉のプレーンは、秀吉が正当な対明、対朝鮮ひいては東アジア全体への征服者であり、その根拠とする目的で、秀吉が母の胎内の入った日輪の子であるとする日光感精神話の亞種といえる「日輪受胎伝説」を作る。天正18年（1590）には「日輪受胎伝説」を組み込んだ国書を朝鮮王宛への返書としている。以降、フィリピン、台湾、中国、マラッカ、インドにも同様の国書を送り、秀吉がアジアの王である根拠として、日輪受胎伝説を強くアピールしている。

伏見指月の丘の上に、文禄年間に新造された伏見指月の城は、日本の天下人秀吉が明の使節を通して世界に霸を示すパフォーマンスを演じる舞台として設けられた、一般的の城郭とは異質で特異な城郭であったと考えている。

調査成果まとめと課題

2008年頃に地元の伏見城研究会の方々から始まった指月城の存否論争では、秀吉が指月丘（丘の下にもか）に天正20年（1592）に隠居所（城）を建てたと見る点は、議論の対象にはなっていない。その後、文禄3年（1594）には、隠居所（城）を本格的な城郭指月城へと大改造するとの見方と、本格的な城郭は木幡山へ直造るとする見方の論争であった。私は以前から文献的にも「京都の歴史」が記している先の側、指月丘に新城を造る見解を肯定的にとらえていた。

今回の指月の丘上面における発掘調査によって、伏見指月城を構成する石垣と堀跡を検出出来た。石垣と内堀と見られる堀跡は、今までの文献資料を中心に進められてきた初期伏見城たる指月城の存否の議論に、終止符を打った。出土した日輪文を中心とした多数の金箔瓦を含む大量の瓦類も、伏見指月城が実在していたことを示す物証であることが、明確に理解出来た。故・星野憲二氏をはじめとした伏見の方々が、戦前以来採取されていた、金箔瓦の出土地点は、調査地のすぐ南側の指月の丘の崖面にある、堀（元々谷筋）の開口部付近が中心である。そのなかには、無文の日輪文軒丸瓦も含まれていた。この金箔の軒丸瓦日輪文がこの城の性格や秀吉の思いまで示す物質資料である可能性が大きい事を導き出すことが出来た事や、同金箔瓦が指月城の城内含

む西南界隈でしか出土が見られない事を実証的に提示出来た、出土遺物の整理研究も、大きな発掘調査成果であると考えている。今回の調査成果に周辺地の踏査も加えることによって指月城の外郭はほぼ明らかと出来、指月城の大手門や大手筋の候補地に対する見方も示した。しかし、この外郭施設を含めて城内部の諸施設は天守等中心的な建物すら位置規模等の手掛かり的情報すら乏しいままである。今後の推定地内外での発掘調査成果の合理的蓄積を期待して、伏見指月城の城郭内外の復元が進むことを切に願う。

また、今後の周辺地の発掘調査では、安土・桃山時代の伏見指月城にとっては下層遺跡であり、前史ともなる古代末期から中世において丘陵上面に展開していたとされる宮殿跡や関連寺院跡等の発見と調査の進展も期待される。後史ともなる安土・桃山時代末期以降の江戸時代さらに近代戦争遺跡も出来るかぎりの遺跡調査が及ぼされることも望まれる。

補記 一伏見城全体の歴史的評価を考える一

伏見指月城解体後の木幡伏見城を検討し、両城を含めて伏見城全体の歴史的評価を考えたい。

太閤秀吉は慶長元年の大地震の直後から、指月城の北東近接地にある木幡山の山頂に伏見指月城とは比べものにならない程の非常に大規模な城郭を新造する。伏見での新造着手後の1ヶ月程後に、明の使節の正使に大坂城で謁見するが、明側の太閤秀吉の日本の位置付けを知り、怒りに任せるように半島への再出兵を命じていている。新しい伏見城の大規模化を見ていると、大陸の侵攻はすでに諦観していた可能性もあるだろう。思考能力や体力にも限界を感じており、武家・院政は国内方向へ転換していたとも考えられる。いずれにしろ太閤秀吉の木幡伏見城の使用は本人の予想どおり、ごく短いものであり、地震から3年後の慶長3年（1598）には木幡伏見城で没している。「露と落ち 露と消えにし我が身かな 難波のことも夢のまた夢」という辞世の句を残しながらも、大坂城ではなく、木幡伏見城でその人生を終えていることからも太閤秀吉は本来的に伏見城を終の棲家と位置付けていたと考えている。

最近京都御所横で発見された京都新城と称された秀吉が手掛けた最後の城と、秀吉が使っていった最後の城伏見城、秀吉の思い等については別項とするが伏見指月城との関係からも考察したい新課題である。しかし、ただ1点言及するとその城は国内すべてのもの上に立った自分秀吉を示す、ふろく的思いの表現であり、高い天守は造られていたと推測される。

秀吉の死後に豊臣秀頼は大坂城へ移る。秀吉が没した木幡伏見城は、その後に自分の死後に残る幼い秀頼を守るために、死ぬ直前に造った五大老五奉行体制の筆頭である徳川家康が、大坂城西ノ丸からこの秀吉の「仙洞御所」城である伏見城に入る。表向きの建前は、豊臣秀吉が残した豊臣家家人としての筆頭大老の政務を行うため、ということであろう。家康は信長の正統な継承者たる秀吉の権力を受け継ぐ、直系の実質的権力者は自分家康であるというパフォーマンスの舞台として、また秀吉のこの城に対する位置づけを逆手にとって、豊臣大坂城を攻め滅ぼす戦略拠点城としての両面を踏まえて、木幡伏見城に入り使い続ける。

天下分け目の大決戦とも評される慶長5年（1600）、美濃の関ヶ原の合戦では、木幡伏見城は

その前哨戦で、西軍の攻撃により火災等の大きな被害を受ける。合戦に勝った家康は、戦後の翌年慶長6年（1601）には伏見城を再建しているが、家康は自分の居城として再建したのではなく、秀吉の「仙洞御所」城のままに再建したと私は考えている。関ヶ原の合戦は、豊臣家家臣団の権力争いとして、家康はようやく勝利を得たものであり、秀吉越えは達成出来ていない。

なぜそのように考えたかの理由については、公的には関ヶ原での勝利後に大老職を放棄あるいは破棄せず、大老の政務拠点を大坂城から伏見城へ移したに留め、その一方で3年後の慶長8年（1603）には征夷大將軍に任官し、徳川幕府を開いたにも関わらず、武家としては豊臣（秀吉）の家人から脱却を宣言していないことが、そのことをよく示している。退職した太上閑白（太政大臣）とでもいうべき、太閤秀吉以来、太閤が死しても豊臣家は摂閥家である。秀頼は大坂の陣までは摂閥家の一人として、天皇家からは扱われ続けている。家康は、天皇の臣下としても豊臣家の秀吉に留まらず、その子秀頼よりも下位的な扱いとなる。木幡伏見城は、家康にとっては秀吉トラウマそのものだったのだろう。それよりも、徳川家の臣下にできていない豊臣恩顧の大名集団が、徳川単独で豊臣を潰し、大坂城と伏見城を破却するまでの家康の最も強力な足かせとなり続けていたのであろう。そこからの脱却にはやはり、慶長19年（1614）の大坂城攻めの踏み絵と、その翌年の「大坂の陣」の勝利を待たなければならない。

将軍職二代目秀忠に続き、三代目家光までの拝任式は伏見城で行われている。その理由は完全には理解しきれていないが、家康が秀吉トラウマから脱却したことを示し、伏見城が晴れて徳川の足下に入ったことを念押しする意図は感じ取れる。大坂の陣に勝利し徳川の天下が確定し、元和9年（1623）に家光の拝任式が終わった後には、戦勝後の元和5年（1619）にすでに決定されていた伏見城の廃城を強力に推し進める。その廃城は地上にあった諸施設を石垣まで含めすべて消し去る、大坂城の破却と全く同レベルで、伏見城が存在していなかったかのごとく、完全に破却してしまう。その面からは、木幡伏見城も家康にとって豊臣の城ではなく、秀吉の居城であり続けていたのである。前代の天下人・秀吉の威勢が地上に姿を残すことを家康は徹底的に嫌ったようである。そのため伏見城の姿は後世に残ることはなかった。山野に戻ったその跡には、桃の樹がたくさん植えられ、桃山丘陵と称されるようになる。伏見には町衆と港と下町しか残されなかつた。伏見城は、大坂の陣以降徳川のものとなりながらも、本質的には築城から廃城まで、秀吉の「仙洞御所」城であり続けたと理解してよいだろう。

秀吉の伏見城や大名屋敷が消えても、伏見の町に残された町衆は、自力で町を発展させるボテンシャルを秘めており、十分にその力を發揮したことは江戸時代を通して栄えてきた現代の町がそのことをよく示している。江戸時代の初めには、都の外港としての立ち位置を利用し、陸運に頼らず高瀬川の水運で都へ直結する、新規の輸送システムを完成させて、都へ入るものも、都から江戸へ下る物資も、すべて伏見を通過する体制を強化した。

高瀬川運河は、水のベルトコンベアーというべき画期的なシステムであるが、角倉了以の発案と見るよりもやはり伏見の町衆の側に種を生む力があったと見るべきだろう。了以は、伏見の町衆の発想に資金と技術力を投資したものと理解すべきだろう。江戸前期には、朝鮮通信使も淀川

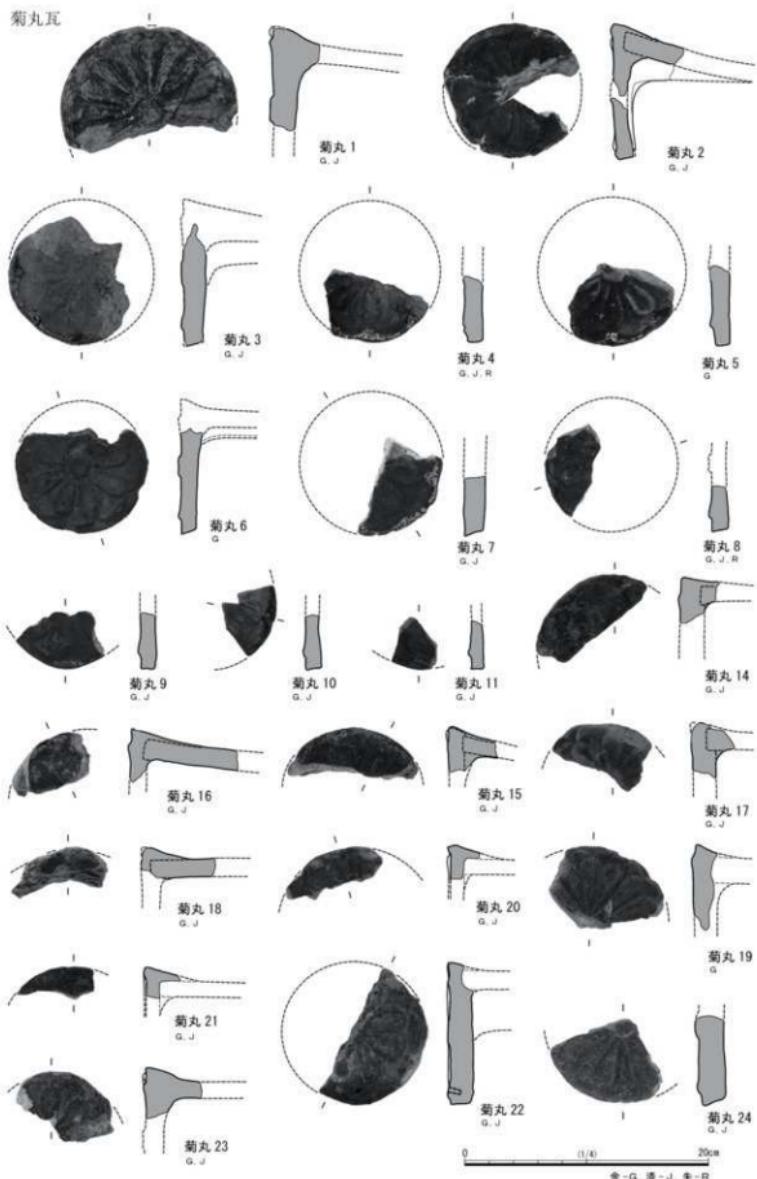
から伏見で陸へ上がったように、伏見は都の唯一の外港、あるいは都の一部として大きく発展する。江戸時代を通じて発展を遂げたことは坂本龍馬や新撰組の活躍した幕末においても、諸国と水運で直結した都の表玄関としての発展した姿を歴史に示している点からも十分に伺えるところである。日本初の電車は明治の伏見で走る。

後書き

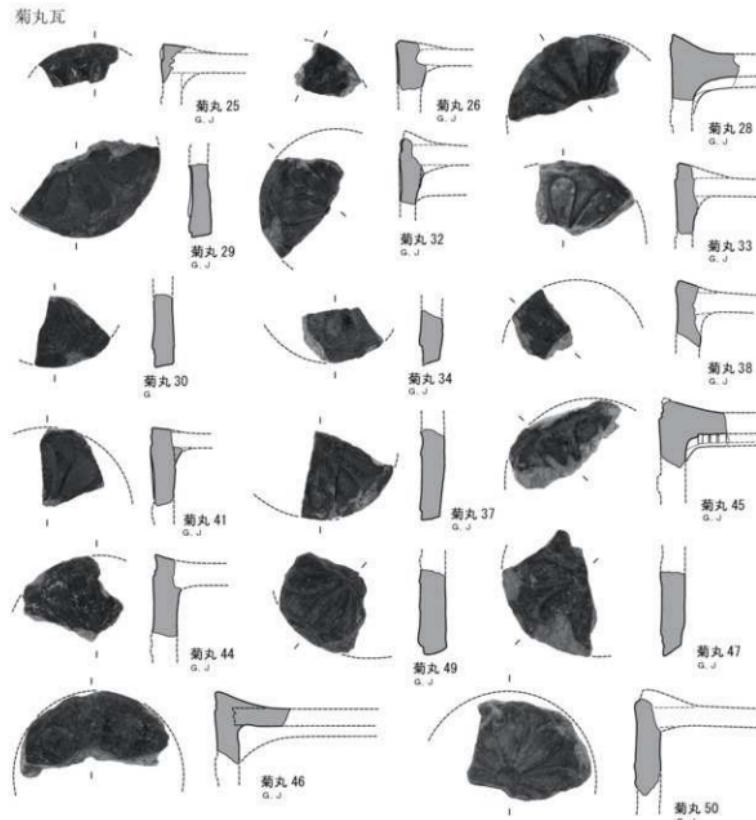
ここで報告している指月の丘の上の発掘調査は2015年の春4月から夏7月までの約3ヶ月程でした。報告書の作成は少なくとも1～2年以内には提出すべき本業の軸的仕事です。しかし、諸般の事情により遅れておりましたところ、昨年冬からはコロナ禍にもみまわれ、さらに遅延しておりました。今年に入りようやく実務量も確保出来、整理研究成果をまとめることが出来、今年初夏には国民の皆様に上奏出来る運びとなりました。敬具

図 版

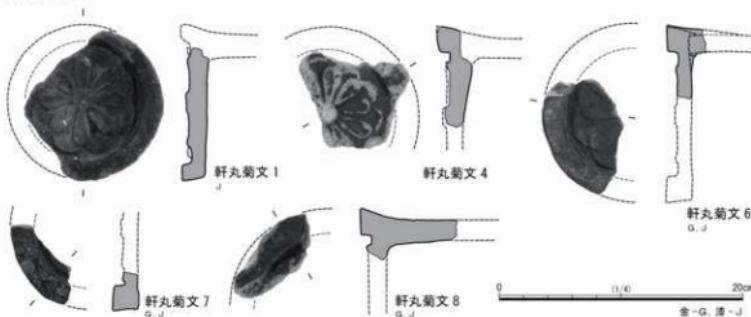
図版1 出土瓦実測図〔菊丸瓦1〕



図版 2
出土瓦実測図〔菊丸瓦2・軒丸瓦菊文〕

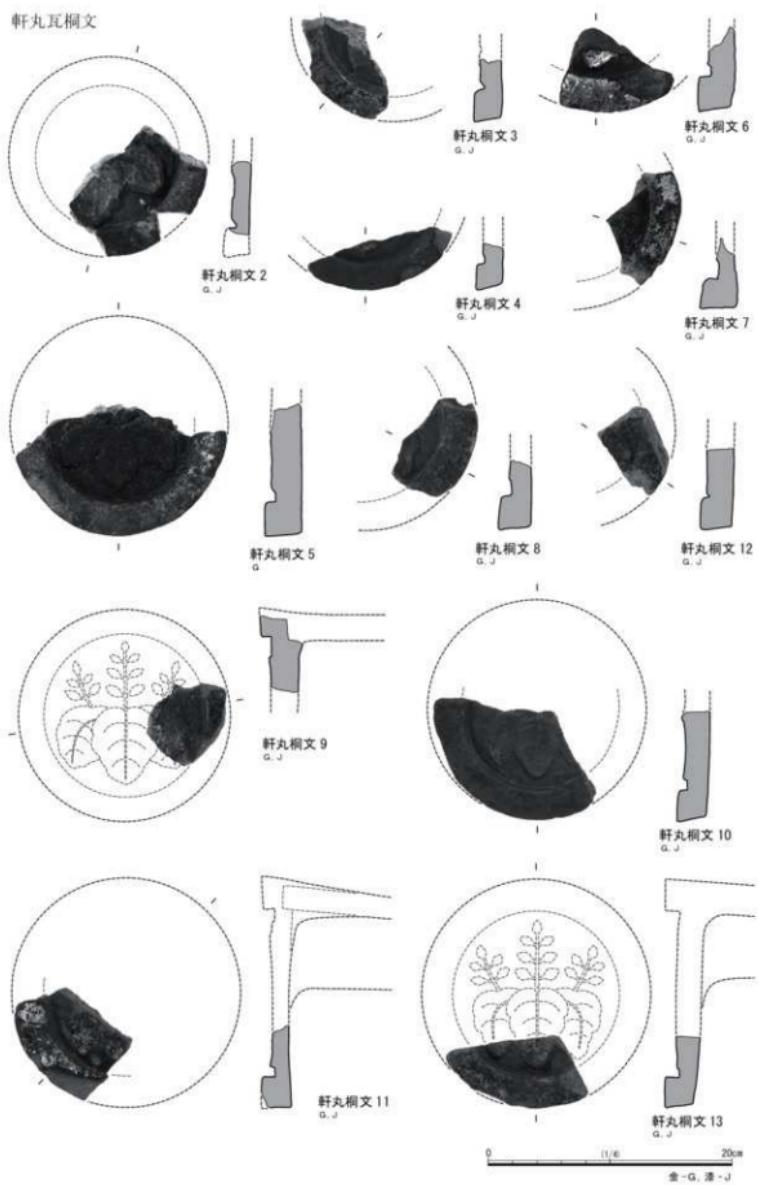


軒丸瓦菊文

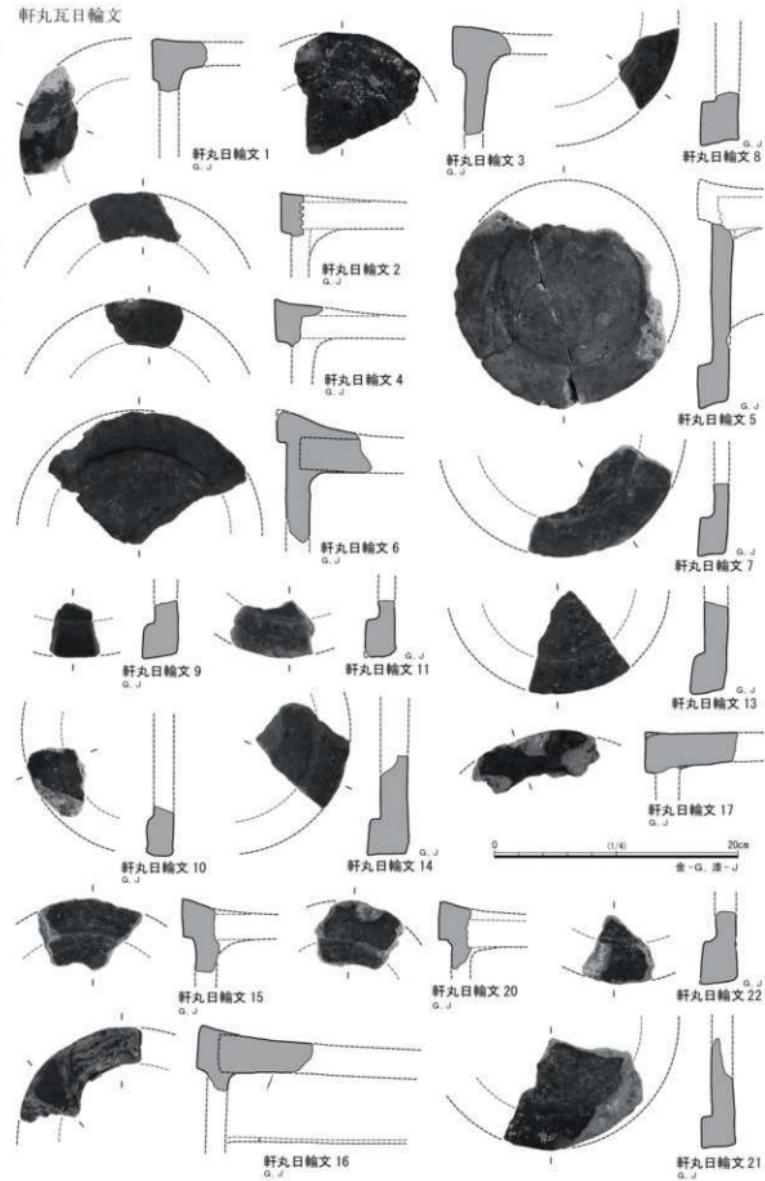


0 (1/4) 20cm
全-G. 渡-J.

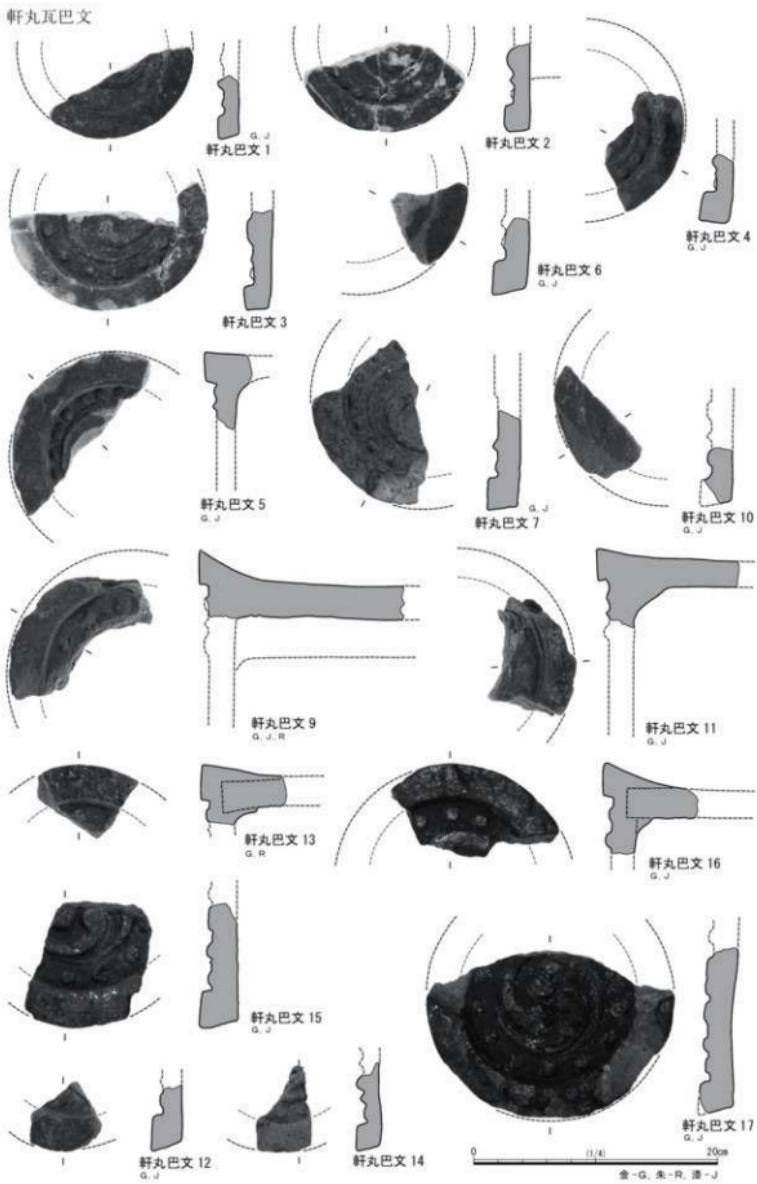
図版3
出土瓦実測図〔軒丸瓦桐文〕



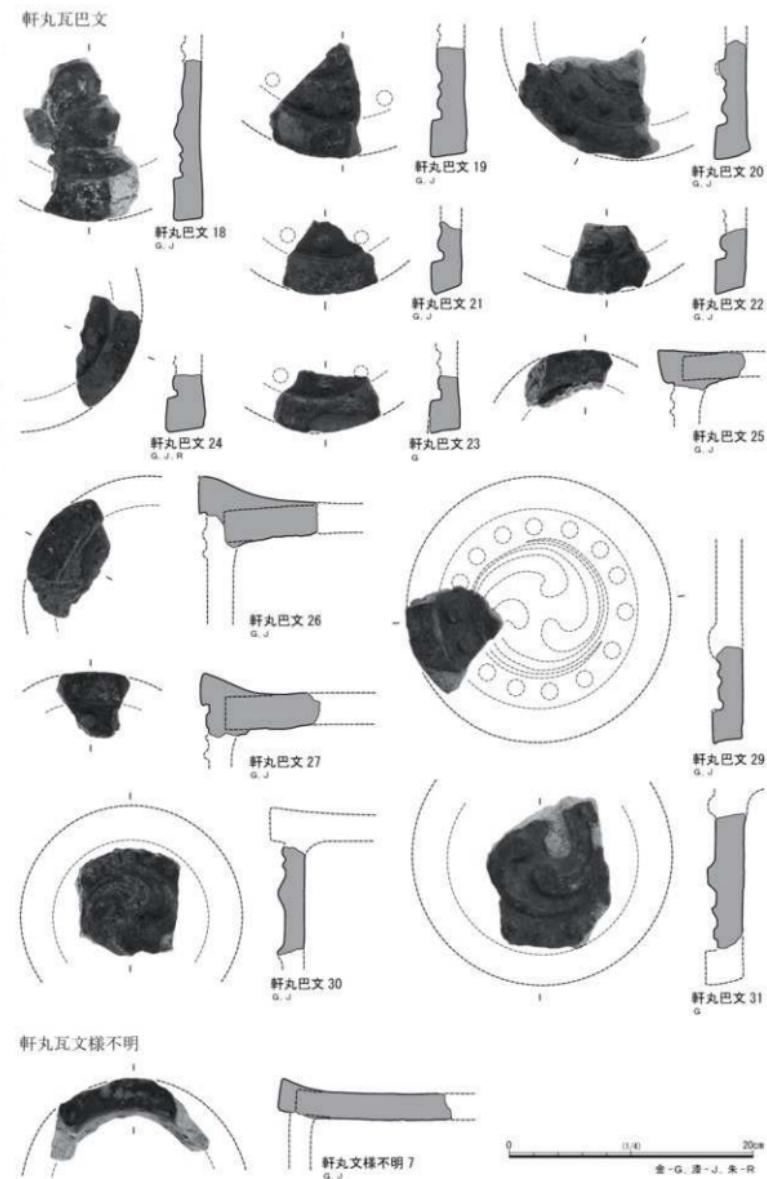
図版 4
出土瓦実測図〔軒丸瓦日輪文〕



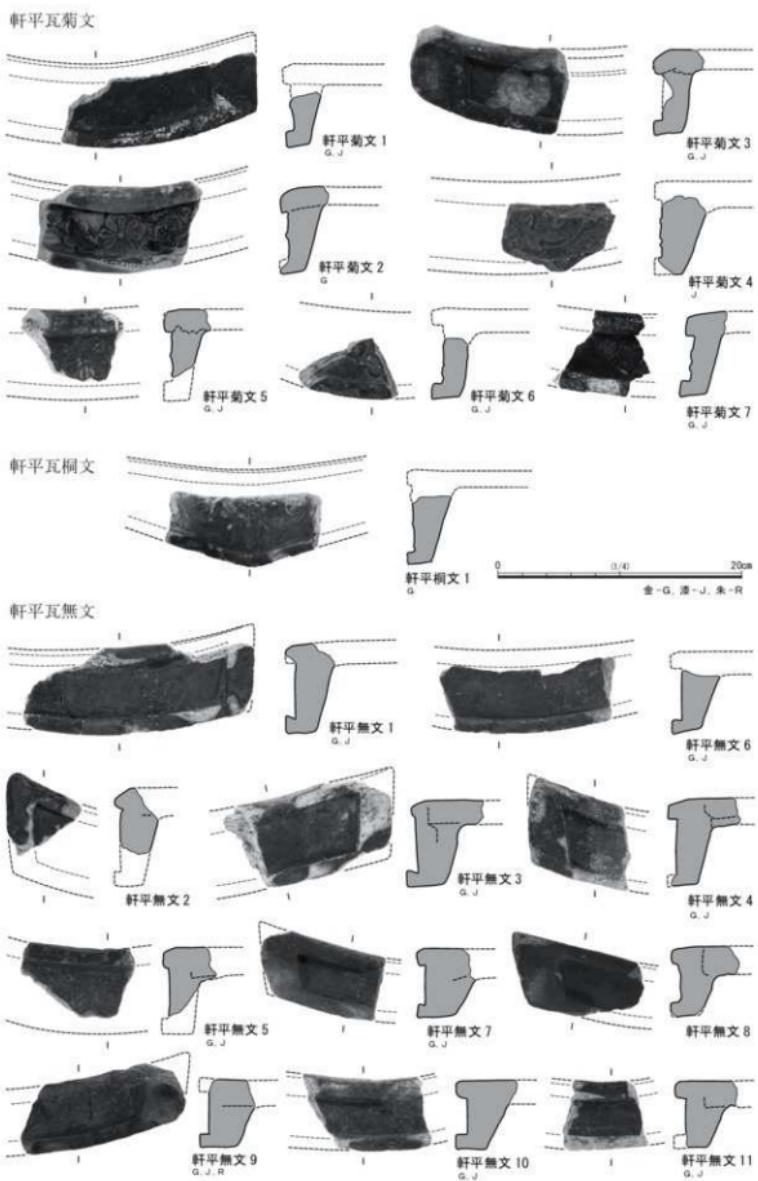
図版 5 出土瓦実測図〔軒丸瓦巴文〕



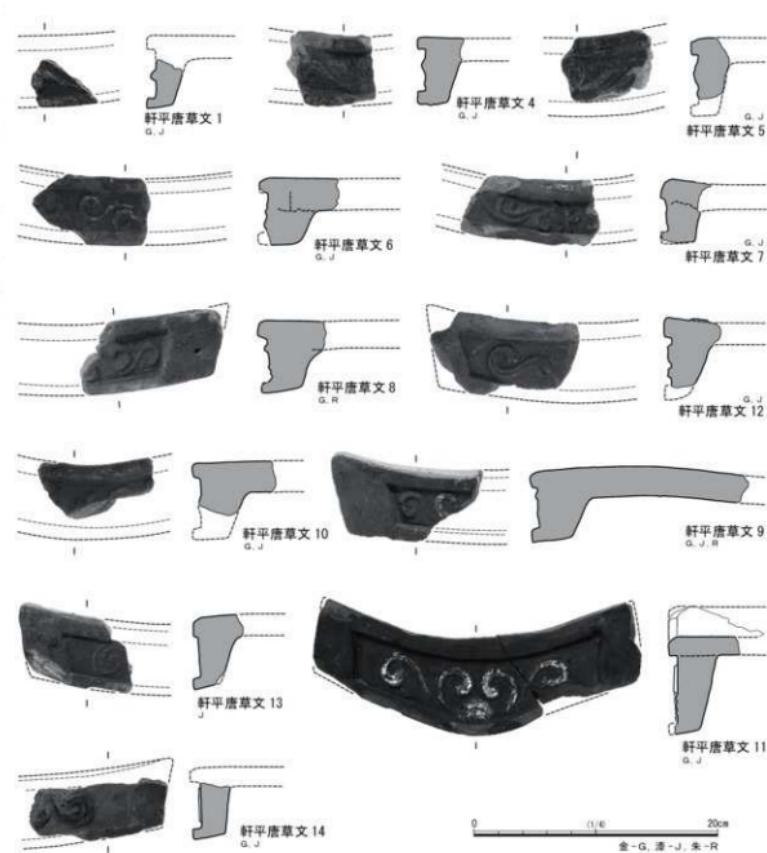
図版 6
出土瓦実測図〔軒丸瓦巴文2・軒丸瓦文様不明〕

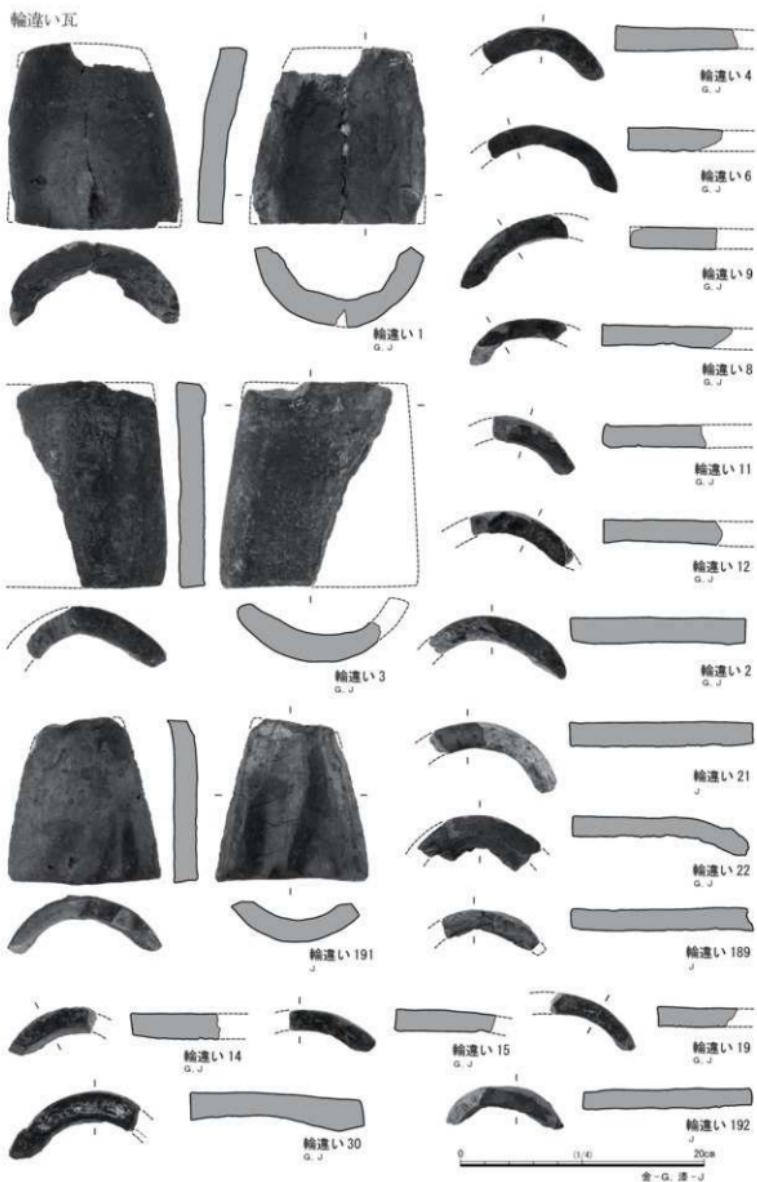


0 100 200cm
金 - G. 隅 - J. 朱 - R.

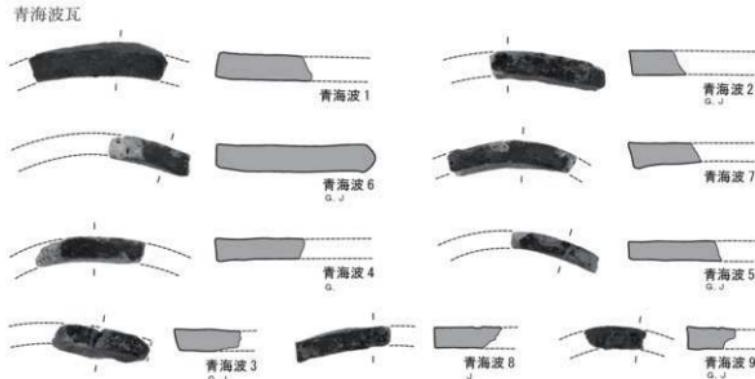


図版 8
出土瓦実測図〔軒平唐草文〕

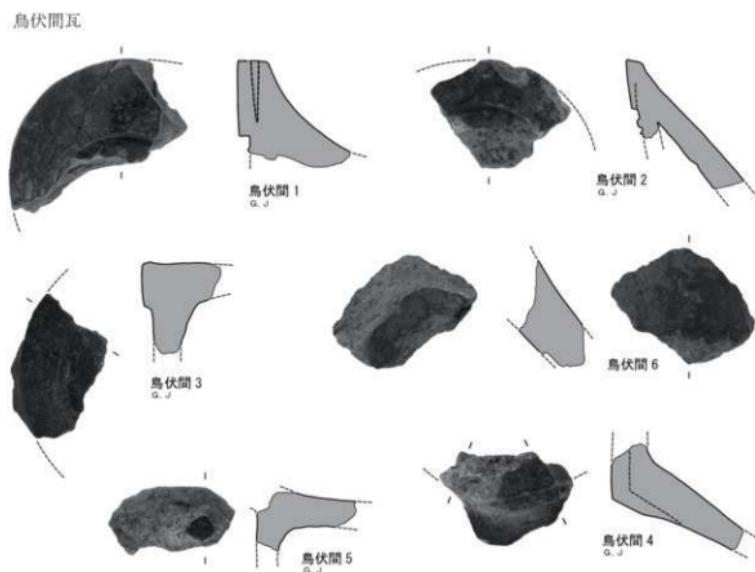




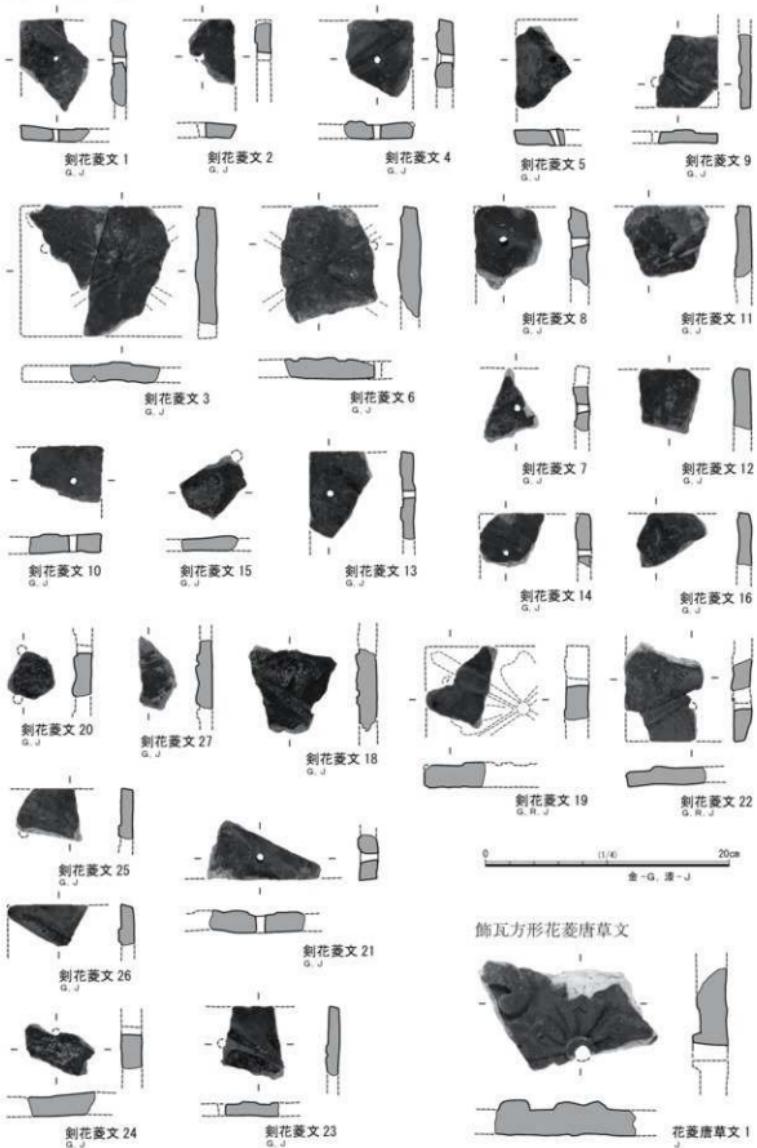
圖版 10
出土瓦実測図〔青海波瓦・青海波面戸瓦・鳥伏間瓦〕



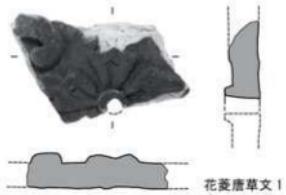
0 20cm
(1/4)
金-G, 津-J



飾瓦方形劍花菱文



飾瓦方形花菱唐草文



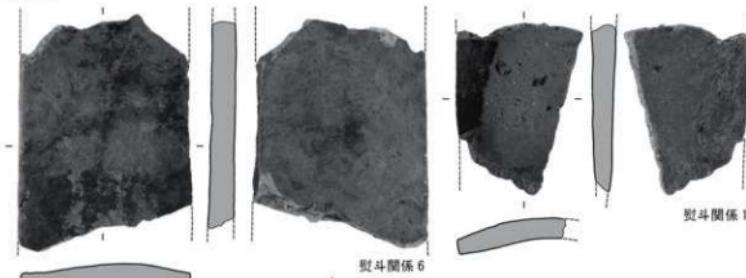
圖版 12
出土瓦實測圖〔飾瓦桐文・飾瓦菊文他〕



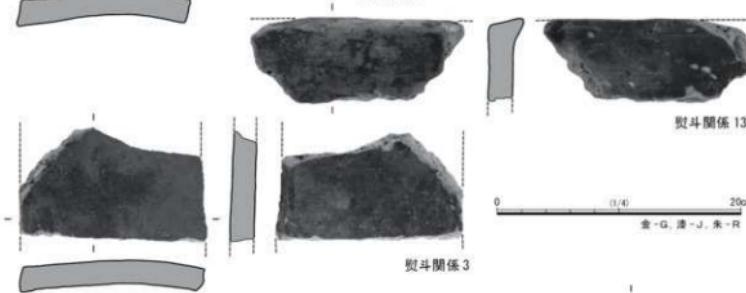
金箔熨斗瓦



熨斗瓦



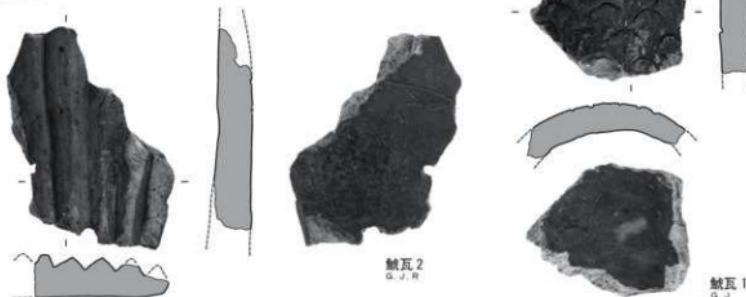
熨斗関係 6



熨斗関係 3

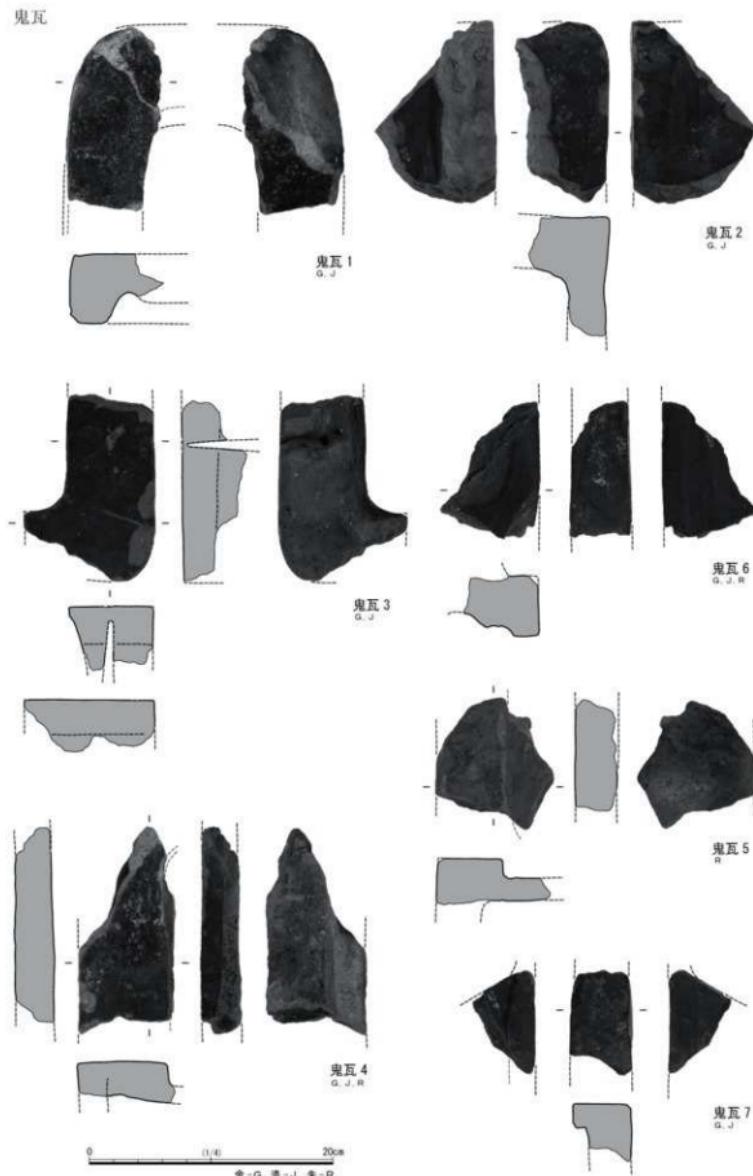
0 10cm 20cm
金 - G. 鎌 - J. 朱 - R

鰐瓦

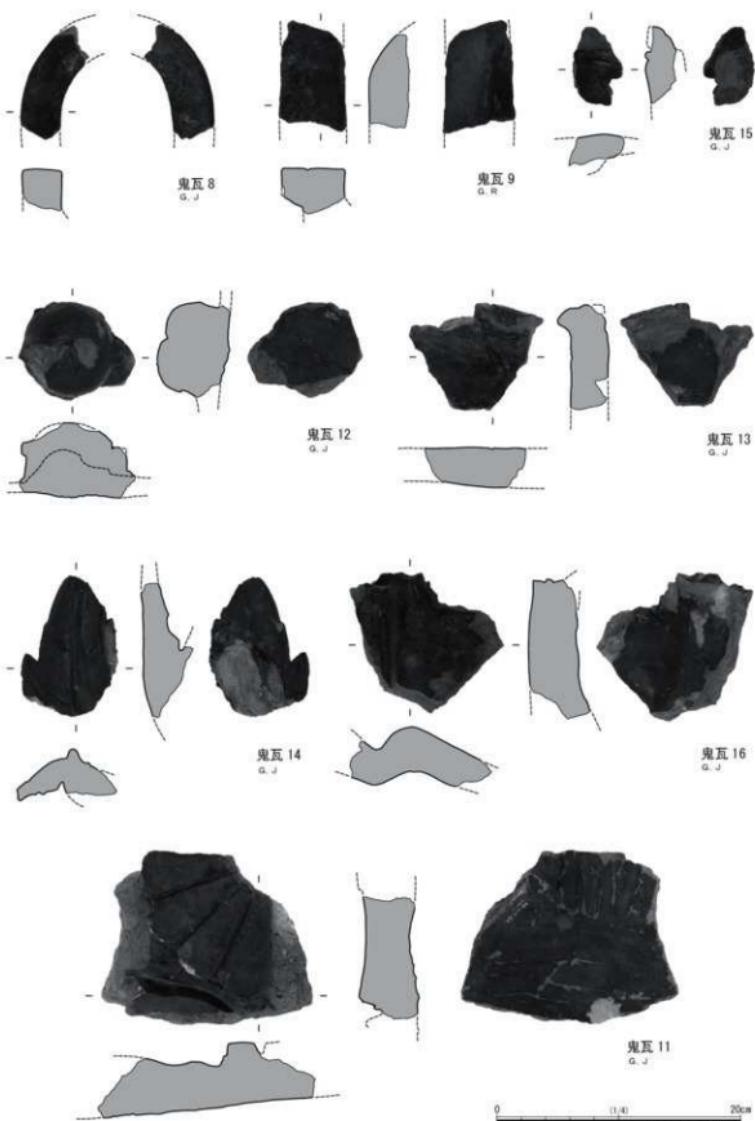


図版 14

出土瓦実測図〔鬼瓦 1〕



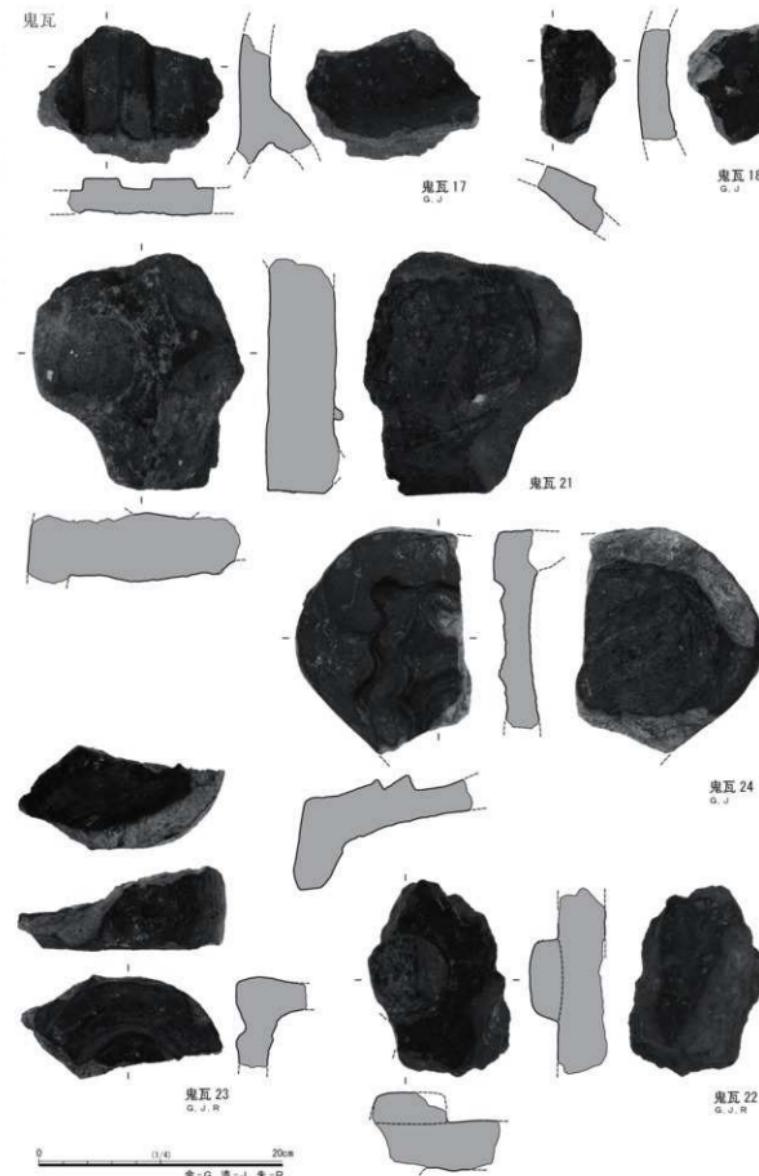
鬼瓦



金 - G, 深 - J, 実 - R

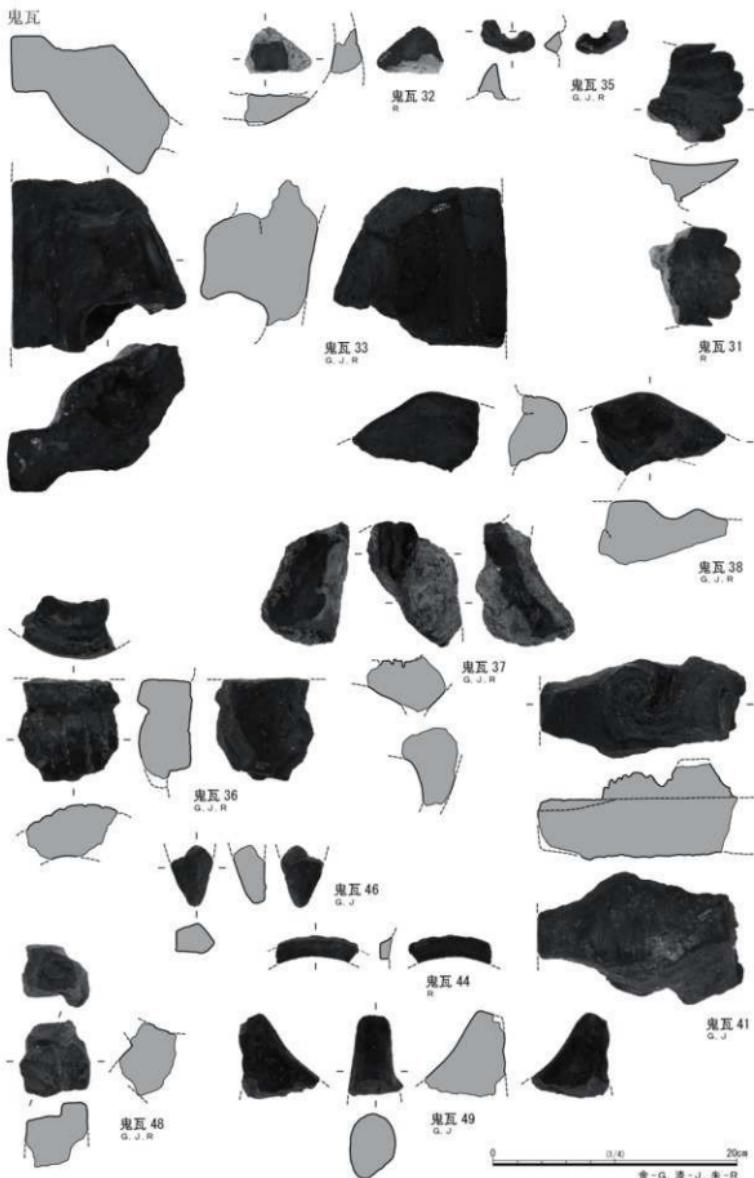
図版 16

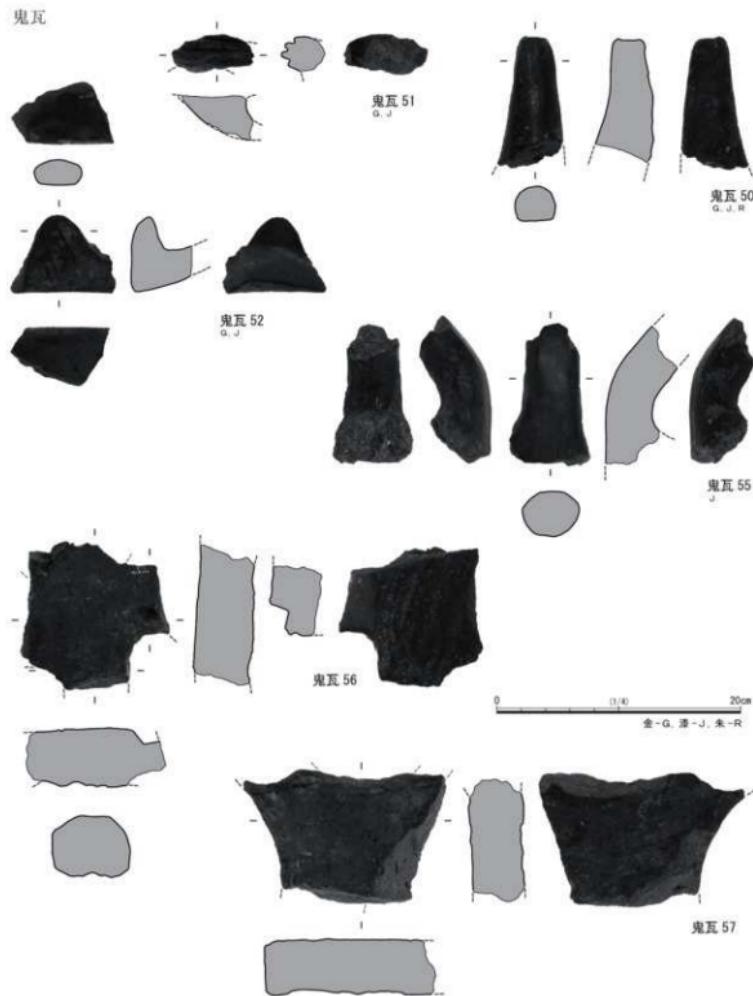
出土瓦実測図〔鬼瓦 3〕

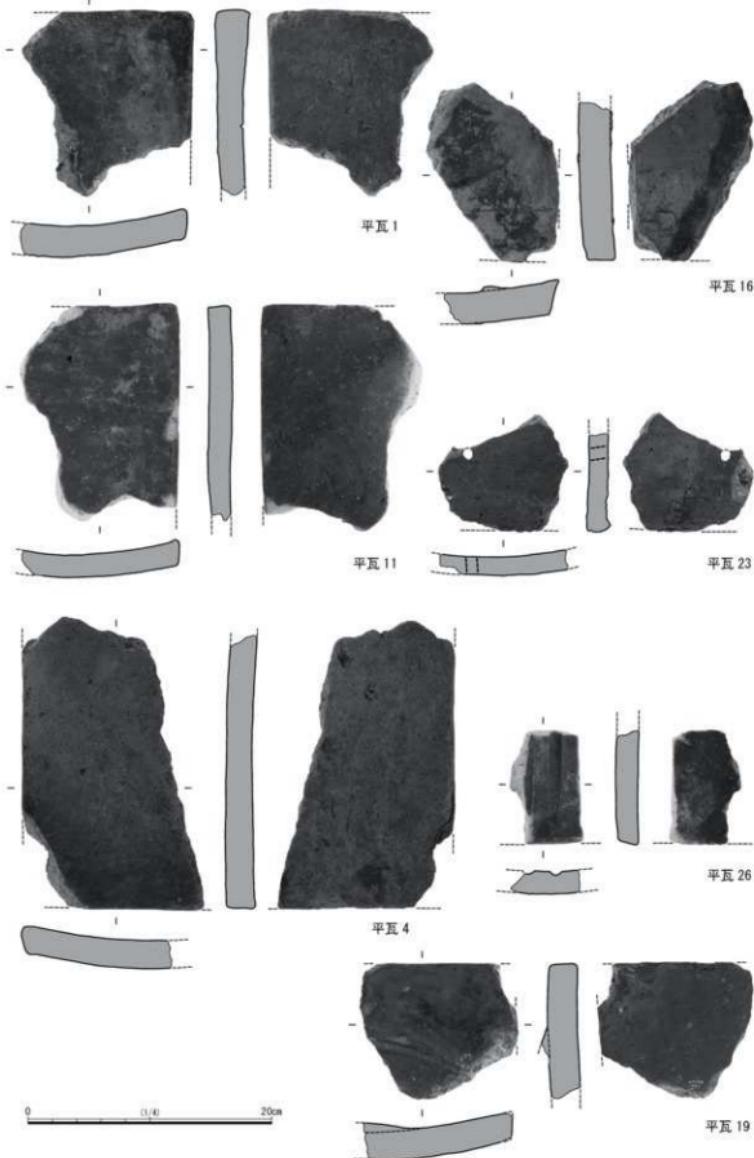


0 (1/4) 20cm
金 - G. 深 - J. 朱 - R

出土瓦実測図「鬼瓦 4」

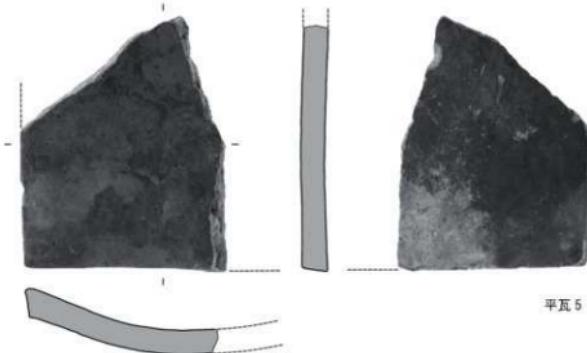




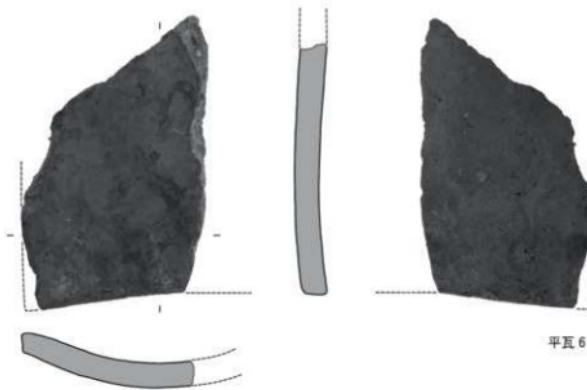


図版 20

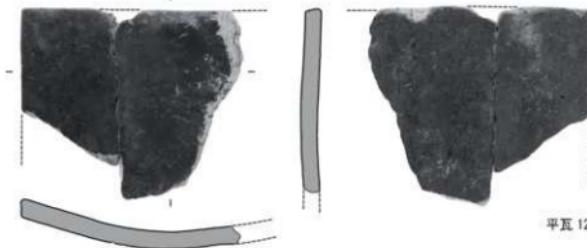
出土瓦実測図〔平瓦 2〕



平瓦 5

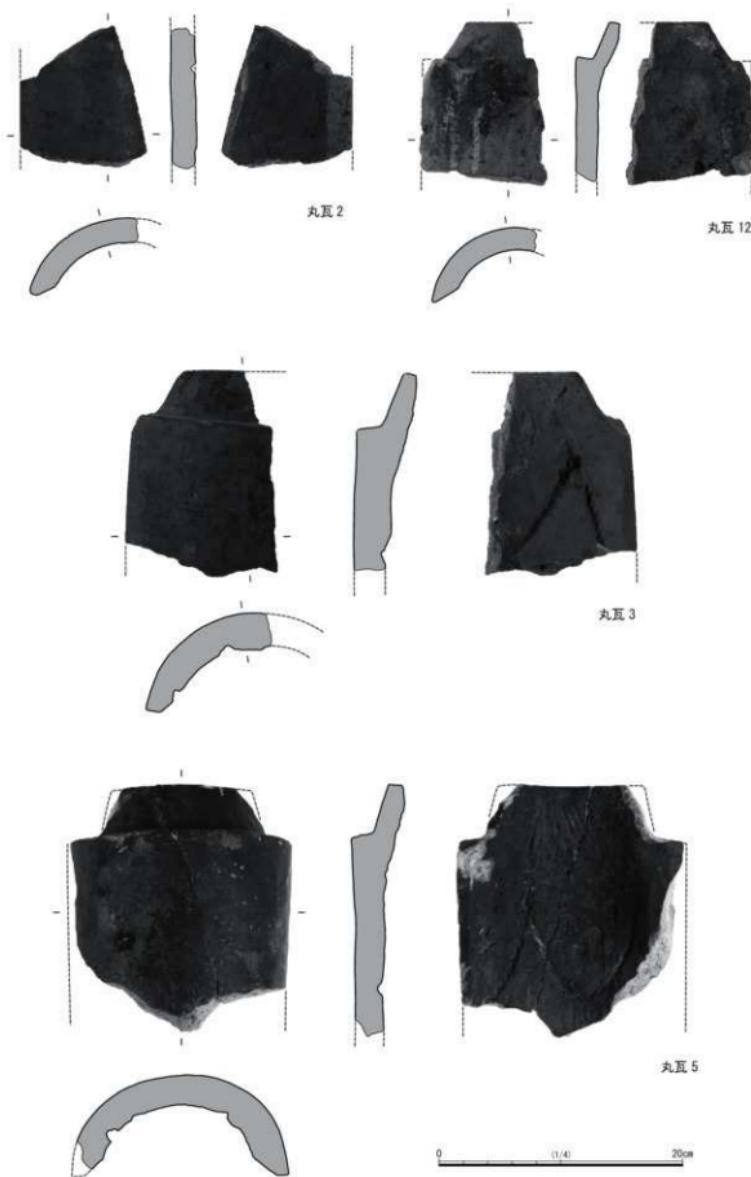


平瓦 6



平瓦 12

0 (1/4) 20cm



図版22

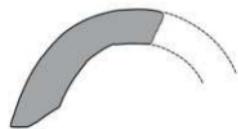
出土瓦実測図〔丸瓦2〕



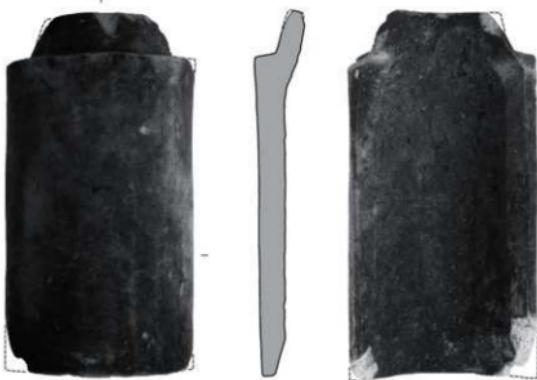
丸瓦4



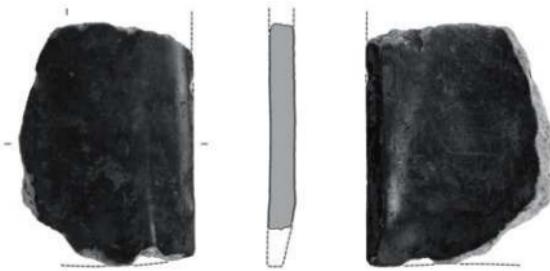
丸瓦7



0 (1/4) 20cm



丸瓦 8

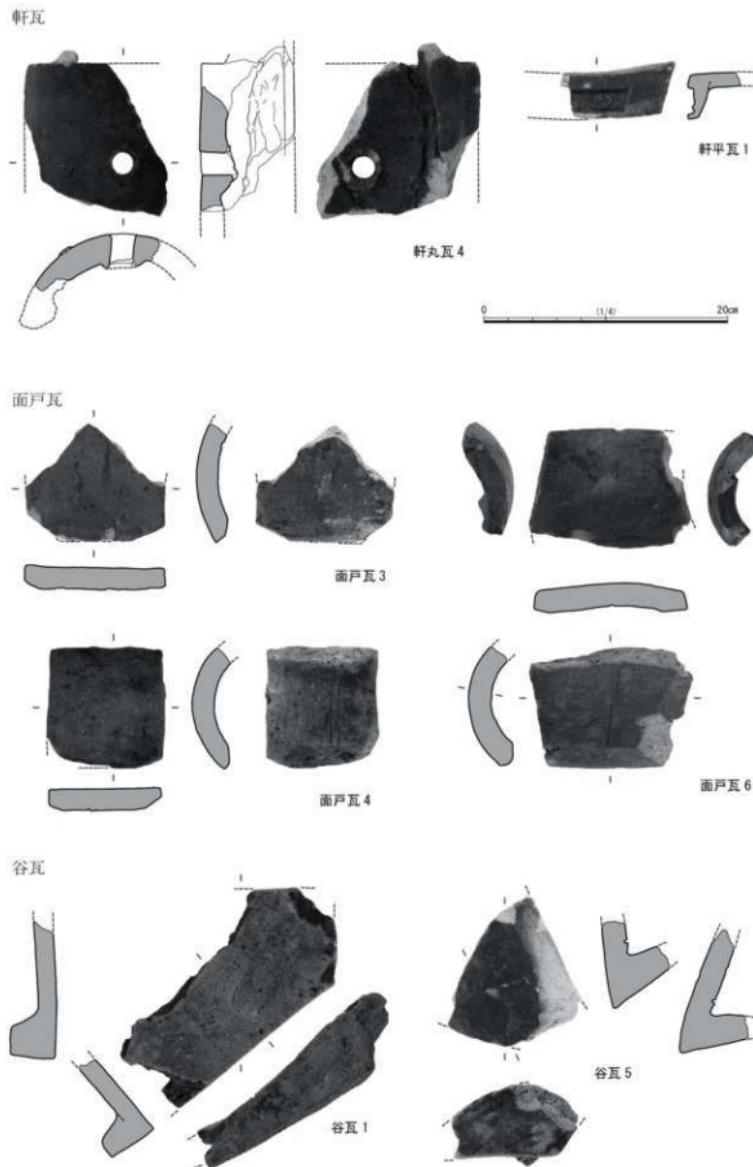


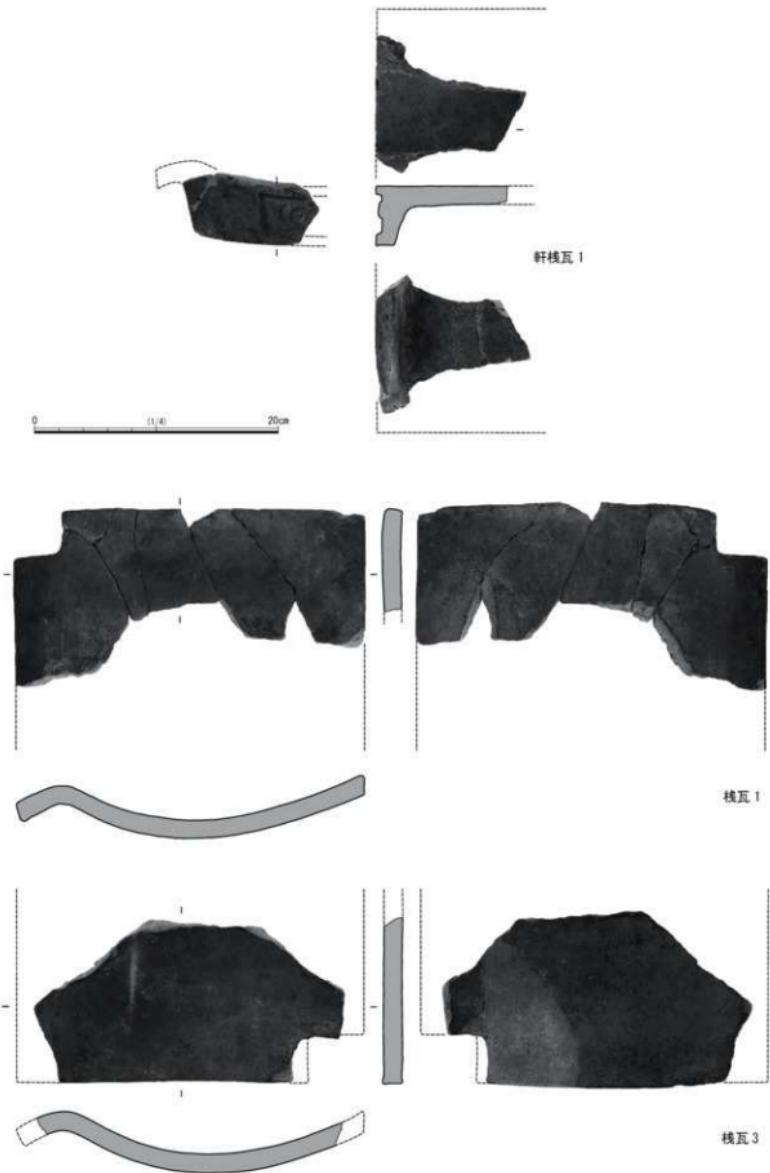
丸瓦 9



0 (1/4) 20cm

図版24
出土瓦実測図〔軒瓦・面戸瓦・谷瓦〕





図版26
出土瓦実測図〔堀瓦〕

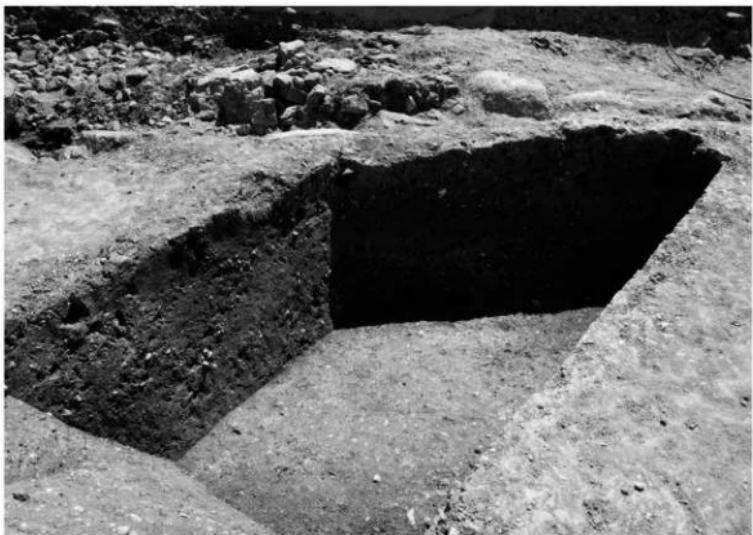


0 (1/4) 20cm

堀瓦 1



1. 桃山丘陵より男山方面を望む（北東から）



2. 北区 NE 摂乱 1 土層断面（北西から）



1. 南区 E 化粧土検出状況



2. 南区 E-C 第 I-②造構面全景（東から）



1. 東区 第 I-②造構面全景（南から）



2. 北区 第 I-②造構面全景（南から）



1. 北区 SE GP 掘出状況



2. 北区 GP 完掘全景（北から）



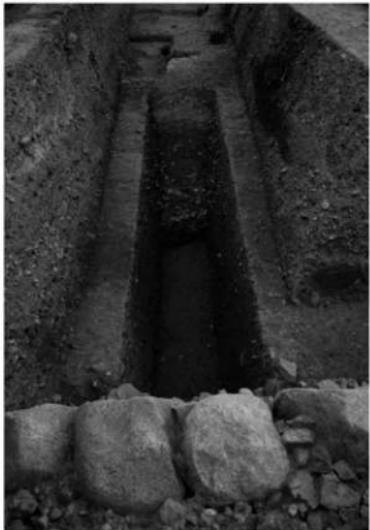
3. 北区 GP 完掘全景（南西から）



1. 南区 E 堀 1 (最上層) 掘下げ状況 (西から)



2. 石垣 1 と堀 1 (中層) 全景 (北から)



1. 南区E 石垣1と堀1(瓦溜り) 全景(東から)



2. 南区E 堀1北壁土層状況(南東から)



2. 南区E 石垣1全景(西から)



1. 南区 E 石垣 I (矢穴痕)



2. 北区 堀 I (下層) 全景 (南から)



1. 北区拡張 石垣1出土状況（北から）



2. 北区拡張 石垣1出土状況（南から）



3. 西区 第1-③造構面完掘状況（東から）



1. 南区 第1-③造構面完掘状況（西から）



2. 調査地遠景（北東から）



1. 西区 第2-①遺構面完掘状況（東から）



2. 南区E 石垣2出土状況（北東から）



1. 南区 E 石垣 2 出土状況（北西から）



2. 南区 E 石垣 2 出土状況（南東から）



3. 南区 E 石垣 2 出土状況（北東から）



1. 南区 E 石垣 2 (矢穴痕)



2. 北区 断割り 1 全景 (南から)



1. 北区 断割り 1 (南から)



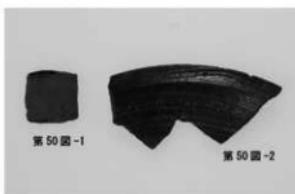
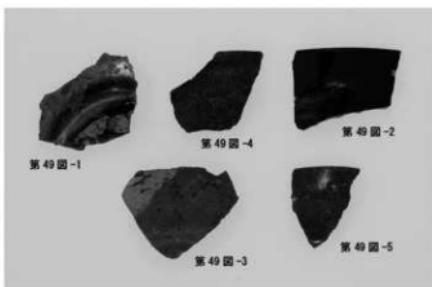
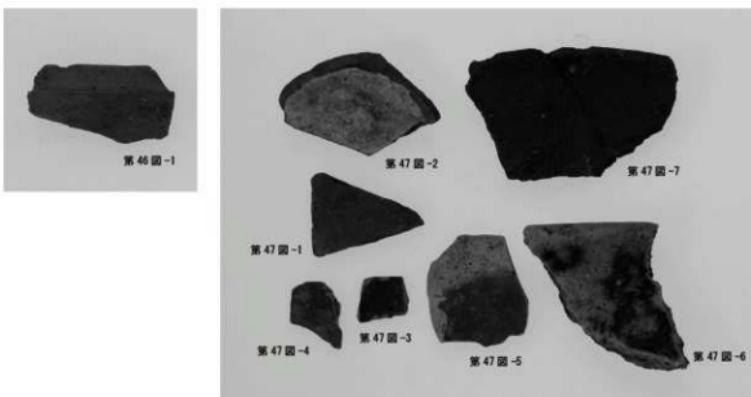
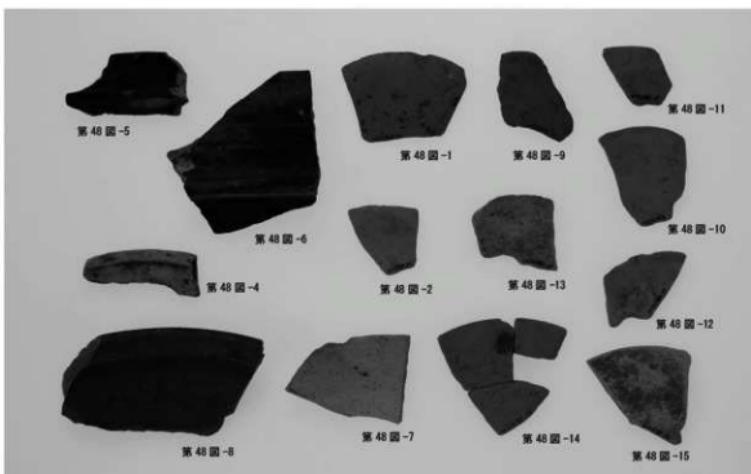
2. 北区 堀 1 (最下層) 南断割り状況 (北から)



1. 南区E 堀1南壁土層状況（北から）



2. 北区断割り1 堀1土層状況（北から）



報告書抄録

令和3年（2021年）3月29日発行

伏見城跡・指月城跡
—平成27年度発掘調査報告書一
(京都平安文化財調査報告 第8集)

編集 有限会社京都平安文化財
〒612-8018 京都市伏見区桃山町丹後20番地4
電話 075-644-6600

印刷 あおぞら印刷株式会社
〒604-8431 京都市中京区西ノ京原町15
電話 075-813-3350